

日本被団協 原爆被害者調査

資料集 I

「あの日」の証言（その1）



日本原水爆被害者団体協議会



日本被団協原爆被害者調査資料集 I

## 「あの日」の証言（その1）

## 発行にあたって

日本被団協が実施した「原爆被害者調査」（'85.11～'86.3）には、「あの日や、その直後のことで、いまでも忘れられないこと、恐ろしく思っていること、心のこりなこと、など」についての設問が含まれている。

この資料集は、それへの自由な回答の中から、500例を選んで編集したものである。

それぞれは、回答者の原爆についての〈原体験〉を、凝縮された形で示すものであり、そのイメージは40年後の今日なお、被爆者を激しい情動—恐怖、怒り、悲しみ、悔いなど—へ誘い、被爆者の反原爆の思想と運動を支えるものとなっている。

原爆がもたらした「あの日」の“状況”は、被爆者にとっては、思い出すのもつらいことであり、また、それを伝えることばもないようなものであった。

この証言を読まれる方々は、そのような困難をのりこえてあえて筆をとった人たちの、気持を汲みとりながら、その一言一言から、原爆のもたらした「人間の想像を絶する地獄」（基本懇「意見」）とは何であったのかを再構成してみたい。

なお、厚生省が昭和60年度に実施した「原子爆弾被爆者実態調査」には、さらに多くの被爆者の「証言」が書きこまれているとのことである。「原爆は人間にとって何であったのか」を永く人類の歴史に刻む資料として、被爆国政府は、その全容をありのままに公表すべきである。

最後に、この資料集作成にあたっては、「〈原爆と人間〉研究会」（一橋大学）の奥田妙子さん、沼崎保宏、高波辰男両氏の献身的な協力をいただいた。付記して、心からの謝意を表したい。

## 目 次

発行にあたって

凡 例

広 島	頁	長 崎	頁
I. 直接被爆 .....	5	I. 直接被爆 .....	233
(1) 2.0km以内 .....	5	(1) 2.0km以内 .....	233
a) 男 .....	5	a) 男 .....	233
b) 女 .....	64	b) 女 .....	243
(2) 2.0km～3.0km .....	117	(2) 2.0km～3.0km .....	259
a) 男 .....	117	a) 男 .....	259
b) 女 .....	136	b) 女 .....	266
(3) 3.0km～ .....	150	(3) 3.0km～ .....	274
a) 男 .....	150	a) 男 .....	274
b) 女 .....	171	b) 女 .....	278
II. 入市被爆 .....	178	II. 入市被爆 .....	286
a) 男 .....	178	a) 男 .....	286
b) 女 .....	208	b) 女 .....	292
III. その他 .....	225	III. その他 .....	295

表紙写真：「嵐の中の母子像」本郷新・作（連合通信）

## 凡 例

1. この証言に関する設問は、次のとおりである。

【問4】あの日や、その直後のことで、いまでも忘れられないこと、恐ろしく思っていること、心のこりなこと、などがありますか。あるとすれば、どんなことですか。例を参考に、なるべく、その状況や、あなたの思いがわかるように書いてください。

### ◇例◇

- ア) 人びとの死んでいる姿や、生きていた人たちの苦しみのようす、死んでいった人びとの死にかた
- イ) それを見て、あなたが感じたこと
- ウ) 水や助けをもとめる人びとに、なにもしてあげることができず、心のこりに思っていること、など

2. 本資料集に収録した証言は、問4への回答の中から「原爆は人間にとって何であったのか」について、よく伝えている500例を、任意に抽出したものである。

3. 証言はすべて原文のまま。ただし、表記の誤りや、漢字、仮名づかいについては、改めたところもある。また、特定される人名は△△…◇◇…で、編集にあたって補った部分は文中〔 〕で示してある。

4. 500例の証言は、被爆地、被爆状況（爆心からの距離）、性別、被爆時年齢区分によって分類、編集した。

各証言のあとの〔 〕（ ）内は、次の事項を示している。

〔被爆地、被爆状況（爆心からの距離）、性別、被爆時年齢〕（整理番号）

5. 「原爆被害者調査」の自由記述回答については、ひきつづき「あの日」の証言（その2）を含む「資料集Ⅱ」の編集・発行を予定している。

正 誤 表

誤	正
P.104 [広島 <u>直爆2.0km</u> 女 <u>24歳</u> ] (12-0010)	P.284 (13-07-016) の後に挿入 [長崎 <u>直爆3.0km</u> ~ 女 <u>25歳</u> ] (12-0010)
P.172 [広島 <u>直爆3.0km</u> ~ 女 <u>16歳</u> ] (28-0058)	P.282 (14-0310) の後に挿入 [長崎 <u>直爆3.0km</u> ~ 女 <u>16歳</u> ] (28-0058)
P.225 [広島 入市 女 <u>年齢不明</u> ] (28-0301)	P.294 (24-0115) の後に挿入 [長崎 入市 女 <u>27歳</u> ] (28-0301)
P.288 [長崎 <u>入市</u> 男 <u>15歳</u> ] (40-0118)	P.9 (35-0197) の後に挿入 [広島 <u>直爆2.0km</u> 男 <u>15歳</u> ] (40-0118)

1950-1951

1952-1953

1954

1954-1955  
1955-1956  
1956-1957

1957-1958  
1958-1959  
1959-1960

1960-1961  
1961-1962  
1962-1963

1963-1964  
1964-1965  
1965-1966

1966-1967  
1967-1968  
1968-1969

1969-1970  
1970-1971  
1971-1972

1972-1973  
1973-1974  
1974-1975

1975-1976  
1976-1977  
1977-1978

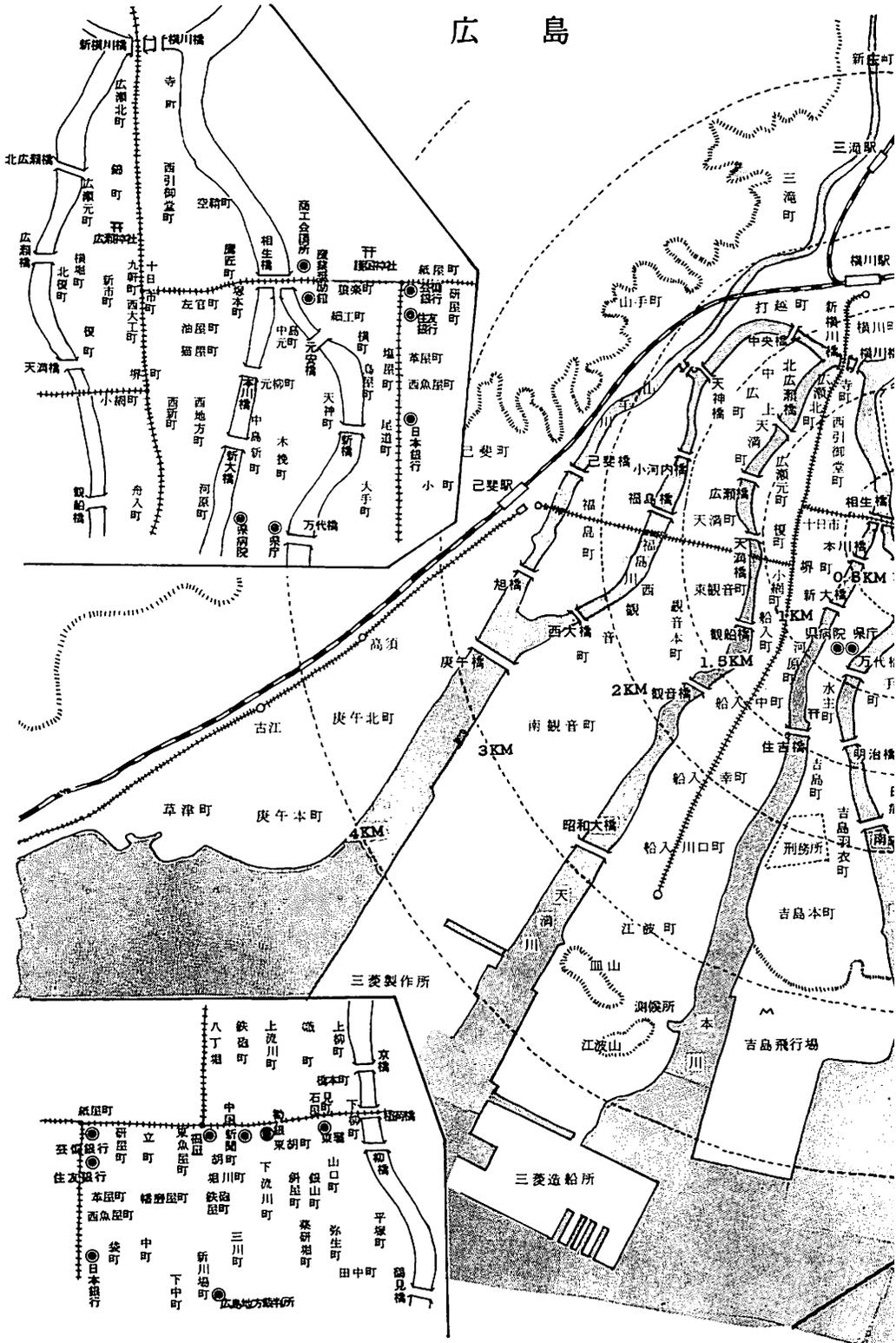
広

島

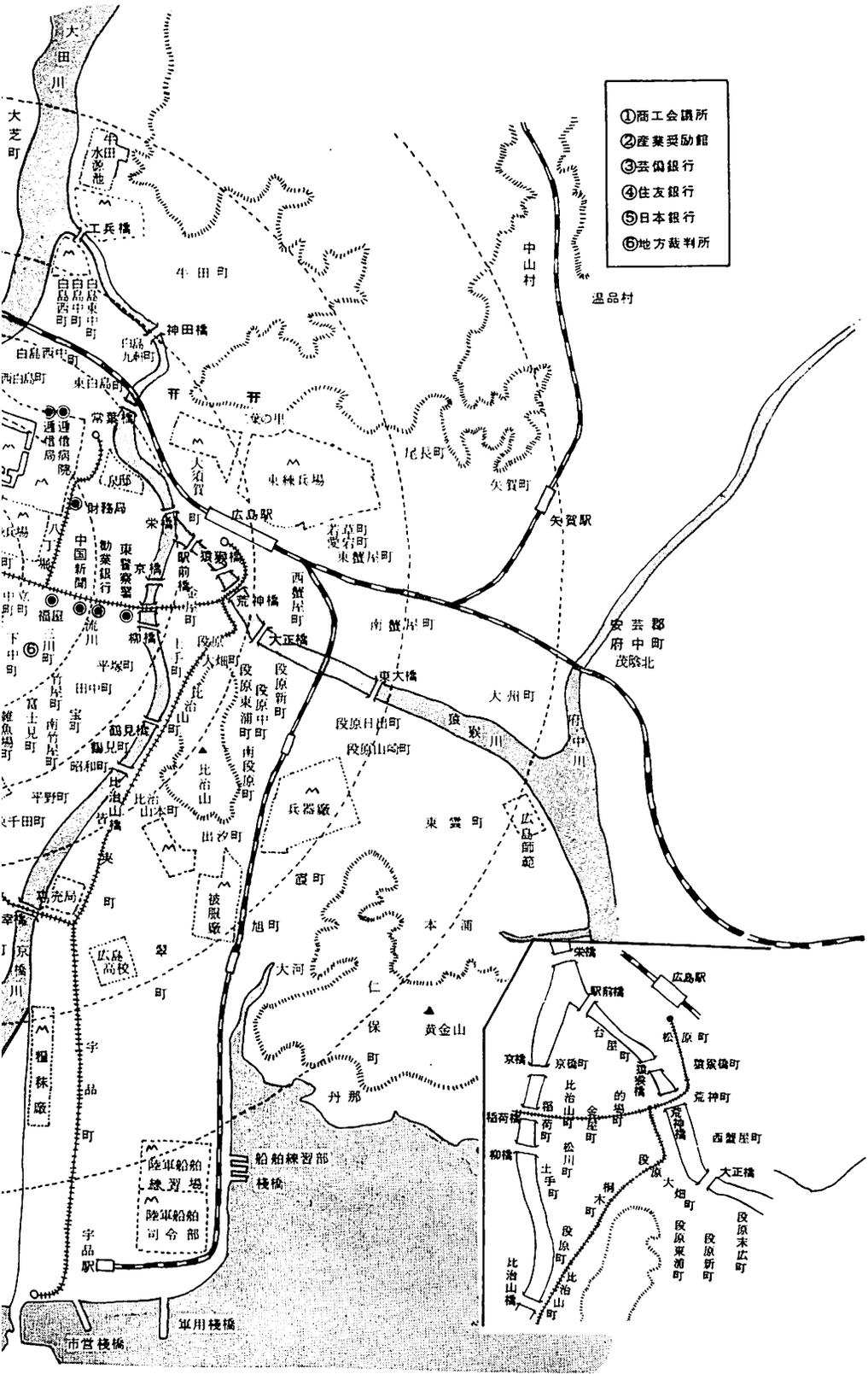




# 広島



- ①商工会議所
- ②産業奨励館
- ③芸僑銀行
- ④住友銀行
- ⑤日本銀行
- ⑥地方裁判所





## I. 直接被爆

### (1) 2.0km以内(直爆)

#### a) 男

##### ① 9歳以下(被爆時)

当時5歳であった私は弟と家の中で遊んでいた。家の中には母と叔母とその子供がいた。

その時強い光と共に家がたおれてしまいました。私と弟はなぜか物の間におり助かりましたが、母は家のかもいの下じきになり、「△△……」と大きな声で私の名前をよんだきり、出ることも出来ず死んでしまいました。

私と弟は家の外へ出てびっくりしたのは、今まで家があったのがそこら火の海で助けを求めての人達であったことは今でもおぼえてはいます。

家から出た私と弟と叔母、その子供は、あの熱い中をはだして比治山へにげていった。

[広島 直爆1.5km 男 5歳]

(34-4007)

子供同志8人ぐらいが遊んでいて、一緒に被爆した。その後バラバラになって消息がわからない。

追跡調査でも出来たら良いと思う。

[広島 直爆2.0km 男 4歳]

(44-0029)

## ② 10歳代（被爆時）

町内から代表で勤労奉仕に出た母が、全身やけどで、髪は焼け、着てるモンペ姿はこの世のものと思えません。ただ私の安否を気づかって一応帰宅。私も顔がはれ、目が見えなくなり、母と二人で出汐町の方に収容され、八月十四日朝、私が母に目が見える様になったよと声を掛け抱きつくと、母は全身水ぶくれになって死んで居り、私は大声で泣き続けた事は一生忘れられません。薬とて赤チンキだけのもの、赤鬼の様で、人々は痛いヨウ苦しいヨウト、本当にこの世の地獄そのものでした。

〔広島 直爆2.0km 男 11歳〕  
(28-0330)

当時小学生だった私も、2日後に自宅に姉をさがしに行き、焼けあとからお骨を拾って帰りましたが、この悲しみは今も忘れませんが、今は思い出したくありません。

〔広島 直爆2.0km 男 12歳〕  
(27-0272)

- ア) A. 皆皮膚なし、ハダカの行列、水を求め、男女の区別不明。  
B. 女学生が制服姿で助けを求める。

C. 手押しポンプの出口の所に、せなかとせなかを合せている。水を出すと動く。

D. 家の下敷きになり助けを求める。1人や2人の力ではどうにもならないので、内と外で御夫婦の生き別れの姿。

E. 日赤では、医者がけがをしながら、良く皆を見て下さったと思います。また、私どもは日陰と食糧と下駄を兵隊さんその他に求めた。

F. 川辺、橋にはたくさんの人たちが水を求めて倒れている。

これ以上書きたくない。現在、泣けて泣けて声まで出ます。

ウ) 近所の人々が下敷きになり、助けを求められながら、私1人の力ではどうにもならなかった。

心よりおわび申し上げます。ごめんなさい。

[広島 直爆1.0km 男 14歳]

(13-07-012)

ア) 一緒にいて即死した級友のことは忘れられない。

イ) 一緒にいて火傷を顔や手に受け、病院にもかかれなかった級友のことが忘れられない。

ウ) 一緒に逃げながら、その後再会することなく今日に及んだ、級友の消息・安否を今でも時々思い出すことがある。

エ) 幼友達で全身火傷で死んだ者や、2～3日で息たえた(重傷で発見されたが)、声も出せないで死んだ友だちを忘れることはない。

オ) 私にはなかったが、近所の女の子の”脱毛”などは、自分にもおこるのか、おこらなくてもどんな恐ろしいこと(死)につながるのか、不安だった。

カ) 人間や馬や牛が、腹が太鼓のようにふくれて転がっていた様子(死体)は忘れ

られない。

キ) 学校という学校の講堂が負傷者であふれ、郊外では死者を焼く火葬場が足りず、いたる所で煙が上がっていた……e t c.

[広島 直爆1.5km 男 14歳]

(01-0021)

被爆の翌日、牛田原の防空壕の中を5、6歳と4歳位の兄妹が「お母さーん」と親をよびさけぶ声が、今でも耳のおくにきこえて来る様な気がして来ます。

夕やみせまる野原の壕を点々と廻って親をさがし求める幼子を想い出す時、軍隊の統一下にあった自分とはいえ、なぜ声をかけて親をさがしてやれなかったか、自分はその時歩くことは出来たのに……………今になってあの幼子等に悪いことをしたと悔いています。

[広島 直爆2.0km 男 14歳]

(32-0133)

#### 1. 見習士官との約束が果せず心残りなこと。

私は特に両足のひどいやけどで動けず太田川の河原に寝ていたが、その時同じように私の枕もとに横たわっていた若い見習士官、ひたいに大きなキズあり出血ひどく、8月6日午後から夕方にかけてか?盛んに水が欲しい、水が欲しいと言っていた。その士官、子供がかわいそうだ、子供が可哀いそうだという言葉と、

水が欲しいという言葉と繰り返していたが、余り子供のことを気遣うので私はきいた。子供が二人幼いのがいるとのこと、すでに父親のいない子になることを知っていたのであろう。私はその士官の住所をきいた。それを脳裏に刻んで、その人の最後を子供さんに会って話して上げると約束した。その士官はお願いします、お願いしますと繰り返し私に言って、すでに見えない眼で私の方を見ようとした。しかし私はそのあとの高熱つづきで漸く命をとりとめたものの、どうしても住所が思い出せず、心当りを探したが未だ約束を果していない。これを果さないとい私は死んでも死ねない。

〔広島 直爆1.5km 男 15歳〕  
(35-0197)

- ア) 倒壊した旅館の下じきとなり、隣にいた友人が名をなのって絶命したこと。その死を、その母に伝えたこと。
- イ) 倒壊した旅館のこわれた材木が牢屋の格子のようになり、中で生きている友人を見捨てて逃げたこと。その父母が彼の骨を探しに広島に生き、後年二人ともガンで死んだこと。
- ウ) 火を逃れて行く途中、女の人をつれて逃げようとして手をひいたらその皮が手袋をぬがせるようにしてむけてしまい、こわくなって放置したこと。
- エ) 同郷の兵隊に助けられたが、そのことがなければどうなったかと思う。
- オ) 郷里に帰り、原爆症で入院し輸血治療を受けた時、恩師、友人が列をなして血を提供してくれたこと。

〔広島 直爆1.0km 男 16歳〕  
(31-0001)

ア) 一瞬にして倒壊した家屋の下敷になって焼死した母の姿が、今でも眼底に焼きついている。屋根瓦、屋根板、土壁を破って、腰のあたりまで上半身をやっともぐり込ませた私は、建物の下のわずかな空間に支えられて上向きに倒れている母を見つけた。大きな梁と家の土台のコンクリートのわずかなすき間からのぞき見た。母は顔中血だらけで横を向くこともできず、「肩のあたりをおさえつけている物をのけてくれ」と言っていた。30分前後で火がまわってきたため、最後の別れの言葉をかわして私は逃げたが、後の方で「般若心経」を唱える母の声に後髪をひかれる断腸の思いであった。

イ) 目鼻の前におおいかぶさった建物におさえつけられたままで、じりじり迫ってくる火の手、そして死の瞬間を待つ気持といたら、どんなに苦しいことだったろうか。なぜもっと頑張って救い出そうとしなかったのか、自分も一緒に死ぬ気になったらもっと何かできたのではないか、母の死に対する罪意識はつきない。  
(私は今でも自分の力なさを母を殺したと思っている。それだけに原爆・核兵器が憎い。戦争が憎い。戦争だからといってこんな残虐な被害は絶対に許せない。)

ア) 妹(第一県女一年生)は、土橋附近で建物疎開の後片づけに動員され、ついに死体すら発見されないで今日にいたっている。私は無駄とは知りながらも、一カ月間探し廻って、ちょうど一カ月目の9月6日、急性症状のため病床に伏すことになった。

イ) さぞかし肉親が自分を探しに来てくれるのを待っていたであろう。淋しく一人でこの世を去っていったと思えば可哀想でならない。

ハ) 隣の女の子(4歳)は首を半分切りさかれたようになって、気管支がはみ出していた。その子を抱いて逃げたが、3日後には似島の収容所で亡くなったそうである。その他逃げる途中で、火に包まれて焼死する人を見たが、自分の火の粉をふりはらうのに懸命で助けることができなかった。母を救け出そうとしてちょうど通りかかった近所の人に援助を頼んだが、すげなく断られた。今でも心にわだかまりは残っているが、人間というものはいざとなると非情なものである。いや人間をそのような極限状況にまで追い込んだ原爆被害の非人間性をこそ問題にすべきである。

[広島 直爆1.5km 男 16歳]

(17-0001)

私がいた病室は、毎日私だけ生残り、一部屋20名の内19人の人が、来る日も来る日も、死んでは入れ代わり、はいつては死んで出て行かれました。

私がいた現場では、4000人位いたと思いますが、全滅状態と思っています。

〔広島 直爆1.5km 男 16歳〕  
(27-0391)

火の中で踊っている女性の姿が、かなしい姿として忘れられない。

〔広島 直爆1.5km 男 16歳〕  
(27-0419)

私は旧制中学3年生でありました。広島駅前で同級生30名位と同じ場所で被爆。向洋、海〔田〕市を経て通年動員令作業に通っていた矢野の陸軍需品廠に収容されました。

隣にねていた同級生の耳の中から”ウジ”が出て来た。また、挺身隊の20歳くらいの女性で、顔から足の先までやけどで赤身が出ており、水をほしがって立ちあがっていたが、ものすごい相(すがた)でありました。1週間目の早朝、やっと尋ねて来た兄さんに名前を呼ばれながら息を引きとっていったのであります。

年を重ねるとともに、自分の被爆体験を記録に残しておきたいと考えております。

〔広島 直爆2.0km 男 16歳〕  
(13-03-021)

建物の下敷となり、火がせまり、助けようにも屋根瓦等で一人や二人の力ではどうする事も出来ず、手を振りながら助けを求めて焼死んでいった友の姿が、今でも臉に焼付いてはなれない。

〔広島 直爆1.0km 男 17歳〕

(34-1334)

木造校舎2F建ての下敷となり木材、カベ土、釘、備品等々の落下する中で、右半身にガラス破片を受けしゃがみ込み、夏用軍衣(半そで半ズボン)の①ひざにしたたり落ちる血のぬくもり、左半身は爆発セン光と同時に反射的に机下に入ったため外傷を受けず、②右半身につきささるガラスの破片の痛さ、③落下する建物用材による頭部の傷、④押しつぶされた圧迫感、やがて失神(出血多量か?)X分間。

「兄ちゃん兄ちゃん」の呼び声に我にもどった自分。

妹はその時はすでに故人(5歳で死亡していた)だったのに自分(私)を助けに来てくれたのであろう。「おお△△子!!(故人妹名)」と思った(正気にもどった)時、妹の顔は私の右斜上でにっこり笑っているのが見えた。思わずその顔の方へ近づこうとして背を伸ばすと、不思議なことにすうと立てるではないか、しかもその顔が消えてそこは天井板、屋根板に穴があき外からの光が入って来るではないか、その穴から頭を、身体を……ぬけ出せたのである。故人の妹が私を助けに、そして家屋の下敷の私を外へ誘導してくれたのである。こんな不思議な現象のお陰で今日まで生命を保持し得たのである。

やっと外へはい出てビックリ!!ほんの何分か前まで校舎があった、木々が、緑が、そして町の家々があったのに――町は倒かいし遠く山すそまで見わたせる――何が起きたのか判断出来ない私、頭から顔から身体から流れ落ちる血々、顔につきささったガラス破片を自分でぬき、布で手当する自分。外影は全く一変しこれが現世の姿なのか、自分は一体どこへ来ているのか、出血多量で意識の確かでない身ながらも、校庭で朝会をしていた我ら船舶通信隊の特別幹部候補生隊隊員達のそこら一面にふっとび、ぶっ倒れている姿々々。

○ こげた顔、やけただれた手足の皮、こげ破れた衣服。

- 乱れ散る兵士の数々。
- これが人間なのか、これが現世の姿なのか。
- 乱れとび散り、校庭の片すみの防火用水（3坪あまりの広さ）の中に水を求めてとび込んだであろう兵士の重なり死体。
- 息ある者の助けを呼ぶうめき声。
- 熱い――熱い――水、水、水をくれの声、あちこちから――。

この様を生地獄と言わずば何をか言わんである。

とっさの判断で私は（その時特別幹部候補生2期生として4期、5期生の指導候補生をしていた）生き残っている隊員を呼び集め約50人程を隊列を組み、比治山へ避難することにした。倒れた校舎、町の家々、その下に、その上に、道路上に、溝川に、河川にと焼けこげた死体の山々。

校庭に避難して来る一般人の姿。何とむごたらしい姿か、髪はやけこげ顔や手足の皮ふのただれ、ぶらさがり、衣服もしかり、或る者は血ダルマになって……。

これが人か、あれが人間か（原爆資料館内の模型人形の比ではない。何十倍もの惨状であった）。

ここ広島市千田町立千田小学校校舎内での被爆である。

体験者のみに理解出来よう、あの日、あの時、この目で、この心で、この身体で覚えている苦しみ。万死に一生を得た当時17歳の国を思い軍務中の少年兵だった私、二度と起こすな戦禍を――。

町が消えた、人々が消えた。平和公園の直下にうずもれているであろう、当時の残がい――。今はその上に作られた公園、訪れる数々の人々に聞こえているであろうか――地下におむる当時の人々の尊い生命、死没者の呼び声が――。

戦後40年、今なお鮮明によみがえるあの日、あの時（S.20.8.6 AM8:15）の惨状は、口舌では十分表し得ないものである。

「ノーモア広島」この祈りが空論に終わらぬことを念じている。戦後から今日まで13回訪れた平和公園etcであるが、毎回無人塚の前で合掌すると死没者の声が聞こえて来て涙するのである。

私には未だ戦後はないと考えている。この身の生きている限りは――。

〔広島 直爆1.5km 男 17歳〕  
 (29-0014)

校庭で朝礼の訓示（話）を聞いていた最中、黄色い火の中にしばらく身動き出来なかった、はねとばされたいらしい。ようやく体の動くのに気が付いた。視界はうす暗い、やられたらしい、よし、この仇はとってやるぞと思った。我に気付くと衣服は縫目だけが残って、皮膚はむげていた。大やけどだ。見る者みんなだ。

避難命令で足をひきずりながら人の列につづいた。道路には動けなくなった人がねている。目は動いていた。全裸だ。人間の丸焼だ。助けを求める声に目をやると、こわれた家の中から主婦がさげんでいる。どうせ焼け死んだのかも。

翌日、両わきにねていた二人とも死んでいた。

顔の化膿が両眼を暗黒の毎日にした。耳の中のうじはとても痛い、大きな音がする。血便ですい弱したのか、昼夜も意識しない日が続いた。

〔広島 直爆1.5km 男 17歳〕

（34-0941）

東練兵場の惨状をご存じだろうか。

少しの窪みにはウミでふくれた死体があって、その数は万にも及ぶものだった。爆発直後にどっと皮のはがれた人間が避難して来て、苦しみながら死んでいったのです。もう、このことは思い出したくないし、関係のことを聞きたくも見たくもないのです。

ただひとつ言っておきたいことは、その惨状のなかで、将校のある男がピストルで脅しながら、何もない焼け跡で、部隊に自分の長靴を探させたり、またある将校は自分の私物の番を兵隊たちに命じたりしていたが、△△参謀長閣下は郊外で毎日釣りを楽しんでいる、そのエサのゴカイとりを兵隊にさせていたのです。ところで、そういう兵隊共は皆やがて死んだであろう重傷者たちでした。

〔広島 直爆2.0km 男 17歳〕

（13-04-004）

被爆直後は何がおこったのかさっぱりわからず、地面がゆれてすごい風に押されて小住宅そばのみぞにたおれた。何時か何がおきたかさっぱりわからず、気がついた時は友達も正気でなかった。

どれくらい時間がすぎたかわからないが、いやなにおいで煙が一面に空から降って来た。そばにはガラスの破片や屋根瓦、板類がちらばり、方向もまったくわからず、もう駄目かと思った。人々も動いていない。自分のことで夢中である。私達の同行員が比治山付近で建物ソカイに出ているのを探しに歩いた。もう電車も自転車もみんな変形していた。

川には人間がぼたぼたとびこんでいた。どうしたかほとんどがはだかに見えた。行員どころか男女の区別がつかないほどだった。死んでいる人、うめいている人、水をほしがる人、がむしゃらにさけぶ者、もう、この姿を見ない者には話してもわからない。

兵隊が日本刀を杖によろめく姿。馬が腹がさけるがようにふくらんでたおれている。もう一面に人のむれ、きいろくやけただれて、おなかはつんつん。西の方向は火の海となって来た。

工場の人と三日間位救護にあたる。のどがかわいて水ものめない。水辺はみんなやけどするようなあつい湯ばかり、もう書き切れないほどのおそろしい思い出ばかり。二度と思い出したくない。忘れたい。

[広島 直爆2.0km 男 17歳]

(34-3529)

ぴかと光が走り、電線を青赤色の火をはきつたわった。すぐどんと音がすると同時に家がぐずれ、5分ぐらいたったと思い、各室に行ってみれば、窓のガラスが破れ、全身につきさして倒れ血の海になり、正門の方へ行く大勢の方々の頭がヘドロの目割れ〔ママ〕になったよう、皮膚がはち割れそって〔ママ〕は前に上げ、皮膚はぶらさがり、肉は赤黒くなり、足は首から下の皮膚がさがり両足に別れ丸くたれ、ばたばたと音をたてて走って来た人が、どこどこに家におさえられていますよと言う人、その人たちに薬を塗らなければ、昼食時に陸軍の「カンパン」を渡せとのこ

と、それを受け取るや棒たおしのようにくずれ死亡。息絶えて動かず死亡。

1日目150名死亡、2日目150名、3日目130名。壕を掘り巾100cm、高100cm、長さ100m。

〔広島 直爆2.0km 男 17歳〕  
(37-0021)

1. 運命とか宿命とかをつくづく感じた。例えば小生については、学徒動員の工場で所属していた技術部の私の机の位置がたまたま良く、すなわち建物が倒れた時上に何もなく、比較的早く脱出でき焼死を免れた。もちろん左右の人は死亡した。
2. 教育の重要性、恐ろしさを痛感した。当時18歳、軍国主義を徹底的に叩き込まれていて、天皇陛下のために命を捧げる事には全く異議はなかった。従って8/7被爆翌日、自宅跡にたどりつき家族6人の遺体を見た時、悲しさを越えて鬼畜米・英の仇討ちを考えた。私の家族を含め死んだ人々は、皆わからないままに国の為だと思って死んだと思い、前記教育の恐ろしさをしみじみ感ずる。
3. 被爆当日から2～3日の間に非常に多くの死傷者を見たが、職業軍人といえども、これほど多くの死傷者を見た人は少ないと思う。

この貴重な体験は何らかの形で残さねばならないと思います。

4. 当時の原爆はウラニウム（ウラン）の核反応と聞いています。現在はその何十倍の威力のある原子（水素他）と聞いています。いかに恐ろしいか！

〔広島 直爆1.5km 男 18歳〕  
(11-0135)

埼玉県の農家に育ち18歳の志願兵だったので、まだ人間の死を見なかった。

8月6日突然たった1発の原爆で、先ず宮庭で何十人の死と、もだえ苦しみの形

相を見、比治山へ避難する途中、平野橋で折り重なっているような一般市民も見た。実に悲惨なものだった。「兵隊さんお水下さい。お水ちょうだい」と幾人とも呼びかけられたが、水筒の水はわずかしかなかく、班長から「もし自分が死んだら、その水筒の水で死に水を取ってもらうのだから、やってはならぬ」といわれ、通り過ぎてしまった。翌日比治山から降りて来て見た時は、ほとんどの人が死んでいた。まだうしろがみを引かれるようです。

〔広島 直爆2.0km 男 18歳〕  
(11-0151)

1. 太田川の死体引上げ作業をしたが、いまだにあのひさんな情況は忘れられない。
2. 焼けただれた乳房を赤ん坊にくわえさせ、地上に倒れる母親の姿。思い出させないでほしい。

〔広島 直爆2.0km 男 18歳〕  
(22-0052)

広島駅構内の列車内で被爆。ホームの屋根の吹き飛んだ中を東練兵場へ避難した。私達がわりと早く練兵場へ出た。空にかたまり（大きな）雲があった。練兵場のそばの山の中腹にあったお寺から火が出てすぐ焼けた。だんだん避難者が東練兵場へと来だした。男か女かわからない4歳～5歳位の子供さんが、父ちゃん母ちゃんと泣きさけびながらはだして、それも顔に水ぶくれのやけどをして、逃げて来た。

背中に火がついて燃えているのに一生懸命走って逃げる10歳位の生徒、「背中が燃えているよ」と注意してやったが、振り向きもしないで形相きびしく去った。

練兵場に大豆を入れた大きなドンゴロスの袋が積んであったが、そのあちこちが

火がついて燃えていた。友が「△△これは新型の爆弾かもしれんぞ」「なぜだ」と言ったら「爆弾の落ちた跡がない」。そうだ岩国には大きな爆弾の跡が出来ていたのだと気がついた。だんだん多勢になった。片足はハダシ、ゲートルをひきずりながらのご主人、水ぶくれになった片目、しるが出ている。奥さん、破れた真黒のモンペ姿。子供はどうしただろうか助かったろうか、後をふりむきふりむき逃げて来た。誰の口からも、これは大変だ、早く市外へ逃げよう。連れていってくれと足の不自由な老人の叫び。顔全部がやけどして水ぶくれのように腫れて、目が見えないようになった兵隊さんが、水をくれ水をくれと叫んでいた。坐ったまま片手に空の水筒をもっていた。

尾長を避難していたら、家の下敷きから這い出してきた。見れば足が片足ない。ちぎれていた。この世では見られない形相であった。頑張れよと言ったが手を貸してあげられなかった。尾長の鉄道寮に立ち寄って見た。建物はこわれていたが立ってはいた。中庭から市街を見たら火災があちこちで起きていた。空を見上げると東練兵場で見た空のかたまりの雲が入道雲のようにモクモク大きくなって、市の空を覆っていた。

当時の思い出がトギレトギレと浮かんでくるが、紙面に書くのはこれ位です。まだまだあるが別の機会に発表したい。

〔広島 直爆2.0km 男 18歳〕

(34-2623)

8月9日朝9時頃、三菱の寮に帰る途中に木造の橋がありました。それを通る時、光線にあたった方は1cm深さ位い黒炭になっていました。見たとたんこれはすごい力の「光」だったとおどろきました。

それから13日まで、広島市内を知人の家族の遺骨や、家族の行方不明〔に〕なられた方をさがすのに歩き廻っている内に、朝8時の通勤、通学で市内電車は満員で、それが直接被爆に遭った所は、両壁が吹っとんで、お客はつり手を持った形で、男女の区別もつかないようにかたまって黒こげになっているのを見て、余りに無ざんな姿で目をおおうようにありました。また電車道は日赤の「てんと」がはられて、

毛布やむしろがひかれて、その上にやけどの重傷患者が寝かされておられるのに真夏の日が照って、傷には「うじ」がわいて、痛い、熱いとうめき、さげび声で手の付けようのない有様でした。

建物のビルの前で電車か自動車を待っておられた方と思ったのですが、遺骨も衣類も全然見当らず、壁に真黒く人の影が残っているのを見ました。

こんなひどい爆弾を二度と使わないようお願いしたい。

[広島 直爆1.0km 男 19歳]

(40-0338)

千田町小学校の疎開先の校門前には、全身焼けただれ、衣服はほとんど裸同然の人々がうずくまっていた。お化けのような姿になって次々集まって来る。

口々に水、水を求め、這いあがって防火用水の水を飲む元気もなく、自分はバケツに汲んだ水をそれらの人々に飲ませてやった。火傷に水は禁物との上官の注意は聞いてはいたが、しかし今になって考えると、末期の水をやってよかったと思うようにしている。

「人間の死」というものを、この年初めて真の前にし、現実感をもって自分の胸にずっしりとこたえた。

いまここに同期生の死体がある。それはたしかに昨日まで生きていた。同期生むくろが……。焼けただれた、ふくれあがった顔、水袋を手にぶらさげたような皮膚、予備知識がなければ誰であるか判らない、赤チンを塗られた顔、またスピンドル油を塗った手足、水もほとんど飲みぬほどはれあがった口唇、栄養も摂れぬにとろとろと眠るがごとく、自分たちが声をかけるとポロポロと涙を流して、冷たい死体となっていった多くの友、さぞ無念であったろう。自分はいまこの人たちの死の上に生きていられる。この負目は一生背負って。

[広島 直爆1.5km 男 19歳]

(24-0109)

1. 被爆後、倒壊家屋の下敷きとなり助けを求めているが、猛火のために助けることが出来なかったこと。
2. 水や助けを求める人々に、なにもしてあげることが出来ず、心残りに思っている。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(01-0019)

わたしの部隊は比治山の近くにあった暁部隊（通信）16710部隊でしたが、被爆後は一般人が避難場所を求めて部隊の表門から裏門をなだれ打つように右往左往し、鮮血を流しながら苦痛な表情で泣き叫びながら、どの顔も真黒であり閃光をうけた顔はみる間に肥大してゆき誰彼の区別ができない程でした。

わたしは2階の内務班で班員と仮眠中に被爆したので眼鏡は飛散して見あたらず、小銃10丁をわきに抱えて2階の廊下から階段が壊れていたのとびおりました。それから比治山に避難をしましたが、途中でお産したばかりの妊婦と赤子が荷車のうえに赤裸なまま放置されているのを間のあたりに見て、恐ろしい現実直面したことを改めて感じました。

また、山道を登って行くと、道の両側には死体が並び、その中から女子挺身隊の女学生が横たわって、末期の水を求めて、私のゲートルに両手に満身の力をこめてすがりつき、哀顔とも怨顔ともつかない悲痛な叫びで水を水をと、まるで、妖気が迫ってくるのを感じました。禁じられているとはいえ、このままでは何れにしても助からないようにおもわれ、しかたなく全くしかたなく、断腸の思いで水を水筒から一口、二口与えると、兵隊さんありがとうの一言を最後に眠るように静かになり、ゲートルから手をはなすことができました。

いまでも、酷いことをしたのか、人助けをしたのか（フット）脳裏をかすめ心苦しくなります。

被爆後は数日間、壕の中で寝おきをくりかえした。疲れた体をおたがいに横にして休んだ周りの仲間が、朝には固くなって帰らぬ姿にかわっていた。

まだまだ、いろいろな情景を間のあたりに接して、戦争の恐ろしさ、原爆の恐ろ

しさをふたたびおこしてはならないとおもいました。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(01-0502)

- 病人の世話をしている、やけどの傷の部分に油（ヒマシ油？）を1日に2回位ぬったりしていた。しかし、医者に診てもらった患者はごくわずかで、配給のおにぎりが残っているのを見つけると、その患者は亡くなっていた。
- 死体処理のため、トラックに積み込む作業をした。その時は人間というよりも、“もの”という感じで、無我夢中で作業をしていた。
- 民間の人たちは、兵舎の裏の畑で、やけどの体が土まみれになって倒れていた。中には生きている人もいたが、医者には診てもらえなかった。

当時の体験をいくら話して聞かせてもピンとこないだろう。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(04-0427)

記憶が不鮮明になりつつあるが、次のような光景をみたり体験したりした。

- (ア) 隊舎裏手の水呑場に片手手首から先をもぎとられた人（地方人）が水を呑みに来た。
- (イ) 隊舎裏門のところ（比治山の仮設治療所へ通じる）で、ショックで急に産気づいた婦人が大八車の上に寝かされていたが、比治山防空壕の帰りそこを通った時は、すでに出産した赤子とともに産婦も死んでおり、むしろがかけられて寝かされていた。
- (ウ) 広島近郊仁保村の小学校に特設された臨時野戦病院に、負傷した初年兵を引

率して行く途中、宇品線の線路ぎわに、死んだ赤子を抱いた婦人（下半身ブルマーのみ）が、半身黒く焼かれた夫らしき人とともに立っており、「兵隊さん」と呼びかけられた。先年、平工業高校の学園祭に招かれたとき「原爆の図」展があり、そこにその婦人と思われる人の死児を抱いて彷徨する絵をみて非常に驚いた。まさにあのときの人です。間違いありません。

- (エ) 臨時野戦病院に11月入院（両腕にガラスの破片による負傷のため）、収容される兵隊や地方人の介護を手伝ったが、その間おびたしい人が毎日死んで行った。特にひどい火傷を負った若い兵隊の最後は悲惨だった。
- (オ) 毎日警防団の人達が街から老若男女の死体をあつめてきて、学校裏手のトウモロコシ畠に大きく掘られた穴にほおり込んでいた。投げ込まれた死体が、箱からころがり出るのを何回もみた。
- (カ) その他いっぱい書き切れないも〔ママ〕あの凄惨さはとても伝えきれものではない。話しても描いても、到底直接の体験者以外にはわかって貰えないと思う。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(07-0059)

千田小学校校庭で全員被爆したが、その際の上官の負傷の状況が、まず忘れられない。（軍服は焼けちぎれ、顔から血を流して朝礼台に仁王立ちに立っていた）

被爆後比治山の防空壕に避難したが、その途中、道路脇民家から火災が起き、数人の人が兵隊さん、助けてくれと叫んでいたが、私自身も負傷しその上はだしのため、現場まで行くこともできず通り過ぎてしまった。残念であった。

また、途中比治山の麓附近では、大勢の被災者が避難して来ていたが、その中には人間の顔とは思われないような顔になって、道路脇に横たわっていた光景は、全く地獄絵のようで目をそむけた。

仁保の小学校が野戦病院になり収容されたが、ここでも一般市民が大勢来ていたが、被災の状態がひどく、身体にはうじがわいたまま廊下等にくろがっていた光景も、今もって脳裏から離れていない。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(08-0036)

あの日の夜、私たちの部隊は市内に入り救護活動を行った。「兵隊さんお水」なんとこの悲痛な声を、私は50人、いやもっとの人々から聞いた。「火傷の人に水はやるな」と軍医は言ったが、私の足にすがりついて「お水、お水を」と言っている女の子、みれば息もたえだえである。私はそって水筒の口を開け、一口飲ませてあげた。うれしそうな顔をして、次の瞬間には息を引きとってしまった。私はその夜、6人程の人に水をやり死なせてしまった。

私のとった行動は悪かったのだろうか、この疑問が私の一生を貫いているようだ。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(12-0211)

この世の地獄を見た。

顔が真黒く火傷で皮膚がたれさがっている人、ガラス等の破片等で血だらけの人、全裸で焼け死んでいる人、一面焼け野原となった市街地。

当時私は呂号第62潜水艦乗組員で安芸灘で訓練中でした。漂流死体のほとんどが全裸で茶褐色、そしてパンパンにふくれ、これが人間の姿かとおもわれるような無残な姿。満潮時は波打ち際に、干潮時は沖合に、しかも海面一面にわたってただよい、腐臭がたちこめ、呼吸困難をおぼえ、また吐き気をもよおしました。

どんなことがあっても核は使ってはならない、戦争してはならない。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(15-0020)

- 私の戦友は中階から廊下に爆風でたたきつけられ、頭部裂傷で瀕死の重傷でした。私は軍医に再三再四診断を要請しましたが見て貰えず、遂に3時間後に死亡してしまいました。
- 被爆後2日後から市民救済に出た。家屋のくすぶる中で、人形さんがまるこげになっている、炭化しているものを見たが、人形でなく赤児であった事にはびっくりしました。
- 被災者救護に毎日でていたが、5～6日後にはほとんどが死亡者でしたが、橋上の中央には2、3人が炎天下水を求める人が多かった。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(22-0263)

私は被爆直後、全身裸で右耳から首、右のほほの皮が焼けぶら下がり、首が曲がり動かず、フンドシも焼け落ち、全身がハシル苦しさをガマンして、人手をかりず頑張って避難しました。

避難途中、大芝町の道路沿いの家が倒れ、その家のカモイの下敷になって背中(下半身)をはさまれて、腹ワタがワクワク出ている18歳位の女の子を見たところ、両手を動かし助けを求めて泣いている姿を見て、何とかしてやりたい気持でいっぱいでしたが、私は足は引きずるし両手は曲がってしまい首は曲がったきりで、自分の事が精一杯なので、そのまま避難しました。被爆後今日に至るまで一日として欠かさず、その子並びに死者の冥福を祈り続けています。

〔広島 直爆2.0km 男 19歳〕  
(32-0192)

### ③ 20歳代（被爆時）

私は広島第一陸軍病院の衛生兵でしたが、陸軍幼年学校控兵舎が宿舎で、そこで被爆した。兵舎の下敷となり頭を強く打ち負傷したためか、逃走のことは記憶にない。

戦友の話では（工兵隊釣橋の左岸で雨しのぎに防空壕に入れて、少しの間目を離している間にいなくなった）とのこと。私はその時広島方面が火の海となっているのを見て放心状態で火に向かって歩いて行った。人一人にも会わなかったように思う。

第一陸軍病院本院で救助され、夜を防空壕で明かした。7日安芸郡飯室小学校へ転送された。小学校では毎日何人もの人が、精神さく乱の狂い死にして行ったのが特に印象に残っています。

〔広島 直爆1.0km 男 20歳〕  
（33-0125）

私は兵舎の中にいて助かった。直爆を受けつづれた兵舎の中にまだ戦友が残っている助けよう。

救護活動、死体処理をつづけ、市中火の海、燃えさかる中で被爆者のうめき声、地上に横たわった死人でいる人、よつんばいではっている者、見れば焼けただれ黒こげ、二度と見ることの出来ないありさまです。

私たち三日間食事の支給がなく、サツマ芋を掘り集めて鉄兜に入れるのに、手づかみで入れていると、一つだけ手ざわりのちがうぬるっとしたのがあり、よく見れば人間の下あご、きれいな歯ならび、若者の下あご、いやおどろきました。こんなところに下あごがあるとは、下あごはその畠に穴を掘って埋めてやりました。

思い出すことはたくさんありますが、文章筆下手の私には書き通すことが出来ません。

広島陸軍病院がつぶれ、燃えている中で、看護婦さんの患者救出活動。まっかに血でそまった白衣、火の海の中から助けだす姿、今でも目にうかびます。

〔広島 直爆1.0km 男 20歳〕

(33-0135)

- ア) 一瞬にして入居していた建物(2階)が倒壊した。
- イ) 倒壊した建物(国民学校)内に閉じこめられた小学生の救出が半数しか出来ない内に全焼した。
- ウ) 避難時、道路端に人びとの死んでいる姿や生きていた人たちの苦しみのようす。

〔広島 直爆2.0km 男 20歳〕

(01-0126)

○教育隊のたてものの下敷きになった人たちを助けようとして努力したが、やけどをした両手と、火のこのため、また身体全体が苦しいので「助けてくれ」と叫ぶ人たちをほとんど助けることが出来ず、5分もしないうちに広い範囲の火が半円形におし迫ってきた。火と煙、ものすごい風でその場を去り、城の壕の中に胸の辺りまで水につかり、なんをさける。

生きながら焼け殺された人々を思い、今も心がいたむ。

○8月8日ごろと思うが、救援隊がきて広場に大テントをたててくれ、その中に收容された。すごい火傷の人々(小生以上に)そしてガラスが目につきささっている人、目をあけてもなにも見えない人、あの閃光で、またあまりの恐怖に、気が狂ってわけのわからないことを大声で叫んでいる人、正に生き地獄だった。

〔広島 直爆1.0km 男 21歳〕

(26-0008)

まさに地ごく図である。人間は上は神より悪まであること、この目でしっかりみた。

人間は死にぎわに本当のその人の真価がわかることがわかった。

人間はあわれな動物、畜生であることを痛感した。

ふだんは聖人のような顔をした人間で、死に直面すると畜生のようになる人間が多いのを痛感した。

[広島 直爆1.5km 男 21歳]

(04-0810)

- 壊れた建物の中から出たとき、血だらけの夫人が自家の下敷になっている主人を助けてくれと頼むので協力し、他人にも応援をたのんだが家はビクともしない。「オーイ」と叫ぶとすぐ足もとで「助けテクレーイ」かすかな苦しそうな声がした。火は回り、誰もが逃げた。私は隊長の命令でそこを離れた。爾後悪夢になやまされる。彼は生きながら焼け死んだのだ。
- 牛田のつり橋のところまで火焰からのがれた無数の黒い人々が渡る順番を待っていた。数人が川へ入って歩き出したが、間もなくバタバタ流れ落ちていった。仮死したのだった。
- くるめぎの小学校（戸坂？）が仮設病院となっていて、避難して集まった無数の黒い人々がここまで来て死んだ。便所に横たわる人をまたいで小便をした。
- 8月8日はじめて広島へ軍用で出た。白島附近は焼けボックリの立札が林立していた。「○子生きていたらギオンへこいハハ」「△男○子やられた、クマノへいくチチ」等々悲報の連絡板が涙をさそった。
- 挙げればキリがない。

[広島 直爆1.5km 男 21歳]

(32-0164)

被爆で家屋の下敷きとなり、ようやく救出されて路上に出たところ、全身やけどで皮膚は黒くやけただれ、だんだんと皮膚がたれ下がった大勢の人が、道路いっばいにのろのろと歩いていた悲惨な姿。

根こそぎ倒れた大木の根元のくぼみで、母親が子供を抱いて死んでおり、抱かれた生後7～8ヵ月位の子供は元気で母親の乳房をしゃぶっていたが、何もしてやれなかった。

こと等。

[広島 直爆2.0km 男 21歳]

(01-0015)

○比治山に避難してきた人はそのほとんどが子供と女性で、火傷の手当をしてやれないままだった。樹下に腰を下して苦痛のうめきをあげていた。水を求めても飲ませてやれなかった。そのうち早い者は夜から死亡していった。とてもこの世の情景ではない。

○婦人（妊婦）がショックで異常出産をする場面にぶつかり、何もしてやれない自分に大きな無力感を感じた。必死になってボロボロの着物を引きさき、仮死状態の児にかけている。血みどろの親子は力つきてたおれていった。未だに頭にこびりついている。

○夜中、何回も偵察の敵機が飛来した。その都度自分は防空壕にかけ込んだ。その時外に寝かされたままの同僚や、樹下で歩行出来ない人々が防空壕に入れてくれと泣きさげぶのだが、あまりにも人数が多く、希望を聞けず自分だけが入ったことが、人間としてこれでよかったのかと、いつまでも心に残っている。

○原子爆弾だということは広島と離れるまで（8月28日）ついに知らせてもらえなかった。早く知ったならば何かもっとすることがあったと思う。（資料あつめや何かの）

○藤の花がかえり咲きをした。（8月の24～5日）だったと思う。みんな不思議に思った。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕  
(01-0091)

昭和20年8月6日午後から爆心地中心に向い、救護活動を行うため動員されたが、途中無惨な遺体がつぎつぎと眼に入り、特に強烈な印象となって今でも思い出されるのが、妊婦が黒こげとなって、その傍らにショックのため流産した嬰兒が、へその緒の連なったまま息絶えていた。

また、水を求めて、市内の川という川があふれ、湯〔き〕をいやし、体を冷やしたのちそのまま絶命し、折り重なっていく様子が、40年経過した今日でも忘れることができない。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕  
(01-2022)

平和を願って……

想いだしたくないあの恐ろしい昭和20年8月6日、朝9時頃一瞬閃光が走り、目の前が砂煙で見えなくなりました。何がおきたのだろうと思いました。ただ茫然としてあたりを見ると、兵舎は潰れ民家は燃えており、その内どこからとなく市民の焼けただれた人々が行く先も定まらず無意識に歩いて来るのが目に入りました。

その中に一人の妊婦が被爆のショックで出産をしたのでしょうか、本人はやけどをしており、下半身には赤ちゃんが元気よくウブ声をあげておりました。でもその悲惨な光景は二度とあってはならないことです。

また、部隊近くに幼稚園がありました。その建物は火に包まれて燃えさかっており、建物の中で7、8人の園児達が助けを求めて右往左往しているのが目に入りました。私は任務のためその子供達を救うことも出来ず去って行きましたが、戦後40年過ぎた現在でも、どうしてあの時助けなかったのかと後悔の念です。

今思うことは、世界の人々が広島や長崎で受けた悲惨な事が起こらないよう、平和確立のために努力して行かなければと思います。

最後に私も被爆者の一人として（頭にケガ）をしました。でも現在は何とか自分なりに健康であるように一生懸命生きております。

平和を願って……。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕  
(04-0805)

(ア) あまりの衝撃で、本来人間のもっている意志や感情といったものを喪ってしまったこと。

○あまりの惨状に、なすすべもなく、呆然自失の状態、救援の手をさしのべる余力（気持ち）もなく、見捨ててしまったこと。

○爆心部より逃れて、折り重なって身を横たえている市民の方の救いの呼びかけやまなざしに応える心を喪い、これらの方を踏みこえて逃げたこと。

○避難した比治山より収容所に夕刻収容される時、「痛いよう」「水くれえ」「兵隊さん救けてえ」の声が全山にこだまし、暗澹たる気持になったこと。

(イ) 収容所に収容されたが、スピンドル油の塗布以外何の手当もなく、夜明けに周囲の者が狂乱状態になって息をひきとっていったこと。

○収容所の窓下や、樹木の下で、誰にも看取られることもなく、放置されている市民の屍体を目撃したこと。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕  
(08-0023)

原爆とは思わなかった。現実には非常に恐ろしい爆弾であり、戦争だからやむをえないと思っていた。その後原子爆弾であると知った。

1. 苦しむ人を助けることが出来なかったのが日本の現実であったと思う。
2. 黒くハレ上がった身体。
3. 水や助けをもとめる人に、物や品物が無いので与えることが出来なかった。残念に思う。
4. 実に無残であった。
5. 言葉や字で表わすことが出来ない人の死骸。

[広島 直爆2.0km 男 21歳]  
(12-0003)

忘れようとしていますので、書きません。

[広島 直爆2.0km 男 21歳]  
(27-0343)

暁部隊比治山下の船舶補充隊兵舎二階舎後寝台上で被爆。壁、天井、窓枠落下。30cm位の銃架、梁で首を押しつぶされた戦友、下半身ははさまれて動けない者。這い廻っている者……。

今思えば、その時少しでも手を貸してやるべきだったと悔やむ。

比治山山腹の横穴防空壕。その後収容された仁保国民学校の臨時野戦病院。帝国人絹字品工場等々へ移転されたが「水ください」「痛い、痛い」の呻き声……。今思い出しても生地獄だ。似島での死体処理作業のありさまが、今でもハッキリと脳裏に残っている。

その当時は夢中でやったことだが……。

なぜあのようなことをしなければならなかったのか？

処理？した死体に対し、一度も手を合せて「冥福」を祈った記憶がない？？

誠に申し訳ない！！

だからかどうか判らぬが、原爆関係会合等で慰霊黙祷の際、必ず思わず身体が震えるような状態になる。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕

(27-0524)

太田川流域の桜並木の木陰づたいに、たくさんの人々の死体が並んでいた。顔を見ても性別の判断もつかない位焼けただれ、水ぶくれ、うじが発生、見るも無惨な姿であり、肉親が見ればなんと思うであろうかと、心痛む思いであった。また、桜並木木陰にて力つきて水を求める人々に対しても、戦時中軍隊勤務という状況のもとで何もしてあげることが出来ず、今から考えれば、せめて最後の水の一滴なりと与えてあげれば良かったと思ひ、誠に非人道的な事をしたと心残りに思ひ、悔やんでいる毎日である。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕

(32-0024)

同僚の受傷に何も出来なかったもどかしさ。軽い受傷と思われた患者が自宅療養中に次々に死亡して行った情報を聞いたときの不安が大きかった。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕

(32-0176)

- ア. 米飛行機の様子を見つめていたとき突然被爆、地面にたたきつけられた。次の瞬間、真暗いうずの中でうごめいていた。しだいに明るさをとりもどしたとき、軍刀、銃剣などぐにゃぐにゃになっていた。
- イ. 宇品にいく途中、道路、電車の中、川の中に死体がいっぱい。しかし道路の死体はしだいに片づけられ路傍に積み上げられていた。その死体の山の中には、まだ生きて目だけぎょろぎょろしていた人がかなりいたのが印象的だった。悲しかった。
- ウ. 宇品の病院でハエが黒山のようにたかり、患者みんなが頭の毛の間のウミの中にウジを湧かした。隣にいた軍人が耳の中に入ったウジのため狂死した。私は紙片をひろってきて耳に栓をしていて助かった。
- エ. 岡山陸軍病院に収容され半月ほどたったとき、自宅療養を命ぜられて岡山の自宅に帰ったが、このあと急に発熱しドクダミを飲んだり、ドジョウをひらいて額にはりつけたりしたが熱がさがらず、病院に再入院をかけあってようやく再入院し治療を受け、死からまぬがれることができた。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕  
(33-0040)

あまりにも多くの被爆者のため、助けてやろうという気がでなかったが、家屋の下敷になり女性の声で手の先だけ見えて、助けて……の状況と、独身寮のおばさんに必死で泣きつかれ、坊やを助けたが、前記の女性は多分？……

思い出したくないが忘れられない。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕  
(33-0137)

- ア 次々に死んでいった。特に小学生、赤子など、母の死後のあとはどうなったか。
- イ 私に子供たちが「兵隊さん、ぼくたちがどんな悪いことしたの」「兵隊さん、どうしてこんな戦争をするの」「兵隊さん、なんですか、アメリカのばかやろう」こうって死んだ多くの5年6年生の子供たち。
- ウ 母親が、兵隊さんこの子をたのむーと息たえた母。赤子は無傷の状態、母親のかばい、人間わざではなかった。

[広島 直爆2.0km 男 21歳]  
(35-0200)

火においたてられるように逃げる途中に白島小学校がありました。児童数二千人という大きな小学校でしたが、数百人とも思える子供達が校庭に、あるいは飛散した校舎の下敷になってたおれていました。

何百人という子供達の父さん母さんと呼ぶ声が、今も耳に残って忘れられません。たおれた校舎の一部には火がついていました。あの子供達も生き乍ら焼き殺されたのです。「ジゴク」以上です。

60年8月15日白島小学校を訪ねました。昔の写真など見せていただき感無量でした。

書き続ければ幾百校書いても書き尽くせない思いです。

[広島 直爆1.0km 男 22歳]  
(28-0097)

13日、祇園より芸備線矢賀駅までトラックで患者を輸送途中、火災のためトラックが通れないので歩いて行くことになりました。

私は両手、両腕、両肩等を火傷で、手を下にさげるとものすごく痛く、手を同じ高さに上げ、また着る物はぼろぼろ、体はまっ黒で行進。それが100名以上の人が行進ですので、まるで死の行進でした。

〔広島 直爆1.5km 男 22歳〕  
(06-0003)

1. あまり多くの人々が死んだ姿をみると、追々それに対する感情もマヒして、気味の悪さ、恐ろしさも感ずる度合いが薄くなった。それと、私自身もやられているので助かり度いという願いが全身の気持の中にいっぱいになっており、渦中にある事なので火に追われて逃げるのが一生懸命だった。
2. 水を求め、助けを求める人をかばう事は全然出来ず、歩いて火のない川の方へ向けてゆく人の列に加わってかろうじてついて行った。8月6日は暗い煙で一日中うす暗いような日であった。

〔広島 直爆1.5km 男 22歳〕  
(32-0220)

被爆直後の比治山周辺は、まさに生地獄そのものであり、筆舌で表現することは極めて難しいが、40年も経過した今でも、あの光景を思い起こすと胸の痛みをおぼえる。

兵隊さん、助けてと足にすがりつく人の姿、顔は、そむける外なく直視出来ず、無理に手をはなして本隊へ連絡に行った時の思いは、忘れようとしても忘れることは出来ない。

〔広島 直爆2.0km 男 22歳〕  
(08-0031)

1. 現役兵として服務中、昭和20年8月6日月曜日、快晴の炎暑の日、朝8時15分警報解除後の全くの奇襲、しかも放射能と強力熱線を受け、焼けただれた皮膚をだらりとたらしめた人間、ボロの群れ、わずかな塗布薬を手に救護の衛生隊は、将校、下士官、兵の順に救護し、階級の下の方は後回し、まして一般市民の被災者は、救いを求めても突き放して見殺しのよう、いかに軍人専横の時といえども軍人が威張り散らしている国は亡びるを見た。
2. 被爆後、焼けた肌がただれ、うめき苦しむ様は地獄図であり、水を水をと叫びつつ死んでいった人々、また高熱のため発狂している者、コンクリート床にそのまま被災患者が無造作に寝転ばされていた。
3. 焼けただれた皮膚に、蠅が集まり蛆が全身に這い、両眼を吊り上げ、口から吐血して苦しむ被爆者たち、化膿した皮膚の手当もせず放置、死ねばガソリン等油をかけ、丸太を焼くごとく、そして無縁仏、彼等の魂と共に死没者の霊は未だに成仏していないだろう。
4. 建物疎開の勤労働員された学生たちが、焼けただれた体でお母さんと苦しい息で叫んでいたが、しばらくして死んでしまった。
5. 火傷や飛来物等による重傷被災者に、水を与えては駄目といって、救護人は「水を、水を」の声を無視していたが、どうせ助からぬ重傷者だから、末期の水として与えればよいのにと思った。
6. 学校の校庭隅で、父親が火傷死した子供をトタンの上に乗せ、木切れを積み茶毘にしていた。もはや泣く気力さえない様子だった。
7. 焼けた肌の死体が、たくさん太田川に浮いていた。また焼けただれた皮膚をむき出しの婦人が、死んだ子供を抱えてうろろう放心の体で歩いていた。よろよろとして。
8. 真黒い雨が降って来たが、火災に雨を呼ぶということあり、埃で黒いと全身に浴びたがさして気に留めなかった私も、放射雨とは大分後で聞いたことであり、いつの時代でも、一般国民には真相は隠され、今後とも恐ろしい。

〔広島 直爆2.0km 男 22歳〕  
(25-0001)

私は広島の暁第16710部隊で被爆しました。

被爆の翌日の朝でしたが、兵舎の裏の道路に荷車の上に、母親と生まれてまもない赤ん坊がまわだてつつまれており、母親は全身ヤケドで虫の息でした。赤ん坊はヤケドもしていませんでしたが、どうしてやる事も出来なかった。

兵隊は、皆水筒を持っておりましたが、被爆でヤケドした人には水をやっては死ぬと言う事で、あまり飲ませないようにしたが、翌日見たら、多くの人が水たまりに顔をふせて死んでいるのを見た。もっと水をあげれば良かったと思った。

[広島 直爆2.0km 男 22歳]

(32-0042)

宇品臨時野戦病院に收容され三日後に気がついた時、あたりを見まわせばうめき声でうずまいていた。異臭が流れて来る方を見れば、死体を重ねて積み上げて焼いていた。うめき声が小さくなるとあっけなく死んで行くのを、兵隊達はもくもくと運び出していた。急に命がおしくなった。オレは近頃、あのまま意識がもどらなかった〔ら〕と、夢を見てうなされる事が多くなった。同僚はなくなった。合掌。

[広島 直爆2.0km 男 22歳]

(34-1302)

被爆数日後より入市、死体整理その他で軍の命令により入市して、この状態がこの(世のじごく)。足のふみ場なく死んだ人、生きていても動かせない人、男女の別が分からない程やけただれ、でも虫のいきという程の声で水を頼む声。あまりの哀れさに、兵隊さんにかくれるようにして水とうの水を少しあげた。その後、数分後、この世からの別れという声か、ほんのわずかの水で満足した意味の表情なのか、今でも思い出せる姿である。(ありがとう) 虫の声でききとれなかったが、たしか

に口の動きと表情で察した。でも安らかなこの世からの別れの旅立ちの姿でした。

電車の中、家の焼ける下、周り一面死んだ人、助けを求める人、戦争とはこんなものか、はじめて見た生きじごく。

日が暮れて寮に帰って見れば、負傷者ところせましと並べてある中、助けを求めて死ぬる人つぎつぎと。自分達は今夜どうして休むのか、コンクリー床の上でむしろしき、うとうとしたと思うと夢の中、昼間のなくなった人の中、水をあげて死んでいた人人、それが私らを呼んでいる影がうかぶ。

このような戦争、二度と繰り返さない事を願うこの頃である。戦争はいやだ、あの声後世に伝える事が私等の願い。

〔広島 直爆2.0km 男 23歳〕

(32-0016)

下敷きになって苦闘の末、九死に一生を得てやっと自力で脱出出来た。文理大のグラウンドが安全と思いそこに避難した。おびたしい被爆者で、顔ははれ上り、やけどの皮ふがぶらさがり、一変して生地獄と化した。

私はけがは大したことはないので、負傷者を避難させたり軍の救援隊の協力をした。その中で今でも心の中に残って忘れられないのは、この幼い女の子のことである。2歳か3歳の幼い女の子が全身やけどで、まとっていた服もちぎれて残っておらず、やけただれた皮ふがぶらさがり、いたましい姿になって、お母ちゃん、お母ちゃんと母を求めてグラウンドをよろよろさまよっている。かわいそうにとその子をやさしくだきかかえて、お母ちゃんをさがして上げるよ、と言って、この子のお母さんはいませんか、いませんか、と多くの避難者のいるグラウンド中をさがし歩いたがとうとうみつからず、この上は私がこの子を看病してやろうと決心した。脱出する時に何かの役にたつかもとふとんの敷布をちぎって持って出たのがあったので、それをグラウンドのプールの水にひたししぼって、炎天でやけどがさぞかわいていたかろうと、ゆっくりと巻いてやり、グラウンドに作ってあった甘藷のつるを集めて、その上に静かに寝かせてやる。やがて軍の救援隊が来て「負傷者は御幸橋に車が待っていますから出て下さい」と知らせたので、さっそくその子をだいて御幸橋に向

う。もうあまり泣くことすら出来ないらしく静かになった。行く途中ひきつけをした。助かるようにと願いつつ軍用トラックにたどりつき、兵隊さんにこの子をよろしく頼みますとあずけた。私はどうか元気になって下さいと手を合わせてその子と別れた。

あれから助かっていれば幸せに暮しているだろうか。

〔広島 直爆2.0km 男 23歳〕  
(34-0410)

爆風で全身打撲を受けながら、飛び散る破片の中を夢中で屋外へ逃げ出した私は茫然となった。毎日見られた周囲の家々が全部崩れ落ち、その上あちこちから同時に火の手が上がっていたからです。一瞬頭の中を地下大火薬庫の爆発ではないかと思っただけでなく、そうではなくはこれ程広範囲の凄惨な状態は考えられないからです。

重傷の戦友に手を貸し、三滝の竹藪へ避難。しばらくして黒い俄雨。その頃である、十歳位の男の子が淋しそうな笑顔で近づいて来ました。見ると半袖シャツから出ている腕の肘から骨が突き出ているのです。携帯天幕と毛布で子供と共に雨を避け、応急手当のみ、ただ見守るばかりで何もしてやれません。

西南の空に爆音が聞こえ、米軍機が戦果を見届けに来たことを感じました。その頃ようやく気持が落ち着き、重傷者の手当のために三滝の陸軍病院へ薬品の調達に行きましたが、そこもまた想像以上の惨状でした。

その夜は竹藪で野宿。一緒に横になった男の子を、私と戦友とで中にはさんで眠りました。隊の握り飯をうまそうに食べたので安心して眠ったのですが、翌朝男の子は眼を醒まさなかったのです。私達に知られないように静かに死んでいったのです。なぜ名前や住所を聞いてやらなかったのか、今でも時々思い出されて心が痛みます。忘れたいのになんか忘れられないこと、思い出したくないのに思い出されるこの日のことと、この男の子のことです。

〔広島 直爆2.0km 男 23歳〕  
(34-2316)

稲光の様な強烈なせん光と共に、広島町は一瞬にして焼土と化し、ガレキの山、屍の山、地獄さながらの阿鼻叫喚の町と化した。自分も服は焼け、左腕は肩口より下、右腕はひじより先、片顔から耳、首、胸にかけて火傷を受け、火傷特有の水ぶくれでき、黒く焼けただれた皮膚は破れたれ下がり水滴が流れ出る。あたり一面煙と土砂や壁土のほこりで一米先も見えない。今までぬけるようだった青空がまるで日暮れ時の様になった。建物の下敷となり助けを求める者、着ている物は全部焼け髪はなくなり、男女の区別もつかない程焼けただれている者や、苦痛をうったえ続けてにげ切れず、精も根も尽き果て断末魔のうめきを上げて死んでゆく者、市内は全部火の海となり余りのあつさに耐えかねて川に飛び込んだ人々も、水が熱湯のようになりもがき苦しんで死んで行く人たち、河原や空地には、まるで魚を干した様に焼けただれて肉親を呼びつづけている人々、焦熱地獄とはあの様な状態を言うのでしょうか、とうてい口や筆では充分に表現する事は出来ません。

入院してからも次から次へ、また1人また2人と死んでゆかれました。今度は自分の番だと不安におびえておむられない毎日でした。幸いにも一命を取止めて、40年もたって参りました。

犠牲者の方々の御冥福をお祈りすると共に、1日も早く援護法の制定願うものです。

[広島 直爆 1.5km 男 24歳]  
(32-0078)

- ①軍医は直後”お前たちはウランという毒ガスを吸ったからもう助からんぞ”と言った。どうしたらよいかと言ったら”毒だみでも煎じて飲め”と言われた。
- ②やけどした母にすがって、泣いているやけどした幼児がいた。どうすることも出来なかった。
- ③”たつまき”が起こって、泉邸の松が燃えたことも忘れられない。”たつまき”は火を伴って広島市を通過して行った。
- ④戸坂村の小学校が臨時の陸軍病院になった。そこでの地獄図は、
  - イ) 背骨に打撲を受けた少年が乳母車にのせられ、小水が出ないと苦しんでいた。

軍医は” どうにも出来ない” と。

ロ) 兵隊 (皆やけどをしていた) が何十人ごろごろしていた。皆フンドシだけで、そのフンドシに荷札が着いていて、それをつけたままユーレイのように、うつろに便所に通っていた。

ハ) 薬は赤チンを塗るだけであった。ひどいものであった。

[広島 直爆2.0km 男 24歳]

(13-11-001)

空襲への恐怖。

今でもサイレンの音におどろく。

部屋の中で被爆しながら顔や手の皮膚の焼けつく様な熱さ。

被爆者の松の木の黒皮をはいだような赤黒い光った焼死体。

外に居た被爆者のボールのようにはれ上がった顔、黒い灰色の顔、象の目、意外に小さな赤い唇、焼けたボロボロの軍衣。

間もなく焼けただれた人々の姿。地獄とはこんな事を言うのだという思い。

今でも思い出すとせんりつが走ります。

[広島 直爆2.0km 男 24歳]

(32-0177)

被爆直後、「水をくれ」という人に、水をあげてしまった。あとで聞くと、水をやると亡くなってしまうと聞いた。

今でも、あれでよかったのかどうか、自問自答している。

[広島 直爆2.0km 男 25歳]

(13-05-001)

- ① 8月6日の夜、部隊の演習場で一般の方と一緒に草の上に眠ったが、その時の皆さんの「うめき声」の中で「何とかしてあげなければ……」と思いながら眠り込んでしまいました。次の朝大部分の方が亡くなっておられましたが、せめてなくさめの声でも掛けてあげたら……と今でも悔やまれる。特に10歳位の男の子が亡くなった父親の身体を枕に寝ていたのが今でも強く頭に焼付いています。
- ② 川の中を潮の流れによって死体が沢山、数日間上下したこと。
- ③ 川の中州に死体を積み上げて何日もかかって焼いたこと。

〔広島 直爆2.0km 男 25歳〕  
(29-0017)

原爆投下の際、私は建物の蔭で直射光線は免れた。あの稲妻にビックリ、防空壕へと走った途中後をふりかえると、空中に入道雲がむくむく、その中は真赤に染まりゆらゆらしていた。瞬間まともに爆風を受け、顔面に無数の傷を受け出血、失明同然となり、その後の状況はなにも見えない。あたりはどよめき、同僚に肩を支えられ一日中病院を探し求め歩き続けた。しかしどこに行っても処置してくれる所はなく、小舟に乘せられた。それより舟が着く頃初めてスカン眼の見る事が出来た。もう日暮だった。舟を降りると、着いた所は似の島の検疫所だった。広島に来る時、この検疫所に一泊したことがあったので分かった。もう病棟は重傷者で満員で、マッチの棒を並べたように重傷者が寝かされ、足の踏み場もない状況だった。夜となると到る所より無数の人が助けを求め、水を求め、ウメキ声、サケビ声で一睡も出来ないままだった。声が止む、もう帰らぬ人だ。夜が明けるとあたりに無数の人が死んでいるようだ。この場面は互いに自分の事が精一杯で他人ごとでない。私は夜明けと共に治療のため一列に並ぶ。数え切れない人の列だ。初めて医師に見てもらったのはもう昼頃だったろう。

あたりの人、顔は黒コゲ、衣類はボロボロ、ある人は傷口よりウジが見える。どこをむいても無残な姿だ。しかし治療に並べる人はよい方だった。起きれぬ人がまだまだ多い。ある所には無数の死体の列だった。

この光景は二度となくていい。絶対にあってはならない。またと原爆の惨状は許

せない。

〔広島 直爆2.0km 男 25歳〕  
(40-1150)

焔の迫って来る家屋の下敷となり、両手を出して助けてくれともがく被災者を助けることが出来ずに、後で助けにくると見捨てたのが、折りにふれて思い出されて、非人道なことをしたと心がいたむ。

赤むけの両腕で（半死の母親の）乳ぶさを捜す子供。

○露出部分が火傷（皮がむける）被服が焦げ、河べりにむらがる被爆者。

○一瞬にして瓦礫と化した砂漠の中、防火用水槽（コンクリート）の内で死んでいるものが多かった（熱かったのであろう）

〔広島 直爆0.5km 男 26歳〕  
(15-0056)

広島第2陸軍病院第10病棟のベットで臥床中に被爆。ピカッとした強烈な閃光に思わず顔をおおった。ジリジリと沸きたぎった油がまとわりつくような熱さ、次の瞬間から記憶がない。窓ガラスやベットと一緒に吹きとばされたい。気がついたときは病院裏の太田川の堤防の上をトボトボ歩いていた。いつも見なれた広島城の天守閣が跡片もない。病院の建物も倒壊して炊事場の煙突だけがニュートと立っていたのが印象的だった。

堤防下の川原には看護婦や患者が大勢集まっていた。左脚の傷からの出血がひどく、看護婦が止血してくれた。あちこちから一斉に火の手があがり、皆風上に向かって逃げたが、私は歩けず他の重傷者とともに川原に残された。目の前が暗く意識がもうろうとして死を覚悟したが、看護に残った△△婦長（現在▽▽）に気合いを

入れられた。そのうち、防空壕に疎開してあった医薬品類が見つかり、すぐにカンフル注射を打たれようやく意識がはっきりした。猛烈にのどが渇き、折から降ってきた雨水を石鹼函にためて飲ませてもらった。放射能を多量に含んだ雨とは露知らずむさぼり飲んだ。午後になって各地から救援隊がかけつけ、川原に天幕を張って救護所が設けられ収容された。

それから5日間ほど救護所で治療を受けたが、正に地獄の様相だった。隣にうなっていた患者が静かになったと思うと死んでいた。所属も氏名も不明のまま。死体を焼く臭いが絶えずただよっていた。生存者の胸に赤チンで番号を記し、早急に患者名簿が作られた。

5日ほど過ぎて、岡山、島根との県境に近い東城町の広島第2陸軍病院東城分院に移送された。約250名ほど移送され、分院となった女学校の屋内体育館がいっぱいになった。

8月15日の終戦のあとから、今まで元気だった軽傷の患者が次々に倒れ、高熱を発し、下痢をおこし、苦しみもだえて死んでいった。毎日毎日5名から10名もの死亡者が出た。体育館いっぱいの患者が急激に減ってゆき、次第に残り少なくなってきた。ピカは原子爆弾で、被爆した者は95%以上死亡するという噂が流れ、今度は自分の番かと恐怖に気が狂いそうな毎日だった。従容と死に直面した6日のことがウソのように恐れおののいた。

その頃新潟から両親と弟妹がかけつけてきてくれた。力強かった。弟が新潟大学の吉田助教授からの手紙を預かって、分院長に届けた。放射能障害に対する対応処置がかかれていた。そのあと、弟は新潟医大と東城分院の間を往復して、患者の容態と治療指示の交換伝達に当たっていた。

9月初め、全く絶望視されていた私に回復の兆しが生じ、9月末には歩けるようになって退院した。そのとき東城分院に生き残った者はわずかに5人、実に98%の人が死んでしまった。

〔広島 直爆1.0km 男 26歳〕  
(15-0032)

軍隊に来て初めての体験で、大変ひどいものと思った。

言葉で表わせない惨状でした。また、私自身のことではいっばいで、助けを求めたり、水をもとめてる人々にも何もして上げられず残念に思っています。

[広島 直爆1.5km 男 26歳]

(04-0705)

私は当時招集されて広島市楠木町にある崇徳中学校を兵舎とした鉄道部隊に入隊しておりました。被爆による木造二階建の兵舎の下敷で一時失神状態から意識を取り戻しました。部隊は祇園古市を経て6キロ離れた緑井にやっと逃避し、終戦を迎えましたが、被爆の広島市は、兵隊、市民、女子供、動植物一切が焼けただけ、文字通り壊滅をしてしまいました。建物は崩壊、大火災で全焼、一望の焼野原、さき程までの中国地方随一の市街がただの一発の原子爆弾（後日判明した）でこの有様、まことに目をそむける惨状でした。

約50人位の被爆者が動く力も失い、呆然として夏の広場に座り臥せこんで、やっとの声で「水を、水を飲ませてくれ」と哀願され、バケツで太田川から掬い飲ませるとすぐ息を引きとられた方々、ひどい火傷で膨れ上り顔の皮が胸元まで垂れ下がり、かろうじて杖を引きながら三々五々と奥地へ逃げて行かれる方。橋桁に上流から流れ溜った死体。それを橋の上から引上げてトラックに山積して運ぶ等々。到底この世の様とも思えぬ地獄絵は、被爆者、救援にかけつけた入市の人達だけしか判ってもらえぬ。修羅場を体験した私達は、2度と地球上に再現させてはならないと世界中の人々に叫び続けたいと思います。

未だ病床で死と直面している人。不幸にしてケロイドのまだ消え失せない人はもちろんのこと、比較的軽傷な私達でさえ、被爆して今日まで死の恐怖から解放されない不安は時々夢にまでみます。だからこそ核の完全廃絶を訴えたい気持でいっばいです。

[広島 直爆1.5km 男 26歳]

(35-0120)

広島市内の家々は倒壊し、瓦は道路一面に散乱、歩くところも無かった。  
水槽には3人、4人と水をもとめて重なり合って死んでいる。

倒壊した家の中にも傷ついて横たわっている人。

なんとしてもたすけ出すことも出来ず、今思えばほんとに申しわけないことだ。

冷たくなった我が子を抱いて、さまよう母親。

親を兄弟をさがしもとめる子供、思い出せば数かぎりある。

「若き母と子」  
抱く子は冷たく  
いくら温めても  
温まらず  
此の世に生れて  
一年たらずの  
はかない命  
幼い命をうばった原爆  
死の我が子を抱く  
母親の姿



若き母と子  
抱く子は冷たく  
いくら温めても  
温まらず  
此の世に生れて  
一年たらずの  
はかない命  
幼い命をうばった原爆  
死の我が子を抱く  
母親の姿

〔広島 直爆0.5km 男 27歳〕  
(22-0254)

被爆して自分の身体が火傷して動けなかった。目の前で死んだ人、家の柱にはさまって傷ついて動けない人たちを、どうしても助けることができなかったことが、今思い出しても悲しい。

〔広島 直爆2.0km 男 27歳〕  
(03-0013)

8月6日(月曜日)私達は公用でトラックに乗り己斐に向かって出発、その直後7、8分たった頃、突然爆発が起き、爆風でトラックから吹き飛ばされやうにしたがかろうじて助かり、そしてまた、死角に入っていたため六名全員助かり、帰途道路イッパイに、皮膚がやけどだれワカメのようにぶら下がり、両手を前に下げ、まるで化物のようであった。

わずか3m位の下水に折り重なって死体のごろごろ、そして2米位と厚さ50センチ位のコンクリートの下におしつぶされ、何人もの人が死体となっている。

数秒後黒い雨が雷雨のように降り、雨がやむとカンカン照り、その道路にトタン1枚をかぶせられ、母親が死に今ショックで生まれた赤ん坊〔が〕泣いている。その惨状たるや、皮膚に粟を生じるということとはこのことかと思った。

原隊までわずかの距離であったが7時間もかかり、帰って見れば隊は全滅、仕方がなく民家をかり、次の日から食糧運搬に走り回り、この目で見た市中の惨状、目の余るものがあった。一週位たった頃、食欲不振、はきけ、微熱、目まい。それから四十年、今ではS字形結腸腫瘍摘出手術をうけ通院治療中。

〔広島 直爆2.0km 男 27歳〕  
(04-0809)

あの日、広島駅を8時28分発車予定の芸備線三次行の貨物列車の車掌で乗務、原爆のため約1時間30分遅れて広島駅を発車した。

途中矢賀駅までの間、確か6回停車したと記憶している。その都度、方々から逃げて走って来る被爆者を乗せたが、際限なくいつまでも待って乗せるわけにはいかず、ある程度で見切り発車したが、今考えると、あのときいくら列車は遅れても最後まで待って乗せるべきだったと、心残りでならない次第である。

〔広島 直爆2.0km 男 27歳〕  
(34-0803)

衛生兵であったので被爆者の救護に当たった時のあまりの悲惨さに、ヤケド怪我、ガラスの破片による負傷は一生忘れられないでいる。

子供の頭のヤケドの皮膚から化膿してウジがわき出ているなど、人間として許せないものであると思った。

衛生兵として助けたくても薬もなく処置する手段もなく、死んでいく人を見殺しにしてくしかなかった。また、つぶれた防空壕の中からの声も助けることが出来なかった。

[広島 直爆2.0km 男 28歳]  
(02-0015)

昭和20年7月に入隊、継続的な呉軍港への艦載機の爆弾投下、続いて8月6日午前8時15分～20分頃の兵器の疎開を前にして異状光線と大型爆音にて身を伏した。約10分～15分経過したか軽傷の自分に覚え、重傷兵、負傷応急処置と看護、続いて民間人の傷者運搬と死者の処理に任し、残務整理に復し、同月23日解散のため帰省。他省略する。

イ)～ウ) 自分の身心中に止めておきたい。

[広島 直爆2.0km 男 28歳]  
(05-0004)

実際に被爆し、被爆した人を見た者でない限り、話にもならない。生(地ごく)そのものであった。焼けただれた身体、そして死んで行く人の群、何とも申しようのない状態。元気そうでも次々に倒れて行く、次は自分の番かと思われる毎日であった。

〔広島 直爆2.0km 男 28歳〕

(34-1303)

ア) あの罹災者の姿を今でも忘れられません。あれは生きたこの世の地獄です。

後言葉はありません。あればすべてがうそになります。地獄です。

小さい兄弟の坊やが、兵隊さん水をくれ、少しでもくれとたのむ姿。なぜあの時腹一杯飲ましてやらなかったかと、今でも思い出す度に可哀想でたまりません。

軍医が水を飲まずと死ぬから飲まずなどの事で、私はわかりませんのでそのとおりましたが、余り可哀想なので水呑瓶で2人の子供〔に〕のましてやりましたら、兵隊さん有難うと喜んでくれた姿。思い出すと自然に涙が出て来ます。幼い可愛い子供2人は、翌朝明方死にました。

〔広島 直爆2.0km 男 28歳〕

(35-0116)

被爆当時私は応召軍人として営外居住していました。隊へ自転車で通勤途中に空襲警報発令、B29より落下傘の投下を目視。長期の戦場経験により瞬間に特殊爆弾と察知し、近くの防空壕に飛び込みました。原爆炸裂後に防空壕より出て、一面の火の中を必死に駆けて本川に飛び込み、下流まで泳ぎ九死に一生を得たが、全身に10数カ所の損傷をしており、その上黒い雨に約2時間打たれて、やっと隊にたどりつきました。

翌8月7日より、軍命令にて負傷者の救助と死体の処理の指揮をしました。被爆者の姿はこの世の人とは到底思えぬ状態にて、今でも思い出すと夜もねむられません。とても筆舌にての表現は無理と思います。また、わかってもらえぬ事と思います。一カ所の防火水槽に、最後の死に水を求めて20人以上の人が全員首を突っ込んで真黒くなって死んでいるのをいやと言う程見ました。一カ所の応急救護所の中

に1,000人以上の人が収容され、（苦しいよ、水をくれ、殺してくれ、と）泣き叫びうめき苦しむあの姿は、実にこの世の生地獄でした。

広島市の平和公園の慰霊碑に刻まれているあの文字の（安らかに眠って下さい。あやまちを繰り返しませんから。）この言葉を日本人は永久に忘却せず、平和日本建設に全国民努力すべきと思います。

〔広島 直爆1.0km 男 29歳〕

（20-0058）

私は室内での被爆であり、家屋がからくも倒壊を免れ、かつ光線を浴びなかったため原爆症状とはならなかったが、被爆後外に出てみると、道路で光線を浴びた人は、顔はふくれ手は垂れ、あるいは物を吐いて、助けを求めてくる姿は悲惨であったが、どうにもしようがなかった。

当日は同僚の負傷者を野戦病院に輸送することで手一杯であり、夜は全市内火災のため職場の空地で野営し、翌日郊外古田町の親戚宅に避難するため市内道路を通ったが、道路に横たわる死人の数のあまりに多数のため、ついに死者に対して無感動の状態になってしまったことを覚えている。

〔広島 直爆2.0km 男 29歳〕

（13-11-002）

私は当時軍人で、三篠の国民学校が兵舎であった。

校舎の死角で閃光は受けなかったが、全身ガラスの破片で血だらけになったが、外傷だけで歩くことが出来、竹藪に避難した。そこは一般市民の避難場所であり、全身全裸一糸まとわぬ、黒こげや皮膚がたれ下がっている数百人。その中に私が足を踏み込んだ時、全裸の真黒な男性が私の足に巻きつき「兵隊さん、その帯剣で殺してくれ、たのむ」と言っはなさなかった。その時私は「救護班が来たぞ」と

言ったらはなしたので、その場所を逃げて、竹藪の片隅で戦友達と一緒に、うめく呼び苦しむものをどうすることも出来ずただ傍観するだけだった。

私達兵達は午後三時頃この場所を立ち去る時、竹藪の中の負傷者は「兵隊さん、立ち去るならば私を殺して行ってくれ、たのむ」断末魔の声を後にして立ち去っていった。この人達は1人として生き延びた者はいないだろう。

〔広島 直爆2.0km 男 29歳〕  
(34-3524)

#### ④ 30歳代(被爆時)

当日12時頃、隊外へ避難する途中、顔、体、手足等焼けただけ赤黒くはれあがり、ぶるぶるふるえ、何を言っても返答する元気ない者が何百人と川岸に座り込み、満潮になると全員流されることを知ってか知らぬか、逃げて行く力も尽きた人々、おそらく全員流されたことと思う。救助の手もなく、生きられた者もいたと思うと何ともやりきれない思いは、今も忘れられない。こんな場面は一部分で、全市内にこれ以上な状態があったのですから、とても口や筆で言うことは出来るものではありません。

翌日より兵営内に帰り、営内には兵士の焼けた死体ばかり、所によっては足の踏み場もないほど……。両営内内合せて500体以上。我が身に置きかえて考えると何とも言う言葉もありません。親身の方に引き取られるのではなく、無縁のまま始末された者が広島だけで何万と……。さぞ浮かばれないことと思います。

〔広島 直爆1.0km 男 30歳〕  
(27-0287)

ア) 「兵隊さん熱いよう、助けて」という叫び声が、今も耳に残っていて離れない。私の足にすがりついて叫んだ40歳位の母と娘のこと。

- イ) 部隊は救護活動をしたので、娘さんの足の傷口からウジがわいていて、ウジをピンセットで取りのぞいてやったが、翌日死亡。
- ウ) 勤労働員中で死んだり、負傷した女学生のこと。
- エ) 収容された負傷者の顔がメチャメチャで判別できず、声で判断していたこと。
- オ) 広島市内で毎晩、死体を焼く火が続いているのを、二葉山からみおろし、一生忘れられぬ光景である。
- カ) 戦争を絶対にくり返してほしくない。自衛隊の軍備増強にも危険を感じ、反対だ。
- キ) 被爆の影響が子や孫に現れるかと大変不安だった。

(広島 直爆2.0km 男 30歳)  
(07-0046)

私は被爆直後の10数時間の出来事が、余りにも多くこんがらかって、要約して書くことが困難ですので、被爆直後の数時間の回想を書いてみますので、これをお問の答えとさせていただきます。

当時私は召集兵で大野陸軍病院に勤務していました。ちょうどその日は命令で兵役免除になった患者護送で、三重県上野市へ出張で広島駅に列車を待ち、第1ホームにて乗車の寸前に、写真のマグネシウムをたいたような閃光が目の前を走り、無意識の中に伏せる刹那の大爆音と大爆風にて、全身に物凄い衝撃を受けたまでは覚えているが、それから意識を失い、数分後かもっと後か気がつき、自力で這い抜け立ち上がることが出来たが、頭部からの流血と左手の負傷に気づき、現場より早く脱出しなければと懸命だった。停車中の汽車は押しつぶされペシャンコとなり、窓から首や身を乗り出した乗客のむごたらしい死体。ホームに立っていた人々は叩きつけられ、血を吐いて即死の者、肩から背中へ窓枠のような木片が貫通したまま倒れ、片手を動かし救いを求めているような仕種をし、懸命にまだ生きている者、血だるまでそれ等の者をまたぎ逃げようとする者、右往左往の阿鼻叫喚の惨でした。

改札口附近だったと思う、駅員のような人が倒れ息絶えだえに、助けを私に求められたけれども、どうすることも出来ず、自分が逃げることだけで無我夢中であっ

た。今も思い出し心に残って消えません。

駅の構内からやっと脱け出した駅前の惨状。電車は押しつぶされ、歩行者は皆叩きつけられ焼茄子を転がしたように路面に散乱し、目にもあてられぬ惨状を横目で見ながら、広島陸軍病院にて応急の手当をしてもらおうと思ひ常盤橋を渡りましたが、まもなく周囲一帯が火の海となり、逃げ場を失い、やっと太田川の川原まで辿りつくことが出来た。川原にも被爆した避難者でいっぱい混雑でした。ここまで逃げる途中、倒れた屋根の上で男の人が私に、兵隊さん、家の下に子供がいるから助けてくれ、と必死に頼まれたが、これを聞き流し逃げた。そんな時は私でなくても皆私と同じように逃げたと思います。

川原で舟を待たされたけれども到底乗れそうにないので、軍服、軍装品をバンドで背負い、裸になり、右手だけで途中おぼれそうになったがやっと泳ぎつくことが出来、三次街道を応急治療所を探し、北へ歩き続けた。この街道にも被爆者の群れがいっぱいで、皆上衣は焼け、ぼろぼろの裸体同様に、熱傷の水疱腫れで顔の判別は出来ない一様な顔で、ただ女の人で二重に衣服を身につけている部分だけ焼け残り、髪は長い女焼けて全然ない女と、子供だけは見分けがつく程度で、皆一様に焼けただけ黄色な胃液を吐きながら、かろうじて歩く人。道端に倒れ救いを求める母子連れ、すでに死んでいる人。そのむごたらしさは筆舌に表わすことは出来ません。それ等の人々はまもなく皆んな死亡されたことと思う。私だけ不思議に命永らえ、申し訳ないような気持と生きている喜びと重なり、今も冥想にふけることがしばしばあります。

まだ書きたいことは、これから後臨時収容所で、毎日毎日たくさんの被爆者が死んでいった惨めな状況、また私が死よりも辛い原爆症の自身の手記等は別の機会に披歴させていただき、生き残りし者の使命として後世に伝えたいと思います。

以上分かりにくいと思いますが御判読いただき(4)のお答えとします。

[広島 直爆1.5km 男 31歳]

(32-0030)

爆心1.5 kmの工場内で被爆したが、その時裸になっていた時だったので、押し潰された屋根で背中を打たれたが、ようやく這出してあたりを見たら、見渡す限りの家は全部ペシャンコで土煙で良く見えない。背中から血が流れてウルサイのでステテコを腹に巻く。従業員全部自力、他力で外に出て無事と分かったので、白島九軒町の自宅にいる妻子が気に掛るので、帰ってみるからと言って走り出したが、方向が分からない。反対に走ったらしい。行方に火がどんどん燃えて来るのを見て慌てた。屋根、電線など踏み越え、ようやく線路に出た。方向がやっと分かり走る。枕木がブスブスくすぶっていた。2番ガード下に妻が5歳の長女をおぶって早く早くと手招きしているのを見てひと安心。我が家を見るともう火が燃え移りそうだ。裸なので着る物は無いか近寄ったが、押し潰された中は見えない。諦める。その時潰れた家の中に出られない人がいるから助けてくれと声を掛けられたが、火の手は迫る、妻は早よう早ようと叫んでいる。とても助け出す時間は無いので、心残りだったが妻子の方に走った。

線路づたいに常盤橋上（かみ）の川原に避難、未だ2、3人しかいなかった。橋上に貨物車もえている。数時間の間に川づたいに兵隊ぞくぞくのぼって来た。俄雨も降る。背中への傷、足裏の踏み抜きの傷の痛さ、だんだん感じて来た。

（工場内で1間位離れて被爆した従業員は、脱毛、ひふの斑点などがあったそうだ。2、3年後、大阪から便りあり、被爆者証明してやった。）

〔広島 直爆1.5km 男 31歳〕

（34-4189）

被爆当時、顔面及び両手にひどいやけどを負い、ほとんど目が見えないほど両まぶたが腫れ上がっておりましてので、当時としては我が身のことしか考えられない状態ではありましたが、名古屋大学病院に入院治療の結果、だんだん快方に向い、被爆直後の情景を思い出す余裕が出て来ますと、自分が避難する時、勤労奉仕に従事中被爆して動けなくなっていたいたいな女学生が、やけどで目も見えずただ弱々しくかすかに手を上げて水を求めていたのを、心を鬼にして見過ごしたことを思い出すと、本当に毎晩毎晩ねむれませんでした。このことは今になっても良心の呵責に

堪えられない気持が続いております。あの時全員即死しておれたなら、どんなに楽であったことかと思われまます。

[広島 直爆2.0km 男 31歳]  
(24-0056)

地上の全てを消滅させる、あの許すことの出来ない原爆を被爆した者が、あの惨状未来永劫決して忘れることはない、また許すものではない。

炎天下の道端に女、子供たち素裸で、顔の皮膚下にうじ虫がはい廻っているけれど、まだ死ぬこともなく目を動かしている姿、手を合わすほかに仕草がない。何という悲しいことか。

歯の2、3本出かけた幼子が裸で暑い路上に捨てられる、そのなき声を後に(いざって)逃げる母親、腹立ちまぎれにとがめれば、私は今夜にも死ぬことと思う、もしも心ある人に巡り会えばこの子だけは助けてもらえる、ただ一つの望みをもって心を鬼にしましたと、泣いている姿、まさにこの世の地獄でなくてなんであろうか。

戦争が起これば勝たねばならない、勝つためには手段を選ばない、必ずまた原爆だろうと思うと、生きているのが恐ろしい気がする。

[広島 直爆1.0km 男 32歳]  
(24-0030)

1. 被爆直後兵舎からはい出した私は、後頭部の傷の応急手当(ぼろきれでしぼる)をしたところで、倒れた兵舎の中からかすかに「おーい助けてくれ、ここだここだ」という声をきき、瓦をよけ屋根板を1、2枚とりのぞくまではできたが、その下のごつい合掌材(木)はとりのぞくことができず、助け出すことができな

ったのは残念だ。

2. 2部隊兵舎のあるうら門のあった方（こわれていた）から出て、白島行き電車通りに出た。道には一般の人の死体が、そして生きておられる人は顔や手の皮がはげてハンケチのようにぶらさがっていて、ふらふら歩いておられる。道にすわりこんでおられる人……それを助けることができなかった。
3. 浅野の泉邸（縮景園）の北側の川ばたの空地に避難された多くの負傷兵、負傷者（一般の人）、その人たちを助けることができなかった（私は兵士であるのに）。
4. 前3の空地にいたとき強風がふきまくり、私はそばの木にだきついて川にふきおとされるのをのがれたが、風がおさまったときは私一人で、他の人は川にふきおとされておられた。私は倒れた家や立木がもえて火が近づいてくるので、石垣の穴にさぼり〔ママ〕ながら川の中におり、水につかっていた。その私の前に、幼児をだいた女の人（お母さん）が石垣の穴につかまって水につかかっておられる。幼児もお母さんもやけどで皮がはげぶらさがっている。幼児はもう泣きもしない……そのお二人を助けることができなかったことが、強く強く私の心にやきついている。
5. 当時東練兵場に移動し、私の頭の傷の治療を待つためならんでいた（50mぐらいの行列）。その私のたっていた草むらに、やけどしてうみが顔その他手足のいたるところに出ている女の人がよこにねかされていて、「へいたいさん、お水ちょうだい、お水ちょうだい」とかぼそい悲しい声、いまでも忘れることができません。

○ここまでかきましたが、まだたくさんたくさん書き残しておきたいことが（悲しい思い出）あります。

〔広島 直爆1.0km 男 32歳〕

（34-1133）

被爆翌日、爆心地近い太田川畔の応急診療所の忙しい中で、衣服は破れ疲れ切った姿の傷々しい歩みの人が「副官殿お元気で」と声をかけられた。対応の策もなく、火傷の顔と手足にリパノール軟膏の黄色が目につく。先週週番で夜の点呼の時、随行してくれ各病室の患者の状況報告をした病棟の婦長だった。頑張れよと言って別れた。

次の日から収容患者の可部分院に移転が始まり、軽傷者は歩かせ大部は近隣町村より徴集したトラックで完了したのが3日かかったが、その中に婦長の姿はなかった。

あの時忙しい中とはいい、なぜもっと親身に力付けてやったらどんなに喜んだのだろうと、いつも往時を忍ぶ時想い出されます。

〔広島 直爆1.5km 男 32歳〕  
(15-0001)

軍人という立場で救護にあたり、あの時の苦しさは文書などでは書きあらわす事はできません。しいてあげると言えば、市に救護に出た時、家はぼく風にてとぼされ、一家5人が食卓をかこみながら、全身はだかやけどにて苦しんでいる姿を見た時、1人として救護に入れなかった思出。二つには、大勢の人が最後の水を○(不明)りに、兵隊さんお水ーとかきよる姿を見て、今日いまだに其の苦しさは目にやきついて居る。

救護の場合もそおぞ○○(不明)。数えきれないほどの死んで行った人を、大きな舟で似島へ運び、百人近い人を一つの穴に入れ油をかけ焼き、いもか大根のように土をかけうめた事を思い出せば、被爆者のかなしさを思い出さずにはいられない。

〔広島 直爆1.5km 男 32歳〕  
(22-0290)

家屋の倒壊で下敷き。全力で脱出、歩行するのが困難。地面をハウようにして自宅前の路上に出た（時刻不明、時計は8時13分で破損、止まっている）。避難場所へと思ったが、道路は破損した物体の散乱で意の如くならず、火災だ、火事だと言う声に近くの河岸にたどりつく。川は満潮では入れない。全身火傷でボロを身につけたように皮膚をさかれ茫然としている人、硝子や破損物体で負傷した人、手当も出来ず、避難も出来ず、無言で顔を見合わせている。談る人なし。大人も子供も火災が近づくとつれ熱風、煙、炎よりのがれようとして力つき川に転落流される人。ただ一人として救助の力なく行動できず、自己のみを支えるのが精一杯。涙とまらず。

警報なしの瞬時の出来事でゆめのような精神状態。何時間経ったのかもわからない。引潮で川の水が浅くなって、避難を始む。右も左も焼けつきた焼けあとにくすぶる人の焼けてるような臭い。未だかつて見聞したこともない悲惨きわまりなし。行動も意の如く進まず、日暮近く救援の人に助けられ、隣町矢賀にある軍の工事現場仮事務所に午後の9時頃収容せられ、20年11月末まで地域住民の皆様や親族の温かいはげましと、手厚い手助けを受けながら治療を受け、昭和20年12月2日家族と共に復員す。

〔広島 直爆1.5km 男 32歳〕

(40-0382)

兵器補給廠にいたので、直後から比治山を下りて来る市内の方を毎日何百人となく手当をして送り出し、また死体も随分扱いましたが、一番心残りのことは、将校たちに止められ十分に水をあげることが出来なかったことと、どうせ駄目と思われる負傷者の住所姓名を聞き札（フダ）を付けるよう提案しましたが、これも将校たちに地方人の死なんか問題でないと断られました。これをしていたら無縁仏が少なかったと思います。

死んでいる人の姿や生きていた人達の苦しみの様子、また死にかた等については、少々のことでは書くことも語ることも出来ません。1ヵ月もその任務についていましたから。

〔広島 直爆2.0km 男 32歳〕

(34-2713)

生き地獄だった。黒こげ、うじだらけの体、眼球のとび出した人、内臓の長く出ている人、おびただしい死体、材木のやけ残りのようだった。河の面の死体、子や親を求めて探す肉親の姿、におい、自分も重傷で何もしてあげられなかった。

現在も救急車の音を聞く度に、あの1人1人があれに乗せられ手当を受けられたらもう少し命があったのではと思う。

可愛い子が亡くなり、死体のわからない母の連日の子探しの姿。その母のあきらめて広島へ出なくなった日の悲しみもだえ。

水、水と求めてやまない黒こげの人々、山積されて焼かれる死体。どれ一つも忘れ得ないことども。

〔広島 直爆1.5km 男 33歳〕

(34-4133)

入隊後戦況がきびしくなり、本来の任務より重労働のモッコをかついだり、防空壕掘りなどの仕事がふえ、自分は40°の高熱を出し肺病の身となりました。軍は広島陸軍病院へ（投下前一週間）入院させてくれましたが、一瞬にして病院も破壊されましたが、鉄筋であるため、病院のすみにベットがあったため死亡するような大ケガはしませんでした。一週間兵役として自分の体のことより死体処理等の仕事をさせられ、一週間後汽車で福岡に復員して来ました。

広島の様子はとうてい語るができない惨状でした。

身も心もボロボロになり、やっと福岡に帰って来ました。

福岡の空襲もすごいものですが、原爆はもっとすごい兵器で、何もかも焼きつく

し、後々まで人生を苦しめるものです。

[広島 直爆2.0km 男 33歳]  
(40-0263)

被爆直後、兵舎倒壊しその下敷きとなって助けを求めている兵士を救出することも出来ず、その兵士が母を呼び叫ぶ声を、そして火災発生し焼死して行く様を見て、どうすることも出来なかったこと。全身ヤケドの母が黒コゲとなっている赤ん坊を抱き、水を求め、助けを求めながら目の前で死んで行く姿を、被爆者の身である自分がどうすることも出来なかったこと。等々今でも目にうかんで来てならない。

[広島 直爆2.0km 男 34歳]  
(11-0089)

思い出してもぞっとする。松の根っ子のような人の形が、私の目の前をトラックで何台も運んで町の方から可部の方へ行ったことを、今でもはっきりおぼえている。軍人さんだったそうなど、後からきかされた。

全身皮が、やけどでぶら下がって足でとまり、そろそろとひきずりナムアミダブツと手さぐりで歩いて行く姿は、生きる強さにおどろきました。

お母さんと泣き叫ぶ子供を、火の中において逃げてきたという母親が、一人は死んだ子をおぶって、気も狂わんばかりに泣いて、私の手をにぎり、その手もやけどでずるずるしていた。

[広島 直爆1.5km 男 35歳]  
(32-0205)

1. 先ず被爆後最初に避難した場所。

- a. 軍人が上半身やけどして、手の皮のブラ下がった両手を前に出して彷徨している姿は異状で、これで日本も終りかなと直感した。
- b. 逃げて来た人びとは、やけどや負傷でゴッタ返していたが、すでに死んで横たわっている者、不安そうに話し合っていた人が急にアワを吹いて死んで行く人等々、不安の継続であった。
- c. 突然旋風と共に龍巻が起こり、火の粉が舞い上がり、呼吸困難となり、ほとんどの人が悲鳴をあげて川に飛び込み、龍巻の終わった後、人影はまばらであった（水死された）。

2. 避難地から退避

死人が街にあふれていたが、中でも半裸の女性が大やけどで地面でのたうち回り、母を呼び、水を求めていた。水をやれば直ぐ死ぬからやらないよう、メガホンで周知していたので、我慢するよう説得したことが心残り。

3. その他

私の怪我も大きいので通院したが、余り怪我もしていない比較的元気に見えた人が、後日高熱を出し、脱毛し急死する人が多く出たことは、大変心細かった。

〔広島 直爆1.5km 男 37歳〕  
(34-4132)

当日の午後、全身に大やけどを負いまるで赤蛙の皮をむいたようになって死んでいる人を、身内の人と思われる3人が荷車に乗せてとぼとぼ行く姿は今でも忘れません。

〔広島 直爆2.0km 男 37歳〕  
(33-0019)

⑤ 40歳以上（被爆時）

爆風によりガラスでお腹を切り、出血がひどく、自分で飛び出た腸を入れおさえて、病院へ行きましたが、大勢でなかなか見てもらえず、そのうちにうとうとして、これでおしまいだと思いました。

ずきずき痛み、あおむけに寝ていたら、二日市に収容されました。

自分自身が大変でしたので、人様を助けることも、何も出来ませんでした。

〔広島 直爆1.0km 男 40歳〕

(13-07-024)

爆風で倒壊した家屋の下敷となって、ながい時がたったが誰も救助に来てくれる者もない。その内に火災が発生した。私はもう助からないと思った。死にもの狂いで背中に乗った天井板をむしりとった。屋根板をはがして脱出口を開いた。やっとのことで焼死体にならずにすんだ。

避難途中、海軍御用の缶詰工場の側を通ると「タスケテー」の女の悲鳴を聞いた。近づいて見たら、倒壊した工場の地下室と思われる所に多勢の女性が叫んでいた。隙間からのぞいて見たが、中は暗くて顔はわからない。「今たすけてあげる」と言いながら手頃の木材を見つけて脱出口を作らんとしたが、1人の力では如何とも出来ず、応援求めようにも皆んな逃げていない。倒壊工場の東端から燃え出した。最早これまでと思った。「人数を集めて助けに来るから待ってなさいよ」と言い残して去った。後日、あの時の悲鳴の主達は高女校の奉仕隊員で、20数名全員焼死と聞かされた。

今でもあの時の悲鳴を忘れることが出来ない。

〔広島 直爆1.5km 男 41歳〕

(34-1943)

- 1) 昭和20年はほとんど病院通いで何も出来ませんでした。21年より体もどうにか動けるようになり、勤め先の事務所の焼跡整理と、家族の食糧確保のためわずかに田畑の準備をして、家に15日勤め先に15日と兼業農家として食糧の確保は出来たものの住居が定まらず、兄弟2人の支援を受けて住居も定まり一通りの生活の基礎は出来たが、少しの貯えも底をつき、それに勤め先も満足処理出来ず、ために収入は減じ子供はまだ幼少で手が入るばかり、経済的に一番苦しかった。例えようのない苦しみを経験しました。
- 2) 原爆投下の日に二葉の里に避難したが、例えようのない阿鼻叫喚に遭遇した。まるで地獄絵を見るようで、母を呼び父を呼び子と呼ぶその声も次第に細り、夜に入ると共に声もしなくなり皆死んで行ったのです。私は翌日に至り焼跡の事務所を検分、稻荷町に行って呆然と立ち今後の対策について考えていると、妻が声をかけ近寄って来てくれた。私は夢心地で妻の顔を見た。その時は例えようなき喜びであった。虚無的であったろうその時、一瞬喜びと勇気とに力づけられた。あの二葉の里に避難していた死んで行った人達、呼ぶ名の人が目の前に現われたらどんなに喜び勇気づけられたことであろうことを今も時々思い出す。あの時妻が私を探しに来てくれなかったら、今も元気でいてくれるだろうと残念な気がします。
- 3) 私が最初避難したとき、駅前通りに来ると人道に1人の婦人が倒れている。よく見ると死んでいるその死体に、6、7ヵ月くらいの子供が、死んだ母親の乳にむさぼりついてしきりに乳首をくわえて引っ張っている。あわれである、泣き声も出ぬらしい、でも私はどうしてやることもできず、誰か良い人に助けられることを祈ってそこを去った。わすれられない思い出である。
- 4) 妻の死はなんといって忘れられない。妻は農家の生れで体力もあり、体重も60kgあるという健康体であった。原爆投下の翌日に私を探して入市し、多分に放射能を吸ったものと思いますが、昭和40年頃より全身は痩せ、時には貧血を起こすことさえありました。病院に入院するの度々で、また病院を各所に変えても回復せず、腰の痛みはますます重く苦しんでいたが、病院にも医薬にもかかりづめであったが、遂に思いもよらぬガンで此の世を去ったのです。  
思えば可哀想でもあり、残念でたまりません。

[広島 直爆1.5km 男 42歳]

(34-2615)

b) 女

① 9歳以下（被爆時）

片目あけたまま死んでいる子供とか、皮一枚でぶらさがっている子供をだしているお母さんを見て、びっくりしました。

〔広島 直爆2.0km 女 5歳〕  
(27-0536)

- ①一瞬に家が倒れた時、母と家族は外に出られたが、父と赤ん坊の弟は大きな柱の下敷になって逃げ出せない。奇蹟的に自分の家一軒だけ残して周りは火の海。父はもう逃げられないから母に子供をつれて早く逃げなさいとどなるが、母はきかない。母は逃げまどう人々にいくら助けを求めても、誰も必死で逃げて行く。その内男の人が大きなノコを母にくれて逃げた。母は必死で大きな柱を引き切って父を掘り出し、弟はもう死んでいるから早く逃げようと言うが母はきかず、また弟を掘り出して抱いて逃げた。一昼夜位して息を吹き返した。その間、妹が一人火の海で行方不明になっていた。
- ②5歳の妹が一人火の海ではぐれた時、親切な女の人に助けられ、比治山の防空ごうで親切な男の人に見つけられた。
- ③腕の皮がむけて30cm位垂れ下がった女学生が、助けてえ助けてえと言って寄って来ても何も出来なかった。早く逃げなさいと大人が言っていた。
- ④あの日から生き残った近所の知った人達が一人……また一人と次々に寝込んだかと思ったら、すぐ次々と亡くなってしまって、父がそういう病人の世話をしたり死体の始末をして、私の家族もと不安だったが、21年3月21日に遂に母が逝ってしまった。それからも続々と死人が増えるので、空地に死体の山が出来て、幾つも穴を掘って、毎日毎日死体が焼かれていた。
- ⑤国民学校2年生で、当日欠席していて私は命びろいをしたが、そかいをしていなかった先生や級友は校庭で黒こげになって死に、誰か判別がつかなかった話を父に聞いた。「お前も学校に登校してたら、お前の骨はどれかわからなかったのう」と言っていた。当時の先生や級友の消息もわからず、あれからずっと今でも辛い

夢を再々みる。

⑥地獄の炎に染まった空に夕日の落ちていった時の不気味なあの色と共に、放心した人々の心持ちと、飛行機のとび交う音は、耳をふさいでも、ふとんをかぶっても、あの頃と同じ錯覚が起きて身の置きどころがない。

[広島 直爆1.5km 女 7歳]  
(34-1609)

- ・死んでいく兵隊さんが「おかあさん」といったり、道に「おかあさん」と書いて亡くなられるのを見て、子供心に涙が出ました。
- ・また、全身やけどの娘さんにそっと浴衣をかけ、ミカンのかんづめを命を縮めるのを覚悟で与えておられた御両親の気持、思い出すたび胸がしめつけられます。
- ・夜になれば、穴を掘り、たくさんの死体を処理しておられました。

[広島 直爆2.0km 女 7歳]  
(27-0370)

父が顔、手足等に火傷。祖母は太ももを白い骨が見えるほどザックリ口をあけていたのをおぼえております。

当時7歳でハッキリとした記憶はありませんが、伯母が全身火傷、避難の途中足の踏み場もない程の死体、負傷者。

8月7日の夜、祖母の田舎に行くために歩いて死体につまづき、死体の上にくろび、所々でりんが燃え、生きたここちがしなかったことだけ、幼な心にも焼き付けたようです。

全身火傷の母親が赤ちゃんを抱いて、この子を助けて下さい、お願いします。虫の息の下で助けを求めている姿を今でも思い出します。母親は助からなかったでし

ようが、子供だけでもどこかで生きていてくれよと思います。

〔広島 直爆1.5km 女 8歳〕

(27-0228)

40年も過ぎてこの調査を書くのに、また肉親を思い涙が出る。今さらむなし  
と思しながら。原爆にあっていなければどんな人生を送っていたらう。子供にと  
って両親の愛情に勝るものはないと思う。10歳の時、父、母、兄、妹を一瞬に殺  
され、私も校舎の下敷きになり、足の怪我で歩くことも出来ず、道端にはゴロゴロ  
苦しんで転がっていた人、人、人。地獄のようだ。校舎の下敷きになり「助けて、  
助けて」と泣き叫んでいた友達の声も耳に残っている。一面焼野原で自分の家がど  
こにあったのかわからない。歩くことが出来ないため、おんぶされて自分の家の焼  
跡で両親の死を聞かされ、10歳の私はそれから毎日泣いていた。4人の死体も骨  
もなくどんなに苦しただろう。人間色々な生き方があるが、最後は平等に手当  
てを受け、畳の上で死にたいと思う。でも原爆は、傷つき苦しんでいるのに、手  
を差し延べてもらえず、道端で犬死にした数多くの人がかわいそうで、今でも胸が痛  
む。国、原爆を恨む!! 殺された父、母、兄、妹を返してもらいたい。私の心から  
の叫びです。

〔広島 直爆1.5km 女 9歳〕

(40-0227)

## ② 10歳代(被爆時)

あの日、竹ヤブへ逃げて横たわっているすぐそばで、4、5歳の男子兄弟が水、  
水、水と苦しんでいた。竹ヤブの下には小川が流れていて、せせらぎの音がきこ  
えているのに、誰もが兄弟にあたえることも出来ず、私も自分の苦しさとなたか

いる時に、気を失ったのか眠ったのか（おぼえてない）。

明けがた、静かだなあーと目がさめた時には、その兄弟はもう冷たくなっていた。今でもその声が耳の奥からはなれない。どこの誰かもわからない。

書きたいことはかぎりなくあります。いつの日か書き残しておきたいと思います。

〔広島 直爆1.0km 女 10歳〕  
(13-03-012)

①水をもとめる人々が多くいたが、自分もにげるのにいっぱいでも出来なかった。

〔広島 直爆1.5km 女 10歳〕  
(15-0038)

天気がよかった。学校が休みになって、部落でえんがわにいた。音と光。うちの下じきになった。はいずり出た。洗たくしていたおばさんが燃えていた。助けて〔と〕言っていたが、おそろしくそばに行けなかった。生きた人がそのまま燃えていた。空はまっ黒で、けむり。当時10歳の私では助けることはできなかった。

今でも、生まれて初めて、生きたまま人が燃えるというのは、助けられなかったのは、今でも思い出す。恐ろしく、びっくりしてしまって、何が何だかさっぱりわからなかった。

泣きながら、はい出して助かった。

今なら、水の一杯をあげることができる。

今でも、頭からはなれない、自分の罪をおかしたような気持になる。

全体がそうぜんとしていて、人の声などきこえなくて、山へ逃げた。三人姉弟はばらばらに逃げた。

〔広島 直爆2.0km 女 10歳〕  
(01-0504)

軍の防空壕に連れて行かれる途中、何千人という死体をみた。被爆当日の午後から一週間ぐらい、毎日黒こげの死骸（炭化して）を見て、瞬時に大量の殺人をした恐るべき兵器におそれ戦った。戦争の怖さと憎さ、気が狂いそうな恐怖感に日夜さいなまれていました。

親を失った幼児が口もきけずに、逃げる私のそばをはなれず、私を頼りにどこまでもついて来るのに、分けてあげる食糧もなく、水もなく、助けてあげることさえ出来ない自分の非力が情けなかった。

救助された重傷患者（重い火傷の兵隊や民間人）が「死に水」を求めても、飲ませる水の一滴さえない極限の状態の中で、飢えと渴きは人間からすべての理性も知性も取り上げてしまうものだと痛感した。

戦争の悲惨さを味わった者として、核兵器の廃絶を心底から叫びたいと思う。

〔広島 直爆2.0km 女 10歳〕

(04-0361)

一時的に意識を失っていましたが、気がついてみたら、一斉に火の手が上がって人々が死に重なっていた。そして体から悪臭を漂わせうなっていた人がごろごろしていた。

自分と家族が突然の恐ろしい出来事からのがれるために川原へ逃げるので必死だったから、他人のこと等考える余裕がなかった。今考えるのも恐ろしくて仕方ないです。

〔広島 直爆2.0km 女 10歳〕

(11-0128)

私の家族は5人でした。当時2、3秒前に戸外に出た弟と妹は直射で全身火傷で即死。両親と私は家内にいたため火傷はありませんが、爆風によるガラスの破片を全身に受け、倒れる家の下敷きとなりました。なめるように全市を燃えつくす火がもえて来る中を、下敷きになった家屋から探して引出してくれ、当時の東練兵場に足をけがして背負われて逃げましたが、道々直射の火傷で死んでいる人の黒こげの死体があちこちにあり、全裸で火傷したヒフが布切のようにぶら下がっている人々、逃げまどう群衆が火で焼け落ちた橋の行きづまりに、川の中へ火をのがれて川へ落ちました。川の両岸も火が燃えるので水が湯のようでした。

東練兵場も寝る所もない位の被災者の人々でいっぱい、薬も水もなく、焼けた家屋の水もれ水道が人々を救いました。

家屋の下じき、ガラスの傷で瀕死の私も、薬もなく赤チンキだけの薬でガラスを取って貰う痛さに地獄の思いがしました。

弟と妹は全身火傷で、6日と7日の未明に、なすすべもなく亡くなりました。

両親も日々におそって来る原爆症に不思議な思いがして、何であるかがわかりませんので治療にも困った様です。

両親も私も血便、血尿、髪はバサバサ抜けるし、下痢、発熱に苦しみました。田舎の人を頼んで輸血して貰いましたが、筆につくせない苦しみでした。まだ10コ位の小さいガラスの破片が40年の今も残っています。

[広島 直爆1.0km 女 12歳]

(34-1101)

①当時小学校6年生だった私は、朝礼の時に男女一組で教室に居のこる当番で、二階の教室におりました。その時被爆し柱や窓ガラスの下になり、やっとはい出したらそこは校庭で、朝礼をしていた全校生徒や先生はバタバタ倒れておりました。

その中に体じゅう皮がぼろきれのようにさがり、頭髪が上の方へ立ちあがっておぼけのような人が声をかけて来て、思わずこわいとにげました。その人は先生でした。今でも忘れられません。

②やっとなげた広島二中の校庭で、くずれ落ちた校舎から上半身だけ出て助けをも

とめていた中学生を、皆んなで引っぱりましたが抜けず、そのうち校舎が燃え出し、くずれ落ちて来て、子供の私は手を合せてにげました。あの中学生さんはどうなされたか、今でも思い出します。

- ③炭のようになった死体の中をさがしまわり、やっとみつけた弟は、顔は二倍にふくれ上がり胸の名札でやっと確認でき、両親と姉と私で二中の校庭で材木を組んでダビにふしました。その時の炎が目に焼きついて忘れられません。

[広島 直爆1.5km 女 12歳]

(08-0017)

家族を探しに家のあった場所にもどった時、何人かの人に会ったが、やけどで顔がふくれ上がっていて、名前をきくまでは隣人だとわからなかった。

市中では、馬が立ったまま死んでいるのや、止まった市電の中で乗客が黒こげになっている様子を見た。赤ちゃんのいる家の母親が、赤ちゃんを抱いたまま家の前にある水そうに飛びこんで死んでいるのを何件も見つめた。死んでいるやら生きているやらわからない人々が倒れている間を歩いていると、何度も水を求めるまっ黒な人に足を引っぱられた。

いまでこそ人に話せるが、戦後20年ぐらいは、涙が先にでて話をするのがいやだった。

[広島 直爆2.0km 女 12歳]

(29-0016)

衣類が焼けて皆んな真裸であったこと。皮膚が黒く垂れさがって髪がつつ立っていたこと。子供達が水を下さい、水を下さいと言って来たけど飲まず水が無くて、まつごの水もやれなかったこと。ある子供が死ぬ前に、助けて下さい、私は観音町

の山崎、と言ったと思うけど、自分が怪我がひどくどうにもして上げられなかったこと。

母は自分のユカタをあげたけど、痛くて着ることが出来なくて、いりません、いりませんとかぶりを振っていたことが、いつも脳裏を去りません。

犬や猫、馬等の死骸をたくさん見たのは初めてでした。戦争の悲惨を見せつけられた、再びこのような事の無いことを祈る。

町中はお風呂屋さんのように裸の人ばかりだったが、髪を散らして、血だらけのたくさんの人で地獄絵図そのものであった。

道はガラスの粉が一杯で、足は血だらけ。電信柱があちこち燃えていた。そこは家は燃えて1軒もなかった。

(広島 直爆1.0km 女 13歳)

(34-0498)

一瞬の出来事だったので何が何だかわからず、真夏の炎天下を女学生が大声で泣き叫びながら、全身大やけどをして、衣服はボロボロに焼け落ち、はだかに近い状態で、皆んながいく方向について逃げました。

途中黒こげの魚のような人をよけたり、重傷の人が動けなくなっている人の中を逃げました。

川にずり込んだら、次から次からけがをした人が押せよ押せよと入って来た。

力つきた人は折り重なって死んでいた。

川から上がって比治山に逃げる途中、家の下敷になった人が助けてくれーと大声で叫んでいたのを、なにもしてあげられなかった。

(広島 直爆1.5km 女 13歳)

(34-4135)

道路または家の下敷になって死んだ人、熱さのため川に入って死んだ人、さまざまな死に方に家族の死を想う。

火災の家の柱にはさまれたまま助けてくれと叫んでいた人の顔、声が今も眼に浮かぶ、親子が抱き合って水そうの中で死んでいる様も、みじめさを、否あわれさを思う。

こんな姿は二度と見たくない。

前か後か見分けのつかない程焼けた身体で、水を求めて叫ぶ声、自分の名を話せる人に尋ねる。

誰かわからない人々の口へ水を入れて歩いた。他人に末期の水をもらって死んでゆく人のさみしさを忘れられない。

[広島 直爆0.5km 女 14歳]

(22-0281)

○家の裏の電車通りを横川の方へ、血だらけのたくさんの人がぞろぞろ歩いていたが、その先頭を頭から血を流して、裸のようになって歩いていたおじさんの顔が今でも忘れられない。

○5～6歳の男の子の近くで、幼児がだいてくれとせがんでいたが、けがをしている兄がじだんだをふんでいる姿も……。

○その日たまたま広島へきたというお婆さんは、手も、足も、顔も大きくふくれて……。

[広島 直爆1.5km 女 14歳]

(20-0098)

- ア. 今の今まで歩いて居た人、それに牛が、影だけ残して姿が消えた。
- イ. 私の居た学校が一瞬にしてつぶされ、二階が道路に近くなってしまった。あちこちから助けを呼ぶ声、それに少しづつ上がる火の手。
- ウ. 河には水をのみに行き死んで行くやけどをした人々、河の水は血で真赤な色に変わって居た。
- エ. 私はきずが深く、そのきずがうみ、夏のあつさでウジがわいて、痛くて、痛くて泣いた。

〔広島 直爆1.5km 女 14歳〕  
(22-0020)

校舎の下敷になった。友人も大部分が、火のまわりが早く出られないで犠牲になった。子供達までが国の犠牲になった。

首まで出たFさん達が絶叫したのを助けることも出来ないで学校を離れた。今でも申しわけない心である。

油をかけたような小さな死体が今でも目から離れない。

勇ましく権力をふりまわした軍人が、目を見開いて宙を両手でつかむような格好で死んでいた。何の感情もなかった。

避難先の工兵橋の道路上で、夜になって救援の車（トラック）がきたが、重傷で子供だったのであんな高いのに乗れず、苦しみの時が長かった。人間のエゴをもろにみた。

戦争と戦争の谷間にある現在、40年たって、被爆者が減っていくのを待っている政府のおもわれる。亡くなられた方のかわりに、私達は平和のために代弁してるようなもの、その叫びを受け取って賠償して欲しい。健康を！そして生活を！

〔広島 直爆1.5km 女 14歳〕  
(27-0526)

爆風で家が倒れ、その下敷きになった人が助けを求めていたのに、火の廻りが早く、その人を助けていたら自分も焼け死ななければならなかったのに、そのままにして逃げた。私などは他人の呼び声を聞きながら逃げたが、親子や兄弟で仕方なく「あとくるからね」と言って逃げた人もたくさんあります。

(広島 直爆2.0km 女 14歳)

(11-0173)

あの朝、動員先の印刷工場へ行く私を、通りの角を曲がるまで見送ってくれた母の姿が、今も臉に焼きついています。それが最後のものとなりました。

被爆後、先生に連れられて己斐の山へ逃げましたが、夕方から夜にかけて父兄が名前を呼びながら何人も迎えに来られ、だんだん数が減ってきましたが、私のところへは誰も来てくれない。父母も姉も人一倍元気だったので、誰かが迎えに来てくれるものと、一睡もせず一夜を明かしたものでした。山の上から見る市内は一面の火の海でした。

翌朝、我が家の方へはとても近寄れず、万一の時の集合場所に定めていた田舎の親類へ、一人でけんめいに歩いてたどりついたら、家族は誰一人来ていないのです。市内は全滅らしいと人々が言い始めていましたが、朝、元気な顔を見て家を出ただけに、とうてい信じられず、ただひたすら待ち続けました。夕方に姉が一人、翌日その上の姉が一人と、たどりつきましたが、家にいた父母と姉二人は、遂に現れませんでした。

何日かたって、ようやく中心地の火もおさまったらしいとのことで、焼跡に近づくことができました。中庭の大きな石燈籠が倒れていたのと、金庫と冷蔵庫が横倒しになっていたのを、我が家だと判断がつかしました。あちこちに白骨化したお骨が散らばっていました。それを拾い集めてハンカチに包んで帰りましたが、どれが誰のものかわかりません。死体を見ていないので、まだ誰か生き残っているのではないかと、学校や病院跡の収容所を探し廻り、数年過ぎても似た人を見ると追いかけていったりしたものです。

〔広島 直爆2.0km 女 14歳〕

(13-07-005)

馬がおどりがあがった姿のまま（ヒヒン）黒こげがそのままこわれないうでいた。電車の窓から半身のり出して、中から火が吹き出して、人々のうめき声、なんとも言いようもない。今でも耳の中からきこえてくる感じが時々思い出す。

柱の下から手や足が動いて助けを求めている。兵隊さんが裸で走り廻って、逃げ口、方法を教えてくださった。私は中学一年生（13歳）の時の事でした。

私は、第一銀行に勤務していた父が岡山支店長に任命されて、事務の引継の為宿泊してたので、お弁当をどどけて、安田学園校門前で被爆しました。

逃げる途中、中学生男子がゲートルを引きずりながら、やけどで手の皮が手袋をさかさまにした姿を見た事。鉄橋の枕木のかんかくの広かった事。所々もえていて熱くて、人は九死に一生をえたと言うけれど、万死に一生をえた私だったと思いました。

〔広島 直爆2.0km 女 14歳〕

(22-0127)

女学校2年（当時14歳）の時、学徒動員で工場の中、始業点検直後ピカッと光った。その直後何もおぼえない。気が付いた時はガレキの上で四つんばいになっていた。あたりがまだよく見えないが、下の方でうめき声とか、助けてとか聞こえて来た。だが燃えて来た。方向が分からない、川の方へ出たら良いだろうかともごついていたら、工具さんの誘導で無事に川の方へ出られた。無我夢中だったが、自分だけが助かれれば良かったのか、思い出せば胸が痛くなるばかりです。

川まで出て来たら、服はぼろぼろで血を流し、手の皮をぶらさげて右往左往、川は水を求めて下りて行く人、浮んでいる人、まるで生き地獄だった。

歩いて帰る途中、黒い雨が降り出し雨宿りした。その家の人は親切におにぎりを

出してくれた。

日暮までには家にたどりついた（家まで約16k）。親達は、兄は大丈夫で、私のことは半分あきらめていたようだったから、非常な喜びようでした。

兄は3日後に連れて帰ることが出来たが、下敷の重傷で、手当の甲斐もなく19日死亡。23年3月母死亡。同4月父死亡。

[広島 直爆2.0km 女 14歳]

(23-0066)

通常の神経ではとても直視にたえられないような光景の中を平然（茫然）と歩いたのが不思議です。

火傷しているのが普通で死んでいくのが当然みたいな中を、顔に火傷は受けたけどまともな体で歩いているのが申し訳ないように思ったのを覚えています。

妹を探して歩いた時、死体を焼く匂いの中で兵隊さんに頂いた乾パンを食べたので、あのお醤油のこげた匂いとミックスして、未だに乾パンが食べられません。

妹は20数年目に死場所が判りました。あの時その川べりに行っていたらと残念でたまりません。

[広島 直爆2.0km 女 14歳]

(27-0254)

私（ガラスの切りキズ20カ所位と打撲傷で、20日位寝たきりだった）が右上半身、手、顔、頭の中に無数のガラスの切りキズの治療をしたくても、医者も病院も無く、1週間位過ぎてやっと街角でテントの中で順番を待ちながら並んでいると、知人の方がヤケドで右腕全体がズルムケに化膿して、プンプンとクサイ臭がしていて、良く見るとウジがついているのに驚き、取りのぞいたらと申しましたら、痛い

からさわらないでくれと言われ、とても痛そうな様子を見ているうちに気分が悪くなり、自分のケガの治療もやめて打し車〔ママ〕に乗せてもらって帰宅したことがあった。

3週間位たって、叔父と従兄弟が共に原爆症で（白血病）、初め発熱がひどく、そのうちに歯ぐきより出血し、内臓出血して約4週間位患らって、苦しみながら死んで去りました。

私は顔のキズが大きかったので、3カ月位ホウタイを巻いていましたが、右手を三角布でつって2人の病人を見舞いに行くと、お前まだ生きているのか？と不思議がられたものでした。

医者に見てもらうことも出来ず、注射の1本も出来ず死んで行った2人を、布団にくるんで大八車で火葬場に運ばれて行った2人を、忘れることは出来ません。

〔広島 直爆1.0km 女 15歳〕  
(22-0100)

同じ家にいて母のギャーという声を聞いただけで、一生の別れとなりました。二度と母には会えなかった。妹も同じです。

たくさんの死人、ケガをしている人々の中で、一晩中そこにいたけど、どうしてあげる事も出来ず、私も苦しみながら過ごしました。

あの時は何が何んだか分らずさまよい歩いた。

今思い出すのもいやです。

〔広島 直爆1.5km 女 15歳〕  
(32-0105)

1. 燃えている家の中で、主人の助けを呼ぶ声を聞きながら、どうする事もできず逃げてきたという女の人の話を忘れる事ができません。
2. 建物の中でパニック状態になり、子供が踏みつぶされてその内臓がはみだしたむごい姿を今でも思い出します。

〔広島 直爆1.5km 女 15歳〕

(34-0216)

ピカッと光線をあび、額にやけどをし、家に入る直前黒い雨が降ってきました。台所で爆風にて倒れ、天井の大きな梁、冷蔵庫の下敷きになり身動き出来ず、助けを求めておりました。母が建物こわす奉仕から帰って来ました。私の名前を呼び、どこだどこだと言っている声がかすかに聞こえました。物の下敷きで声が聞こえない様子、声をふりしぼり、ここよと言ったわかった様子、普通では持てない冷蔵庫を持って、私を出してくれました。

ガラスの破片で、私の手は血と赤身がたれ下がりてえぐれ、薬をつけ（赤チン）で応急処置をして下さいましたが、やけどはひりひりと痛み大変でした。外に出て見ますと地獄図を見ているようでした。あっちこっちと炎があがりもえております。

（黒い雨）重油をまいたのではないかといろいろ話す方もありました。

焼け出された人達、荷車にやけただれた人を積みあげ、虫の息です。お母さん水をちょうだいと言っている人、この世の人とは思われない、全身やけどで水ぶくれになり、両手を上げて歩いている人、水を飲みたさに川に飛び込む人、川の中は焼けただれて赤身が出てお腹がふくれ浮いている死体。川のなかには赤色に見えました。

陸軍の兵隊さんが船で、トビグチで体をひっかけ、なわで胴をむすび帆先に結び、広場に収容しておりました。学校や広場等では死体に重油をかけ焼き、広島町は二カ月以上は人を焼くにおいで大変でした。

また、やけどにウジがわき、大変なハエでまっ黒でした。食事はカヤを吊って、生活はカヤの中でいたしました。水道の水も出なく、焼けただれたたくさんの死体を手でよけながら川の水を飲みました。

ただ頭が呆然としていましたので、あの時は何をしてあげようかと思う考えがな

く、呆然と見ていただけです。40年たった今は申訳なく思っております。

〔広島 直爆2.0km 女 15歳〕  
(11-0114)

従姉、当時幼児と女兒4歳の母親。家の下敷きになり足首に家のハリが落ちて足が抜けず、祖母が必死でハリを取り去ろうとしたが、火が廻って来て……。

「お母さん、私はもうあきらめました。娘を頼みます。早く逃げて」と生きながら煙と火にまかれて死んでいった従姉、どんなに苦しんで死んだかと……。

学徒動員中の女学生（我が友よ）、爆風に飛ばされ共同便所のコエ溜に落ち（共同便所の建物も爆風で飛ばされた）引き上げてくれる人もないまま死んでいった。15歳の乙女よ哀れ……。

〔広島 直爆2.0km 女 15歳〕  
(14-1061)

私は被爆当時女学校の三年生でした。学徒動員として西電話局にいました。朝礼前でしたので、皆教室にいました。友達一人トイレに行くと言って出て行くと（ピカ）と光り（ドカン）と音がして、私達七人ぐらいの者は全員机の下に入りましたが、トイレに行った人は戸があかなくなってそのまま、となりの部屋にいた人は大きな戸棚の下になって助ける事が出来ませんでした。

今でもその二人の事が気にかかっています。

もう一つ、西広島の方へ逃げる時に、ある橋の上で、私はスリッパでしたので片方がぬげて前を逃げている人の下駄を取ってはきました。悪い事をしたと何時も思っています。

私は今では幸福に暮していますが、川の中で助けを求めている人を見ながら、ど

うする事も出来ずに逃げた事が心残りになっています。

〔広島 直爆0.5km 女 16歳〕  
(32-0137)

電信柱が倒れているように、表面だけ真黒でゴロゴロ死んでいる人たち。

腸をダラダラと引きずり、エプロンのように皮膚をブラブラさせながら、水、水と血だらけになってさまよっている人、人、人。

水もなく、注射液のアンプルをわって口に入れてあげた人たち、持って行って見るとすでに駄目になっている人、人。思い出すのも心が痛みます。

暑さのせいで、遺体を早く処置するため、番号札をつけ（遺〔品〕類とか髪の毛をとり）病院内の空地でガソリンをまき、焼いたこと等々。今では考えられない事をしました。 合掌。

〔広島 直爆1.5km 女 16歳〕  
(13-04-007)

被爆当時、母、弟、私の3人は家の下敷になり、運よく私と弟はけがもあまりしませず、必死の思いで外に出ることが出来ましたが、母の足がはりの下になっていて、やっと引っぱり出すことが出来たのですが、足の骨折のため骨がとび出し出血がひどく、後日足がくさり、うじがわき、15日の終戦の日になりました。今思えば、平和な時ならばすぐ手当をすれば命は助かったと思いますと、今でも残念でたまりません。

私のすぐ下の弟も学徒動員に出て行方不明のままなので、今でももしかしたらどこかに生きているのではないかと思うことがあります。

また、死んだ人をあちこちで焼いている中で何日も過ごしていましたが、こわさ

を通りこして神経がまひしてしまったのか、あまり何も感じませんでした。

[広島 直爆1.5km 女 16歳]

(15-0025)

当時安田高女4年生16歳、学徒動員で工場に行っていた。投下直後工場の下敷となり、右指先を柱の角でおさえられ、身を動かすと重量が体全体にのしかかる。真暗闇の中で何が何だかわからずゾーッとしていたら、何分か後と思われるが黄色の煙がおそって来た。とても苦しくて声も出なかった。ピカッと閃光が目に入った。ドーンの声はおぼえていない。南側に爆風で飛ばされていたと思う。なぜなら、工場の門が目前にあった。

当時2年生らしいが名前は知らないけど、工場のハリの先の方でその下級生が首をはさまれ、口を開き、舌を出し、ヨダレを流して「上級生のお姉さん、お水を下さい」と言った声が未だ耳に残っている。

工場から一瞬火が出た。義足の工員のおじさんが私達の先生、松尾先生のところに来て「学徒さんが工場の煙突の下敷になっている。助けてあげて下さい」と言った。松尾先生は白髪のおじいちゃんですが、防火用水の中に入って引き止める私の声も聞かず「△△さん、あんたは上級生だ、下級生を誘導して下さい」と言われた。下級生を川に有った舟一そうに、泳げない人だけ乗って下さいと言ひ、私はそのまま先生の来られるのを最後まで待ったが、もうメラメラと火がおそって来るので川に入ろうと思ったところ、3、4歳の男の子が体のヒフをぶら下げて泣きもしないで立っていた。その子に、お姉ちゃんと逃げる？と聞いたら、うなずいたので、その男の子を背中【に】おぶって川の中にドブンと土手から飛んだ。男の子の皮が川面にユラユラと……。私は水を飲みながら必死で泳いだ。途中助けてと声を残して沈んで行く人や下級生もいた。

なぜか私のクラスの人1人も見なかった。なぜ??60年4月にクラスメートと広島駅前で出会ったので、当時クラスの人達はなぜ私と別々になったと聞いてみたら、後の人達はほとんど北側に飛ばされて、先生4人と下級生達と可部方面に逃げたと言っていた。初めて耳にする言葉だった。

男の子を背負って長寿園の中州目指して、ようやくたどり着いた時はもうヘトヘトだった。男の子は翌朝死んでいた。牛田側に再び泳いだ、死んだ男の子を川面に浮かべ、その時初潮が始まった。平気でした。

戸坂国民学校でウジ虫を取ってあげたり、死体を校庭で焼いた。

9日の日に同じコースで工場の焼跡に行き、兵隊の言うままに焼跡の整理に当たったり、白島九軒町に有る自宅に帰ろうと、川を泳いで基町（元陸軍病院のところ）土手に這い上ったら、兵隊が死体をトビ口で川から引き揚げている。ロープを3本私に渡され、むすびをやるから死体を泳いでロープにかけるよう命令され、むすびほしさにクタクタの体で川に入って3体にロープをかけ引き揚げたが、兵隊はむすびをくれなかった。乾パンを2枚もらった。

今でも胸中に残るのは、松尾先生の最後の姿と言葉、下級生の声、それに男の子の名前を聞いていなかった事。工場の焼跡の煙突のところに先生の灰のようになった骨、下敷になって焼死した下級生の骨、焼瓦に集めたけれどどんなになっていたのか、後の事は知らない。

父の行方不明。従女の死。母が翌年私の目の前で死んだ事、またその病名が腸チフスと言われた事。戸坂の国民学校で、陸軍病院のところで死体を焼いた事等、鮮明に今でも、心のこりが有ります。それに直爆した私と田舎方面で被爆者援護に当たった人と、同じ健康管理手当をもらうなんて、私は納得出来ません。これは如何とした事でしょうか。

〔広島 直爆1.5km 女 16歳〕  
(34-0027)

- 1) 8月6日夕方、当日土橋町付近へ建物疎開に行った同町内の人数人、三瀬町付近で出会いました。全身やけどで両手、両足の皮膚の皮はたれさがり顔もはれ、相手は名乗ってくれても、私には全然わかりません。苦しいので泣きながら、とぼとぼと歩き、親戚へ行くと行って別れた姿は忘れられません。
- 2) 火に追われ逃げる途中、横川駅付近で腸を両手でかかえ、時折手でちぎり、苦しんで”殺してくれ”と叫んでいた男性と女性の人を見ました。

(男性は近所のお兄さん。女性は父の友人の奥さんでした。)

[広島 直爆2.0km 女 16歳]

(24-0007)

ア) 避難中、やけどをし着衣もなくゾロゾロと無意識に歩かれている異様な姿、橋の欄干に首をつっ込んで死んでいる人、川のなか、水ぶくれになり流されている人々、路上に倒れ死んでいる人々をみた。二中の校庭で山積みされ焼かれている死体、無造作に処置されている校庭。忘れることが出来ない。

イ) 恐怖感で足がすくんだ。

ウ) 救護所へとか水を欲しいといわれたが、怖くてなにもしてあげられなかった。

隣りのお婆さんは階下にいられ、下半身焼けて死んでられた。いつも子守していられた近所のお婆あさんも孫をかばうように、いつもの場所の下敷きになったまま焼死されていた。

地獄図は今でも脳裏に鮮やかに残っている。

[広島 直爆2.0km 女 16歳]

(26-0007)

当時16歳で、女学生は学徒動員にかり出されていました。私もその一人で、家族は誰も被爆した者はありません。8月6日に原爆投下の日、家にたどりついたら家族は私が死んだと思っていたとのことです。私は地獄絵をみて帰って、人間の死体の上を歩いた時のことは忘れることが出来ません。足もとを見て歩くのもおそろしく、やわらかいものの上を歩いて走ってにげていたことが、信じられぬ思いでいる。

夢中で歩いているそばを、黒くすすけたおかしい人間の顔がのぞいているトラッ

クが目映ったりして、電車の線路が上空に舞い上がっていました。

横川の駅らしいところから海か川か、みえるように焼けてしまっていた広島。

歩いていても、人が助けを求める声ばかり耳に入って来ましたが、自分が生きていることが不思議でした。

8月7日（原爆投下翌日）から町の寺や学校や役場に、被災者の看病に出たことが、薬のない時に一番つらかった。私は勝円寺という寺へ。寺のくりには廊下まで黒ずんだ顔か何か見わけのつかぬ、人間でなく動物といった方がよい状態の人。片っぱしから命たえてしまった人を寺の庭に山積みでした。片っぱしから河原へ運んでわらで焼くということでしたが、次から次に運ばれて来ては息がたえていく。水をくれ、水をくれと叫んでいた人、足もとを引っぱって、人間の最後の力をふりしぼって何か言っているのが聞きとれなかったこと。私のしてあげること何一つありませんでした。私は思いきって、どうせ皆死んでいく人にせめて杓子で一口のきれいな水をあげようと思い、バケツに寺の水を汲んでのませてあげたのが、今思い出すことです。上官に叱られました、1週間も経つと全員亡くなりました。

暑い時に人間にわくウジ虫を、白い色をしたのも見ました。この世の中でこんなことがあってよいものでしょうか。私は16歳の年齢で放心状態になって自問自答を何回したか知りません。これが私の人生のスタートだったように思われて、戦争ほど残酷なものが他にあらうかと思えます。

新型爆弾と後にわかったことですが、当時怖いことがこれほどおそろしいものか心のこりです。

〔広島 直爆2.0km 女 16歳〕  
(27-0288)

学徒動員で住野工業にて被爆し、山の方へ逃げようと友人と三篠町から祇園町へと行く途中、市内のどこの幼稚園かわかりませんが、女の子が左腕をぶらさげて私の手をいつの間につかまえて、連れて行って、と泣きついて来ました。よく見ると左腕がひどく切れ白いものが見えていました。私も腕にやけどをしていましたが女の子の傷を見ておどろき、途中救急医療班のテントまで連れてゆかねばと思い、手

拭で腕をしばってやりいっしょに歩きました。（先生もお友だちもわからない）と言ひ、お姉ちゃんといっしょに行く私の手を離さず、でも泣きもしないで一生懸命がまんしているのがわかり、とても可哀想でした。やっと辿り着いた救急所には人々が溢れて列を成していましたが、訳を話し先に診てもらうよう看護婦さんに話して、私達は先に行きましたが（連れて行く事が出来なかった）、女の子がお姉ちゃんお姉ちゃんと呼んだ声が忘れられません。元気でいてくれたら四十四、五歳でしょう。置いて逃げたのが後ろめたいような気がしてなりません。

〔広島 直爆2.0km 女 16歳〕  
（32-0214）

友達と一緒に動員作業に行く途中、電車の中で被爆し、友達の姿が見えないまま逃げたが、翌日友達は死体となり発見された。

逃げる途中会う人々は夢遊病者のようだった。両親の安否を気遣ったが、足の怪我のため動けなくなり、待つ間の不安、寂しさは今も忘れられない。

19日になって人に頼んで、焼け跡を掘ってもらい、骨となった両親がわかったが、あれでもどこかへ逃げのびてはいないかという望みも断たれ、力が落ちてしまった。

もちろん家財は何もない。はだかになった子供達ばかり、親類に別れて厄介になることになり、気がねな生活となった。

〔広島 直爆2.0km 女 16歳〕  
（34-4129）

1. 死んだ人は真黒になって、とても見ていられない。
2. 一つの爆弾で何十万人が傷ついたり、死んだり、小さい子供、学生と若い人が

血をはいて死んでいくのを見ると、むざんな戦争だったと思います。

3. 助けてと言われても、どうしてあげる自分の気力がなかった。自分さえ死がくると思っていたから。

〔広島 直爆1.5km 女 17歳〕

(15-0034)

ア. はだかで曲がってこげて、まるで虫が焼け死んでいる通り。

広島駅ホーム＝上半身はだかで並べられている兵隊さん、肌は焼いた魚のようにこげて、人間とは思えなかった。やけど、けが――見ても何もないので、なにもしあげる事が出来なかった。

〔広島 直爆1.5km 女 17歳〕

(33-0062)

○日赤病院の看護婦寮で被爆する。助けを待つも、大声で泣きさげぶ多数の友のうめき声、大きい柱や壁で身動き出来ずやっとはい出すも、周囲は火が燃え広がっていた。声に近づいて引き出そうとしても道具なしでは骨折など引き出せず、だんだん声もしなくなり、火が近づいて燃えうつって来た。直〔爆〕死した友の声が今も頭からはなれません。

○被爆後の日赤病院は、折り重なる重傷患者で悪臭と熱気に蒸しかえされる中を、鼻口をタオルでおおい肉親を探し求めて地方より入って来る人が次々と続いていました。火傷の浮腫はびらんし蛆が真白に身体の深部まで発生して、人相の判明すら出来ない患者が多数呻き合っていました。私とその蛆を掃き集めている時でした。「〇〇はいませんか」「〇〇はいませんか」の声に混じった母の声を聞きとれたのでしょうか、息絶えだえに私の前に横たわっていた重傷の青年が「母さ

ん僕だ」と力をふり絞って出たその大声に驚いている私の前で、着物の汚れもかまわず、ずるずるの息子に抱き付き、わんわん泣き続ける母親の姿が今も私の目からはなれません。

[広島 直爆1.5km 女 17歳]

(34-2617)

17歳で単身学生として他郷（広島）に住むようになり2週間目の出来ごと。

当時は自分の意志など持ち合わせない世の中だったから、戦争の是非など論外で、”いつでも死ぬる”というのが別に気負った気持でもなく、だから無感動に被爆した。

そばで友だちが死ぬ。子供が一晩中イタイ、イタイと言いながら母親を呼びつけ、朝には絶えた。それらを逐一みとどけながら、自分もやがてそうなるのだ、速いか遅いか時間の差だ、今は助かったが、この先どんなふうにならぬのだろうか考えていた。人を可哀想だと思っている余裕などなかった。

国家主義、全体主義の教育の中で、無感動に、無表情に自分をこころして、人間性（味）のない青春に育ちつつあったことを思うと、ぞっとするのである。

[広島 直爆2.0km 女 17歳]

(12-0071)

昭和11年、母34歳、私8歳、弟6歳の時父は亡くなりました。以来母は、息子の成長を飽をのぼすような気持で頑張って居ました。母子3人、父の遺産で何とか女学校を出してもらい、弟は中学へ、大学へ進学することを唯一のたのしみに母は頑張っていた。弟中学3年の夏、あの恐ろしい原爆に散ってしまいました。

婦人会の依頼で母は鶴見橋に建物疎開の奉仕に行きました。弟も中学校より小網

町に、やはり建物疎開に行ったのです。挺身隊だった私はたまたま家に居て洗濯して居た時でした。B29の爆音が耳に入り、風呂場より座敷に上がった途端、ピカッと光ったと同時に家の下敷きになりました。眼を明けると、黄土色の煙のようなもやもやした中で、再び眼をとじてじっとして居ました。上空を飛行機が旋回しているので防空壕に入りなさいと兵隊に助けられました。

全く知らない人の家で一泊させてもらいました。翌朝、母と弟の安否を尋ねて市内に向かう途中、東練兵場に近くなった道の両端に、火傷で達磨さんのようにふくれ上がった大きな肉の塊のような人？を見た時、私の足はすくみました。しかし母を弟を探さなくてはと気を取り直して歩きました。練兵場のあちこちの死体、水を求めて最後の声をふりしぼって訴える人、母ではないか、弟ではないかと思極める私は鬼のような心？おそらく平常では見られない惨状、肉親を探し求めるが故に正視出来ないことを、もしやもしやと眼を皿の様にして彷徨い歩き、5日目の朝、やっと母が向洋の小学校に居ると知らされた。半身火傷の母は腕にウジ虫がわいていた。そんな体でお息子の安否を気遣う。生きている、生きている、どこかできっと生きていると信じ、早く元気になって探してやらねばと頑張った母、息子の成長を生きがいにしていた母に、行方不明の息子は無惨。75歳の生涯をとじるその日まで、記憶喪失になって、どこかで生きているかも知れないと思いつけていた。弟よ許して、探して上げることが出来なかったこと。

〔広島 直爆2.0km 女 17歳〕  
(28-0039)

私達弟も体全体から血がふき出て衣類は血だらけ。道ばたで2歳～3歳くらいの子供が大やけど、泣きさけぶあついあついという声で、おもわず体ごと水そうの中へつけてやりました。ちょっとはなれた所に学校があり、そこで傷の手当をしてもらったが、子供はまもなく死亡してしまいました。

私達はトラックで田舎の大きなお寺へ収められました。毎日のように死人が何人も出て、お寺の横に大きな穴をほって火を付けて焼いている。ああいやだどこかへ行きたいと思ったが、どこへも行くことが出来ず、不安な毎日がその当時続きました。

した。

焼けあとへ何度か行って見ましたが不安はつるばかり、兄をさがすのに焼けあとを歩きまわり、どこかへ生きていないかと、弟と二人でさまよったのを思い出します。

〔広島 直爆2.0km 女 17歳〕  
(33-0026)

皮膚がたれ、衣類はやぶれ、黒い顔で同じ川で丸太につかまり、消え入るような声で「水……」と水を求めて1人2人と沈んで行く人々に手をかすことも……また水を飲ませてあげることも出来ず、ただ火の粉から無我夢中で自分を守っていた。やがて川の水も引き、川底より数限りない死に人に目を見張るばかりであった。

今思えば、何とかして水を飲ませて送ってあげられなかったかと残念に思います。  
(合掌)

〔広島 直爆2.0km 女 17歳〕  
(34-2303)

木造の宿舎の下敷になっている友達の胸にたくさんの柱が重なっていて、どの柱を動かしても胸をしめつけ、火の手はまわってくるし、どうしても助けてあげられなかったのが、いつまでも心にのこっています。

広島陸軍病院の近くであったので、多分患者さんだろうと思う、火傷でまっ黒になった人や、顔といわ〔ず〕手足と〔いわず〕大きな水疱をぶらさげ、水、水と叫びながら川原へ降りてゆかれる姿を見ても、どうしてあげることも出来ず、何を見ても自分が生きのびることで精一杯でした。あの様はこの世のものとは思われません。

口先だけの平和でなく、本当の平和を築いていくため力を合わせたいと思います。

〔広島 直爆1.0km 女 18歳〕

(27-0219)

1. あの光線と共にカゲも形もなく消えて行った友。
1. それから家の下敷になって生きたまま焼けた無二の友。
1. あの瞬間に意識もうろうとして、親友の私の顔を見ても表情をかえなかった友は、上半身焼けてヒフがたれさがっていました。
1. 焼けたカワラの上で動けなくなった友は、歩ける私に水を求めました。私は水をあたえませんでした。今も昨日の事のように、そんな友の声が聞こえます。
1. 日赤の看護婦に志願した友は、焼けたヒフがくさり夏の事なのでウジがわくのです。生きた人間にウジが頭から首すじにかけてわくのです。生きたままくさっていくのです。薬もなく、友はハエをよけるためにカヤの中に入って、3ヵ月生きました。
1. あの時のことは私が死を迎える日まで忘れる事はなく、いつでもどこでも見えます。まぶたのウラに焼けついていますから。
1. 人間は、世界中の人間は戦争をしてはいけません。

〔広島 直爆1.0km 女 18歳〕

(35-0034)

あの強烈な閃光に焼かれ、煙のたちのぼる街をさけ、痛む足をひきずりながら異様な人々の長い列に加わり歩き続けました。なんでそのような連想をしたのか、18歳の私は、その時思いました。頭だの顔だの手足など衣服から出ている部分が白くお米の粉をかぶったような人の群、と、人の流れにのって歩き出した私の腕も白くなっているのに気づきました。

やっと辿り着いた被服廠は惨憺たるものでした。異様な臭いのたちこめた床に、全身火傷で皮膚のぶらさがった人、怪我をして動けない人達が、運び込まれたのか？ 辿りついたのか、床に蹲くまって呻いて、水をください、水、水、とつぶやいていました。時折り泣き声を上げる人に、あなただけじゃないのだから、がまんしなくてはと、励ますのでしょけれど、ずいぶん冷たい声かとんでおり、おもいきり泣くことも出来ず、家族とも離ればなれになり、水を欲しがっても、火傷に水はいけないとかで、水ももらえず、ひとりで苦しんで死んでゆく人の姿を思い出すと、とてもたまらなくなります。せめて助からないあの人びとに、自由に、口に入れられるものと言え水しかなかった、食料難のおり、たっぷり飲ませてあげれば良かったのと思います。

その頃になって私の腕も水ぶくれになっており、あの白く見えた人達は火傷だったのです。今だったら、ほんの指先をやけどしても痛くてさわぐのに、気が動転していたのか、乱れ飛ぶ空襲のデマに怯えて、ひたすら逃げることに夢中で何も感じなかったのか、みんなよく歩きつづけたものだと思います。

戦争は無惨です。まして核に焼かれた人々は最大の犠牲者です。人類に使用してはならないものを、モルモット代りに試用したのですから、絶対に許せません。

[広島 直爆1.5km 女 18歳]  
(22-0385)

江波の病院に避難している時、4歳くらいの女の子がお腹が切れ腸がとび出しており、若いお母さんが必死で何とかして下さいと走り廻っておられた姿が、今でも浮かびます。血だらけの人等地獄のようでした。

親類の家の人に迎えに来てもらっている時、あちこちから伯母や叔父が怪我ややけどでひきとられて来て、叔父は全身やけどでずるむけており、苦しいのでおこしてくれ、ねかせてくれと言いつづけていましたが、持つ所が無い、どうすればいいのかと看病する人が困っている位でしたが、それでも気はたしかで、家族のことを案じながら死んでしまい(8日の日あつという間に)、その家族の方も、妻も、娘も十日市町にいたので死んでいました。私ととなり合わせでねていただけにショッ

クでした。

両手、両足のやけどで、私もうわ言を云ったりしてもうダメと言われながら、隣におられた看護婦さんに注射をしてもらったのがよかったのか少し元気になり、廿日市の病院へ入院することになり、怪我をしていた伯母と二人、馬車にのせてもらって運んでもらった時の傷の痛かったこと、ヒイヒイ言いながら行きましたが、一週間いて終戦になり病院が閉鎖になったので、やっと南観音町の我が家に帰る。家はやけ残っていても部屋の中がめっちゃめっちゃなので、裏にあった倉庫を整備して、ガラスで傷だらけになった母がねており、父と末弟は元気でいたけど、次弟の方が学徒動員で小網町で被爆し、家にかえって7日に死んだことを知り悲しかった。

4ヵ月ずっとねたきりで歩けず、一時はどうなることかと思ったが、正月には少しづつ歩けるようになりホットする。でも左肘右肘がケロイドがひどく伸びず、傷あとを見て母が泣く、弟は死ぬし、私はこんなで一緒に死のうと言うて父に叱られたりした。

それから私達を毎日治療して下さった看護婦さん、元気だったのに急に血を吐いて死なれ、これは皆の毒をすわれたためと後で聞き、いまさらながら原爆の恐ろしさを知る。

親類の人が20年8月10日までに9人がなくなった。その中遺骨のわからないのが6人、若い子も多くやり切れない気持になった。

〔広島 直爆1.5km 女 18歳〕  
(27-0525)

- ①元安川のほとりで、下着をちぎってほうたい代わりにし、一応の応急処置をした。近くにたくさんの全身やけどの人々がうめいており、持っていたタオルを川の水にひたしては、やけどの部分を順々に冷してあげた。冷たくて気持ちいと感謝された。
- ②川原から土手にあがり比治山めがけて歩いていた時、黒い雨が降って来た。防火用水のかげに腹部より多量の出血を流していた女の人が、雨が当たって傷が痛むと言った。近くにあった焼けトタンをそっとかけてあげた。「ありがと」といって

いた。

- ③国泰寺の側の樹木に、多分中学生位だと思ふ男の子が爆風に飛ばれていたのだから、突きささるようなかっこうで木にぶらさがっていた。
- ④共同水道の所に折り重なるように、皆口を蛇口の方へ向け、ある人は赤ん坊を抱きしめたまま息絶えていた。
- ⑤金輪島でたくさんの死人が山とつまれ、火葬にされた。その炎の色を今も忘れることが出来ない。

[広島 直爆2.0km 女 18歳]  
(13-11-026)

- 1. 戸外がダイダイ色に染まって「焼夷弾！」と叫んだため、上前歯が1.5本なく、のみこんでいた。
- 2. 顔のキズがひどく左眼はハレでふさがり、右眼下はザクロのようにさけ、右腕の関節（中側）は静脈が見える位きれており、血はちょうど魚のハラワタのようにドロリとしていた。
- 3. 道なき道を人の群れにまじって東練兵場へ逃げる途中、「死にたくない。日本は勝てるのか」と無意識に倒れた。その時字画の多い「驚」という字をかき、かけた喜び、生きた証に気を強くもった。
- 4. 大須賀町で破裂した水道で乙女心に顔を洗い髪をなでた。顔は2倍はれ、頭はマワタのようであった。
- 5. 右眼も見えにくくなり、逃げ廻る子供の手をとって助けを求めたが、恐ろしかったのか手を放され、東洋工業の勤め帰りの方に救われ今日があった。
- 6. トラックに乗せられ東洋工業-日本製鋼所と仮診療を尋ねやと製鋼所で注射1本、ガラスのささった上からグルグルほうたいをまかれた。
- 7. その他色々ありますが、限りがあるのでこれで止めますが、キズに痛みのなかったことも不思議です。もう一つ、母のヤケドは青柿のシブで治しました。
- 8. 自分が重傷の身であったため、人の身の救いは出来なかった。

[広島 直爆2.0km 女 18歳]  
(33-0032)

被爆した日は、家族や親類11人で防空壕にねましたが、夜に小さな子供3人が水、水といいながら死んで行きました。朝になってその子たちを壕から出してみると、顔ははれあがってまっくろで、だれがだれだかわからず、3人を並べてねかして、これが一番大きいからしげちゃんだ、次がよっちゃんだときめた時は本当にいきじごくだとおもった。

姉の家族が一家7人次々に死んで、さいごにめいがのこって、小学1年生でしたが、体にはんてんが出たのを見て、私が死んだらみんなの墓参りをする人がいなくなるから死にたくない、死にたくない、死んで行きました。

自分の子供や孫が死んだ人たちは、あっちこっちと死がいをさがしてまわって、自分でやいていました。

〔広島 直爆1.5km 女 19歳〕  
(13-11-012)

無二の親友が建物の下敷になり助けを求め、必死の手を加えたがどうにもならず、他の友人とにげたけれど、今でもその声が耳に残って忘れる事が出来ない。

〔広島 直爆1.5km 女 19歳〕  
(32-0146)

家に帰れないので旧練兵場の方へ逃げて行きました。尾長小学校の救護所に行きついた時、入口の築山の芝生の上にたくさんの負傷人が横にされていた。その中に一人の体格の良い大きなおじさんが大声で救護を求めて叫んでおられた。見ると腹部に大きな穴があき、内臓が飛出して腹部のそばでヒック、ピックと波打ち、声を出される度にその波は大きくなり、血液がドーッと吹き出していた。入口は寄り付くことも出来ない程の負傷者でどうにもならず、私もあのおじさんが待っているのに

と思ひ我慢の出来るところまで行こうとそこを離れました。

私が離れてまもなく、校舎も延焼、救護所附近も火の海となりました。あそこにはたくさんの動けない負傷者は？あのおじさんはどうなったのだろうと思ひながら、矢賀の親戚の方へ歩んで行きました。途中で〇（不明）々と薬を（といつても油とかジャガ芋等）塗った処置を受けながら、やっと親戚の家にたどりつき、そこでどうとう動けなくなったのです。

途中で中学生の子が「お姉ちゃんこれカブリなよ、僕貰ったのだからかぶるといいのでね」と言つて破れた麦ワラ帽子をくれた。その子は頭は帽子のあとがくつきりと残つて、全部火傷を負つていた。「いたいでしょう」「いいや、お姉ちゃんこそいたいだろう」そう言つてくれて、一緒に岩鼻まで歩いたあの子。

余りにむごい事の続きを見て来て、自分も裸でポロポロに焼けてさがっている体の事に気づかない程でした。いつもあの吹き出る血と、あの火の海を思い出します。

[広島 直爆2.0km 女 19歳]  
(34-0887)

### ③ 20歳代（被爆時）

幾日も馬の腹部のまぐさがくすぶっている傍に、人の黒こげのかたまりがあつたり、そのまた腐乱した臭い、びっしり群がってとび散る蠅。瓦れきの山。一瞬の中に地獄絵図となつた広島市街。放射能の直射で黒く化した顔々。一体全体どうなつたのか、茫然として考える余裕などないまま、負傷者の看護に當つた。

下敷となつて瀕死の状態の先輩の悲鳴も、まもなく静かになつた。やつとの思ひで脱出した自分。数日後に遺骨を拾ひながら、無念の涙がとめどなく流れた。この仇、きっと討つからねと誓つた1週間後に終戦となつてしまつた。等々思ひ出す度に戦争の愚かさが増すばかりです。絶対に戦争を繰り返してはなりません。

人間は戦争をするために生まれてきたのではないのですから。

[広島 直爆1.5km 女 21歳]  
(01-2015)

広島市己斐町三菱重工業（株）の訓育課が、南観音町地崎の広島製作所の工場よりソカイしており、ピカドンに遭いました。パーと言う音と黄〔色〕い光線と共に、2Fにいました足下がくずれ、階段と一緒に1Fの書類の上にはいました。材木（コワレタ家の）の下にはさまれた学徒5～6人を助けて、フッと己斐駅の方を見ますと、10人～15人位そのアト続いていたような気もしますが、上半身は裸身で手をユウレイのごとく前方に出してタラシ、手の指先にヒモのごとく何かをブラ下げて、歩いているような立っているような一団が、今でも眼に焼きついています。

8月7日午前1時過ぎ、中心地に学徒（市女1年）で建物コワシに行っていた妹をさがしに、父と県庁の正門のところへ行く、どの水槽（防火）にも銅色の真裸身の子供（中、女学生）がコウ直したまま空に向かってサカサマに立っていた……。

〔広島 直爆2.0km 女 21歳〕

（13-11-022）

顔が2倍にふくれあがって黒こげになり、苦しい苦しいとさけび、おれは死ぬ、早く治療してくれとなきさけび、子供などはくの字形に丸くなり死んでいた。

そこら中は死体の中で、私達は死体をまたぎひなんした。夏のことで傷口はうじがわき、うじをとってやったりして、死んでいったが、薬がなにもないのでどうすることも出来なかった。

死体を山程あつめて、そこらの材木で油をおとして死体をやいた。夜になるとリンがもえおそろしかった。

子供はやけど、背中一枚皮がめくれ、ぼろをさげたようで、手は5本のゆびがひつついて、水をほしいとさげんでいた。

私の母は家の下敷で人に助けを求めたが、自分のいのちがあぶないのに人を助けるどころじゃないと人はにげた。

〔広島 直爆2.0km 女 21歳〕

（18-0013）

- 黒焦げの死体。お化けのような異状な人々。
- 乗りおくれた電車のガイコツになっていた姿。
- 燃えている建物の間をにげ廻ったこわさ。
- やけただれて皮膚のたれ下がった自分の姿に気付いた時。

〔広島 直爆2.0km 女 21歳〕  
(19-0024)

私がいつも心にのこることでありますが、私が熱でうなされている時ですが、三夜ぐらいと思います。山の向うの空に真赤に炎がつづいていたことです。

その前に私が広島より帰る途中、トラックで男女ともに見わけのつかないほどに黒い衣服で、覆うがまさに地獄の様相で、泣き声ともひめいとも、虫の息の者等と、何台も通り過ぎし様子です。

それに家に着いた時には、小学校では被害者でうめき声に泣き声にまじり、父母を呼んでいるのが、夜中でも風に乗って聞こえて来ることです。それから後、毎日十人~二十人と死亡して、車でトンネルのむこうに埋葬されたことが続いていました。

1週間くらい過ぎたころと思いますが、戦場が気になり広島に出向き、駅のホームに降り立った時、市内が一目で見渡せる様子を見て、三日三晩炎を見たことがこのような大変なことで、本当にガレキの山でした。それに駅の構内で見た兵隊さんの様子です。コンクリの上にタンカに寝かされている様子です。口もきけず体中焼けただれて、その中をウジ虫がウヨウヨとはいまわっていました。私が声をかけると、生きているのか死んでいるのか、目から涙がひとしずつ流れている方もありました。私は本当に気持が悪くなりましたが、頑張ってくださいと声をかけ、そこを立ちのくことが出来ませんでした。あの兵隊さんたちが一人でも助かってくださればと、今でも気にのこります。

〔広島 直爆2.0km 女 21歳〕  
(27-00243)

ちょうど地獄図を見るさまで、なんとも形容の出来ないすさまじさ、何かを感じるというようなこと以外の思いでした。口ではちょっとあらわしません。

目の前で眼が見えなくなる人。逃避中足が立たなくすわり込み、その人々の手だすけも出来ず。山すそでは枕を並べて討死にのごとく、そこまでやっとたどりつくのか、息たえたり、息もたえだえで横たわり、今眼を閉じるとその人々から何かもやもやと立昇っているような気配を感じます。

あまりの恐怖心のため、避難場所にいるのにヒコーキの爆音がきこえると、悲鳴をあげ逃げまどい、そんな事が、2日3日と続きました。

こうして書いていると涙がにじみ、もう嫌という思いです。

〔広島 直爆2.0km 女 21歳〕  
(37-0028)

忘れることのできない8月6日、一瞬の光りと轟音、何か地球がひっくり返ったような一瞬でした。同時に一面火の海と化し、かろうじて押しつぶされた家屋より這い出した時、近所の方が破れた腹部より腸のようなものを押し込み、あえぎながら逃げて行く、川を渡って行く有様は、正に血の池でした。

わたしも足が立たずやけどでしたので、外で夜を過ごしました。大へん強い雨が降り、死んでしまうようで気が遠くなっていました。

当時の警防団のトラックに乗せられ、約10km奥地の可部のお寺に収容された。付近には水を求めて這いながら助けを求める多数の人たち、うじ虫が湧いて死んで行く人、道路には黒こげになった死体が多数散乱し、正に地獄絵を見るようでした。

自分もトイレも行けず、婦人会の方におんぶされお世話になりました。40度以上の熱があっても氷もなく、傷にも何の手当てもなく、毎日が不安で気も狂いそうでした。

近所の死んだ人もどんだったかと思うと胸が痛みます。

〔広島 直爆2.0km 女 21歳〕  
(46-0056)

居住地は広瀬元町（0.9km）だが勤務先で被爆、ピカッと光ったとたんに家屋が倒壊、埋もれたが自力で脱出、見渡す限り家屋はペシャンコ。

ならびの家の方が、この梁をもちあげてくれ、中に家族もいるから、と言われたが、私一人の力ではビクともしない。通る人に声をかけたが誰一人手をかしてくれず、右往左往するばかり、火の手もせまって来たので逃げたが、崩れた家の中から助けを求める声等、未だに忘れられない。

二階におられた家主さんが、足をはさまれ動けなくなっていたのを助け出し、一緒に古市小学校まで避難したことが、唯一の慰めとも思っている。

〔広島 直爆1.5km 女 22歳〕  
（27-0450）

つたない文章ではかえって中途半端になり、本当の姿を表現できません。  
胸の奥にかたまりついて言葉になりません。

〔広島 直爆2.0km 女 22歳〕  
（24-0039）

- ①大きな火の玉と閃光。
- ②爆風で家がふき飛んだ瞬間。
- ③爆風が治まるまで死を覚悟した時の気持。
- ④瓦礫の下から立ち上がり、初めて目に入ったまわりの様子と血達磨の兄の姿。
- ⑤傷からの出血がひどく倒れた私のことを「あの人今死んでゆく」と叫んだ人。
- ⑥ボロ布（火傷のヒフ）をヒラヒラさせて走って来る男の子（今でもその姿が臉に残っている）。
- ⑦貧血で歩くことが出来ず、川の土手の土の上に横たわった自分の姿を想像すると

みじめでならない。

- ⑧あの惨状の時、アメリカのB29が襲来して、空爆を始めたらどうしたらよいのかと、非常におそろしかった。
- ⑨「一緒に連れて行って」と助けを求めた少女3人の顔は、今でもはっきりと憶えている。
- ⑩学校の校庭と思われる芝生に、動くことも出来ず横たわっていた人達の、じっと一点を見つめていた顔は今も夢に見る。

[広島 直爆2.0km 女 23歳]

(01-0004)

家族の1人(妹)が倒れた(つぶれた)家の下じきになり、やっとの思いで母と助け出し、太田川の土手まで逃げましたら、市内から逃げて来たけがをした人でいっぱい、皮膚が破れてぶら下がっている人もあり、その時は何が何だか分かりませんでした。近くにバクダンが落ちたのかと思いました。後で原爆と知りましたが、見るも無惨な姿でした。

また、3日後後に広島市内へ入ります途中、川のふちで兵隊さんがおにぎりを手に持ったまま死んでいる姿や、東練兵場近くで人間や馬の体が三倍位にふくれ上がって黒光りがしているのを見まして、戦争の恐ろしさ、みじめさ、本当にこの世の地獄だと思いました。

40年たった今も、あの姿がはっきりまぶたに残っています。あわれな死に方をした人々の姿を思うにつけ、二度と核戦争が起らないよう祈らずにはおれません。

[広島 直爆2.0km 女 23歳]

(26-0029)

- ・大変な被害だということはわかっている、不思議と心の中で自分の家だけは残ってほしい、残っていると念じていたこと。
- ・翌日トラックで相生橋を通り、自分の思いが無残に消え、焦土と化していたのをはっきりこの目で見た時のショック。
- ・生地獄としか言いようがない。私はガラスで顔、頭に怪我をし腫れ上がり、砂埃であき盲同然だった。それでも腫れた間からはっきりみました。

通信病院まで姉が大八車に乗せて連れていってくれて、木陰で横になっていた時、隣で女学生が助けを求め、水を求め、死んでもいいからと言いながら我が母を求め、住所を教えながら、いつの間にか静かに”こと切れ”ていたが、何一つ手のかすことも出来ず、自分もいまにあんなになると思った時の恐怖。

ハンカチに水を浸してくれて傷口を拭いてくれた時の、何とも気持ちよいくわれた思い。

- ・両親と長男は家で下敷になり、そのまま焼け死に、姉二人が可部線の緑井から2日間歩いて往復し、一度は素手では熱くて掘ることも出来ず、やっと帰って来た時には、紙箱に3人のお骨だと渡されても、頭は虚ろ、涙もかわき、苦しかった青春だった。

〔広島 直爆2.0km 女 23歳〕

(27-0270)

倒れて亡くなる方、大出血の方、虫の息の方、崩れた屋根の上で「お父ちゃんとお母ちゃんがこの下におる。誰か助けてよ！」と叫び泣く学齡未滿の男児の声。顔全面と両手の火傷等のためどうしてあげる事も出来ないで、まるで置き忘れられた荷物のように、負傷者や死者をよけたりまたいだりして自宅(翠町)まで帰って来た事。

(詳しくは拙著、原爆記”それは第2の誕生日だった”参照)

〔広島 直爆2.0km 女 23歳〕

(33-0031)

あの日の朝元気で別れた弟、同級生、近所の人等、別れ別れになりました。あの日を境に見ることが出来なくなりました。皆さんどうされたのでしょうか、ほんとに世の中が変わったように、生きているのか、死んでしまったのか、大勢の人の消息がスパッと切れてしまいました。話をしようにも全然初めて会う人ばかりのような気がして話が通じません。どんなに悲しい、淋しい思いをしたことでしょうか。夢であればと何度思ったか知りません。月日、年月が流れるにつれて、ほんとうなんだと感じ、大勢の方々を一人一人思いだしては涙しているこの頃です。とてもあれから40年たったと思えません。

〔広島 直爆2.0km 女 23歳〕

(34-4131)

一瞬にして天国から地獄の底へつき落された私達被爆者、それもこの世の生き地獄とはあの時の様子そのものだと思います。警戒警報もとけて、やれやれと思ったとたんの被爆、一ぺんに眼の前が真暗になり暫くして明るくなったと思ったら、家は全部倒壊、弟も母も三人共家の下敷になり、弟と私はやっと這い出し、お互いに相手の顔、身体を見てびっくり、2人共全身血みどろ（私は左眼が3日程見えなかった）ガラスの破片が突きささった為で、母は柱の下敷になっていた為外傷は私と弟より少なかったが、あとで考えてみれば放射能で内臓をやられていた。やっと母を助け出してふと見れば、北、東、西から火がすぐ近くまで燃えてきている。とにかく南だけしか逃げ場がない。どこをどう逃げたのか無我夢中。半身裸のまま南へ南へと……途中一ぱい死体の上をまたいで。少しして振り向けば我家はもう全部燃えてしまっていた。

その夜、どこかの小学校へ逃げていたが、四方から燃えてきてとても屋内にいられなく、校庭の芋畑の畝の間で朝を待った。とにかくのどがやけつく様にかわくので、校庭の水道の破れから流れている水を汲みに行ったら、「お水を下さい。お水を下さい」と倒れている人に足を掴まれ大変困りました。あげたいのはやまやまなれど「水を飲まずとすぐ死んでしまう」と聞いていたので、飲ませてあげられなかった辛さ……。また、屋内で学徒の丸坊主の中一位の男子生徒が夜通し「誰かお水

を下さい。先生お水下さい」と叫んでいたが、朝になって死んでいた。あの子の声が今になっても私の耳に残って、筆をとっていても涙が出てまいります。

翌日になって、とにかく弟と2人ザックリ口をあいた胸の傷口を、弟は眼の上を切って指は動かないので「治療して貰わなければ」と暑い日中長い列を並んで、やっと自分達の番が来たと思ったら、「こんなの怪我の中に入るものか」とどなられ、全然治療をしてもらえなかった時のくやしさを。遠い道のりをまた、一人残して来た母の事が心配で、泣き乍ら小学校へ帰って行きました。

市内の小学校には3日間も置いてもらえず、弱った母もかかえ、宮島の手前（地御前村）までたどりついた時は、もう配給の物も無く、3人でうすいフトン（敷物）を1枚やっと頂きました。頼っていた（大阪から3年前に）伯父も全然わからず（あとで当日直撃で死亡していた事をきいた）、食べる物は何も無く、母が亡くなった

（26日の朝）その午後、初めて軍隊の乾パンを頂きました。「せめて一口その乾パンを母に食べさせてやりたかった」と、それが40年たった今でも心のこりではありません。薄暗い田舎の古びた小学校の床板の上で死んでいった母の事を思うと、涙が出てきて仕方がありません。

私の県庁の友もたくさん死んでいきました。あのたった一個の原爆の為。絶対に許す事は出来ません（いくら戦争とはいえども）。

〔広島 直爆1.5km 女 24歳〕

（28-0149）

○防空壕の中は重症者だけだったので、入れてもらえなかった。入らなくても子供が恐れ入らなかった。

○防空壕の中の弟（4歳）やけどでふくれあがっていた。兄（5～6年生）がたずねてきたけれど、恐ろしくて兄がにげていった。弟をみてびっくりした。その弟がかわいそうでしかたがなかった。

○気が狂って、子供の名前を呼んでいた人がいた。

○防空壕の中は”地獄でしたよ。”

〔広島 直爆1.5km 女 24歳〕  
(43-0239)

家族は疎開のため長崎市外にいたので、私1人が被爆したが、知人の数人の人達が一応は救助されたが、一晩中水を求め苦しみ、翌日早朝亡くなったことを目のあたりにして、始めは原爆とは思わず、この世の終りを感じたほど恐ろしかった。

頭は油ぎってチリチリに焼けただれ、水を求め苦しんだ人達に何もしてあげることが出来なかったことは、生きている限り忘れられない心のこりと思っている。

〔広島 直爆2.0km 女 24歳〕  
(12-0010)

世界で毒ガス禁止されている。国際的にも毒ガス以上に強力な放射能症等に、どんなにか苦しみながら死んでいったか。

家の下敷きで生きながら焼け死んだ人々。全身焼けただれて、声も立てられず死んだか。

父は6日間ケガの手当も火傷の手当もしてもらえず、食物もなく死んで行き、妹は一度も医者も来ず手当もしてもらえず死んで行ったが、思うだに心が痛みます。私も何度死のうかと思ったことか。戦争をにくみうらみ、歴史上でなく、ついこの間の事があったということに苦しみます。

〔広島 直爆1.0km 女 25歳〕  
(11-0043)

8月6日の朝、外での用をすませて家の中に入って、朝食の後片づけに裏の炊事場に立っていた時でした。そこはひら家で、家の下敷にもならず外にはい出ることが出来、けがもかすりきずでいどでした。外に出て一瞬、夜のようにまっくらの中、次第に明るくなるにつれ、やけどした人々の泣きさげび右往左往する、まるで地獄のようでした。

少し出た所にコンクリートのかべの下敷になり、頭の毛だけ出ている近所の方を救いだそうと救助活動しましたが、やっと顔半分だけ出すことがやっとで、そのままそこで焼け死なれた。

それから西へ西へと人の波にもまれながら、江波だったと思う、ガラスの破片のいっぱい的小屋にたどりついた時、その中にもいっぱい被爆した人々がうめいていた。その中の一人に顔も目が見えないくらいはれ上がり、口びるもめくれ上がり、手も指先まで皮膚がめくれて、体のおきばもないくらい苦しんでおられた。水をほしがられたがどうすることも出来ず、タバコを救助隊員の方から1本もらい、めくれ上がった指先に、めくれ上がった口びるの間からヤット一口吸わせてあげることが出来、（ウマイノー）とひと言。その声が今も忘れることが出来ません。その方も恐らくその夜が最後ではなかったかと思います。

7月末から8月初め頃の焼けつく土の臭いは、いやでも被爆当時を思い出し、しめつけられるような胸の痛みを感じます。

8月7日から毎日夫の安否を気づかって市内を歩き廻った。たくさんの死がいを見て歩きました。その中で今でも思い出すのは性別も判らない、目玉がとび出て、大腸が全部とび出た、あんなひさんな死がいは初めてです。

〔広島 直爆1.5km 女 25歳〕  
(27-0168)

被爆した赤十字病院中でいたるところに死体があり、人間の死が厳粛で尊厳なものなのに、少しもそんな感じをしているひまもなくその処理をしなければならずお骨を拾った。

はだかになった小さな女の子が、親をしたって泣きもせず私達の仲間になり、おひるの食事をさせようとさがしていたら、正面の玄関の芝生の上にまるで白いお人

形のように転がって死んでいた。

学徒動員の中学生が表門の石畳の上で苦しそうに、お姉ちゃん僕の家のお母さんに知らせて、水がほしいというので、少しまっていてねと言って地下室から水を持ってきたけど、もう死んでいた。胸の名札が今も目に浮かぶ。

田舎へむけて歩いていて、知人の軍人が車をとめて声をかけてくれて乗せてくれたけど、その中で次々と死んで行ったけど、私もその一人だけど誰も合掌する人もなかった。今思えば異常だけど、当時の人の心は人間として〔の〕心を失っていたと思う。

川の土手を歩いている時、母親が死んでいる傍らで女の子が母の乳房にしがみついて泣いていた。炎天下可哀想になって引き返した時、その女の子も死んでいた。

生一死へそれらの人達は何を考えていたのだろうか、死体を運び、お骨をひろい、その焼く匂いは今も忘れることが出来ません。

[広島 直爆1.5km 女 25歳]  
(27-0257)

町にあふれてた黒こげの子供の姿が、今もまざまざと思い出されます。

お寺の下敷になって出られなく死んでいった小学生。

私のいとこの子供も手を出して助けを求めてたのに、大きな柱の下敷になっていて助けられぬうちに火が廻り、目の前で死なせたことが、心のこりでいつまでも忘れることが出来ません。

[広島 直爆2.0km 女 25歳]  
(20-0073)

悲惨な苦痛の様子、まさにこの世の地獄を見た。生きている自分が夢の中にいるようでした。黒く焼けただれ、いきたえだえに水をとと言う声が、いまでも耳に残っています。

私は被爆当時のことを思い出す度に体の調子が悪くなり、四、五日具合が悪くなります。当時のことをとても思い出して書くことは少々ではありません。

被爆者だけにじかわからない苦痛です。行方不明の主人を探したり、学徒動員の甥を探したり、6歳になったばかりの甥が、全身焼けて死んでゆき、何もしてやることが出来なかったことなど。

〔広島 直爆1.5km 女 26歳〕  
(19-0027)

校舎の下敷になって助けを呼び叫んでいた声が今も耳にのこりたえられません。手を貸そうにも全く姿はなく声だけがきこえました。

共に職場の友達でした。

辛うじて逃げまどう途中、地の底からの呻き声がきこえ、何年の後もなやまされました。

また逃げる途中などや

動けないで練兵場に横になった方々、今にして思いますのに、せめてお名前をきいてあげていたら。

あのまま亡くなられた方が多いときいていますので、ご家族の方にお知らせ出来たのにと悔みますが、その時自分と友人（火傷）を守り逃げるのが精一杯でした。

〔広島 直爆1.0km 女 27歳〕  
(33-0131)

私の兄は広島一中の先生をいたしておりましたので、校舎の下敷きになって背中一面骨が見えているようなじょうたいで、3日後に亡くなりましたが、死体をはこぶ時、二度三度とコーヒー色のような物をはきまして、生きているのではないかと思うようでした。

新しい絹の布団の上に死体をのせて連れ帰りましたが（被服廠から矢賀まで）、布団がボロボロになりました（アラメのように）。

その時の様子が今でも忘れられません。

ボロの下がったようにヒフが下がって、うめき、さげび、はだしでにげて行く人々（私もふくめて）、昨日のように目の前に浮かび想い出します。

〔広島 直爆1.5km 女 28歳〕  
(34-3635)

1. 焼け野が原と化した住居跡のあちこちに、空をつかむようにもがき苦しんだ姿のまま真黒焦げの死体があった。どこの誰とも判らない。何日も放置されたまま。
2. 被爆2日目正午頃、救護の手伝いをしているとき、瓦礫の中に白いものがちらちらするので走りよって見ると、2歳あまりの男の子がよろけながらふらふらと歩いていた。着ている白い（ネマキ）はうす黒くどろどろに汚れ、小さな足は血みどろで泣き声も出せない状態。親をさがして焼野を30時間あまりさまよい歩いた様子に、驚くと同時に生命力の強さ、尊さに神秘的な思いがした。今でも元気に育っているかと気にかかる。
3. 仮住いの防空壕の近くで、毎日毎日運び込まれる死体が山のように積み上げられ、油をかけて燃された。人間ではなく何かの物体のように……。その火葬場を10日くらい過ぎた頃、私等隣組3人ほどがわらのかます袋を引きずりながら、お骨を拾い歩いたが、恐らく身内のもとには帰れないお骨と思えば、一層痛々しく涙にくれた。
4. 被爆当日は避難所で一夜を明かした。ずらりとむしろの上に横たえているのは死者か、生者か区別もつかない人々が広い工場内を埋めつくしている。その中から泣き声、うめき声、どなり声、苦しさを訴える、水をほしがる、しかし医者も

くすりも見当りません。ただおろおろと見守るばかりでした。

[広島 直爆2.0km 女 29歳]  
(27-0244)

#### ④ 30歳代(被爆時)

自分が逃げるのがいっぱい、助けてくれと言う人を助けることが出来なかった。それが今も心に残り、助けてあげなかったバチで今苦しんでいるのだと思います。なんでこんなひどい事をするのかと今に腹立ちは消えません。

助けてくれと言った人々のことが、頭からはなれません。現在の辛い毎日もあの人達のうらみが来ているのではないか、そんなことがいつも心の中であってつらい毎日です。

[広島 直爆1.0km 女 31歳]  
(38-0013)

1. 被爆後逃げる時、私は6カ月のおなかで、また、手には満1歳3カ月の子供(頭にキズ失神)を抱き、こんな状態の時、くずれた屋根の下から手が1本出て助けてくれと言われたのに、私は許して下さい、誰かに助けて貰って下さいと言いながら逃げました。これは私が死ぬまで、悪いことをした、なぜ助けなかったかと、死ぬまで思い続けることでしょう。
2. 高須の避難先にたどり着いた時、いろんな被爆した人が来られ(髪も何もないヤケドの女学生)、顔全体のヤケド子供、傷がなくもゲイゲイともどす人、語りつくせぬ数々です。今思い出してもこの世の地獄だと思います。

[広島 直爆1.5km 女 32歳]  
(19-0036)

家がこわれて、下じきになった子供とともに家はやけてしまい、財産たくわえもなくなり、主人は職場から帰らず、幼い子供をつれて人々の死体のころがった中をあちこちさまよいまわった。おそろしい、思えば気がとおくなるようです。もう何をどう書いていいかわからないです。ただ、こわいかなしいことです。

〔広島 直爆1.5km 女 32歳〕

(34-2311)

疎開先の娘さんが、被爆後3日位して探し出されて帰って来たが、やけどの跡が化膿してウジがわいていたが、間もなく死んだ様子。

疎開先で広島より逃げて来た人が、次々と血を吐いたり、毛がぬけたりして死んで行き、その火葬をしたこと。木のわくの上に死体をのせ、その上に割木、松の木をのせ、わらをかぶせて火をつけると、死体が焼けるにつれ手足がニョキニョキ動いた様子。この次は私たちもあのように死んで行くのだと思ったら、知らぬ土地ではいやだ故郷へ帰りたいたと、親子三人逃げるようにして疎開先をはなれた。

私たちは先に広島郊外へ疎開していて、たまたま8月初めより市内の病院へ主人〔が〕入院したので、それにつき添っていて被爆したが、逃げ帰る所はあった。

私と子は二度と広島土地をふまなかつたけれど、主人は何度も勤め先の広島文理大へ出かけた。そのため放射能をたくさん受けて発病、他界したものと信じている。

志半ばで死んで行った人があわれでならない。

〔広島 直爆2.0km 女 33歳〕

(24-0071)

私共夫婦と子供と共に空襲解除になっているのにB29のウーというような音を聞いたように思った瞬間、家の下敷きになって意識を失ったので、気がついた時にはほら穴の中に落ちたような気がしたので、何時間気を失っていたのかわかりませんが、夫のことも子供のことも忘れあかりがかすかに見えるところまで這ってはめを破って外へ出ましたが、もう三カ所火事になっていましたが、逃げる方角もわからぬまま南へ逃げていましたら、後から夫に声をかけられ子供の名を言われて初めて気がつく、子供を胸にしっかり抱いていましたが、何時の間に抱いたのか40年たった今も分かりません。逃げる途中、血だらけで助けをもとめる人は数知れず、私も血だらけ服は破れ、人を助ける段ではありません。

吉島の刑務所の南側まで行った時、たくさんの方が集まっておられました。

翌日自分の家のあった所へ帰りましたが、商品も家財道具も全部焼失。それから青天井でねて、親や兄達をさがして市内はもちろん五日市の方まで、毎日子供を背に、毎日歩きましたが、橋のたもとや側だけ焼け残った会社の中は死人の山。日赤病院の表にも死人が並べてありましたが、死にかけた人は小さい声で水を下さいと言われますが、私も水を持っていないのですからあげることも出来ません。

私の実家は今のNHKテレビの裏側にありましたので、母は即死、兄も1人は市役所であい8日に死に、1人は日赤まで逃げていたのを矢賀町の方が、人をさがしに行かれたので兄が私の所を言って頼み、知らせに来て下さって、早速行くと兄は荒ムシロにねていまして、2人の子が袋町小学校へ解除になったので登校日で行ったから子供を頼むと遺言をして、14日に死にました。

それからは8月中さがしましたが行方は分からず、夫の生家の津田へ帰りましたが、夫も原爆から5年間病床に臥し死にました。兄の子は今もって行方不明です。

昔から有名な7つの川は沢山死体が浮かび何度涙したことでしょう。夜はどこにも数しれず隣が燃え、そこには死体があったと思います。けがをしたりやけどをした人もつけてあげる薬も無く、気のどくに思いました。3、4日たてばウジがわき、二度と戦争はあってはならないと思います。

兄の家は一家全滅で、2人の子供の遺骨も無く、電信局に勤務していましたが保険も手当も貰えず法要もしてやれず、私も、夫も財産も失い4人の子を育てねばならず、1人でお寺でお経をあげてもらうだけです。

今でも心のこりなのは、苦しんでおられた人を助けてあげることもせず、ほしい水をあげることも出来ず、兄の私に頼んだ子供の遺体を見つけることも出来なかった事です。

戦争の悲惨さをしみじみ感じます。私も抱いていた子供も、頭や足から血が流れていましたが薬がない。

〔広島 直爆2.0km 女 34歳〕

(34-2716)

20年4月まで広島市内に居住していて、建物そかいで8キロ位離れた所にそかいていました。あの日主人は市内の勤務先の銀行へ、私は市内にいた時の小児科病院に、長女の腹痛の為二女も連れ、主人と一緒に列車で広島に向いました。二女は知人(女)に預け、長女を連れ時間が早いので知人宅(洋館二階建の家)に行き、便所に連れ入って被爆しました。恐ろしさに身動きが出来ず何時頃かおぼえていませんが、人々のたくさんの死人や苦しんでいる人、水をのもうと水槽に顔をつけたまま死んでいた子供たち、背中の子供のひもじいので泣く子、何もやる事も出来ず預けた子供の事も気になりながらさがすすべもなく、ただ一時も早くこの地獄からののがれたい一心で、橋も落ちてないので電車の線路をはって渡って、下を見れば、川を馬が流れ人が流れ、どうする事も出来ず、ただ子供を背おい一生懸命渡って、人々のはだかの人や、やけどの人達と一緒に何と言っていいやらわからず、もくもくと夕方までにヤット帰りました。

夜が来ても主人も帰らず、7日から広島に出てさがし廻りました。でもわからず、4日目の夕方、人に水を下さいと言って、住所と名前と勤務先を(7日の朝まで生きていたそうです)言ったとか。

10日の夕方役場より通知があり、11日近所の男の方2人と私と参りましたが、目の玉が5センチも飛び出て、身体中焼けただれ火ぶくれが出来て、今も目の中に焼きついています。さぞ苦しかったでしょう、やけども痛かったでしょう。何もして上げられず原爆がにくいです。二女も女の知人もわかりません。

〔広島 直爆1.0km 女 35歳〕

(35-0029)

その時私は二女と二人、家の中で話し合っていました。マグネシウムをたいたような閃光を東の窓に見た瞬間、私は焼夷弾ではと思い声をあげた。と同時に娘は立ち上った、“水”と思ったのだと思います。しかしその時私達は爆風のため庭へ吹き飛ばされて、瓦や木材の下敷になっていました。どの位の時が過ぎたか、気がついた時は私は立ち上がる力があつたが、娘は立ち上がる気力はなく倒れたままだつた。その時すでに座つたままだつた私と立ち上がった娘との間に“生と死”の境が出来ていたとは。後になって知つたのは娘は腹部裂傷（爆風のため）になつていた。そのため苦しみ続けたが、誰に診て貰うことも出来ず、見殺しの状態で7日遂に死なせたことは、私が声を出したことによって娘が立ち上がったと思えば、ほんとにすまなく一生を通じて忘れることの出来ない痛恨事であります。

二男（2歳）も幼く爆風で家の下敷となり即死。自分の元にいた二人の子供すら守ることも出来ず自分だけ助かつたことは、すまなく、くやしく、痛恨のきわみです。

もちろん当日登校と勤務のため家を出た夫、長女、三女をさがしに出た時は、すでに遺体も遺骨もなく、市内くまなく三日かけてさがしたがすでにおそく、もう少し早くさがしに出たら、遺体なりと見つけることが出来たかも知れぬと残念でなりません。

市内すべての建物はこわれ、一望の焼野原。収容所には氣息奄々とした人々のうめき声と苦しみの声。道路には死体を山積して火葬に付す有様はこの世のものとも思えぬ鬼気せまるものがあり、心にやきついて忘れることは出来ません。

心身とも疲れはてて、傷を負うた身を引きづりながら故郷にかへつたのは10日でした。

今はただ、原爆の犠牲になつたものの靈安かれと祈る日々であります。

〔広島 直爆1.5km 女 37歳〕  
(34-3646)

当時私には1人娘が17歳、広島市中央電話局に勤務して居りまして、8月5日午後2時出勤、その翌日交代が来ましたのでちょうど8.15分前、3階のバルコニーに出て点呼をうけるので集合、18名の交換手が直撃を受けて今なお遺体も分

らず、40年間苦しみ悲しみにたえて今日まで来ました。

中心地より1.7キロの所で、母の私は、8月6日解除になったので娘が朝帰って来るのを待つ朝食の仕度をしている時、光は見なかったがドンという音と共にその後意識不明。気が付いた時は家の下敷になって、ずいぶん苦しんで、とてもその時の様子は書き表わす事が出来ませんが、九死に一生を得た私は1人です。

はい出た時はこの世の地獄、おぼけやしき。とっさの声に、日本はだめだと大声を上げた事をはっきりしています。

ずいぶん死んだ人達のお世話もさせて貰いました。今過去のあの時の苦しみ恐ろしさを表現する事がつらいです。ただ心に残る娘のせめて1きれの骨でもあってほしいと思います。書きたい事は山程ありますが、書く事がつらいです。以上お察し下さい。乱筆です、心がみだれて書けません。

〔広島 直爆2.0km 女 37歳〕  
(34-0001)

#### ⑤ 40歳以上（被爆時）

街を歩いていると母親が二人の子供を抱いていた。一人の子供はもう死んでおり、もう一人の子供もほとんど息をしていなかった。お母さんも子供も頭から血を流して、胸や腕はまっ赤になっていた。そしてお母さんが私に”子供は生きていますか”と聞いてこられ、私は一人の子供はもう死んでいるとも言えず、”生きていますよ。だからあなたも頑張ってネ”としか言えなかった。すると母親は”でもこっちの子供は段々冷たくなるんですヨ”と、その目もうつろだった。私もその母親達をどうすることもできず、振り返り、振り返りみながら、自分の用事をするためにそこを去っていった。本当につらかった。

〔広島 直爆1.5km 女 41歳〕  
(28-0354)

主人は学校教師、長男は動員学徒、長女は県農協へ勤務。三人を送って、私は誕生すぎの末子を抱いて庭に立っている時、一瞬、閃光目前足もとに落雷のよう。気がついた時は5m先の座の上にはね飛ばされていた。真暗で（ここはどこかいね）と独り言。家の破片が散乱して身動きも出来ない。末子を抱き上げた。突然二女（女子挺身隊で当日は休日）の悲しい声。隣室でお腹を切って苦しんでいた。大変どうしよう。外の方では隣の市営住宅（10家）が倒れる。方々で火の手が上がっているらしい。〇〇さんは家の下敷でぬけ出られない等々。けがをした人、やけどした人、避難者続々、右往左往。生きながらの地獄の展開。

医者もなく手のほどこしようもなく、家にいても危険なので前の長寿園へ避難。黒い雨も一時降る。私は頭、末子は足のかすり傷。長女は助け出してもらって宇品へ避難後、川伝いで夕方帰宅。四人の手がそろったので二女を担架で工兵山上の軍医の診察を受けたが薬品なくそのまま帰宅。残念（山で近所の学生がいた。家の人へ知らず）。翌々日末子を負って、待ちきれずリヤカーで戸坂小学校の救護所へ連れ行く。ここでは兵隊さんだけでも200余人、ごろごろと足の踏場なくろくろく見てもらえず、軒下土間で頭巾をかけて夜をあかす。

二日後、おくの小田小学校の救護所へ転所した。食べ物は塩のないおむすびだけ。それでもありがたく腸が癒えたので20余日して全壊証明の我が家へ帰りホッと嬉し。

主人と長男はついに帰ってこない。親類の人が主人のそれらしいお骨をもらって来て下さっていた。長男のは長女がお骨を。一人で淋しく逝った、すまない、あれやこれやで断腸の思いがする。

早速午後、気にかかっていたお葬式の件。長女は二人のお骨を抱き、私は末子をおんぶして、月の光に照らされながら、てくてくと主人の生家、70歳の母親が待っている今の私の現住所高田郡へ、夜を通して夜中に着いて、葬式をしてもらって、二女が待っている広島へ帰る。

二女は養生も行きとどかず、10月29日（祭の日）に医者留守の時永遠の旅路につく。長寿園で野辺の送りをすましたが一人残して家へ帰る気もつらく、一人長いこと泣く。（三人のお骨がいただけたことは不幸中の幸いと感謝している）

- ・夫には死目にも会わず、看病、遺言もなく突然逝った。学校の疎開先の学童のこと、家族のこと等々心配して、気の毒ですまない。
- ・長男。救護所で8月7日（家の者も親類の者も誰も来てくれない）と、一人淋しく逝く。食べ物も不足の時で可哀想。末子百日咳にかかる。早朝三滝の観音様へ

念仏祈願50日間。

・二女。長い間の闘病生活。何一つ不平もらさずがまん強く。かわいそう。

(死にたくないから防空壕へは夜中でも避難する)と言っていたのに。

・長女は私の代りに1人で心身過労等で、白血球の不足。夏には毎年不健康。苦しむ。

・死者へも申訳ないが残った者も可哀想。精神的・身体的・経済的(貯金不明)にも苦しむ。今は感謝の生活。

遺族(当時) 学童疎開

長女	三女	二男	四女	私・妻	母親	
21歳	小5年	小1年	1歳	41歳	70歳	合掌

被爆後荷生活。70歳の姑の住む高田郡八千代町下根(現住地)へ転居。(子供の教育上涙)

なれぬ百姓生活には子供もつらかった。隣家の姉、6日に死亡。

[広島 直爆2.0km 女 42歳]

(34-3415)

○警戒警報が解除になったので安心して畑へ出かけて行く途中に被爆死した母のことが心残り。

○私は家の中で被爆し、気づいたときは真暗で失明したかと思ったが、そのまま気を失った。気がついたら明るくなっていたので、子供をさがしにすぐ外に出た。

○小学校3年生くらいの男の子が死んだ赤ちゃんを抱いて泣いていたので、一緒に逃げようと誘ったけど、お母ちゃんを待つと言って立ちつくしていたのを後髪ひかれる思いで逃げたことを、今も思い出すと涙が出ます。死んだ赤んぼうはきつと弟か妹だったのでしょ。

[広島 直爆1.5km 女 47歳]

(27-0245)

川の水は真黒だった。やけどした人の顔は大きくふくれあがり、川のガンギに水を求めて折り重なって死んでいる人、水槽の中に多くの人々が顔を突っ込んで死んでいた。電車の中にはローザイクのようにツルリと皮のむけた全裸の人がツリ皮を持ったまま立っている。

アッあなたも生きてて、私も生きてて、あっあなたもと対面し喜びあったのもツカの間、四、五日たって死の報告をうけた。

一ヵ月位経ってからも抜毛し、血が「しみ」出し、高度の熱が続き、40℃以上ずうっとさがらない、気「意識」は確かなのに苦しみながら、薬も手当のほどこしようにもなく死んでいった。輸血も駄目だということわられた。

そして歳月が経ったある時「肺ガン」を宣告され、普通のガンと異なり石のようなガンだった。そして死亡。

家の下敷からやっと逃げ出る時、男の子が、オバサン、僕はお母さんに助けに来てくれるよう頼まれたが、出てみてそれどころではなかった。あの子のお母さん！

[広島 直爆1.5km 女 年齢不明]  
(33-0162)

## (2) 2. 0～3. 0Km (直爆)

### a) 男

#### ① 9歳以下 (被爆時)

学校の渡廊下で始業前に遊んでいる時に被爆した。

爆風で失神、気がついたのは早かったと思われ、周りには友達が倒れたままの状態であったが、近くに火災が迫っており、そのまま自分が逃げることにせいっぱいで人を助けることなど考える余裕がなかったが、あの人達は全員逃げてくれたか、今でも思うことがある。

〔広島 直爆3.0km 男 8歳〕  
(18-0019)

信じられない死骸の山。仲良くしていた友人の死。廃虚と化した街並み。何があったのか恐ろしい空白の時間等々。心の傷跡は今も続いています。

原爆投下が私の人生を変えたのは間違いありません。

〔広島 直爆3.0km 男 8歳〕  
(35-0214)

## ② 10歳代（被爆時）

戦争は地球を死の街にするもの。

戦争は地球から人類をなくすもの。

子供心に戦争のない国へ行きたいと思った。

〔広島 直爆3.0km 男 12歳〕  
(27-0702)

被爆当日の午後、庚午橋方面から、4、5歳頃の丸ハダカの子供が泣きわめきながら逃げてきた。何か腹のあたりにブラブラぶらさがっているの、よく見ると、それは腹からはみ出した茶色の腸だった。痛いだろう、可哀そうにと思ったがどう

することもできない。ただ、病院の方向を指さしてやっただけだった。あの児、その後どうなったろうかと、今も時々思い浮べる。

〔広島 直爆3.0km 男 15歳〕

(28-0036)

1. 南観音町の工場から牛田の自宅に帰りつくまで、黒こげの死体、やけどで皮膚のめくれた人、血のりをべっとりつけたけが人など、また、川辺に死んでいる人などを見ながら、自宅にたどりついた。
1. 自分が健康で歩いているものだから、医者のところへ連れて行ってくれと頼んだ人がいたが、あの破壊の中で気が動転していたし、医者がどこにいるかわかったものではなかったし、介抱をしてもせず、見捨てて去って行ったことが今もって心残りとなっている。
1. わが家へ向かう途中、「おかあさーん」という若い女の声聞きながらも今はそれがどういう状態だったのか、家の下敷となって助けを求めているのか、けがで倒れて動けないでいたのか、そういう叫びを聞きながらも通り過ぎて行ったことを記憶しているが、当時中学4年生であったが、早く家に帰りたい焦りで通り過ぎて行ったように思う。

〔広島 直爆3.0km 男 16歳〕

(22-0322)

前日夜に何回も空襲で夜ねむれないので、朝より全員兵舎で床について休んでいたのですが、朝になっておそろしい音で兵舎が横にかたむくようになり、天井板が落ちて頭にあたり、兵舎の前、後に防空壕がいっぱいになり、中に入っている兵隊達は頭、顔、手、耳等がやけただれてくるしむ様子が頭にのこる。

また、空は暗くなり、灰がちりみたいのが降って来た。木の葉や草は全部枯れてしまった。そのちりみたいのを、元気のよい人達は天上空を見ながら口を開いて上ばかり見上げるので口の中に入るの、その時は何にも知らない、何の爆弾が知らないのです。きっと恐ろしい灰とっております。あのちりが死の灰でしょう。

市内の人達が、私達は市内死体運搬するのに働かされた時は、市内の人達は何日も食べないでいるので、兵隊さん水ちょうだいと言われて何人からも水筒を取られて水をあたえると、すぐげんきがなくなり死んで行くのが頭からはなれない。

また、死体を運ぶ時は手、足が水ぶくれになって水がたれている死体を、手、足をとってトラックに積む時も本当に気持が悪く感じました。その時はむがむちゅうでした。

また、爆弾がおちた時より、兵隊達の上等兵以上は仕事は全くせず、みんなで顔色が悪くなって家に帰るまで、私達兵隊達がごはん、洗濯等何でもやらされた。

体のやけた4班長、宍戸班長がやけどで苦しんで家に帰るまで付添ったが、とても苦しがつたのが目に写ります。なんでも家に帰った後死亡したと聞いております。書けばまだまだありますがこれ位で。

比治山に登った時は、市民の方々は焼けただれた体を横にして、おなかへって食事もなく、それに水ぶくれただれて、やけどの時と同じような苦しんで死んでいったと思います。

ただただ光線のねつで焼けただれた方々の死にかたは、本当に苦しい思いで死んでいったと思います。

二度とあんな爆弾を使うことはゆるせません。

[広島 直爆3.0km 男 19歳]

(02-0031)

忘れられないあの日から40年の星霜が移り去りました。

当時私は陸軍兵器学校特別幹部候補生として、広島市江波町にある(前県立広島商業学校)陸軍兵器学校広島分教所において教育を受けている時に被爆しました。

被爆直後、命令により負傷者の救護活動に入りましたが、一瞬のうちに地獄と化した現状を見せつけられ、軍人ではあるが核戦争の恐ろしさを痛感すると共に、悲

しみと怒りが激しく突きあげて来たことが今でも心の奥から消えません。

1. 全身火傷で男女の区別がつかないこと。
2. 倒壊した建物の中から手、足を動かし助けをもとめているも、人手だけでは何もしてやれなかったこと。
3. 水を水をくれと言われても、与えることが出来なかったこと。

〔広島 直爆3.0km 男 19歳〕  
(05-0022)

現在は忘れてしまいたい思い出ではありますが。

道路の端に累々とうじの湧いた死体の並ぶ有様や、一山二百名位の黒こげの死体の山が2つも3つも広場に積み上げられていたのが、今も目に浮かんでならない。

〔広島 直爆3.0km 男 19歳〕  
(06-0013)

戦時のこととは言い、一般国民の死と、その後の処理状況。

二カ月余りの救援活動で、食糧として被爆で死んだ牛馬の肉でしのいだ。わずかな米食は一般市民へと、毎日看護に明け暮れた。病む人、死んで行く人。トラックに山に積み上げ焼け残りの木材の上で焼き捨てられた。もちろん身元不明者であろう。人道的に人の最後がこのようなことで良いのか、戦争だからで済まされて良いのか。我が身も軍医から半年しか生きれないだろうと言われた時、職を探す志もなく、毎日暗い生活であった。戦友が死がうらやむこともしばしば。

〔広島 直爆3.0km 男 19歳〕  
(12-0025)

被爆直後、市の中心部から避難してくる人々が両腕を前に捧げ、近くに来て、重度の火傷のため皮膚がすっかりむけて垂れ下がっていることに気づいたが、地獄の幽霊としか思えなかった。家の前まで避難してきた兵士は、翌朝体がタイコのようにふくらんで死亡していた。

隣町に住んでいた次兄の家族のうち、甥（当時7歳）が顔面の火傷と家屋の倒壊による全身打撲で、避難先の親戚宅で8月10日に亡くなった。母や姉につき添って数回訪れたが、その途中で見たこと。－

屍体の鼻や耳の穴から丸々と肥った蛆虫が出入りする様は、とても人間の死に方とは言えない。川の中を流されていくおびただしい死体の群れ。また着衣の特徴などを記した紙片を付して瓦の上に置かれた遺骨の列。等々－

甥は寝床の上で苦しんで転々反側するが、手当の施しようがない、うわごとに「Bの奴（B29のこと）」と叫んでいた。嫂も「つらいだろうね」と言いながらかわらで団扇の風を送るだけ。遺骸を収めた小さなひつぎを、嫂の弟と二人で大八車にのせて近くの丘に運び、穴を掘り薪を組んでダビに付した。まわりに同じ火煙が何十となく立ち昇っているのを見たときは、暗たんとした気持ちにおそわれた。

近所の公園で、逃れてきて力尽きて亡くなられた人たちの遺体を、数限りなくダビに付して埋葬したが、その屍臭は今でもこそ忘れたが、戦後も相当永い間ふと記憶によみがえることが続いた。

〔広島 直爆3.0km 男 19歳〕  
(13-06-016)

終戦復員後一緒に復員した友が一様に突然の死、それも脱毛、斑点、吐血して死体となっているのを目のあたり見て恐ろしかった。（22～29迄に5名）

焼跡の状況等も忘れることの出来ない悪夢の如く思い出される。

自分の病状が亡くなった友と同じようになって明日にも死が自分におそいかかる恐怖に、すいみん薬をのみすぎ、死ねず、寒中に入水、夜半より翌朝まで海上をただよう。又死にそこなう。が、そのまま自分の過去を失う。24年後自分が別人であることが判明。

当事者以外に判らぬ苦しみを持つ人々、被爆者がいかに多いことか。現在この会の人達と話し合ってみて、二度とこんな我々のような人間を作ってほしくない願いで一ぱいです。

[広島 直爆3.0km 男 19歳]  
(33-0004)

### ③ 20歳代(被爆時)

- ア) 1. 橋のたもとで母親が母乳を0歳児の子供にのませていたが、よくよくみると母親は死んだばかりの状態。
2. 橋のところにやけどをした民間人が「兵隊さん、苦しいからこの橋から投げて下さい」と声をかけられたこと。
3. 死体をまたぎながら市内を歩くと、腸がはみ出しているものや、軍人
- イ) アメリカに対する敵愾心が生じた。はやく特攻隊員に参加したい気持になった。
- ウ) 母親をうしなった乳飲子は、その後まもなく死んだものと思う。私の心のこりになっている最大のものである。

[広島 直爆3.0km 男 20歳]  
(02-0013)

非戦闘員である老人や子供達を一瞬にして焼きつくしたあの悲惨な熱い日のことが、眼に焼きついて忘れることが出来ない。

それに異臭を発するやけどに苦しんでいる人を、助けることも出来なかったことが心に残る。

[広島 直爆3.0km 男 21歳]  
(01-0007)

総合体練場に中隊の救護所を作り被爆者を収容し手当をしたが、薬品もなくただ白い軟膏を塗るだけであった。

顔、手足をガラスの破片で傷つき、髪は灰色に焼かれた若い女の人に、水をくれと追いかけられときは、本当にこの世の人とは思われなかった。

また、幼い6、7歳位の男の兄弟と思われる二人が、手をつないで助けてと歩いて来たのを見たら、パンツ1枚で、身体中の皮膚が焼かれてボロ切れのように下がっているを見たことは、いまでも忘れることのできないことであり、原爆の恐ろしさをまざまざと見た思いであった。

〔広島 直爆3.0km 男 21歳〕  
(05-0025)

爆風で道路まで吹き飛んで、焼け跡が30cm程高くなっている所に、子供が半焼けのままになっており、家族がこの辺に子供がおったはずだとさがしていたので「ここにおりますよ」とおしえてあげると、はしりよってきて子供をだきおこすと、おなかのところがわずかなやけのこりのカスリの着物の柄で、子供を確認されて涙された親の様子は忘れられません。

学徒動員で市内の住宅のこわしに参加している子供の生死をさがしていて、亡くなった子供が一ぱいあるのを見た親が、「我が子だけ生きていることを望むことは勝手がよすぎる」とつぶやいた言葉は忘れられません。

〔広島 直爆3.0km 男 21歳〕  
(22-0019)

昭和20年12月1日〔ママ〕より野戦船舶本廠暁第6140部隊第3中隊立花小隊(宇品港内金輪島)海運資材の現地部隊への補給の勤務についていたが、資材倉庫や置き場所が至る所にあるため、その日その日により勤務場所が変っていた。

8月15日の午後より金輪島の資材倉庫の一部片付け、負傷者の収容にあたり、口の話せる人には何がなんでも住所氏名を聞き、荷札に書入れ頭髪の焼残った部分に荷札を付けてたが、口の話せない負傷者やすでに死亡している者は無名者となり、死体置場に山と積まれて行く、無名の死体をどう処分したのか解らない。

負傷者男女をとわず、とくに男子においては、着る物は着ていない。ただただ兵隊さん水を飲ましてくれ、さかんに言われても、隊長より飲ませてはいけないと言われているので飲ませず ”水をくれ、兵隊水をくれ”

負傷者中には母親は火傷を負って口を開けないけれど無傷乳児をかかえて収容された母親もいたが、あまりかわいそうなので女子学徒にあずけ、カンパンを粉にし砂糖を入れ飲ませるようにした。母親死体置場へ。

私たち小隊の一部が市内衛兵に勤務するように命令を受け、先にも書きましたけれども、元安川上流己斐駅に通ずる橋の左岸の畑の中に天幕をはり、15日夕方まで勤務につく。右岸の市内には牛の屠殺場がたくさんあり、人骨なのか牛の骨なのか解らないありさまであり、毎日朝になると己斐の方より牛の死体を車で運んで来てカーボーイが待っていて解体して元安川に流していた。夕方には無数のすみれ色煙至る所である。

いまだに耳に残る兵隊さん水をくれ〔の〕叫び声、死体置場死体（無名者）をどう処分したのか、15日以降元安川を高速艇で上流に向かうと、死体が流れて来てもどうする事が出来なかった。残念です。

〔広島 直爆3.0km 男 21歳〕  
(22-0381)

○惨酷の極限と思った。

○このような惨酷なことをするアメリカ（連合国）を鬼畜と思った。

○自分が助かっていることを不思議に思い、命の尊いことを知った。

○再び敵、味方を問わず、繰返してはよくないと思うようになった。

○目の前で苦しみ、死んで行った人に、何もしてやれなかったことをすまなく思っ  
て、今でも、いや死ぬまで苦しむと思っている。

〔広島 直爆3.0km 男 22歳〕  
(12-0038)

- 沢山の人が市中から私達のいた己斐国民学校の傾いた校舎や校庭に流れこんで、そこで死んでいった。この状況を目前に見て”きのどく”とか”かわいそう”とかいう気持は抹殺されてしまって、軍の規律の中で自分のできることは何かということを探すことであった。
- 中に暁部隊の兵が50人位おり、水をのましてくれと要求した。当時、水をのまずと死ぬから飲ましてはならぬと命令されていたので、私はそれらの兵を叱った。そして彼等は全部死んだ。どうせ死ぬなら水をのましてやればよかったと思う。
- 校庭に暁部隊の生存者の小隊がきて壕をほり、死者を1日千人位焼いた。死者が火の中で動いた。私は生きていたのではないかと思った。子供は親がさがしにくるからとて焼かずに保留されたが、夏のあつさの中で腐敗した。今もあの校庭の下のお骨が気になる。
- 国民学校の中は阿鼻叫喚にみちていた。特別、女学生の「先生」と呼ぶ声が耳に残った。除隊後一年間この声が耳に聞こえ、たまらず、毎日お経を読んでこのせめ苦からまぬかれた。
- 黒い雨にあたった女の子のつるつるあたまが今も忘れられない。

〔広島 直爆3.0km 男 23歳〕  
(02-0041)

爆心地付近の死体処理、救援を行ったが、まさにこの世の生地獄であった。特に市役所付近で防空壕のなかで、大きいご遺体と小さなご遺体がむらがってなくなっており、先生と生徒かそれぞれ先生をとりかこむようにしてなくなっていた。苦しまぎれに先生を中心に防空壕に逃げてそのままなくなると、その最後を思うといまだに脳裏から離れることの出来ない状況であった。

また、水を求めて助けを求める人に、水をのますとそのまま死ぬということで、のませてあげなかったことも心残りである。

原爆投下の決定をしたことは、人類に対する犯罪と思う。

〔広島 直爆3.0km 男 24歳〕

(37-0060)

被爆、火災等とやけどをして道路に横たわり苦しんでいる有様を目の前に見ながら、何一つ援助出来ず死亡して行く多くの人、本当に気の毒であった。

また、水をほしがる患者の多くに何もしてあげられず、目もみえない被爆者が、兵隊さん兵隊さんと呼ばれる中を、任務で通り抜けなくてはならない苦しさは、今でも思い忘れる事は出来ない。

〔広島 直爆3.0km 男 25歳〕

(22-0096)

当時私は「暁部隊」の軍人でした。比治山というところに本部があり、そこへ行く途中の被爆でした。

途中、倒かい家屋の下敷になり、外出していた家族が帰って来て救助しているが、一人ではどうにもならず、私も他の二人の戦友と共に救助に参加しました。一人は救出したが、後二人いるというので救出を続行中、憲兵が来て早く行け、任務が大切だと言われ、後に心を残しながら立去らざるを得なかった。その時の家族の方の顔は今でも忘れることは出来ません。残った二人の方は無事救出されたであろうか、今でも気になって仕方ありません。

〔広島 直爆3.0km 男 25歳〕

(37-0045)

熱いと叫びつつ川へ入って行った女性、また子供たちがうつぶせになって死んでいるのを見、盛り上がった顔面や、多くの人々の死体を貨車で運んだ時、また土手に壕を掘って中に入れて、人名の分からぬままに石油をかけて焼いた時は、今前に現実として思い出されて来るが、これ以上は書けない。

〔広島 直爆3.0km 男 26歳〕

(24-0020)

私は昭和20年8月7日投下翌日、地区司令官（船舶司令官）の下命にて広島市市役所内連絡所に出向、終戦翌日まで勤務しました。

市役所周辺の死体の多いことまだ目を開いたまま、また途中道端に座って動けない人々の傷の化膿していること等、市役所周辺でいろいろ見聞しましたが、今でも原爆に対する非人道的な攻撃に対し激昂して書けません。

投下後船舶指令部に集まった患者の中に、推定12～13歳位の人が2名走って来て、兵隊さん苦しいと言いながら、内臓を吐いて一緒に死んで行った人等に、水もやれなかったこと、母に抱かれた幼児が同じく内臓を口より半分出しぐったりとなり、母親が医者になんとかしてと言えども何んとも出来なかった事。かつ、その夜の市内より草津方面に向けての負傷者の大行進、おそらくあの行進の内どれだけの人が助かったことか。

まだありますが、涙が出て書けません。

〔広島 直爆3.0km 男 26歳〕

(46-0040)

毎日親せきの安否（避難先）を探して東練兵場に入ったとき、多くの人が倒れて背のやけどでうつ伏せになってうめいていた人には、素手の私には何もできず「救

護隊が来るから頑張らなさい」としか言いようがなかったが、助からないかも知れないのに「ごめんなさい」と心で詫びて通った。また全身の皮ふが垂れ下がり、顔も目と口だけ出して包帯した人が、水を下さいと何度も叫んでおり、私の目には助かる見込皆無のような軍人さんに、通りすがりの人と話して水を飲ませてあげたとき大変喜んでいられたが、一目散に走ってほかの場所へ行った。

また北端の寺の境内へ探しに行ったとき、幾人か息絶えている中に、体が大きな風船のように丸くなって、何日目になるのか、人が来れば足音でも分るのか、手だけが少し動き驚いたけども、何もして上げられなかった。達磨さんから手足が出て動いているようなあの姿は、今でも脳裏に焼付いています。

〔広島 直爆3.0km 男 27歳〕

(34-0257)

広島市営グラウンド内で幹部候補生教育隊に所属し、高射砲の陣地を設けて勤務してました。あの日8時に起床。8:15分に点呼を受けていたら、突然前方左斜めに(ピカリ)と光り(キノコ)雲が見えたら、強烈の熱さで(ジリー)と熱いと思ったら、とたんに顔と両手先が大やけどとなり、後方に20m位の所にとばされ、やけどの部位が水滴が流れ、皮膚が一片取れ、つるんぺんとなり、ひりひりしました。戦友の正体が全然見えなく、でも意識ははっきりして、今のは何だろうか、ひどいめにあったなとかすれ声で話し合った。あの時の状況は死ぬまで忘れない。頭にこびりついてます。隣接の部隊が救援活動にきて、真白い〇〇〇(不明)粉をつけてくれたのも覚えています。兵舎はとばされ、藁の上に一列に並び水が飲みたくて、つばが全然なくなり、声が出なくなりました。応援部隊も水をのむと死ぬぞと大声でさけんでいました。

名古屋、大阪方面より肉親がいはいを持って、本人が生きていたのを確認して大喜びでいた戦友もいました。私は9月5日復員したら、顔がはれて真黒に変形して驚き、他人の人ではないかと人違いをしていました。生きていたとは思ってました。復員の時広島駅前から一望千里で中国のようでした。あの思いは今でも時折ゆめを見ます。

[広島 直爆3.0km 男 28歳]  
(12-0001)

○最初出会った人たち。

「兵隊さん助けてー」とタレさがった皮膚を両腕からダラリとさげ、茫然としている人、血だらけの男女の区別もつかない人、死んだ子供を抱いて笑っている若い狂女等(30名~40名)水はほしがらなかった。

医務室の方向を知らせるだけだった。その後倒れた兵舎内より兵隊の救助をするが、さきほどの人たちのことが気になり、医務室に見に行った。内部もたくさんの人たちで、入りきれない人が入口に倒れていた。

○道路上の学童(4年生~5年生)と思われる。

大勢の人が倒れている。特に集団で同じ方向に倒れている学童の姿を見て思わず近づいた、「水ー水……」と言った。「よーし水をもってくるから元気をだせよ」と言った時、通りかかった将校が「このバカ者、兵隊は市民をかまうな、兵隊をさがせ」と言った。私はきき違いかと思った。

○荷車の上に荒ムシロを敷いて苦しんでいた産婦。

比治山の防空壕で「材料廠の兵隊はいないか」大声を出す。返事なし。壕内は暗く、大勢の人が苦しんでいた。帰りにふと見ると、荷車の上で若い産婦が付き添いの老婆に声をかけている。ヘソの緒がついたままの姿である。あまりの光景に涙……涙であった。大勢の人に見せたくないと思って毛布をかけてやった。

○海軍将校ご夫妻の我が子探しに立会い。

6日か7日、屍衛兵勤務を命じられる(30時間ぐらい)夕方海軍の将校ご夫妻が子供を探しに来られたので案内する(命令がなければ歩哨線内は立入禁止)。奥さんは死んでいる子供を一人一人だいて、我が子の名前をよんでおられた。

○部隊が爆撃されたものと考えていたので、市民の人たちの姿に驚いた。苦しんでいる人たちをほんとうになにもしてやれなかったのが残念。荷車上の産婦とヘソの緒のついた子供の姿が今でも目にうかぶ、思っただけで涙が出る(この世に生まれ、何分生きられたか考える時)ただ毛布をかけたことだけが気休めとなっている。

海軍将校ご夫妻は子供を見つけられたか?現在も生きておられるか、遺族の方

は広島に生活されているかを知りたい。

○野戦の体験ある（敵上陸作戦参加2回）私は、死人に対して恐ろしいと思ったことはない。野戦においても死人を見て来たが、原爆死にくらべれば、同じ死でもあのむごさは違うと思う。

〔広島 直爆3.0km 男 28歳〕

(14-0602)

私は兵隊でしたので、家族的なことはないと思います。

1. 昭和20.8.6私は広島市内曙第16710部隊に所属する兵隊でした。原爆投下日は、各中隊は毎晩のような空襲警報のため、兵隊が夜がねむれなかったので、6日朝食後、就寝許可が出て兵隊が寝ていた。私は友人と二人で洗濯をして、兵舎の前にある物干場で洗濯物を干していた時で、原爆が投下された物凄い音と共にあたりは真暗になった。煙かと思って倉庫の軒下にふせをして煙のおちつくのを待った。4、5分したら明るくなったのであたりを見たら、兵舎はもちろん電柱、立木すべての建物が破壊された。私は幸い兵舎のかげにいたので難をのがれた。
1. 私の班は幸いに皆たいした被害者もなかったので、班長の指示に従って救護活動に従事した。班長の集合の命令で皆集まって見ると、兵舎の中に逃げおくれた一人の兵隊が、落下した太い木に足をはさまれて足が板のようにつぶれていた。本人は足を切ってもいいから早く助けてとさけぶ声、私たちは太い木を切る道具もなくどうすることも出来ないので、営繕係の兵隊を呼んで木を切断して助けてやった。今でもあのさけび声が思い出される。
1. その後部隊中にはたくさんの被爆者がいて、避難所比治山に避難させた。被爆死した兵隊及び町民は、トラック自動車に二人でなげ上げられた。一人は頭を一人は足を持って、二人で車になげ上げられる。死者を積んだ車を見送る気持は何とも見苦しかった。その時は気が張っていたので、今ではとても出来たことではないと思うと思出したくない。
1. 比治山の避難所に行くと、被爆した兵隊・町民が足のふみ場もない位避難している。爆風に当たった皮膚は顔、手、足がふくれ上がり、腐って流れ落ち、口はは

しも通らない小さくふくれ、食事も出来なくそのまま死んでいく。水をくれ、早く助けてくれと泣きさけぶ声。私は水をやりたくても、水をやれば死ぬと、水をやるのは禁じられていた。私は運がよかったので、被爆者達を見て本当に可哀そうで、今では考えたくない。

〔広島 直爆3.0km 男 29歳〕

(02-0024)

焼けただれた体、黒こげの体、けがをしたり、むごい姿の被害は地獄さながら、すでに語られた通りだが、老人、女、子供まで犠牲になるとは言語道断。

うじ虫が生きている体をむしばんでいたことも忘れられない。医薬品や、早期診断が発達していたり、施設があれば、もっと多くの人々が助かったと思う。

原爆に対する知識がないために、入市したことで被害が多くなったことも忘れてはいけない。

助けを求められても、助けてやる方法と手段がなく、どうにもならなかった。水だっ入れ物もないし、水を与えるとすぐ死ぬると聞いていて、そのとおりにしたいと思ったことも忘れられない。

コンクリートの橋の欄干が、両方とも倒れていた広島駅付近。火の気のないはずの吊橋のワイヤーが燃えていたり、くさぶきの屋根が火を吹いたり、山火事が起きたり、直後のこれらの火事さえ、不思議に思った現象、稲の葉、野草、野菜まで熱線を受けたものはちぢれていた。神田橋付近では、ガソリン・石油・または重油が流れこんだらしいものに火が入ったらしく、川が燃えていた。

茸雲の初期は、爆発後3分か5分位後には綿菓子のような形で高さ100m巾2～30mほどに（だろうとしか言えないが）○（不明）白さで立ち昇り始め、次第に茶色も混じり、天空に広がっていった。下からは茸の形には見えず、雷雲のようにむくむくと渦を巻くようにして空で広がる。色は白、茶、黒と混じり、後刻雷鳴と共に、黒い雨を降らす。牛田辺りは20分位大粒で通り雨のように降った。着衣に黒いしみが出来る。

〔広島 直爆3.0km 男 29歳〕

(13-11-038)

当時は小倉市に長期出張中で、広島の人に業務連絡で帰る途中、朝食をするため牛田町の母の家に立寄り、被爆後附近から火の手があがり、これを婦人、老人を集め（7、8人）消火活動をして、正午頃より約5、6kmの会社に歩いて行く途中、焼けただれた人々（主に婦人、子供）に足にすがるように助けを求められたが、自分も傷を受けており、何もしてあげることが出来なく残念でした。（逢った人々は約200人～300人）

また、当時の爆死者の遺体が道路、川、その他に永く放置されておりましたが、その当時はさほどにも思われませんでした。夜遅く人通り無い時等は、未だに当時の様子が思いだされ、死んだ人、当時の姿が目に見えて来ます。

〔広島 直爆3.0km 男 29歳〕

（18-0018）

#### ④ 30歳代（被爆時）

1. 爆発1分前には、人間の姿として、戦争中ではあるが、戦争に貢献していた。それがあの原爆により、姿の消えた人、首のもぎり取られた人、腕のもぎり取られた人。全身の着物ははぎとられ、全身の皮膚が破れむきはがされ、皮膚をぼろ布のように全身に下げている人、建物の下敷きになりそのまま焼き殺された人、川の中には目の玉が飛び出した首、片足、片腕、犬も猫も、自転車もゴミもかきまぜたような、地獄の中の地獄としかいいようがない。
2. あの残酷さは、話としていい表わせるものではない。私は比治山の上に砲兵団指令部におり、公用で広島高校の近くの馬車屋に馬車をお願いにいて、馬車屋の店先で被爆した。馬車屋は崩壊し家の下敷きになった。頭から血が流れて、軍服は血みどろになり、指から筋が10センチもたれ下がり、その手をかかえながら指令部にもどった。その途中、街の中は地獄の中の地獄だった。私は街の中であまりにももの出来事に涙をとめどなくして泣いた。
3. 兵隊さん水を、兵隊さん水をくれという断末魔の声、熱線で顔を焼かれ腫れあがって目がみえぬ人、頭が割れ2センチ位の傷口で長さ10センチもあり、血を

頭からかぶったような人、産気がきて荷車の上で苦しんでいる人たちに、何もや  
ってやれなかったことを一生悔やみ続けることでしょう。

〔広島 直爆3.0km 男 31歳〕

(13-01-001)

あの日10時過ぎだと思う。時計はくだけ正確な時間はわかりません。

参謀長の命令で、市街視察と参謀長の家族の様子を見に、兵团より御幸橋を渡り  
燃え広がる市内に向かった。道路に焼けただれ、ふくれて横たわる姿は人間とは思  
えない。私より火に近いところに人がよろよろ歩いている。おーい、と呼ぶとこち  
らへ向いた。衣類は焼け切れ、わかめを身につけているようで、全身焼けただれ仁  
王様ようだ。ふと向きを変え、燃え盛る家の中に、熱さをかわす態度もなく入っ  
てしまった。

電車運転手だろう、前の窓から半身のり出して真黒、消炭のようになっていた。  
横に行くと、満員だったのででしょう、一瞬に膨張し倒れる隙間がなく、立ったまま  
坐ったまま身体を斜めにした、子供の作った粘土細工を真黒にしたようだ。また、  
先へ行くと、外から人の気配もない電車で、人がいないのかと中を見ると、何人か  
いるのだがかぞえることができません。車内は手足がとび散り、天井、窓はどすぐ  
ろく一瞬にとび散り、肉は焼けつき骨だけ床に落ちているのもあり、人間がバラバ  
ラになっているに、今まで熱風で体内の水分がなくなるのか、苦しさとのどのかわ  
きで倒れそうであったのが、恐怖にふるえが止まらない。これらの状態があの一発  
の爆音で起きたとは信じられない。

また歩き、街角を曲がりしばらく行くと橋があった。橋の上は人でいっぱいだ。  
重なり合ってうめき声があちこちです。重傷者ばかりだ。よく見ると死んでいる  
人の方がはるかに多いようだ。死んでいる人の間から手や足がわずかに動き、水、  
水と言う、水はなくどうすることも出来ない。この人たちはどうして橋まで来られ  
たのか、助かりたい一心で最後の命をふりしぼってたどりつき、死んでいったので  
しょう。私も意識がうすれ倒れ込んでしまった。

何年かたって、この橋が相生橋で、建物の崩れる音で気がついた建物はドームだ  
った。

〔広島 直爆3.0km 男 31歳〕  
(14-2026)

幼年学校の校庭（練兵場）に百人以上と思われる人が、薄い日除けの下で苦しみながらころんでいた。皆んな顔や手や腕等出ている所は全部皮ふがはがれ、目もつぶれておそらく見えない状態だった。衣服もぼろぼろ、その中の一人が突然、班長さん助けて下さい、水が欲しい水を下さいとかすかな声でさげんだ。何とかしてあげたいと思って水を探したが、どこにも水の出る所がなかった。後から持ってきてあげるからと言ってその場を去った（私は部下の戦友を探して歩く途中だったから）。その後1時間位で私の探していた戦友を見付ける事が出来てとても嬉しかったけれど、水が欲しいと言った人（だれだかわからない）達は、水を求めて苦しみながら死に至った事と思うと、申訳ない気持ちでいっぱいです。

直接被爆でない戦友（家族が広島市内に住んでいた）が肉親を探して二、三日、市内を歩きまわった。四日後位で身体の具合が悪くなって収容所（学校の校舎だった）に入ったが、その後聞いた話では、何日か後に死亡したとのこと。そのことを思うと、自分が今日まで病気がちではあるが生き永らえているのが不思議に思われてならない。

〔広島 直爆3.0km 男 31歳〕  
(35-0135)

眼前において全身を硝子破片創による死者を火葬にした時、顔面はざくろのごとくさかれ、眼球は飛出し、動物の山アラシのごとく全身に突き刺さってた硝子。今思うだけでもぞうーとします。

〔広島 直爆3.0km 男 32歳〕  
(40-0134)

1. 私は直接被爆したため、帰郷後も戦友達が次々と亡くなる度に、次は私の番かと日夜精神的に悩まされました。そのため神経衰弱症になり、ノイローゼが続きました。
2. 後遺症があるために、24年娘が生まれましたが、放射能の影響が現れるのではないかと心配しました。現在も娘に異変が発生したら大変だと、心痛にたえません。

〔広島 直爆3.0km 男 33歳〕  
(07-0050)

今考えると、どうしてあの時それが平気で居れたのか不思議に思う。ひどく傷ついた人、やけど人、死体を見て、最初はさわるのもいやだったが、2日もすると、まるで物のように感じて扱った。

看護係だったので子供を収容したりした。食物にはさして不自由しなかった。

〔広島 直爆3.0km 男 34歳〕  
(22-0327)

## b) 女

### ① 9歳以下(被爆時)

自宅前の家の塀が倒れ、その下で近所の方が亡くなられたが、しばらくの間はわからずに、皆その上を歩いていたこと。

土手で人を、魚を焼くように次から次へと焼いていたことを、子供ながらに悲しい思いで見たことと、その臭いにいやな思いをしたこと。

[広島 直爆3.0km 女 9歳]

(27-0516)

## ② 10歳代(被爆時)

ハイポセンターより3Kと云うのに、眼前で強烈なフラッシュを浴びた感じ。直後、爆風でしょうか、震度8位の感じで立っておれず、傍らの教机の中に入って、気がついたら目が見えず失明と直感。周りを見回しているうちに少しずつ見え始め、無傷は私のみで、周りの友人は全身教室の窓のガラスをあびて、生き地獄の風景。負傷した友人達の手を助け校庭に出ましたが、あの真夏の午前中というのに、七色の入道雲(原子雲)で夕立直前のようなうす暗い風景。どこからともなく髪を逆立てぼろ布をさげたような放心状態の人の波。

夜中近くでも延焼続ける全市の火の色で夕焼けのように明るい反面、息絶えてゆく人々のうめき声……6000度の熱を全身にあびた人達の壮絶な最後の声!!

書き表せません!!

受けた者にしかわかりません。

八月六日の一分間の祈りの中に、毎年私の心の中に訪れる犠牲者の声。安らかに眠って下さい。

[広島 直爆3.0km 女 12歳]

(20-0099)

被爆した当日は己斐の山に避難し、翌日爆心地を通過して自宅へ帰ったが(土手町)余りの悲惨さに気持も動転し、我が家の焼け跡に着いた時は、このままの状態では精神状態がおかしくなるのではと、自分で自分が非常に心配でした。幸い、母が無事でいてくれた姿を見て、やっと気持が落ち着き、安心して火傷の痛さを母にあまえて泣く事ができました。

家に近い比治山の避難先（横穴の防空壕）で、同年位の男の子が精神的に異常をきたしている姿を見て、母を失っていたら自分の姿がこうであったかもと、心から同情した事を、いまだに心の奥深くにおさめています。

〔広島 直爆3.0km 女 13歳〕  
(22-0055)

今でも目に焼きついているのは、紫の閃光と同時に熱い光。それからまっ暗やみ、それが落着いて来るとあちらこちらから火の手が上がって来た。空を見ると、上の方が火のようになったきのこぐもがだんだんと大きくなっていきました。

二葉の里の鉄橋の上では、列車が止まっていました。機関車の方からめらめらと炎につつまれて行きました。

しばらくして下の方から（ここは小高い所の畠で、市内が良く見える所でした）血まみれになった人々が上がって来ました。途中けがをした学生や色々な人に会い、やっとの思いで家に帰ってみると見るかげもなく、屋根はめくれ、かべも落ち、ガラスも家具も形もなくこわれて、何が起こったのか、ただ立ちすくんでしまいました。時がたつにつれ、多くの人が、やけどをした人、けがをした人と火をのがれて来ました。夜になると市内はまっかな空、山の方は山火事で両方からサンドイッチになったようで、皆焼かれてしまうのかと、とても恐ろしく思いました。

事実は体験した者でないと、はかりしることは出来ません。筆舌に尽くし難いものです。

〔広島 直爆3.0km 女 13歳〕  
(34-4105)

1. 小学校にケガをしてはこぼれてきて、毎日つぎつぎ死んでいく人々を、校庭の片すみに10人ぐらいずつかためて、名札をはがし油をかけて焼き、小さなこつ

つばにいれるおてつだいをしましたが、だれに命令されてやったのか記憶にない。  
2. 義兄をさがしに、姉といっしょに市内にはいり、己斐の寺に行き（あとでわかったことですが、その寺にケガをしてはこぼれていたのですが）まくら元をとおりさがしたのに、顔もわからず、兄もきがついていても声がかけられず、そのまま思いをのこし淋しく死んだと思います。

〔広島 直爆3.0km 女 14歳〕  
(13-03-014)

火傷の女子学徒の方が「どうかして下さい」と助けを求めて来られたけれど、私たち（友人と）も家に帰る途中でどうしようもなく、後で名前だけでも聞いておけばよかったと、あの火傷では助からなかったと思い、心に残っております。

広島日赤病院の門から受付までの前庭に、遺体積み重ねられ、遺体の垣が出来ていた中を通して見舞に行ったこと。

母、子が抱き合った遺体。

何かして上げたいと思っても、あの時の様子ではどうしようもなかった。合掌。

〔広島 直爆3.0km 女 14歳〕  
(26-0040)

右も左も死体とやけどの人々の中を逃げる途中、最初はさしのぼして私の足を掴まんばかりに水を欲しがらる人々の様子に、身震いするばかりでしたが（自分が泣き叫びたいほど怖かった）時間が経ち地獄のような中にいると段々馴れて来るもの。そうした人間性が一番怖いと思う。

安全地帯に逃れるために、何もしてあげられなかったこと。またその術がなかったこと。

〔広島 直爆3.0km 女 14歳〕  
(27-0295)

被爆2日後、同居していた叔父夫妻をさがしに、中心地に父と二人で行きました。美しかった川が焼けた死体いっばいで、その人たちがすべて裸体で下流に流れていたこと。その中に馬が同じように浮いていて、その悲惨さとおそろしさは、15歳の私の心の中で忘れられない地獄絵として、心に焼きつきました。

でも、その時の私たち親子、というより街中を歩いている人たちは、ただただ家族の身を案じることで、そのことについての怒りとか、すべての思考力はどこかに押しつぶされてしまい、平常の神経では町の中は歩けなかったと思います。

牛田、神田橋から八丁堀の方へ通り抜ける町角で、道ばたに焼けただれた人がいっばい倒れておられました。かすかな声で「水がほしい」といわれても、父の肩にかかっている水筒の水は、きょう一日の私たち二人の生命の水であり、そんな声をふり切って歩いた思い出もごさいます。

自分が生きるために、他人に対してこのようにあさましい人間になってしまうことを、自分自身で体験したことは、終生、心の責めとなって、今も心苦しく思い出すことが度々です。

〔広島 直爆3.0km 女 15歳〕  
(14-0138)

かげろうの燃える路上に敷物も無く、全身が焼けくずれ横たわって水をくれと手を合せ頼む姿、あげる水も無い、さぞかしノドがかわいた事でしょう。私は15歳でした。兄さんをさがし歩いて10日間、人のくさって行く臭い、手足首とちぎれ

ちぎれに成った人、私は思わず手で目をふさいだ。親は子供、子供は親兄弟を必死で呼ぶ声、1日さがし歩いて、つかれ、床にはいる。でも、色々な出来事、見た事、人を呼ぶ声〔が〕耳に付いて眠れず、そしてあの人達、此の夜、星空の下で苦しんでいると思うと、心は痛み、自分のキズの事は忘れていた。

そして40年、私は色々と病気と戦っております。1日たりとも体が良いと言う日はありません。でもあの時に助けてくれとさげびながら死んで行った人気の毒です。その人達の供養してあげながら、此の病気にまげず頑張ります。

〔広島 直爆3.0km 女 15歳〕  
(27-0383)

#### ○ 体験したこと

動員先の工場では、頭に機械類が落下して血を流している人、鼻がそがれて一生懸命手で押えている人、誰も彼も血だらけでした。

ガラスの破片を敷きつめたような、そして熱いアスファルトの道路を素足で家の方角に一目散にかけ出していました。道端の押しつぶされた民家からは、下敷になって助けを求めて泣き叫ぶ声が耳に入りました。でもどうする事も出来ませんでした。

まるでボロをぶら下げている様な皮膚のめくれた人達にも、何度も出逢いながら、ただがむしゃらに走りつづけ、やっと屋根に大穴があき、建具は無くなり、壁の落ちた我が家にたどりつくまで、泣き声叫び声の他、人の話し声を一言も聞かなかったこと、出会う人が皆無表情で無言だった事を思い出します。

後になって考えると、あれは人の世ではなかった、あの世の地獄を目の当りにしたように思います。だのに何を見ても、何を聞いても何も感じない。神経も摩痺してしまっていたと思います。異常な状態の中では人間は人間でなくなるという事を知りました。本当に怖い事です。

人間らしく生きられる平和を熱望しています。

#### ○ 母のこと

妹の疎開先へ、学校の父兄と共にトラックで出掛けた母を方々探し歩いて、やっと探し当て、父が連れて帰った時の驚き……まるでだるまのように、風船のよ

うに全身がふくれ上がり、目も顔の中に埋まってしまう、開くことも出来ない状態でした。父も周囲の人々も、今日明日の命と思っていたようですが、不思議に母が死んでしまうとはどうしても考えられなくて、父は父の想いで、私は私の想いを込めて、一生懸命母の火傷と戦って……そして76歳の今の母が存在しています。母も身体的な苦しみを乗り越えて、ケロイドも名残を留める位に柔らかく薄くなって来ています。

同じ隣〇（不明）で何人もの方が火傷で命を落されました。一番重症の母だけが残りました。幸運といって済ませてしまえるのでしょうか。

あの時に残された遺族の方達が今どの様な暮し方をなさっているだろうかと思うと、また胸が痛みます。

〔広島 直爆3.0km 女 15歳〕  
(28-0115)

私の家は爆心地より3.0kmの所にあったが、あの瞬間異様な物音にふり向いたら、狭い家の裏庭にオレンジ色の光を見た。次の瞬間に家の壁、障子がくずれ私は下敷になったが、奇蹟的にけがをしなかった。ようやくのことで外に出て見ると、家々のカワラが波のようになり、近い所に爆弾をうけたと感じた。

学徒動員で（広島市立中学）出ている弟が夕方になっても帰ってこなかったので途中まで探しにいったが、火事になっていて行けなかった。市内の中心部から、やけどやけがをした人がぞろぞろ続いて逃げてくるのに出会ったが、ひふがさがってまるでボロボロをさげたような人達が、一様に無表情だったのが、今も記憶にのこっている。

弟はぼうしの形だけ残して右側はやけただれ、ハダシで夜になって帰って来たが、何もくすりがなく、その中やけどの中にうじがわいて痛い痛い泣いていたのを覚えている。食料もなく、家のまわりのレンコン畑からレンコンをわけてもらって、その夏はすごしたが、それが後から思うと放射能のかたまりだったのかも知れない。当時鉄道局にいた姉は、全身湿疹だらけで長い間治らなかった。

〔広島 直爆3.0km 女 17歳〕  
(29-0009)

当時私は女学生で、学徒で広島市己斐駅に勤めておりました。

8月6日は非番で、まだ8時15分は駅で引つぎの事務で出札室におりまして被爆にあいました。己斐上町の方に逃げましたが、雨にあい駅に帰りホームを見ましたら、被爆者がずらりならんで寝かせてありました。1人1人が水を下さい、水を飲まして下さいと出ない声をしぼって、水、水と言っておられるので、私は水をバケツにくんで持ってきて1人1人にのましました。その時1人のお母さんが赤ちゃんをだいてもう死んでおられました。赤ちゃんは何も知らずにただお乳をほしがって泣いている。水をのました人々はぼたぼた死んでしまう。

その内に憲兵が来て、水をのますな、やけどに油をぬってやれと言われましたが、もう水をのましたので皆さん死んでしまいました。果して油だけぬってあげてよかったのか、水をあれほどほしがった方々に水を上げてよかったのか、今思い出して悩んでおります。また、あの時の母親のお乳をほしがった赤ちゃんは現在どうなったのか、あの当時まだ16歳の私には、どうしてよいやらわかりませんでした。

[広島 直爆3.0km 女 17歳]

(35-0185)

○ 崩壊した家の下からようやく外へ出たとき、はじめて見た、何もない、物音一つしない暗黒の世界。

地に根を下ろしたように、目の前に立つ原子雲の柱。

○ 皮膚をはぎとられ、髪は逆立ち、指先を曲げて前に差し出した腕、放心したようなこの世のものとは思われない姿。

○ 人が人でなくなったあの日。

○ だれも助けてあげることができなかった。

[広島 直爆3.0km 女 19歳]

(22-0198)

被爆後30分ぐらい壕の中において、救護活動に駆り出される。平常から救急法など学んでいたけど、あまりの凄まじさに息をのんで立ちつくしてしまった。救護法など何の役にも立たず、次々とトラックで運び込まれてくる人々の口の中に水を流し入れるだけだった。もはや人間という感じではなく、私達も最初のショックが去ったあとは、頭の中が空白になってしまって、怒りも恐怖も悲しみも感じなくなってしまう、機械のように負傷者の間を縫って水を配り、悲鳴をあげている人には気休めのため赤チンを塗ってまわった。

老若男女、息をしているのさえ不思議なような人達が美味しそうに水を飲み、次々と死んでいった。

それからどれだけかの時間が経過して、私の心の中にあの当時の思い出が強烈に甦り、末期に交わした言葉の数々、真黒に焼けた皮膚の色、ボロボロになって身体にくっついた布地の断片、助けを求めて泣いた声、恐怖と絶望で表情を失ってしまった顔、今も私の頭の中でしっかりと位置をしめている。何ともやりきれない思いです。役にも立てなかった自己嫌悪と共に。

[広島 直爆3.0km 女 19歳]  
(17-0116)

### ③ 20歳代(被爆時)

陸軍病院でたくさんの火傷、腸出血の患者の看護、次々死んだのです。医療がなくて白い虫が体全体にわいた事。皮膚がずるずるしてさわれなかった。毎日何人かの人を担架にのせて焼いた。市民の人の看護に出かけた時は、息たえだえになり体全体が焼けただれた母の側に、赤ちゃんが乳を求めて泣いていた。今でもこんな事を思うと胸がいっぱいになる。

川に吹き飛ばされ水の上に浮かんで死んだ人。防空ごうの中でブスブスくすぶりながら焼け死んだ人。広島街は夜になれば真赤な空でした。苦しんで、看護婦さん助けて、水を下さい。何も言えずに死んでいった人。軍医も友達も本院にいたものは形もなく散りました。こんな事書き出したら止まらないのです。次から次、私の目の前でどんな思いで死んでいったのだろうと。

私は結婚していなかったから家族はいなかったけれど、主人や子供さんを目の前で亡くしながらどうする事も出来なかったあの人達の事を思うと、胸がいっぱいになります。

私は一生の内こんな被爆なんて夢にも思わなかった。この世の生地獄を見た。何かを心に残して死んだ人のため、被爆した者でなければわからない体と心の病気。子供や孫達の世代には絶対あってはならない。そのために平和の運動をしなければならない。それが私達に与えられた使命だから。

被爆を知らない人は、私達の事を医療費はいらぬし手当をもらって良い事だと悪口を言う人がいるけれど、医療費はらっても、手当はもらわなくても、心安らかに暮せる方がどんなに幸福かと思う。

〔広島 直爆3.0km 女 21歳〕  
(35-0007)

突然起きた事でその時は呆然としましたが、だんだんあとで腹が立って悲しくなり、思い出すと涙が出ます。

当時私は21歳で女の子を一人持っていました(赤ん坊)。福岡で空襲に会い、丸焼け。広島で原爆。それでも命が助かり不思議な気がします。

当時の原爆を直接受けた人々が次々と目の前で死んで行く様子を目の前で見ましたが、つらくて書けません。が、思い切って書きます。

- ・ まるで黒人の様に皮膚がこげて、眼だけ光っていた中学生位の子供が歩いていた。
- ・ 全身焼けただれて虫の息の母親が、橋のタモトに横になり、そばで4歳位の女の子がポーゼンと坐っていた。
- ・ 河に衣類のない死体がブヨブヨにふくれて流れていた事。
- ・ 防火用水に子供が2～3人折り重なって、水をのむ形で死んでいた事など。

〔広島 直爆3.0km 女 21歳〕  
(40-0182)

1. 毎朝郊外電車で通勤していたと思われるOLが、その日己斐駅で黒のレースのワンピースを着ていて素敵だったのを見た。翌日（東部仁保町に避難していた）がれきの町を紙屋町交差点まで戻った時、黒レースのボロボロをわずかに体のアチコチにへばりつけて、ほっそりとたたずんでいた彼女に出会った。気にはなったがこちら草津町の家にも一人を置いていたので、その方に心配があり見過ごしてしまった。まだ戦時中だったし、上空には偵察機か何か一機旋回していたし、他人のことにまで気配り出来なかったとはいえ、あのあと彼女は怎么样了らうか、郊外から家人が救助に来たかとー
2. 観音町の土手に、並べられたように倒れていた人の中の一人、糊のきいた白いズボンがいやに真白く整然としていたが（顔には麦ワラ帽子がかぶせてあった）上体は裸ただけに、今でも記憶にある。その青年？が私たち（保育所主任と二人連れだった）の足音をききつけて「タノミマス、タノミマス」と言った。だが私たちには何一つしてあげる手だても知らず、ただ先を急ぐだけで素通りした。
3. 同上、土手の左側の焼けのこった電柱か何かの蔭に、うずくまっていた少女？私がかかえていたヤカンの音をききつけ「お水、お水ちょうだい!!」と言う「これ水ではないのよ、トマトが……熟れてない固い青いのが入ってるの」と言う「トマト!!ワタシの大好きなトマト!!」と言う、一個取り出し（多少黄味があったのを）差し出して驚いた。その顔、眼はふさぎ、唇は白くふくれただれて、差し伸べた両手は指が一もちになって白くふやけていた。その両手の間にトマトをのせて、逃げるように先を急いだが、今になって思う、あの固い青いトマトをあの子は、あの白くたかれた口でどうやって食べたのだろうか？せめて汁なりと吸えるように、半分に割ってでも持たせて上げることに気づかなかったのかと後悔している。
4. 比治山国民学校に集められた、原爆のための迷子。収容所には名も年齢も判らない幼児が、軍隊払下げの毛布を床板に敷いた上に並べられ（ボール紙の番号札を首から胸にかけて下げられ、虫の息だった）、その一人は胸部にブドウ同様のものが多数出来ていた（血の固まりだったろうか）。次々息絶え、それを校長や生き残りのその辺の町の世話役がどこかへ運んでいた。埋めたのか、焼いたかは知らない。
5. 住居のあった草津町の国民学校講堂は、ケガ人で溢れ、終戦と同時に国防婦人会会員も看護に出ず、薬も食物もロクにない所を、苦痛のあまり抜け出て、真裸でウチの前の水槽によりかかり、息絶えだえに「ワシはイヨの者だが……」と言

っていた。近所の人々が学校まで連れて行ったが、あの人も大方駄目だったろうと思う。

[広島 直爆3.0km 女 23歳]

(32-0175)

- 近所の学徒動員に出かけていた女子学生さんが爆死せられ、その人を焼くため近くの公園に行くと思死体がゴロゴロ転がっていて、コモをかぶせたのや何もかけてない人、その中に大きな目玉が飛び出し、お腹はお相撲さんのようにふくれ、足も太いのが2本まるで丸太を並べたようにして寝かされていました。聞けば町の薬局の御主人とか、本当はとてもヤせた人でしたのに、爆死するとあんなにも変るものかと、いまだに目にちらついてあの姿が忘れられません。
- つい近くのワラ屋根が、まるで紙に火をつけたように急にポーッと焼け出した事。一生懸命消火につとめたので類焼はまぬがれましたが。
- 縞模様の(白と黒の)洋服を着ていた人が、黒いシマの所だけひどいやけどを受け、難きそうに治療しておられた姿なども忘れられない。

[広島 直爆3.0km 女 27歳]

(34-1533)

被爆して翌日より、たくさんの方が泣いたりわめいたり、そして親が子供を探し、子供は親を探し求めて歩く姿。それも傷を負ったままで、焼けただれた手足の皮をぶらぶらさせながら、駆足で泣きながら親を探す子供。自分は目が見えませんが、なんでも感じてわかります。手足の皮の件は人様に聞いたことですが、寝る所も無く、なんで女子供までこんな目に遭わなければと、当時はアメリカを恨みました。でもその時は親子三人家族で、自分だけがちょっと肩に傷をしているだけなので、まあ人様のことを思えば良いとしなければと思ってました。

広島には30年も草木もはえぬということでしたので、父の本籍福井県大野市坂谷という所に引揚げることにしました。大野にまいりまして昭和37年10月4日父、昭和38年7月30日母が続いて亡くなりました。二人とも頭の毛は抜ける、歯ぐきからは血が吹き出る、本当に恐ろしい毎日が続きました。私もこのようになって死ぬのかと思って毎日が恐怖の気持でした。

なまじ原爆の日に死んでおけば良かったと思う日々です。

〔広島 直爆3.0km 女 29歳〕  
(18-0002)

#### ④ 30歳代(被爆時)

爆だんが投下されて千田町に居る同僚の所に行っていました。此の人は、3歳、5歳の子供を連れて被服廠の保育所に来ている人です。友達の家はたおれて3歳と5歳の子供が2階の階段の下敷になっていて、身重な友達が助け出そうとけん命に努力しているところでした。その中に火事が起こって、煙がもうもうとたちこめて警防団の人が早く逃げなさいと叱りますけれど、2人の子供が煙たい、痛い、早く助けてと泣き叫ぶので、逃げるところではない、逃げようとも思いませんでしたが、警防団の人にせかしまくられて、にげまどう人にまじっていました。今でもけむりを見ると、40年前の事がまざまざと思い出されて来ます。母親はその後死亡いたしました。けむたい、痛いのが耳について、何ともいえない気分になります。自分が生きているのがくやまれる。

〔広島 直爆3.0km 女 32歳〕  
(35-0075)

バスのつり皮を持ったまま死んでいる人、本川の川底に立ったまま兵隊が死んでいる。被爆者の長男は県一中一年生14歳、学校はどこを探しても見つからない。二日目にやっと学校にたどり着いた。がれきの中に、もえ残りの胴がブスブスとイヤな臭いをはなしながらくすぶっている。長男の姿はどこにもない。△△、△△と声を限りに呼ぶ、答えはない。5日間足を棒にして探し、やっと宇品港で船に積まれ捨てに行くところを見つける。ああ人の命の戦争の前ではなんとみじめなものよ。学校に運びだびにした。戦争とはいえ、自分の生んだ子を、自分でこの手で焼いてやらねばならない。心が張りさけそうにいきりがこみ上げて来る。

戦争はイヤ、もうこりごり、どこの国にも原爆は投下してはならない。

生命は、世界中の人は、一人残らず尊厳すべきだ。

アメリカにどんなにつぐのってくれたとしても、命はかえってこない、つぐのいは無いのだ。

[広島 直爆3.0km 女 36歳]  
(22-0082)

### c) 性別不明

私が10歳の時ですが、母と姉が自宅付近の路上で被爆し、一時は行方不明になり、家族で探して歩きました。夕方自分で帰ってきたときは、上着は焼けてぶらさがり、両手はぶらりとしたまま、顔はとても判別できないほどで、かろうじて洋服と向うからの様子で母とわかりました。

当日はつける薬がないまま一晩中冷やし、翌日近くの小学校の講堂に、治療してもらうため、母につき添っていったのですが、門から講堂までの100米たらずの間の両側、息のある人、息たえた人、中でも身動きしないお母さんの横たわったそばで、赤ちゃんがお乳をさがして泣いていた姿が、目にやきついています。

私たちも治療の順番を待って何時間も並んでいたのですが、その間にはトラックの荷台にあふれんばかりの、大けが大やけどをした兵隊さんが運ばれて、教室の廊下、講堂の中は見る見るいっぱいでした。

炎天下ゴザを敷くわけでもなく、生きている人も死んでしまった人もごちゃごちゃの、地獄のようなどしか表わせない有様を見ていて、半身やけどで私から見るとせめて薬くらいつけてもらいたいと思った母が、こんなにひどい怪我人や死人がいるのに私なんかが治療を受けたら申しわけないと、何時間も待ったあげくに治療を受けないで帰宅してしまいました。

その後は一カ月あまり家で寝たきり、生死と戦って幸い健康をとりもどしたのですが、あの時の世間、家族の混乱は言葉で表わすことが出来ません。

〔広島 直爆3.0km 性別不明 10歳〕  
(13-12-024)

### (3) 3.0Km～(直爆)

#### a) 男

##### ① 10歳代(被爆時)

当時私は旧中2年生で、学徒動員として向洋の東洋工業に通っていました。自宅は大手町7丁目。父は天満町の軍事工場、母は自宅、兄は学徒動員で三菱造船所、妹は学童疎開、5人家族でした。

私は翌7日、自宅附近に入市し、父、母、兄に会いました。母は身動き出来ず、父は頭に大けがをして市役所跡にいました。兄と二人で看病したのですが、何も出来ないまま、母は13日に死亡。父は2年後行方不明になりました。おそらく母の後を追って自殺したのではないかと思います。

当時の爆心地附近は、地獄そのものでした。川には何百何千という死体が流れ、女子中学生が何十人も重なって死んでおり、防火水槽には4、5人頭をつこんでおり、市電の窓からは、逃げようとした人がそのままぶらさがって死んでいました。夜になると、軍隊の人が死体の山に油をかけて燃していました。今思い出してただ一つの心の安らぎは、母の死体を兄と二人で燃して骨をひろったことです。

〔広島 直爆3.0km～ 男 14歳〕

(14-0309)

原爆投下後約30分位経過した頃、南観音町から見て北の上空（己斐、沼田方面）は真黒い雲におおわれ、木切れ、紙切れ等が泥雨と共に夕立のように降り、観音町附近まで届いた。南、東は良く晴れて太陽がまぶしかった。

屋外にいた人は、ほとんどが縦半分の衣服がなく、ハダは皮がぼろぼろに下がり、赤い肉が血に染まっていた。

昼過ぎには県営陸上競技場へ、次の空襲におびえた人が防空壕に集り、さながら地獄を思わせた。

夕方には徴用された朝鮮人が、倒れている馬の肉を切り取っているのが忘れられない。

夜は貴重品を入れたトランク一個を持って友達数人と、川端の土手でお互いに怪我の手当をして夜を過ごした。川向こうの舟入町から東の町が燃える火で大変明るかった。

夜明けの川には数十人の死体が浮んでいた。

翌日（7日）10時頃に第二中学校へ食物や罹災証明書を貰いに行ったが、大竹警察署より救援に来ていて被爆後初めて食事した。校舎の中は倒れてうめく者、最早死んでいる者で足のふみ場もない状態であった。当時14歳。

〔広島 直爆3.0km～ 男 14歳〕

(34-3820)

ふと気が付くと、手や腕から、顔からも血がぽたぽたと落ちてきた。血だらけになっている。ひざ立てがやっとだった。ガラスの矢じりのような破片がそこらじゅうの床につきささっている。誰かがいる。うめき声だか叫び声だかが聞こえる。何が起こったのだろうか、どうしたのだろうか。階上にいた私は、下の方で何

千人もの人の叫び声が聞こえてきた。皆泣いているのか、どなっているのか、ガワアーツ、ガワアーツ、オーウイと呼んでいる。自分も血だらけで痛いのかどうなのかさっぱり分からない。血まみれになった人々が道路つづきの広場にいっぱい群がっている。さながら大型屠殺場のような残酷比類ない光景であった。

まっ黒焦げのそれはどこの誰なのか、男なのか女なのか、若いのか年よりか、全くわからない。後からあとから川つぶちの続く限りを、何百メートルも行列になってやって来る。近づいて来たその群れを見ると、目の玉がとび出て顔のまん中にぶらんとさがり、髪の毛が焼き焦がれたまま顔いっぱいにくっついている。衣服の切れっぱしなのか、皮膚がひきちぎれ、裂れた皮膚がぼろぼろになって腕や腰にたれさがり、火ぶくれで全身がはれあがり、煙ともつかぬ湯煙のようなものが、背中や足、頭、体中から出ている。そして肉がジュツジュと燃えさかっている。もはや人間の様相など全くない。真赤とも真黒焦げともいえない肉片の大きな固まりが歩いているのである。ただれた全身に服の切れっぱしをからみつけた足が二本あるだけだった。手や腕がなく、どちらが前か後かがわからなくなっている。そして体中がどろどろにとけて燃えさかり、異様な臭いのしている大きな肉の固まりが、そばでうなっている、いや叫んでいるのである。「熱いようー熱いようー水をくれ、水を……助けてー助けてくれえ……水だあー水を飲ませてくれえ……一口、一口でいいよ……」と「娘はどこだあー私の子どもを、私のボーヤを助けてくれえ……誰かーこの子を助けてくれ……熱いよう、苦しいようー」と腹ばいになって泣き叫んでいる。声と涙とがிரいまじって、うめき声となり絶句しながら、のけぞるようにバタツ…と路上に倒れていく。つぎの人もつぎの人も、そこがやっとたどりついた場所かのように、バタツ、バタツと倒れて死んでいった。

延々と続く目の前の凄まじい光景と異様さに、ただもう夢中になって何か叫びちらし、興奮状態になってしまって、何が何だか分からなくなり、かけめぐり、喉がからからになって卒倒しそうになった自分を、ころんでは起きて、やっとのことで気を取り直したのであった。その日の午前10時過ぎ頃、真夏で炎天下の足が焦げただれていくような、熱い砂地が続く海ぞいの造船所内へ、市街地からぞくぞくと避難してきた人々の、あわれな残酷な光景だった。

所内は焼け焦がれた棒くいのような人々、焼却しそこなったロー人形のような焼けただれた人々を、つぎつぎに並べて寝かせても、並べても並べても並べ切れない焼死体が小山になっていく、そして、いくつもいくつもの小山ができていくのであった。それはものすごい形相の顔つきと、うなり声とどよめき、叫びこえの固まり

であった。

考える力も感覚も消え失せていく自分を感じたあの時の体験は、今も脳裏にはつきりと焼き付いて離れないのである。

以上

〔広島 直爆3.0km～ 男 15歳〕

(03-0140)

被爆直後は、ただ今の広島空港前の三菱の工場内（爆心地より5～6km）にいましたが、その2～3時間後には学校の寮がありました西観音町まで帰り、そこで寮の隣まで火が押し寄せていたので消火につとめたりしました。

その後爆心地近くで家屋をこわして、防火地帯をつくるための勤労奉仕に従事していた。下級生たちがひん死の身でありながら、気負って逃げ帰ってきましたが、その姿は口に出来ないほどの悲惨な姿であり、彼たちもそこまでの気力で、寮に帰り着いた途端に芝生や寮に廊下に倒れ、助けや水を求めましたが、どうすることも出来ませんでした。

医師もおりませんし、先生もいない状態で、私たち中学生の身では何も出来ませんでした。誰が言い出したかヤケドにはじゃがいもの汁が良いと言うので、気休めにすぎませんが、倒れていた食堂の中に入ってじゃがいもを探して来て、その汁をつけてやったりしました。水を求めて、上級生さーん、水を下さいと、うめくようにうたえていましたが、水をやったら死ぬぞと言うので、彼等に水をやらなかったことが、今にしてかえって後悔されます。1週間以内（翌日そのうちの1人は亡くなっていた）亡くなっていた彼たちであったからです。水を求めていた声はこれからも忘れられないと思います。

〔広島 直爆3.0km～ 男 15歳〕

(12-0220)

8月6日学校の朝礼がすんで、いもの工場の現場へつくと原爆にあう。  
9時半過ぎ頃から工場の手前から外を見ると、こげたり、大きな水ぶくれになったり、衣服はやけてぼろぼろになったりして、横川から安方面へぞろぞろ必死で歩いておられた姿は、此の世の地ごくで何時も忘れられない。

宇品への行き帰りには道ばたには多くの人が、誰ともわからないかわった人が死んだり、助けてくれー、水をくれいと叫ぶ人でなんとも言えぬ気持でした。

死んだ人をすぐふとんにくるみ、タンカにのせて運ぶ途中、しるがおちてほんとうにうさ〔ママ〕かった。

火葬場ではこわ板をならべてある上に、いわしを焼くようにタンカをおいて片方の竹を持ち上げてまくり、そしてスコップでならべていた。大きく腹がふくれた人の腹にスコップがあたり、ちぎれて白いうじが出たのにはびっくりしました。

こんな事は二度とあってはいけないと思う。

〔広島 直爆3.0km～ 男 16歳〕

(34-1922)

夜勤だったために、原爆投下時は寝ていた。はじめまた爆弾だと思った。外は白いけむりにおおわれていた。すぐ強い雨がふってきてパーと暗れた。

”ぼっかん”を洗いに行っていた人等、ふきとばされたり、ぶたが鼻血を出してブーブー鳴っていた。

ももや顔がやけ、水ぶくれをブローンとたらし、さまよい歩いている。女の方は薄着でひどいやけどをしてたおれている。

みんな被爆したので医者にもたよれず、うなっている人に直射日光をさえぎるための”むしろ”でもかけてやれば上等だった。

涙なくしては見れない状態だった。

かわいそうだとはじめは思ったが、(自分はけがややけどをしなかった)だんだん慣れてきて、仕方のないことだと思ふようになってしまった。平常な精神ではなくなってしまったのだろう。自分達は兵隊だったから食糧の配給があったが、一般の人は3日～4日は何も食べていないのではなかったか。

まわりがすべて地獄のようだったから、自分が生きてるか死んでるのか、わからない状態だった。生きてることが信じられなかった。

〔広島 直爆3.0km～ 男 19歳〕  
(04-0353)

## ② 20歳代（被爆時）

ア) 被爆直後、陸軍運輸部佐伯司令官の直命により天満川をヤンマー舟でさかのぼる。同僚、私外3名。二十日市に上陸—午後1時頃。  
徒歩にて己斐国民学校に至り、中心部から送り込まれた被爆者を収容、死体の処理にあたる。

1. その時の被爆者の肌はエナメルのような黒、まだボロになっていなかった。
2. 被爆者がそれぞれ叫ぶ声は言葉になっておらず、余りに想像を絶した情景なのでアゼン。私自身思考力を失った単細胞のごとく動くだけとなる。
3. 原爆を落したアメリカも憎かったが、それでも戦争をやめようとしなかった天皇が、殺したいほど憎くなった。
4. その後8月14日午前まで、大野国民学校で所属中隊から離され、単身被爆者看護にあたるが、おびたしく継続して発生する死者の処理に追われて、生きていた人に、何もしてあげられなかったことが、一一生の悔恨。

〔広島 直爆3.0km～ 男 20歳〕  
(01-0129)

黒焦げの死体をまるで石ころのようにまたいで歩いた。

今にも息を引取るような人から水の催促を受けた。

倒壊した家の梁の下になった老婆から、両手を合せて助けてくれと言われたが、

如何ともなし難かった。こちらから両手を合わせ、後髪を引かれる思いで逃げた。

大勢の被爆者で皮膚がただれ、焦げ、ぶら下がったような人がぞろぞろと風下から風上に（御幸橋畔を比治山方向へ私は向かったが、人々は宇品方面へ逃げて来た）歩いて来たが、中学校の学友に出会い励ました。

翌日妹を焼津神社境内で見つけ、東練兵場の草むらの中で一緒に寝た。四方八方から苦しみのうめき声が聞かれ、耳に残っている。

〔広島 直爆3.0km～ 男 20歳〕

（04-0352）

被爆後軍隊は出動して、ケガ人や、死体の収容にかかったのですが、まるで地獄でも行ったような気持でした。苦しい、殺してくれと呼ぶ者、声もなくなつてうめく者、暑くて川へ飛び込んで水ブクレで死体になって、その死体が川いっぱいになっている。道路には病院代わりに重病人や、死人を並べ、死亡した人から次から次へと空地に運び、火で焼く仕事をしたのですが、あの時のつらいこと、悲しいことは今でも目や、心の中までこびりつき、今、自分が生き残っていることがうそのような気持になってきます。同じ防空壕で亡くなった者もあったのに……。

そのためにも、死んだ人たちの無駄死のないように、援護法の制定の遅れを見逃せない。

〔広島 直爆3.0km～ 男 20歳〕

（24-0016）

一言でいうと地獄であった。

目も満足にあいていなく、全身がまる焼けで、見渡す限り死体だらけで、自分の家族であれば気が狂うと思った。戦争といえども悲惨で、もう二度とこんなことがあってはいけないと思った。

野戦病院となった小学校で、ボーフラのわいた防火用水の水を飲んだ少年通信兵（被爆し身体にやけどをおった若者）が次々死んでいく。毎日毎日裏の原っぱで焼いた。

自分の身の心配で他人のことまで考えられず、本当になさげなく、人間の弱さでした。

〔広島 直爆3.0km～ 男 21歳〕

（01-0025）

防空ごうより出た時、広島町を見たら何もなかった。

上司の家の状態を見に行くように言われて、線路ぞいに歩いて行った。行く途中やけどをした人たちがいた。とても暑い日だった。

焼けこげた人々がいたが、女だか男だかわからなかった。

原爆ということはぜんぜん知らなかった。

救護活動はしなかった、命令はでなかったため、死人の処理をしているところをぼっとながめていた。

1ヵ月ほど広島にいて、北海道に帰ってきた。

やけどをしている人たちに食用油をはけでぬっていった。

両眼のとびでている人がいた。2～3日たつとやけどをしている人たちにうじがわいてきた。こんな中にいると人間の心はマヒしてくるもので、何とも思わなくなってしまった。苦しんで死んでいった人たちはとてもかわいそうだった。

〔広島 直爆3.0km～ 男 21歳〕

（01-0058）

○川面をふさぐように浮いている、おびただしい死体。

○性別が分からぬほどに焼け焦げた多くの死体。

- 皮膚の焼けた部分を垂れ下がったままの状態にして歩いている人。
- 黒焦げになって、道路上で仰向けに寝転がっていて、手だけ動かしている姿。
- そうした人たちの目と歯だけが白いこと。
- 最初の2、3日間、収容所がないので、道路に並んで寝かされていた負傷者の列。
- 死体をピラミッドのように積み上げて、焼却していた光景。
- 夜、死体が薄青く光っていたこと。
- これ以上陰惨な光景は考えられないこと。
- 前に見た地獄絵は、こんなにひどくはない。
- 親類、家族がこんな目にあわないようにと念じた。
- 当時「火傷には水を飲むとよくない、だから水をやってはいけない」と聞かされていたので、最初の2、3日の間は多くの負傷者から求められたにもかかわらず、また水の入った水筒を携行していたにもかかわらずあげなかった。私にとって思いつく度に悔やまれてならまい行為となった。

〔広島 直爆3.0km～ 男 21歳〕  
(13-10-011)

被爆当時、火傷になった非戦闘員（町民、学童）のことがいちばん……  
人間的ではなかった。

顔がはれて口がとび出し、皮膚がボロが下がったようになって、そこらに倒れていて、水をくれと叫んでいた。水をくれると死んだ。ごろごろ死んでいた。広島はハスがあって池がそこらにあった。

その直後は原爆ということはわからなかったが、どうしてこういうふうにならなかつたのかギモンにおもった。ガスがはれつたのかなどと思っていた。

いかに原子爆弾というものが非人道的であるか、学童が兵隊さん助けてくれ、となだれこんできた。えらいことだと思っていたが、夕方になったらみんな亡くなった。

これほど、兵隊はしょうがないと思ったが、町民や学童がこれほどやられるのではと、アメリカに対して敵がい心を感じた。

人類はいつしか滅亡するのではないかと感じている。

戦争は悲惨なものである。

[広島 直爆3.0km～ 男 22歳]  
(10-0016)

①蛆虫

犠牲者の方を二人で車に乗せる時、死者の皮膚が手のひらにつき、皮膚のなくなった所より蛆虫が出て来る、幾匹も、幾匹も。

ケロイドになった皮膚の厚さは5mm～7mm位はあったと記憶する。私も火傷は幾度もしたことはあるが、原爆のケロイドは表面が紫色になり、神経がおかされるのか、ピンセットではがしてもいたがらず、はがした後はピンク色をした肉であったと思う。そこには死者と同じく蛆虫がコロコロと。

生きている人間に（広島専売局野戦病院にて）

[広島 直爆3.0km～ 男 22歳]  
(24-0055)

軍隊に応召中にて金輪島より翌日市内に救援に入る。被爆者の重軽度を問わず、生きている人のみ荷車に積み、金輪島の本隊に運ぶ。

営庭にムシロを敷き、火傷部にはチンク油、軟膏等で治療、数日中に多数の死者が出る。死者は機帆船にて似ノ島に送り、防空壕に埋めたようである。

栈橋から機帆船に積み込む時など、荷物同様4～5m下に投げ込む有様にて、死者をあつかう状態ではなかった。

[広島 直爆3.0km～ 男 22歳]  
(27-0312)

死んだ人びとの無ざんな姿。  
水死体。

〔広島 直爆3.0km～ 男 23歳〕  
(01-0138)

原爆投下のある日、船舶司令官の命令により救援のため入市、場所は記憶していませんが、至る所に瓦礫の山、立ちのぼる煙、息たえだえの人々が水をもとめてうろうろさまよう姿、また水がほしくて歩けない人、苦しい、あつい、痛いといって泣きさけんでる人、また親は不思議にも元気で子供が死に、家の焼け跡に煉瓦をつんでその子供を泣きながら焼いている父らしい人、可愛そうだ、気の毒だと思いつつながらなんにもしてあげられないもどかしさ、くやしさ、恐ろしさ、いかりにどうしようも出来ませんでした。

また、宇品の兵舎は負傷者で一ぱい、頭は西瓜のように大きくなり、目は焼けただれて見えなく、白いくすりを身体一面塗って異様な姿、身体の皮は一面むけて赤くはれ、その上大きな水ぶくれが出来、息たえだえの人。毎夜毎夜の如く何人も死んで行く。その上1カ所に集められた死体の山。異臭が鼻をつく、全く地獄絵図を見て来たようでした。何とも言えない気持になりました。

もう戦争はいやだとしみじみ思いました。

〔広島 直爆3.0km～ 男 23歳〕  
(27-0708)

エンマ大王ともいっていい現状を体験した。原爆によって被爆した市民が市内中心部より宇品方面へ、また黄金山方面へと、やけどの顔に破れた服装で長い行列をして来た。軍医（医者）がもう助からないと感じた被爆者と、手当によっては助かるかも知れない被爆者とを左右に分けていた。助かりそうにもないと感じた人が行

く先は実にあわれであった。手当する人もないところで死に直面した人々の様子が今も忘れられない。軍医がまさしくエンマ大王といっても過言ではないと思っている。

[広島 直爆3.0km～ 男 23歳]  
(34-0534)

一望の焼野原と化した広島街。太田川の中に浮ぶ多くの犠牲者。その中で仮死状態にあった人。西練兵場の防空壕の中で、垂れ流しの状態でポー然として発見された見習士官。水を飲むと死んでしまうので与えられず、こっそりと水洗場の蛇口に這って行って口をつけたまま死んだ人（船舶練習部の臨時病院）。日本がアメリカを爆撃して仇を打ったというデマを信じて息を引きとった人。

しかし正直のところ、生きてるものより廻りはすべて死人で囲まれると、生きていてよかった等と考えるより、自分も死人の仲間のようになって、気の毒とか可哀想だという感じ方は失ってしまって、何が何だか生と死の区別がなくなっていたのが実感です。

過ぎ去って、今子が孫が出来、国泰寺の銀行の前で死んでいた女の子の姿が眼に浮び、あんな戦争は絶対あってはならないと思います。忘れられるものならあんな悲惨な思い出は、死者には申し訳ないが忘れ去りたい気持です。

[広島 直爆3.0km～ 男 25歳]  
(13-10-001)

すごい光とともに体がふっとび、屋根の明かりとりのガラスの破片がバラバラと降ってきた。頭上にはキノコ雲（これはあとでわかったことだが）なにがなんだかわからなかった。

負傷者の収容看護、死体処理などに従事したが、ただ夢中だった。水、水といい

ながら多くの人が次々死んでいったが、そのときは特になにも感じなかった。ただ夢中でなにがなんだかわからなかった。

2、3日後ウジが体にわき、たいへんだと思った。手のつけようがないくらいたいへんだった。

数日後、自宅へ帰宅を許され、道のないところを熱いのをがまんして、とびとび帰ったが、当然家もなく家族もいなかった。

町中ものすごくくさく、死体がゴロゴロ転がって目鼻口などから泡を吹き、煮えたぎっていた。このころからやっと、これはたいへんなことだ、これからどうしようかと、やっと人間らしい気持ちにかえたような気がする（今考えてみて）

家族をさがしながら町中をうろうろし、いろいろな死体をみるともなくみて、大小さまざまな黒こげ、半焼け、とにかくむごいことだと思った。でもまだ戦争に負けるとも思わなかったし、まだまだ戦いつづけなければと、ある面では勇気がわいた。年もまだ若く元気良かった。

しかし今考えてみて、これが教育の恐ろしさだと思うし、苦しみながら目の前で、水、水、水をチョウダイ、水をくれ！と言いながら、次々死んでいった多くの人たちが安らかに眠れるよう努力したい。

〔広島 直爆3.0km～ 男 25歳〕  
(20-0009)

昭和20年8月6日午前8時30分広島市上空に新爆弾（当時ピカドンと呼称）が投下され、宇品の暁部隊陸軍中將佐伯文郎閣下の命により各部隊は広島全市の救援作業に出動いたしました。

市内は想像も絶する大破炎上、死者は各所にいるい積み重なる状態で、どこから手をつけてよいかわからない状態でありました。

私の隊は補給部運輸班でしたので、車で各救援本部に資材を運び、その帰りには負傷者を満載して取りあえず自分達の兵舎へ運び治療班に引渡して、折り返し負傷者の救援を続けて参りました。連日の救助活動で宇品の各兵舎、病院はすべて負傷者でいっぱいでありました。

治療と言ってもほとんどがやけどの患者が一番多く、軟膏かただの油薬を塗る程度で、1日に5～6名の死亡がくりかえされ、10日間で50名位なくなりました（私の兵舎だけで）。

兵隊同志の戦争なら仕方ないとしても、何にも関係ない一般市民も巻き込む悲惨な原水爆には絶対反対する一人です。

お互いこの運動を盛り上げ、戦争のない平和国家の到来を望みます。

〔広島 直爆3.0km～ 男 26歳〕

(12-0012)

若いお母さんでした。全身焼け爛れ乳呑児と共に収容されて来、お母さんはもう意識はないのですが、赤ん坊は乳房を求めて焼け爛れた胸の上を泣いて這い廻っておるのです。お母さんは両手で乳房をかかえるようにして吾が子に与えようとおるのです。私は独身でしたがそれを見て涙がひとりでに流れ、諺にあることを思い出しました。女は弱し、されど母は強しと。母親の愛の偉大さは到底筆舌では言い現わせないことを知りました。その子は今生きておればもう40歳以上不惑の年齢ですが、その事を知っておるだろうか、おそらく偉大なる母の愛を知らないだろう。学校の教育にとり上げてもらえないものだろうかと思います。

戦争、特に原爆は最大の罪悪です。

〔広島 直爆3.0km～ 男 26歳〕

(40-0763)

当時、私たち船舶練習部経理課に勤務していた18歳の女子事務員が、宇品町7丁目で休んでいた。8月6日当日、屋内でなにも光もうけていないと言って、元気で出勤して来た女子事務員が、その日午後より熱が出て、次第に高熱となる。当時陸軍病院、日赤病院は治療する状態でなく、私たち陸軍船舶練習部が臨時病床とし

て治療に当って、各方面から患者収容でてんやわんやの状態でした。医師団もあらゆる手当等を患者にほどこしたが、髪の毛は次第にぬけて熱は下がらず、1週間後に亡くなりました。

女子事務員があんなに元気で出勤して来た姿を思い出すとき、今も忘れることが出来ません。あの恐ろしい死の恐怖を思い出します。

国の責任において、当時被爆者で亡くなられた多くの人々の霊をなぐさめると共に、二度と核戦争がおこらないように願います。

〔広島 直爆3.0kmから 男 27歳〕

(24-0012)

「原爆地獄」忘れられるものなら忘れたいが、そう思うほど次々熱で苦しみ家族をあんじながら死んでいった人達のこと。

生きている人が傷口がウジがうごめき、自身ではどうすることもできず、兵隊さんお願いと呼ぶ声。

兄の戦死した骨箱かかえて死んでいった娘さん。発熱で寝込むと、何年たっても夢に出て来てうなされた。

原爆は、多くの人々の死に様もむごかったが、生き残ったこの40年の医者も不明という病気の不安、毎日の生活の不安、苦しみはもうたくさんだ。何人にも繰り返させたくない。

国の大事だから戦争の犠牲は受忍などという人は、原爆のおそろしさを知らない人だから言えたのであろう。

太田川に何日もあとまで浮んで流れていた死体を見たら、大手町の防火用水槽に囲いから頭だけつつこんで死んでいた黒こげの死体は何日も引き出されずに、今も私のまぶたの裏に焼付いている。

40年もすぎても、兵隊さん水をつかさいとさけぶ声は「アメリカの野郎」といかりに変わる。核を無くしよう。

〔広島 直爆3.0km～ 男 28歳〕

(01-0005)

広島市矢賀国民学校は非常の時には収容所に定められており、警防団員が運営に当ることになっていたが、当日警防団員は市内へ建物疎開に出動中被爆したらしく誰も帰って来ないので、私が運営に当りました。

最も印象に残っているのは、普通の調子で話をしていて人が、ちょっと眼を離したスキにストンと死んでしまったこと。また、人が生きていながら傷口にウジがわくこと。火傷のあとがカサブタになり、そこが痛むという人がいたので、カサブタをちょっとめくってみたらウジが何十ぴきとなくはじけるようにパラパラと飛びはねたことがありました。

3歳と5歳くらいの男の子の兄弟が親に別れました。第1日から校門を見おろせる2階の窓から、収容所を閉鎖するまで(約2ヵ月)必ず親が来る、と言いつけて待たせたが、とうとう親と逢えず施設へ送られたが、どうなっているかと案じています。

〔広島 直爆3.0km～ 男 28歳〕  
(27-0376)

- ア) 路上にバタバタたおれていたり、歩行中たおれてそのまま。人々は水水とさけぶ、女学生は、おかあさんーおかあさん、お水と言って死んでしまう。
- イ) 兵隊だから、以上のような実況をみてもヘコタレス、勇気を出して務めた(主計業務)
- ウ) 水をあげたいと思っても、水もなく、自分ののどがかわいて人様どころではなかった。

今になって、あの人々に水をさしあげたかった。時々夢にだにみる。

〔広島 直爆3.0km～ 男 29歳〕  
(19-0005)

### ③ 30歳代（被爆時）

死んでいる人が、川から海へ流れ出して、ついに海岸で白骨になっていったあわれさが忘れられない。

〔広島 直爆3.0km～ 男 30歳〕

（24-0119）

あの日正午より爆心地に向け金輪島を出発、宇品棧橋に着いて先ず驚いた被爆者の群衆、それは内海の軍施設への収容逃難でした。途中沿道には被爆者の列、倒れて助けを求める、水をくれと叫ぶ悲鳴、ただ一人として救う人影はなし、焼煙の中を目的地に到着、被爆者を土べたに並べ水を与える程度で何の手当も施すすべもない、日は西に傾き悲鳴を後に現地を引揚げる心中は今でも忘れる事はない。

帰営後（金輪島）は軍用倉庫に収容した患者の世話、傷口からはうじがわき異様な臭いが鼻をつく、次から次へと死んで2、3日で倉庫はからっぽになり任務は終わった。患者の性別、推定年令、身長など、処理より去って行く方が早いのでどうにもならなかった。

〔広島 直爆3.0km～ 男 30歳〕

（34-1335）

死体処理で毎日毎日ゴミでも焼くかのようにして尊い人命を燃してきた。それも素手で死体をさわり――暑さと異臭で息もつまりそうであった。夜になるとポーと青い炎があちらこちらで燃えていた。なんと悲しくつらい事であったか。お供えるものもなく、ただ手を合せて冥福を祈るだけだった。息のあるものは私の手を取って（兵隊さんきつと敵をとって）と言った。あの娘さんの顔を今も忘れる事が出来ない。

〔広島 直爆3.0km～ 男 32歳〕

(30-0004)

私の勤務していた陸軍病院江波分院は、爆心地から4kmへたった所であったが、強烈な爆風により、病院の建物の柱はへし折られ、窓硝子は木葉みじんに砕かれ、破片は壁や柱など一面につき刺さっている。私は室内での被爆で火傷はしなかったが、着ているじゅぼんのボタンはことごとくちぎりとられ、顔面に硝子の破片で怪我をし、防空壕に避難し、しばらくして怪我の処置をうけるべく院内の処置室にかけつけたが、もうその時は市内で被爆した地方の人たちが次々と避難して来て、私の処置どころではない。避難して来る人来る人たちの皮膚は、日光の当たるところは強い光線に焼けただけ、皮はむけ、着ているものはぼろぼろに裂け破れ、男とも女とも見分けのつかぬ惨めな姿である。

当時病院でも薬物も少なく、赤チンキを水に溶かして塗布するのが応急処置である。夜になれば、爆撃によって電灯もつかない暗い中を、水をほしがる被爆者に、電池のあかりにヤカンで少しずつ水を与えてゆく。喉のかわきに夢中でヤカンをとらえて離さないのを、無理に引き離して次々と与えて廻る。「兵隊さん、看護婦さん水をくれ、水を」と叫ぶ。その声は今もお耳の底で聞こえるようである。

被爆の一夜が明ければ、昨夜水を与えた被爆者たちはみんな息絶えている。中でも乳呑児を抱いたまま母児ともに死んでいる姿を見たときは、何とも言われぬいとしさ、あわれさに胸がつまり涙が出てとまらない……と同時に無事の人たちをこんな無惨な仕打ちをする敵に対して、大きな憤りと憎しみを覚え「鬼畜打ちてし止まむ」の心に燃えたものだった。

その後も、病院はもとより、倒壊を免れた小学校の校舎など、収容所として収容されている被爆者の看護を続けたが、当時広島市内は真夏の下、被爆による死体の氾濫で腐敗による悪臭が深い、もの凄く蝇がたくさん発生していたが、被爆者が収容されている室も焼けただれた皮膚の悪臭が鼻をつく。力もつき果て苦しむ被爆者のただれた顔、鼻といわず、耳、口、目など蛆虫がわいて這う。それをどうする力もない。その痛さに苦しむ状は、さながら生地獄そのままである。

そのような被爆者が身寄りもなく死んでゆく、その数は日に50人～70人と。

その死体の処置は、近くの広場に運び、建物疎開による廃材を積んで、その上に死体を並べ、夕方になると火をつけて焼き、翌朝その骨を集める。そんなことが幾日も続いた。

また、直接被爆しなかった元気な人でも、原爆投下直後あるいは数日後広島市内に来た人が、原爆による放射能によって入院する人も多く、白血球が極度に減少し、頭髪が抜けて丸坊主になる、歯ぐきから出血する、身体に紫の斑点を生ずる、次第に衰弱して1週間で死んでゆくというような例も幾つもあった。

原爆の恐ろしさ、当時の惨状など、とうてい筆舌には言いつくせない。被爆40年、今なお被爆障害で苦しみ死んでゆく人が絶えない。今健康であるという人たちも、いつ被爆障害により罹病するかわからないという不安な日々を過ごさねばならない。この恐ろしい原水爆は造ることも、使うことはもちろん、実験そのものも絶対に許されない。世界から核の追放。戦争のない平和な世の中が望まれる。

〔広島 直爆3.0km～ 男 32歳〕

(32-0021)

1. 倒壊した家屋には生きたまま家の下敷になったり、家の中をはい回ったりしている人がたくさんいた。この人達は皆迫り来る火災に怯えつつ、狂い死にするように火炎に包まれて死んで行った。残虐非道これ以上のものはないと思った。
2. 原爆が出勤時間であったので、市内の道路上には全身火傷したまま倒れたり、腰をおろしたりしたまま動けなくなった人がおびただしい数にのぼっていた。この負傷者達は、死に至るまで2、3日の間、火傷した体を、焼けつく真夏の太陽に照らされ、蔭一つない焼けつくアスファルトの上に放置されたまま終日終夜うめき続けて死んで行った。この世さながらの地獄であった。
3. 広島周辺では、被爆当時負傷も火傷もしていない、おびただしい数の人々が、1ヵ月くらいの間にも原子病で死んで行ったが、この人達は、頭髪が抜け、歯ぐきが出血し始めて発病すると、身の多くの事例により、自分の死期を的確に承知していた。しかし、鉄道、電信（可部鉄道など）が破壊されて、多くは家庭に連絡できないまま淋しく死んで行った。病院でもない、がらんとした広い建物の

隅で、或は農家の納屋で、死期が迫って苦悩する様は、刑期の確定した死刑囚のように思えた。

4. 原爆投下直後の郊外に走る阿鼻叫喚の群衆に仰天して以後、想像を絶する悲惨極まる状況に直面して、私の感情は凍りついてほとんど無神経になりきっていた。私の救出看護も自分の部隊の数十名がせいぜいで、全般に火傷が余りにひどく、しかもあれほどの数の火傷者を見ては、路上の人々にはまったく手が出せなかった。しかし現在ではそれが残念に思えてならない。

〔広島 直爆3.0km 男 32歳〕  
(35-0113)

8月7日の救援活動に入った時の事。1人の婦人と子供（乳のみ児）がタンカで運ばれて来た。全身やけどで母親の目が全然見えない。子供は空腹で母親の乳房を探す、母は見えぬ目で我が子の手を胸元に引寄せた。それが精一杯だった。（この親子は死亡した。）

死んだ人は船にのせ似島に送られた。救護所で三人の我が子を亡くした母親は、別れの船の中でいつまでもわが子の手を離そうとしなかった。別れを急がせた係の兵士も、ついに泣いてしまった。でも別れなければならない。船のもやい網は解かれ、すべり出した船を茫然と見送っていたあの母親の姿が、今もはっきり私の脳裏に残っている。

戦争はいかに悲惨であるかを後世に語りつぎたい。

〔広島 直爆3.0km～ 男 34歳〕  
(22-0266)

広島市宇品町金輪島船舶本廠（暁第6140部隊）修理部にて船舶修理作業に従事傍ら部隊長（原中佐）の当番兵として服務中、当日配給物資を届ける可く準備中、兵

舎内にて被爆し、すぐ宇品行き連絡舟にて宇品に上陸、平日なれば電車にて可部線緑井駅近くの下宿先に行くのだが、当日は交通機関は何もなく、歩いて御幸橋方面に行く途中、大勢の負傷者に出会った。皆なの顔が脹れ上り、眼は一線の筋を引いた様な顔の人達が海の方へ歩いていた。(一見おたふく面の様な顔であった)御幸橋を渡って間もなく、赤十字病院の出張所のような建物の前で、一見習士官の指揮のもとで負傷者をトラックに積む作業を手伝って、どうやら火勢も少なくなり歩けるようになったので、廻り道をして己斐町附近で壊れた家材に下敷きになった男の人がこの足を切ってくれと言われたが、その人の恐ろしい目付がこわくなって逃げ出した。暫く歩いて人々が飲み物をせがまれ飲める物は全部飲まして上げた。その人達の嬉しそうな顔、先程の人の顔との違いが大なるものがあった。

下宿先にて一泊の後、また歩いて護国神社の前の待避壕へはいろいろとして手を差し伸ばして死んでいる人達の苦痛な顔は今でも思い出す。太田川へ降りる石段に折り重なって死んでる女の人々に出会った。皆んなが川の水を求めて降りて来たのだろう、吾れ先に水を飲もうとして死んでいる姿がはっきりと現われていた。また、川面の無数の人々が腹を脹らまして、多分水を飲みすぎてだろう、潮の流れに上へ下へと漂っていた。

どうやら部隊に帰ったが、私等ねる兵舎にギッシリと負傷者が横になっていた。あちらこちらで水を求める声、軍医が水をやれと言われ、飲まずとゴクンと息を引き取る。無数の死骸を、穴を掘って木の枝を敷きその上に死体を置き火を付けたが、あまりよく燃えない。重油をかけたが、油が燃えるが死体が完全に焼き切れない。油の節約でそれを中止して、防空壕に入れ土をかぶせた。後11年後の新聞紙上に金輪島の壕の中から白骨がぞくぞく出たとの報に、命令とは言うものの、すまぬことをして来たと心で詫びた。

体験談で話をするると約一時間三十分程かかるが、上記は大分ちぢめて記しましたので御了承下さい。

(広島 直爆3.0km～ 男 34歳)  
(30-0046)

b) 女

① 10歳代(被爆時)

私の父も紙屋町にて被爆して8/6 AM11:30分ごろ帰宅、やけどをして帰り、食用油で治療して良くなった。8/6より2日間5回～6回胃から青緑の液を出した。8/28～9/8まで毎日40度前後の熱で苦しみ、山から泉の水で冷すだけ、医者も無く大変でした。

9/6から大小便も一人で行くことも出来ず床に行いました。

9/7夕方から昏睡に入り、9/8 PM9:15死亡。

国民学校5年でしたから大変でした。

8/6学校から帰宅して、家の横の道を市内中心附近から安緑地区に避難される人々、その時人々の傷、火傷のこわさ一生忘れません。水もあげ力をつけてあげました。当時薬品が無いのが、父始め多く、人々の多く死亡させたと思っています。

[広島 直爆3.0km～ 女 11歳]  
(29-0008)

現在の県病院で、歩く所も無いほどの死人の間を、首と首のすき間をつま先立ちで動きながら、やけどの治療を手伝いました。少し離れた所で兵隊さん達が死体を焼いていましたが、時々飛来するB29のため、死体にトタンをかぶせて火を消すので、半焼けの死体を沼の中に捨てるのが、今でも目に浮かびます。あの(におい)は終生忘れる事は出来ません。

[広島 直爆3.0km～ 女 13歳]  
(27-0522)

8月9日長崎原爆落下、突然火の玉の様なものが見えたと思った瞬間、イソギンチャクの様な雲を見た。爆風のため気絶、翌朝家路に急ぐ私共に更にB29機は爆弾を落す。道なき道、歩道解らぬまま、石ころみたいな人間また人間の上を歩き、家の下からは助けて下さいのさげび声、水欲しい方の悲鳴に涙、真黒に焦げた方の耳からはウジ虫が出ている。まるでこの世の地獄を見て、死ぬ方に「先に行っててね」の一言でした。

(広島 直爆3.0km～ 女 16歳)  
(28-0058)

一瞬にして焦土となった市中を見てもうダメだと思いました。事務所の中でも爆風のため机の上に立っていた人がありました。

被爆して2日目の夜。倉庫の屋上に出て暗やみの中で「アア目が見えなくなった」と叫んでいる声がかきこえましたけれど、防空壕の中に入っている私の所から側に行ってあげられなかった事が、今でも私の脳裏から離れず心苦しく、その友に申し訳なく思っています。その日から核兵器の病魔がおそってきていたのでしょうか。(市中から被災した人が避難して来ていました。)

負傷した人の看護中、水と叫んでおられても思うように水を上げられなかった事。死んでいった人びとを運びました。その時胸のあたりをひどい傷をしていた4、5歳位の男の子でしたが、まだ体に温かさをかんじました。上の人が安置所へ運ぶように命令され、それに従った自分が情けない。

市中の人が着ていた衣服は爆風にはぎとられ裸同然の体は焼けただけ、その上にわずかな布端がついている人々。幼い子の手をひいて何か分らないことをうめきながら、泣きながらさまよっていました。

夜は裏の田に昼間安置所へ運んだ死体を幾人も重ねて、麦ワラの束を投げて焼いていました。私達はその人達の納骨箱を作りました。納骨箱の骨はご本人のものではありません。名前等は負傷して来られた時に聞いて衣類へつけておきました。

(荷札のようなものへ) (誰も身内の人に最後を見とどけてもらえずに)

郷里へ帰る車中の中のことです。隣に坐っていらっしゃるご婦人のひざの上の白

い包みが目にとまり失礼と知りつつ、誰方ですかとお尋ねしました。ご家族の方ではなくご近所の子供さんのお遺骨です、とおっしゃって、自分の郷里へ持って帰って祭って上げるのです。建物の解体作業に出て行方不明なのですとおっしゃっていました。苦しい嫌な思い出もありますが、こんな胸のあつくなる思い出もあります。

○ 水と叫んでいた友を思いつつ。

(亡き友が水と叫んだその声は核廃絶のおしえぞと知る)

[広島 直爆3.0km～ 女 16歳]

(33-0106)

弟が行方不明になったので8月7日から毎日楠木町周辺を父母と探し廻りました。安村のお寺から借りたろうそくを手に夜は被爆者の収容所を照らして廻りました。光が当たると寝ている人々が口々に水をとうめきます。その時は弟を探したい一心で一人一人見廻り、もとより水など持っていないので心残りでしたが、一つの収容所からまた一つへ、死にかけている人、重傷の人などをかまってはられません。弟を探して必死で歩きました。

横川駅前には死人の山でした。あまづっぱい死臭がただよう前で、たき出しの御飯をむさぼり食べ、自宅のやけあとのじゃがいもを昼食がわりにして父母と食べました。弟が見つかったのは8日?の夜。新庄の焼場に置いてありました。8日の○

(不明)よくおぼえておりませんが、弟らしい死体が焼場にあるとき、父母と附近の人の話を聞きました。それによると6日の夕方男の子が道に倒れて、水、水と言っているのを聞いて水をやると、お母ちゃんと言って息たえたと言うことです。着衣と骨格から弟らしいと分りましたが、父母は火そうにしても未だあきらめず、私と一緒に終戦後も孤児収容所の似の島学園へ何回も通って、弟をさがし廻りました。父もガンで死に、母も不明の病気で現在死線をさまよっています。

[広島 直爆3.0km～ 女 16歳]

(34-0838)

8月6日、出校日になっていたので助かったのだと思っています。いつもだと学徒動員で横川の方にありました工場に、電車で朝夕今の原爆ドームと呼ばれてる前を眺めながら通勤いたしてましたから。また私の家から2人爆死。その死体さえ分からず、白骨を拾い集めて帰りました8月8日、早朝から夕暮まで紙屋町、護国神社広場、練兵場広場、一面見渡すかぎり死体が並べてあり、市内に焼け焦げた電車の中は人間の姿形のまんまで出来上がってる人間の木炭が折り重なって、見るもムザンな姿が強烈に胸深く刻み込まれ忘れることが出来ません。

また私は額の皮は目の前にブラ下がり、左手首から腕にかけ皮が下がってましたが、右往左往、道ですれちがう人皆んな顔の皮はアゴに下げ、手足の被服はポロポロに焼け、皮をブラブラさせて逃げまどってる人の姿は、今も新ジャガイモ芋の皮をそぐと、するりと薄くむけるので鳥肌立ってしまい、思い出してしまいます。

また川の橋桁の上に消防団員のハッピー姿や国民服の方たちが、先の方がカギ型になった長い棒で、川上から流れて来る死体やまだ生きて焼けただれてる人々を引っかけ上げてた姿。市内の道両側に数米おきに掘ってありました防空壕の穴は、皆んなどれも死体がいっぱい放り込まれていたこと。

市内の方面が毎夜明るいののは、死体を焼いている明るさ……と聞かされ、1人でポツンと眺めながらも、一方ではあれほど残酷な死体をいっぱい見過ぎると恐怖心がマヒしてしまうものか、恐ろしいと思う心は通り越してしまい、ただただ無性に悲しくポロポロと泣きながらも、良くまあ私は生きているもの……と不思議な気持ちでいっぱいでした。また近所の方で学徒動員で被爆した、やけどのところうじ虫が湧き、動けずに寝てる姿を、泣きながらお母さんがハンで一匹一匹取って捨ててた姿も忘れられません。

(広島 直爆3.0km～ 女 16歳)  
(46-0061)

家の者が皆(4人)全身被爆して、さがしてつれ帰りましたが、薬一つなく番茶にてしっぶしたり、はえのたかってうじがわいたりして、悲しい思いや、おしめ代わりにわた入れの着物など下にしいて、しっこさせて、それを遠くまで洗いに行っ

た事など思い出せば胸がつまります。

[広島 直爆3.0km～ 女 19歳]

(26-0030)

## ② 20歳代 (被爆時)

兄二人を第一線に送り、女ながらもお国のためにと親、の反対を押しきって広島陸軍看護婦に志願した一人です。

被爆の先夜、山口の小郡が空襲に入り、大手町1丁目の下宿、原爆ドームのうらから病院に出て行き、朝8時頃空襲も警戒も解除になり、ほっとして宿直間のベッドの上に腰を下ろした瞬間、百米ぐらい前方がはげしくピカッと光った瞬間気をうしなして、気がついた時にはベッドの下で、床面はガラスの破片が一ぱいしきつめたようにちりばり、柱は折れて屋根の瓦はほとんどはがれて、外に出ていた者は皆あついあついといって火傷して入ってこられ、そうこうしている内に門衛からつぎつぎと、頭から灰色で、被服はぼろぼろで、顔ははれあがり、皮膚はたれ下がり、支えることも出来ない姿で入ってこられ、見る見る間に室、廊下共にいっぱいの患者で、それからは仕事が忙しく一生懸命で、顔を洗う間も髪をすく間もふりみだれた頭をはちまきをして働きました。

水々と叫ぶ声がきこえなくなると亡くなり、また口から血をはいて、ひと夜の内洗面器一ぱいもはいて亡くなる方、また皇族の方もまじっておられ、畜生、畜生と叫んで亡くなられ、朝は死体を運ぶのが忙しい毎日で、家族の者が同じ部屋にるのが何日もたってわかり抱きついて泣いている姿、何回もらい泣きをしたかわかりません。

いくらか傷がよくなって、帰るあてもないまま、幼い少女がふろしき包を一つ背負って帰って行った姿がいまも思いだされます。

昨年11月に本院の慰霊碑にお参りして、石碑にきざみ込まれている内には、母のようにかわいがって下さった従軍看護婦さん、また仲のよかった友、また下宿の年老いたおばさんの名前を確認して、目頭があつく足もとの寒さを感じました。

被爆と共に運命を共にした方々の冥福を祈ると共に、苦難な過去が二度とないよ

う平和を祈りいたします。

〔広島 直爆3.0km～ 女 21歳〕

(34-2315)

一番心に残っているのは、主人を探して被爆直後幼児を背負って入市した時の、火のために丸ゆでになり防火用水に何人も入ったまま死亡していた姿。

市内から逃げて来られた主人の姿を分らないほど黒こげになって、私に道（場所）を聞いた声で旦那様と分り一緒に帰られたが、知人だったせいもあり、体中黒こげ、口だけ皮がとれて赤い肉が出、手も両方皮がとれさかさにブラ下ってただ歩くだけ、それも人に押されて、あの時の姿が忘れられません。

ただあの時は何かおそろしい爆弾がおちて、これは大変な事になったものだと思っていましたが、日が経つにつれてやっと原子爆弾と分り、あの時の被災者以上に毎日たくさんの方が死に、私の夫も原爆症で一ヵ月あと死亡した事などにより、だんだん原爆に対する恨み憎しみなどを感じました。

〔広島 直爆3.0km～ 女 25歳〕

(35-0170)

#### ア) 人びとの死んでいる姿

中学生位の男の子がトタン様の物でおおわれていたので、そっと取りのけてみて腰がぬけるほど驚きました。ランニングシャツが今にもちぎれんばかりにふくれ（体）、眼球が10cm近く両方とも飛び出しかにの目のように、今も焼きついてはなれません。念仏をとなえて立去りました。

穴という穴は3日間で、もう血とハエでいっぱいでした。血はあわぶくのようにふき出ていました。

イ) 生きていた人たちの苦しみ

頭髪はエチオピアの人のようにチリチリパーマ、口びるは3倍にふくれ上がり真黒でした。うめき声、でも意識はたしかでした。3日目には背中の方から2～3cmくらいのうじがわき、ひふの皮はわかめのようにたれ下り、この世の者ではありません。防空ごうの中はまさに地獄でした。

比治山橋を渡る時、どうして腰がぬけて歩けんのかと大声で助けをもとめられても手の下しようもなく、ごめんなさい、ごめんなさいと手を合せて渡った日を思い出します。

イ) 広島から火災の火の消えるまで

一ヵ月と少しかかったと思います。毎日毎日ビルの建物の中が焼けくずれるドドンという音の不気味さ、味わった者でなくては解りません。

馬が白骨になって足を上に向けてあちこちありました。

イ) 恐ろしい思い出

- ①ソ連が参戦したのニュースが入った時の恐ろしさ、焼野原では逃げる場所もなく、主人と子供と三人死をかくごしました。
- ②一ヵ月後の宇品港より米兵上陸の話があちこち……身ぶるいしました。生まれて初めて米兵をみた際のおどろき。
- ③毎日毎日くぼ地で死亡された方の焼き方のあわれ。中から飛び出る方も。その臭いが毎日のように太陽がおちるとにあって来るのには、死の世界に落ち込むようなさっかくに、ノイローゼになりそうでした。
- ④相生橋のこわれ方のすごさ、それに米兵がはだかではばりつけられ泣き叫ぶ声が耳からはなれません。（ここを通る者は米兵につばきをかけて通れ）の立札、頭にたくさんかけて通った人があったのでしょうか。その人の気持がわかりません。

〔広島 直爆3.0km～ 女 25歳〕  
(35-0206)

## I. 入市被爆

### a) 男

#### ① 10歳代（被爆時）

生き残った友人が、原爆直後から1人1人櫛の歯が抜けるように、ポツリ、ポツリと1カ月おき位に死んでいき、ある時はA B C Cのジープで比治山に連れて行かれたまま永久に会えなかった友人もいる。

常に、次は自分の番ではないかとおびえつつ、中学校、高校生活を送った。

〔広島 入市 男 13歳〕

(15-0064)

助けを求めて川を流れ行く人々。またガレキの下で助けを求めて声だけ聞こえるが、助かる見込のない状態のため、本当に助かる可能性のある人々だけを〔しか〕、薬品及び薬剤その他の関係で救護出来なかったことが今でも心のこりを感じている。

〔広島 入市 男 16歳〕

(01-2019)

昭和20年8月19日に全身に火傷を受けた父が死んだ。郊外の山村で死体を焼いたあと、母と幼児を含めた五人の子供は、全壊した家の片付けもままならず、頼る親類も、焼土と化した市内で消息不明。連日死体を焼く臭いの中で、食糧も乏しく途方にくれる毎日であった。

人々がそれぞれ明日のことも判らず生きていた。どうして生きていけばよいかも判らなかつた。

戦争、初めての恐るべき原爆、肉親や友人知人の死。生活の破壊……極限の中にいた人間しか判らないことだ。

親を返せ。人間を返せ。家屋家財を返せ。それ以前の幸せな生活を返せ。

〔広島 入市 男 16歳〕

(20-0013)

やけどのひどい人々はみんな寒がっていた。そしてふるえていた。

けがの人々はみんな水を欲しがっていた。

老人の2、3人は気が違っていた。

〔広島 入市 男 16歳〕

(22-0251)

8月8日早朝、当時賀茂海軍衛生学校（当時賀茂郡乃美尾村、階級海軍上等衛生兵）に在校中の我々は上官の命で広島に救護のため約70名出動。広島駅前～八丁堀～護国神社前～相生橋東側辺～十日市～横川駅前にと進んだ（軍トラック荷台に乗って）。一口には言えない数々の思出は強くあるが、市内電車が破かいされその中の白骨化したもの、熱の恐ろしさ、護国神社の大木の幹が裂かれた力のすごさ……しゅん神国が信じられなくなったこと。路傍の死体腐敗しかけ散乱、悪臭のため持参の手拭を暑くてもマスク代りにして通行し、相生橋東側辺の死体はまだ路上に放置され、豚か犬の丸焼き状の様であった。各河川は岸寄りに死体が延々と浮かび、いくら戦時とはいえ生きて二度と見れぬものと思った。我々は横川駅前に救護所を設置、大勢押しかける被爆者を治療と救護に当たった。8、9日の2日間であったが目の前で多くの人の悲劇に接し、この用紙だけでは記されないが、被爆者は死の寸前の人から比較的元気な人〔まで〕色々な人がおられ、元気な人でも空腹のため警察隊の炊出しにぎりめし（麦めし）も疲労を忘れて我も我もととびついて押しかけた姿は現代では想像出来ない。

現在生存されている人は少ないと思いますが、これ等の人々は長い列をつくって治療待ちをしておられたが、口々に我々に「兵隊さんきっとこの仇をとって下さい」「復しゅうしてやります」とか興奮と敵愾心に満ち、この時の心情は当然と思います。

我々は治療だけでなく迷子の保護→警察隊に依頼ということも何回もありました。

横川駅前三篠信用組合焼けあと（外形だけ残っていた。現在広島信用金庫）に治療所を設けて二階に重体、一階にも重体、重傷患者収容建物の周りもコモ、ムシロ等の上に寝かせ治療と救護に当る。周辺は死体を焼くジリジリと人の油の音と臭気で何とも言えない異様なものであった。

8日夜は夏というのに肌寒く感ずるよく晴れわたった夜だった。収容者の中にはさっきまで生きていた人が冷たくなっている人何人もいた。我々は全員徹夜で看護に当たった。大半女性であったため、中には尿瓶代りのようなもの探して用をたしてもらったこともあったが、大半の重傷者は土間にたれ流しであった。とりわけ忘れられないのが二階の男女子供10名ばかり、土間に裸のような状態で横たわり死の寸前で、土間には各人の尿がたれ流されそばの他の人のところまで着きこれをさける元気もなく、また大便も1、2カ所あり強烈な臭気の糞尿の中を身をくねらせ苦悶し、そのうめき声は正に生地獄でどうすることも出来ず、入口の18、9歳の娘さんの腰に治療用の布切れをかけたのが当時16歳の自分としては精一パイであった。→そして「水を水を」とたのまれ水を与えて廻り、2日間時々気をつけたが、9日の夕方には何人が死んでいた。入口の娘さんはまだ生きていたが、もう助かるまいと後髪を引かれる思いで帰路についた。収容者の中にはまだあるが、中でも8日夜、全身火傷の母親が幼児をかばい子供は無心に泣くのみ。その声も元気なく、9日の夜明け母親は息を引きとり、子供は死体となった母親の乳房に吸いつき抱かれたまま泣いている姿は、余りにも悲劇としか言いようのないものだった。

〔広島 入市 男 16歳〕

(33-0003)

15～16歳位の少年が寝ている父親らしい人に大声でしっかりしてとはげましていたが、寝ている人が何か言ったら少年はその大人を引き起こし、こちらだと方向を指さしたら、大人の方はその方向に両手を合せておがんだがそのまま倒れて死んだ。少年はうつろな大きな目で大人を見ていたが、やがて死んだ人に重なって息を引きとった。

〔広島 入市 男 16歳〕

(34-3003)

私は特幹（少年兵）で、特攻機の攻撃援助のためと高射砲隊の弾道風計測のため、造船所対岸の山頂で高層気象観測に従事していましたが、奈良の若草山のような山頂で上半身裸で作業中、上空に落下傘3個を発見しじっと見つめている時、猛烈な爆発と光線と熱気が走り、その熱さに耐えかねて10米ほど離れた防空壕に飛び込んだのですが、爆発の瞬間、目の中へは真赤に焼いた針の束を差し込んだようで、目を閉じても開いても同じ状態で、一瞬直撃弾に命中され体が四散する最後の瞬間であると思いました。

背を向けると、大地は陽炎（かげろう）の大きいようにぐらぐらと揺れて、なかなか真っ直ぐに走れませんでした。次に爆風が通過し、兵舎はマッチ箱を押しつぶしたように倒れました。防空壕から出て来て下を見ると、等距離にあった航行中の焼玉漁船が物凄い炎に包まれて、全船中湾の中ほどをぐるぐる円を描きながら回転しておりました。おそらく船中の人々は亡くなられて、誰も舵をとる人がいないものと思われまます。

翌日隊長の命令で、列車の状態や被害状況調査のため、未だ燃え続ける駅や爆心の方へ行きましたが、その惨状は筆に尽くせません。

〔広島 入市 男 17歳〕

（25-0034）

当日晩負傷者を文理科大学に運んで看護したが、寒いと言ってもかけてやる物はない、痛いと言ってもつけてやる薬はなく、ただ呆然何の手当もしてやれなかった。ただ水をほしいと言う人に対し（数名以上と思われる）与えると死ぬと思いつつ水筒よりたらしめて与えたことをおぼえている。良いことか悪いことか、翌朝立ち寄って見たらほとんど全員死んでいたの、せめてもの供養になったろうかと、今もなお複雑な心境として思い出される。

浅野候別邸泉邸での死者。川から収容された全身水ぶくれの死体処理はあまりにも無残であり、今でも脳裏をかすめる。

県庁前庭と記憶するが、数百名の死体（後日勤報隊の人達という）の火葬を一晚私以下七名でお護りしたことは、余りにもショッキングなことであり、その後の処理がどうなったか今でも心掛かりである。

行を一緒にした人のうち2、3の方が早死にしたことを思えば、多分に放射能の影響ありと思い、心から冥福を祈るものである。

〔広島 入市 男 18歳〕

(01-0003)

あの朝、原爆が炸裂したとき、私は呉線小屋浦駅にさしかかった列車内にいた。閃光と爆風が走り、キノコ雲を見た。呉海軍工廠の職場に着いて、直ぐ引返し、海田市駅から向洋の自宅まで歩いた。広い道の向うからは壊滅した広島市内から逃れてくる被災者がいっぱいつづいた。みんな服がボロボロに裂けたり、焦げたりしていたが、よく見ると両腕の前にたれ下がったものは、焼けただれて肩から下にはげ落ちた皮膚だった。船越町あたりだったろうか、軒下に人だかりがするのでのぞいて見ると、戸板の上に全身の表皮がむけ、赤肌のまま虫の息の少女が横たわっていた。私は思わず目をそむけ息をのんだ。生地獄であった。

このあと、昭和町に住むイトコとその家族の安否をきづかって広島市内にはいった。午後6時ごろだったろうか。流川町を歩いていたとき、道ばたに倒れていた中年の女性が突然大きな目を開けて私を見た。附近には直爆の犠牲となった遺体が多数あった。その女性も当然遺体と思っていた私は本当にびっくりした。その目はなにかを言おうとしているように見えたが口は動かなかった。しかし私はそのまま現場を退ち去った。そのことがいまだに私の心のどこかに、しこりとなって残っている。「なぜ、あのとき声をかけて聞いてあげようとしなかったのか。せめて一杯の水でものませてあげられなかったのか」。8月6日がめぐり来るたびに心が痛むのである。

イトコのところへは結局道がなくて行けず、比治山の下を歩いて向洋に帰り着いたときは、日もすでに暮れていたように思う。

〔広島 入市 男 18歳〕

(28-0346)

昭和20年8月7日朝、宇品金輪島へ上陸した時、兵営内は負傷者であふれ次々に火傷で火ぶくれの人々が死んでゆき、特に哀れだったのは、カンカン照りの営庭にすでに死んでいる母親の乳房にすがって自分（赤ん坊）も死にかけながら、びくびく動いてかすれた声で泣いている姿でした。

また、当日中に楽々園にあった本部に命令受領のため、市内を宇品から楽々園まで歩いて行ったのですが、途中市内電車が爆風のため線路から大分吹き飛ばされ（10m位）、その電車の中につり革にぶら下がったままの真黒な乗客が多数いて、地獄絵そのままでした。

また、途中から道はがれきでいっぱい、まだくすぶっているつぶれた家の瓦の間から手や足が出ているのを目撃しました。

川を渡る時、電車の鉄橋を渡りましたが、所々枕木が燃えて、もう少しで落ちそうになった記憶があります。下を見ると、橋桁には材木が先ずかかり、その後次々と死体が流れつき、ものすごい死体の重なりで、ほとんど裸で真赤な背や腹を出していました。

道のそばに一番印象的な死体を目撃したのは、町名は分かりませんが家だけ吹き飛ばされ、一家族と思われる死体でした。ちょうど朝食時だったと思われる状態で、夫婦子供4人の焼死体がまるく輪になって坐り、父親と思われる人がのけぞり、手に茶碗を持っているかっこうで、腕時計のあとだけ白く他は真っ黒に焼け焦げていました。母親は子供をかばう様に両手を差し出し、小さな二つの黒焦げ死体は母親の方へ両手を差し出すかっこうで坐っていました。

〔広島 入市 男 18歳〕

（34-0915）

原爆投下の翌日、比治山に救護と警備及び死体処理のためおもむいたところ、現地では焼けただれた人々の「水をくれ」という叫びと苦しみの声があちらこちらからもれていた。火傷した患者の肩や背中にはウジがわき、衛生兵がピンセットで取り薬を塗って手当をしていたが、一晩のうちに2、3人位の人が死んでいった。

死体を運んで行った帰り、すさまじい光景にあいぎよっとした。それは中年の女性の死体で、両方の目玉は飛び出し、両手足は切断され、かっと口を開いて、両手

をかざして今にも飛びかかってきそうなその形相は、正に生地獄であった。

〔広島 入市 男 19歳〕  
(02-0045)

ピカードン焼けの原になった現場に救援活動に入った私達隊員が見たものは、赤く黒くやけただれた死体ごろごろと。防火用水の中でふくれ上がって入っている死体の山。人間とは思われない有様でした。

橋の上で野宿をした時は、近くの電車の中から、兵隊さん助けてくれーの悲痛な声で助けをもとめていたのが、今も頭の中に残っております。

〔広島 入市 男 19歳〕  
(03-0055)

原爆投下の夜、入市、山沿いに焼残った民家に一ヶ分隊毎に分宿、夜明けと共に私達は川の中の遺体収容作業に当たった。焼けただれた広島市、大きな場所に目をみはった。鼻をつくいやなにおい、近くにあった山の中ふくの神社の境内には、同じ服を着た陸軍の兵隊がやけどを負ってうなりわめいてる姿を見、通路ぎわで倒れた市民の死姿。水をくれと、たすけをもとめるやけどの人、顔はあまりにもむごい。水をくれとたのまれても恐ろしさのあまりそばによれない。今思えば水筒の水をわけてやれたらと後悔している。

火の残る焼けあとに私達同年兵はエンピ、タンカを渡されて、水の中の(川)遺体収容作業に当る。女、老人が多く、橋桁につかえた死体を船舶兵がトビグチでさして舟でひいてきて私達に渡す、それをエンピでタンカに乗せて川岸の焼けあとに一列にならべる仕事を毎日やった。二三日すると死体はくさり、そのにおいが鼻をつく。今でも死人の顔、姿を思いうかべる度に、戦争だからそうなった。教育もそうであったから死体収容作業が毎日続けられた。いまさら恐ろしくなる。

そんななかで生きるためには、夏の炎天下のどの渴きは水筒の水ではたらず、焼けあとのカンヅメ会社倉庫後にあった、みかんの黒くやけただれたふくれたかんづめを古釘でさして、毎日何度ものみ、のどのかわきをいやした（黒いカンに口をつけてのんだ）。

これを書いている時も、死没者のめい福を祈り続ける。

当時のおもかげが脳裏をはなれない。

〔広島 入市 男 19歳〕

（12-0043）

広島に原爆が投下されて2日後、私等は警備隊双三部隊として入市しました。汽車は矢賀駅までしか行けなくて下車、徒歩で市内に入りましたが、目に入るものはまったく地獄絵図そのままでした。私等は生存者の軍人だけをトラックに収容して宇品まで運びましたが、途中死亡されるとその場に置いて行くといった、まったく考えられない行動でした。夜は死人を焼くにおいて食事も出来ない有様でした。

〔広島 入市 男 19歳〕

（34-2903）

被爆翌日、まだ市内には火柱と煙、折り重なった死体。夜半に出発して消防団第1出発隊に参加、目的地中島本町に着いた後死体処理に当たった。

人員も小さく分隊に分けられ、受持の区域も指定された。遠くで米軍機来襲を知らせるサイレンの音。間もなく米機が低空せん回する。身をかかす何ものもない。

死体を2、30体と重ねて火を付けた。死体といっても全部が裸で、焼け残ったベルトの下に残った婦人の着物の模様から肉親と知った遺族が死体を引取りたいと言った。でもそのようなことをしたんでは整理が付かないと言ってことわれ、泣

きながら自分の着物を死体にかけて焼けるのを待って骨をもち去った。

防空壕の中でも生存者はなかった。死体を引出さずに入口に火をもやし、入口をふさいで済ました。

妊婦の腹がパンクして横に赤ちゃんが飛び出して、爆風のものすごさを感じさせる。学校跡に大きな便槽があった。あたりの死体はその中へなげ込まれ、瓦や焼け残った木片でかくされた。古井戸は絶好のかくし場だった。

我が身が危険にさらされる時、人は鬼となることを知った。

平和な今日、思い起こしてはすまないことをしたと、痛む心をいやすことが出来ない。

〔広島 入市 男 19歳〕

(34-3107)

## ② 20歳代（被爆時）

死体の処理、救護にあたったのであるが、重傷を負って生きている人の苦しみは今でも目にうかぶ。タンカで指定場所へ連れて行くが翌日死んでいる。生き残った人がいないように思う。水をやってもものむ気力がなかった……。

通勤時間でしたので、死体のそばに弁当箱が黒こげになってちらばっていた。

妹だという人が、この人は私の姉だと言ったので、ねんごろに焼いて骨をやった（半焼死体）、などなど書ききれません。

最後に戦争はどうなるんだろうと思った。

〔広島 入市 男 20歳〕

(02-0007)

① 8月6日被爆者の治療中に、幼い兄妹3人の子供がひどい傷を受けて来ましたので、兄が7歳、長女5歳、二女3歳位の子供達でした。兄の頭の傷がひどかったので兄の方から手当をしようとしたら、兄いわく、僕はあとからで良いから妹から先に手当をして下さいと言ったのに感心しました。母親は公園に寝ています。後から人をやるからと帰りました。後から後から来る人々の手当に夢中ですっかりわすれてしまった。そのことが時々思いだされて、申し訳ないとわびています。子供達が元気でいてくれと祈っています。

② 2日目より焼の原を通り比治山町に警備につきました。道中多くの人々が折重なって死んでいます。特に川岸の近くで特に多く見られた。家族がばらばらで死んだことで心残りであったと思います。

警備中、川岸で声かけられ、兵隊さん水を下さいと言うので、しばらく待ってと一言の声で息を引取ってしまった。やりきれない思いでした。私は一滴の水をやる事が出来なかったこと、くやまれます。

〔広島 入市 男 20歳〕  
(28-0299)

あのと時の惨状は筆舌に尽くし難いとはこのことです。何百という人々が太田川沿いの道を北に、それこそ衣服がさけて全身丸裸同然、ハダは焼けタダレ正に正視できない避難者の群に出会う。

工兵隊辺りにたどりつき、鉄舟で対岸の村落に負傷者を収容す。どこの民家もケガ人でいっぱい、治療といっても種油を傷にぬるくらい、水を求めて声は次第に細りて次々に死亡。河辺に死者をイナを並べたように転がし、気の毒の極み。

後日市内にも入るが人・馬至る所に転がり、ただ自分達はこれを一個の物としてしか扱わない気分となってしまった。今にして思えば不敬の至り。深く同胞のご冥福を祈っています。詳しく書けば尽きませんので……。

〔広島 入市 男 20歳〕  
(33-0047)

1. 呉陸戦隊第23大隊員として(千名位)臨時列車で早朝呉駅出発、海田市から不通のため徒歩で広島に入ったが、途中東へトボトボ歩く被爆者の一団に会った時、真夏の太陽の下ボロボロの被服でしかも無口で、体のそこかしこに子供の握り拳位の水ぶくれのあるのは今でも強く印象にある。
2. 向洋から市内が見渡せたとき、西の空は赤茶けて、街は未だ煙っているし、道路のあちこちころがる死体。はじめはびっくりしていたが、馴れというか不感症のようになり、駅前へ行くまでにはほとんど無感覚のようになってしまった(8月7日12時頃到着、9日午後4時頃広島駅を出発呉へ)
3. 7日か8日か9日か忘れたけど、満潮時のためだったのか、駅前の太田川は死体の群れで(流れが緩やかだったと思う)水面がほとんど見えない様が不気味というか鬼気せまる状況だった。これが最高のショックだった。
4. 私らが被爆後入市が早かったせいだろうけど、駅前附近以外、街中心の中国新聞社屋(側だけ残って建っていた)あの附近一帯も瓦れきの山のみで人っ子一人見ず、全く死の街といえる不気味な姿でした。

(広島 入市 男 20歳)

(33-0109)

あの日私は、中国第104部隊から広島市の真向いにある宮島の豊浦弾薬庫に派遣され、歩哨勤務についていた。そのとき強烈な光を感じ広島方面を見ると、あたかも太陽が落下したかとおもえるようなオレンジ色の巨大な火の玉が上空に浮かんでいた。その直後轟音と共に強い爆風があり、衛兵所のガラス窓が吹き飛んだ。

翌日から焼けこげた木片と共に人や馬の死体が海辺に漂着し、中でも上半身裸で小さなすねに巻脚半をつけた少年の姿はいっそう哀れで、いまでも臉にうかんでくる。その腹部は異常に大きく脹らんでいた。

8月16日、交替が到着し基町にある部隊に帰營の途中、己斐駅から市内に入った途端、これまで経験のない異臭が鼻につき、中心地近くなるにつれますます酷いものになった。道路ばたは倒れた家や壁等まだ完全に片づけられておらず、その下から頭ガイ骨や手足の半焼けがのぞいており、大きな蠅が群がっていた。

当日夕刻部隊跡についたが、建物は全焼で休む場所もなく、その夜は近くにある商工会議所のコンクリート床上に一行6名と共にゴロ寝した。翌日部隊移転先の安佐郡安村に行き、その後部隊焼跡の片づけ遺骨拾集の作業についた。そのとき部隊洗たく場の水槽の下から、青脹れになって腐らんし軍服がハチ切れそうになった遺体を発見した。さぞ猛火の中を逃げ惑いこの場を選んだのであろうが、何をどれだけ思い考える時間があって死を迎えたことであろうか、正にこの世の生き地獄と想いをめぐらせ痛ましい限りであった。

部隊の中には直接被爆でありながら無傷で生き残った兵もかなりいて、一緒に作業しながらその幸運を共に喜び合ったものである。ところが8月下旬になると、頭髪が抜け鼻血を出しながら急死する兵が多くなり、遺体処理の使役も頻繁となった。前日戦友の遺体を焼いた者が今日は自らが焼き場に送られる立場になる有様で、被爆した兵達は何の医療も施されないまま、死に怯えながらの日々を過ごしていたのである。当時の状況は、いま想い出しても、実に悲惨極まりないものであった。

〔広島 入市 男 20歳〕  
(34-1614)

たくさんの死体を処理したが、それらの人の氏名をいちいち記録しておくべきであったが、軍隊にいたため上官から、やらなくてもよいからすぐ焼けといわれ、記録や持物の收拾をしてやれなかったのが、今日でも残念に思っている。もっとも当時我々は記録する紙1枚、エンピツ1本すら持っていなかった。着のみ着のままとんできて、毎日板を敷いて野営していたため、どうしようもなかった。

〔広島 入市 男 21歳〕  
(16-0011)

原爆投下の翌日、広島に入市したが、焼け野原に道路の中や道ばたに黒こげの死体が多く横たわっており、電線や焼け残った物が道路に散乱し、車で入市するのに困難を極めた。――周囲の被害の少なかった所のお宮の庭で治療所を開設して多くの被害者の治療に当たった。

その内に老婆（70歳位）が、孫娘7歳位の手を引いて、早く見てやって下さいと、私のところに連れて来られたが、見ると横腹に直径3cm位の穴が有り、血液がにじみ出て、腸の内容物も少し出ているが、涙もかかれて普通と変らん態度で歩いて来たもの、軍医に治療を頼んだが、とても多数の人で細かい治療は出来ないので、消毒してガーゼで押えて、腹帯を施す程度の応急処置で、どこか被爆地でない所のお医者さんへ早く行くよう伝えたが、当時交通の便が悪い中であつたから、いずれ適当の手術ができずに死なれた事だろうかと思えば、普通なら助かる程度のけがも、あの時ばかりは死んで行かれた人々が多数おられるものと思います。――私が応急治療したあの人達はその後どうされたのだろうか――いつまでも、いや一生忘れられない。お気の毒なあの惨状を。

〔広島 入市 男 21歳〕

(32-0110)

被爆者を家族の方がさがして私の部隊にこられた時、被爆者を見て何もいわずにそばにぼうぜんとしていたので、おかしいなと思って声をかけると、その時すでに、家族の方は気がくるっていた。その時私は、二度とこの様なことはしてはいけないな――と思いました。

また、被爆者がくるしいからさすってくれといっても、さすってやるどころがなく、そのまま死んでいった人々のことを思うと、すまないと思うことで、今でもわすれられません。

〔広島 入市 男 22歳〕

(22-0107)

私は制服の軍人です。上官より水をやるなど命令を受け、それを守り、水をあげずに多くの人を死にやりました。死ぬとわかればやれるのですが、それもわからず、あの場合仕方がなかった、私は正しかったと自問自答しつつ今も苦しんでおり、被爆者のため少しでも手助けをと思い行動しています。

〔広島 入市 男 22歳〕  
(27-0096)

瞬間に多くの人々の死と、怪我人を見、立派な街が一瞬に焼野原となったこと。

からだに「ごまの油」を塗ってもらった、怪我人が街にうごめき、各島に避難するためトラックで栈橋に運ばれて来る。血と油の臭いが強烈に鼻をつく。私は栈橋にいて怪我人を舟に乗せた。原爆ということは全然知らないし、何によってこんなことになったのか、それさえわからないのだ。船舶本廠の「ラジオ」がアメリカ放送をキャッチ、原子爆弾だと聞いた。殺人光線だとお互は言った。船底で「兵隊さん、水下さい」「水、水」と地の底からのような声が、今でも私の脳裡にはっきりと、あります。赤銅色にこげたようになった人々（男も女も、大人も子供も）の、うつ伏せ、あお向きの姿を見て、こわいことだと思った。私だけでも1,000人位の人を焼いて来た。この時の話はあまりしたくない。すればいつも南無阿弥陀仏と心の中でとなえる。

人々は皆、家族を求めて、寺町でのこと、墓石に生き残った人々がチョークで白く名前を書いて、生きていたら見てくれるだろうと、その悲しい心をみせられて「あゝー」と思った。

防火用水に伏せて死んでいる女の人を焼くために、俄で作った即席のタンカに乗せると、下には必ずという位に小さな子供がいた。当時私は24歳だったが、母性愛の強さを感じ、急に悲しくなった。

戦争を知らない若い人々は、戦争は多くの人々の死と、悲しい多くの人々を出すことを考えたことがあるだろうか、戦争は無惨だ。教育は恐ろしい。

〔広島 入市 男 23歳〕  
(20-0065)

- 同じ部隊内にいた戦友、部下、上官など知己の大勢が爆死、焼死、圧死などいろいろな状態で、瞬時あるいはその夜、さらには1ヵ月後に死亡して行くのを目のあたりにし、何とも悲痛、惨酷極まりないものに思い、生き地獄とはこんな状態をいうのでは……との感を深くした。
- 河面に浮かぶ数多くの遺体、ここかしこで荼毘〔だび〕に付する死者、痛恨という外なし。○当夜（8/6）水を求める火傷者に対し、水を与えたら生命の尽きることを恐れ、がまんするよう励ますだけだったけれども、後になって、助かることのほとんど不可能がわかった時点、水を十分に与えてあげればよかったと心のこりでならない。
- ともに救助活動等に当たっていた戦友、部下たちで負傷など全く無かった人達が、被爆後1ヵ月位の期間に次々と高熱に侵され、最後は吐血して死亡していくため、まったく手の施しようがなく、原爆の恐ろしさを身にしみて感じるとともに、自分の死期を予期する状態にあった。

〔広島 入市 男 23歳〕  
（34-1305）

- 1) 広島の良い川という川に浮んでいた死者たちは、人間とはとても思えない異様な姿だった。恐ろしい姿だった。赤黒く倍ほどもふくれ上がった人間（？）が、川を流れていく。恐れおののく兵隊たちを叱咤して、舟で橋脚まで引いて行ってゆわえるのが任務だったが、これは人間の死ではない。これほどの残虐なことが許されていいはずがない。
- 2) 宇品に集められた重傷の人々を、金輪島と似島へ舟で搬送したが、息も絶えだえの人々の形相のものすごさ。  
蚊のなくようなかすかな声で、ミス、ミスと欲しがると人々に「水をやったら死んでしまう」ということで、たしか腰に水筒を用意していたはずだったが、一滴の水も飲ませてやらなかった。  
後年これを思い出すたびに、あの惨状の中で平静さを失っていたとはいえず、「末期の水も与えなかった」という非人間的行為が悔やまれてならない。ミズを

欲した人々の眼に映った自分は何だったのか。

〔広島 入市 男 24歳〕  
(15-0053)

水槽の中に首をつっこんで、何人かの人が黒い固まりとなって死んでいた。どここの水槽を見ても空の水槽はない。

助けを求めて来る人、くる人、男女の区別はつかない。上半身は裸、指先には黒い糸のようになって皮膚がさがっている。体は焼けただれて何倍かにふくれあがっている。とうていこの世の者とは思われない、地獄の様相です。

たくさんの被爆者が、次から次と列をなして安全な地を求めて泣きさげぶ様は言いあわすことは出来ない。

一人小さな子供が、水をください、水がほしいと言って私にすがり、ぼったり倒れて死んだ時、全身に電気が走ったような状態で、せめて水のあるところに連れて行って死なせたいと、死体をかかえて走った。しかしその子は水を飲んでくれなかった。

神仏は、誰も殺すことは許してはしないと悟った今、核兵器の使用は絶対許してはならない、永久に。

〔広島 入市 男 26歳〕  
(15-0003)

### 生きた体に蛆がはい屍臭を放つ

被爆直後に亡くなった人も悲惨であるが、被爆後1ヵ月以内に亡くなった人のほとんどが、体中に紫色の斑点ができて、生きながらにして体の組織が崩壊して鼻血

を出し、歯茎から血を出しながら吐血を続けて死んでいった。これを見守る家族の慟哭のさまは忘れることができません。

(これは私の義妹の場合ですが、1ヵ月以内に亡くなった人はみんなこんな悲惨な状態であったと聞いております)

〔広島 入市 男 26歳〕

(27-0146)

- イ。入市当日、昭和20年8月7日朝、己斐駅より横川駅に至る間の路上で、初めて広島市内より被爆した(当時は原爆による被害とは判らなかつた)人、男女の区別は判らないと出合い、全身火傷でほとんど裸体の状態で何の事かと思案した。
- ロ。路辺には全裸の赤く焼ただれた死体ごろがり、その数は全く不明である。
- ハ。横川駅前の広場には、男女の区別のつかない全裸の死体が続々に運ばれ、頭を外に円形に並べられ、広島県内各郡市より死体探しにトラックで来て判明した者を引取って行ったようである。
- ニ。横川駅の可部線待合室には相当の人数がいたようで、その人達は全部建物と同時に下敷となり、一瞬の内に白骨となったものと思われ、頭蓋骨が相当数ごろがり、全く肉片は見受けられない状態であった。
- ホ。私達は鉄道隊で生存者の救護等が任務でなく、駅舎焼跡の整理の任務であった。私達の出会った生存者といえば、ほとんど市外より入った者ばかりで、市内居住者は死者ばかりでほとんど無人の広島であった。
- ヘ。入市後3日位して、我々の教育中隊であった三篠本町の大芝国民学校に行く事になり横川駅から離れたが、見渡す限りの焼野原でその間には人影も無く、家々の焼跡から煙が出ているのは死体の焼けている煙で、あれだけの木造家屋は真白な灰となり、普通の火災とは全く異なる風景であった。

〔広島 入市 男 26歳〕

(35-0129)

私の場合、入市被爆で（8月8日～8月12日）直接被爆者の方々のような生々しい体験はしておりませんが、あの生地獄の一端は体験し、今でも險の裏にやきついています。

先ず爆弾の破壊力、己斐駅を降りてびっくり、宇品や比治山が目の前に見えるのです。駅前の市内電車が線路より30米位横に脱線して、黒こげの残骸をさらしている。駅から実家のある袋町まで約4km、途中川を三つ渡ることになるのですが、ほとんどの橋が破壊されて、幸い干潮で、折れた橋梁を渡って行く始末、ここでまたびっくり、6日から3日たった8日だというのに、川の岸や橋梁に水でふくれあがった男、女、子供の死体が、犬や猫の死体と一緒にさらされている。

やっと家にたどりついたが、そこで待っていたのは親、姉、弟、妹5人の遺骨でした（8月7日に入市した兄が5人の遺骨を拾い上げました）。兄の証言によれば、5人はちょうど朝食時らしく、一瞬にして家の下敷きになり、直後火災により焼け死んだのではないかと、2人が半焼けだったとのこと、なにせ爆心地より0.5km。

しかし私思うのに、家の下敷きになった時は動けなくとも、息はあったと思う。直後、熱線、熱波による火災で、生きながらにして焼き殺されたのではないかと、人間としてこんな死にざまがあっているのか、生き地獄そのままではないか。

〔広島 入市 男 27歳〕  
（14-0605）

爆風のすごさ。市電がふつ飛び、二両連結の機関車が太田川の鉄橋の上で横倒しになっている。

火災温度の高さ。広島郊外の遠くはなれた山林の立木が全部市内側が黒焼けになっていた。

倒れている人や、助けを求める多くの人々を見ながらも、自分も火の手と熱さから逃げるのに夢中で、今にして思えば心苦しい。

日も暮れて、熱風吹きまくる川の土手づたいに道を探して行くとき、川の中から水をくれ、助けてくれと救いを求める何百、何千という人々の声のすごさは、さながら地獄絵図そのまま、我々の任務には変えられず、心に念仏を唱えながら目的

へ進まざるを得なかった。

目的。長崎県川棚海運工廠へ特攻用空雷の製作工程修得後、北陸において開始すべき極秘図面、指示書、特種工具、工程管理等一切のものを、隊員約32名、買い出し部隊に身をやつし、金沢へ輸送後製造を開始するため。

〔広島 入市 男 27歳〕  
(17-0062)

ア。死んで全身焼けて、男女の区別も出来ない有様、ちょうどサンマ、イワシ魚を焼いて灰の上に落としたような皮膚と、爆風による塵の付着状態。

市内の比治山に救護に行った時、特に被爆者から水を要求され、その日本刀で一さしにして下さいと言うあわれさ、いまだ40年余になるが目の前にはっきり表れてくる。

イ。以上で、初日比治山に救護と、午後と翌日は革屋町附近の整備で、防火用水槽の中、市内を流れている川は、どれも最後の力をしばっての表れでしょう、とにかく夢中で一日が終わった。

ウ。心のこりはある。腰にぶらさげている日本刀で一さしにしてくれと言われた時のつらさ、負傷者には治療薬がないため、部隊からオイル、グリース（エンジン用）等を持参、治療に当たった時は、皆んな苦しかったようだった。

40余年経過している今日、あれだけの傷を負って生死をさまよっている人々に対し、当時何も出来ず収容所（兵舎）におられる患者に大きなウチワであおってやったことが何より、特に女性は「鏡をみせてくれ」とさげんでいて、次から次へと命をおとして行った状況がいまだ忘れられない。

患者も男性か女性か区別がつかない程の損傷状態であった。

〔広島 入市 男 27歳〕  
(20-0083)

原爆投下後の広島へ、防衛隊として召集を受けて被爆者の救援に向かった。左官町あたりで2週間、臨時救護所で不眠不休で全裸の被災者の看病に当たった。

赤鬼のような全身赤チンを塗った裸の群。夜もすがら水を求めて暗闇に呻く人々の枕元に、缶詰の空缶に水を配って歩いた藁小屋の風景は、今でも臉に焼きついている。そして夜が明けたら、ところどころ藁を覆った屍が眼に痛々しい。東の白みかかった河原に冷たく息を引きとった人達の骸を並べて、焼けトタンを覆って吊いの火を放つと、河原に白い煙が川面をもやのように流れた。1週間位で収容所はガラんと空いた。

黒髪が焼け落ちて丸坊主の少女が坐っていた。劫火の中をくぐり抜ける間に両眼を灼いて失明のこの少女の背中の皮をピンセットで剥いで赤チンを塗ってやると、蛆が皮膚の間に動いている（生きている人に蛆が一）。群がる蠅を追い払う術もない失明の少女だ。また原爆のショックで陣痛を訴えて出産した灼けただれた婦人もいた。

そして一週間後、焦土の広島に終戦の噂が流れた。

私達は全裸の被災者と手を取り合って慟哭した。それは生き永らえた歎びの涙でもあった。

〔広島 入市 男 28歳〕  
〔34-0810〕

私が入市したのは8月14日でしたので死体は大体片づいていましたが、それでもまだ風呂の中や「かめ」の中に性別の分からない死体がありました。私たちは通信兵でしたので、各部隊間の電話線をはったり補修の仕事をしておりました。軍管区司令部に作業に行った時、通信室の中に兵隊が4、5人おりました。聞きますと、厚さ1m〔ママ〕位もある通信室の窓ガラスが破れ、爆風の威力で反対側の「カベ」にぶちあたり体中打撲したので立てないんだ、と言っておりました。何日も食事をしていないと言われますので至急連絡をとってあげました。

また己斐や三滝の方に行くと竹藪の中が臨時の病院になっておりまして、生えている竹を柱にして床をつくり、大勢の人がねており、全く悲惨な状況を今も

忘れません。

〔広島 入市 男 28歳〕  
(34-0914)

矢賀駅に下車、広島駅、八丁堀を経て横川の農協の建物の本部に歩いて着いたが、途中トタン屋根の掘立小屋に被災の方が横に多く並べられ、ほとんど息の絶えた人ばかりで、中にはすでにウジの発生した死体もありました。人の姿は（救護に来た人）本部へ着く迄に5、6人しか見当らず、どうしたことかと思った。

私達は8月8日の朝4時半頃に、下りの西条駅発列車で入市したのですが、長い道中他の人とは会いませんでした。本部の周りに一糸も身に着けない焼けた体で右往左往する男女の人もおりましたが、救援物資配給に追われ、救援隊の方に引渡したのみで何もして上げられず残念に思いました。何はともあれ、死体の処理もあり、私も支那事変で戦場を往来しましたが、この惨状は到底言い表せるものではありません。見たことも聞いたこともない地獄絵とはこのことだと思いました。見渡す限りの焼野原で、ある物は電線の焼残り、水揚ポンプの頭、市役所の少しの建物等、建物も道もまったく見当もつきませんでした。道中福屋百貨店前の建物の土間で昼食したのですが、この土間にも焼死体が3個余り目につき、百貨店の地階には相当な焼死体がありました。とにかく地獄絵でした。

〔広島 入市 男 28歳〕  
(34-1403)

- 広島を街を通った時、焼けた熱さが残っており、はいていた自分の皮靴の底があつさでいたんだし、足もあつかった。
- 何ともいえず臭いと死人の姿を方々で見たり、灰の中より両親たちが焼けただれた人の姿を掘り出す様は今も忘れられない。

- 被爆した人の髪が焼けて、少ない髪に汚れた布を掛けて、死体をさがしてさまよっている姿は、悲しさと惨めさで今でもゾーとする。
- 顔のヒフがただれたり、だらけてみるかげもない人が、たくさんハダカ同様な姿で収容所（学校や公会堂）にはいられた。

〔広島 入市 男 29歳〕  
(26-0023)

爆発1時間30分後の広島市小網町における玖波町勤労奉仕隊員100名の直接被爆者実況。

男女共丸裸で頭髪はクルリと剃り落としたごとく無く、履物も飛んで無く素足で、ただ腰ヒモ一本だけかたく結ばれて残っていた。肌色は全身脂肪にべとべとで、それへくまなく茶褐色のヨードチンキをたたき塗りした感じの裸姿であった。顔が倍位に太くはれあがり、眼が細くはれつぶれ、それでも視力は皆完全であった。寒い寒いと炎天下にありながら寒さに耐え難く訴えておられた。水を一生懸命求めておられた。元気さ気力は溢れ、全員して私の名を呼ばれるその声は力強かった。水は少量を時間間隔を置いて差上げる方が良いと考え、水筒のキャップに一杯ずつ差上げて廻った。一巡に三十分かかり水を差上げる都度元気を出されるが、余りにも救援隊の到着が遅いため、皮膚呼吸の無くなった被爆者の方々は耐えられず、一巡ごとに一人ずつなくなって行かれる、それが実に過酷で耐えられなかった。

〔広島 入市 男 29歳〕  
(34-0412)

私は8月10日に入市したので、それまでの状況については良くわかりません。しかし入市して見たものは、かって中支で味わった戦場以上の光景に、ただ啞然と

するばかりであった。焼け落ちた広島駅を中心に見渡す限りの焼野原。悪臭をともなう白い煙につつまれた、軍都広島が一ぱつ原爆によって壊滅したのである。

当時聖戦と信じていた国民は、みな戦争だからとあきらめと焦慮にかられていた。いま当時を思い起こし、聖戦と信じていた自分に腹が立つ。

〔広島 入市 男 29歳〕  
(34-1316)

- ①あの日、その直後（午前10時頃）郊外船越町に被爆者が次々と避難してくる。ただちに救護班を出動させ岡本病院に集結、応急手当に従事したが、思いがけぬひどいやけどにもだえ苦しむ患者に白い薬を塗り包帯をする。またたく間にくすりが無くなり包帯すら出来ず、泣き叫ぶ患者をただ呆然とみつめるのみ。一時的にでもけがのいたみをやわらげおさえてあげることが出来なかったのが心のこりで、40年を過ぎた今日胸が痛んでなりません。
- ②避難途中で次々と死なれて行った人々の火葬でした。海田市の田んぼの中にある火葬場にかつぎ込み死体を焼く作業には、子供の頃の記憶が目の前に見せつけられて、身も心もおののくあの地獄絵そのものでした。
- 火葬場に死体を運ぶ道端には、男女とも判別出来ない顔、静かに生死を確かめるひまさえない空襲警報下の作業でどうすることもできなかったことが残念で心のこりでなりません。

〔広島 入市 男 29歳〕  
(34-2905)

### ③ 30歳代（被爆時）

部屋の隅で、川の中で、その外いろいろの場所で、随分とむごい死んでいる姿をこの目で見た。生き地獄である。

また、投下日以降、毎日夕刻になると必ずくらい、たくさんの死体を集めて焼かれる有様が方々で見られた。

とにかく原爆を投下した人、投下させた人、戦争をおこした人がにくいばかりである。

〔広島 入市 男 30歳〕  
(07-0025)

私と家内と叔父等、広島に原爆が投下されて2日目の8月10日でした。原爆が投下され（当時私達は呉市に住んでおりました）当時は原子爆弾なんて知りませんでした。夕方になってトラックに乗った人々が衣服はぼろぼろに焼け、皮膚はやけどでまるでぼろが下がっているようになり、その下からどすぐろい血がにじみでているのが見え、これは大変なことになっていることを感じました。翌日になって新兵器爆弾を（原爆）だと知らされ、広島市は全滅だと聞かされ、広島には母をはじめ身内の者が多くいるので、さっそく呉駅に問合せを試みましたが、汽車は何日運行されるかわからんとのことでした。気持ははせれどもどうすることも出来ません。

翌日駅に問合せたら、広島駅より2つ手前の駅の海田市駅まで運行しているとのこと、さっそく呉駅に家内と叔父をつれて海田市駅まで行き、そこから徒歩で広島市にたどりつきました。舟入町の土橋に兄の家がありましたので、駅から兄の家まで行くのに、家らしきものは見えず焼残りのビルが2、3か所見えるだけで一面焼野が原でした。いかに原爆の威力のあるものかと初めて知りました。広島駅より歩いて目的の兄の家に行く途中、橋の上から川面を見ると、川の中には熱さに耐えきれず川に飛び込んだとも思われる人々の死体を、救助隊の方々がトビロで引きよせ土手に引上げていたり、まるで材木でも引上げる様は、とうてい涙なしで見られるものではありませんでした。また、生きている人もやけどをしていて気がくるって、ごみ箱のふたをだきしめて何を言ってるかわかりませんでした。子供をあやすような格好で歩いていたり、または水をもとめて助けをもとめる人や、そこら中死んでいる方々が、また、学童勤労隊の学生の遺体が路上にずらっと並べてあり、ただただ頭が下がる思いで、冥福を祈りつつ足を早めました。

〔広島 入市 男 31歳〕

(11-0145)

8月7日か8日の朝。水道補修作業に出かける途中、2米ばかりの道路の曲がり角のすみに立っている水道の蛇口の下で、タラタラとほんの少しずつこぼれおちる水を、顔をあおむけにして受けている子供がいた。シマの着物を着、3尺おびをしめた姿は、どこも焼けただれてはいなかったが、顔の色はうす黒くまんまるにどうぶくれた様子は、もう生きてるものとは思えなかった。私は連れに行った兵隊に「もうダメだ、片つけてしまえ」といいながら、焼却場へ運ぶよう指さした。と突然「ダイジョウブダヨー」と弱い声だが、必死で呼んでる子供をみた。

その時は、ああそうかと行き過ぎてしまったが、復員後、年が経つにつれ「ダイジョウブダヨー」の声が耳についてはなれなくなってしまった。

必死で生きようとしている子供に、面とむかって、片つけてしまえ、焼いてしまえと言ってしまった俺、どうしたらいいのだろうか。

〔広島 入市 男 31歳〕

(14-2501)

20年8月7日比婆救援隊東城分隊として広島へ入市、芸備線矢賀駅より先は鉄道線路が曲がりめちゃめちゃとなっており同駅で下車、第一に驚いたのは、広い市内見渡す限り白瓦の状態、建築物は全壊、わずか点々と鉄筋コンクリートの建物が残っていた被害の大きな惨状であった。

次に忘れ得ぬ事は、我東城分隊は横川駅に本部が有り三篠小学校に駐屯した。我々は校庭に藁であんだこもを敷いて寝起きしたが、校舎の二階の梁が落ち、半分傾いて落ち掛けた二階の板の床に所せましと、衣服は半焼、身体は焼けただれた人がいっぱい、わめき声をあげて苦しんでいた中に、四、五歳の幼児が全裸で盲目とな

り、全身自分の糞にまみれ、右に左にころがりながら泣き続けていた姿は、今でも忘れる事は出来ません。

〔広島 入市 男 31歳〕

(34-1331)

8月6日郷土を守る高田部隊の一員として赤紙の召集令状を受け、直ちに出動、可部町で露営し、翌7日早朝西部第2部隊の救護の任務につく。途中タイヤの無い自転車〔に〕またがったまま丸裸身の男女も判らない人が、橋の欄干によりかかっている死体を見た。路上にころがる死体見ながら悲鳴上げ何か探し求めている人、水道は破裂して方々が噴水状態、電柱は倒れ電線は垂れ下がり網の如く路上をふさぐ中を進む。衛門らしき所に若い女性が裸姿で目も見えないらしく石にしがみつ、我々の声をたよりに手さぐりで、救護の方ですか、救護班の方ですかと助けを求め悲慘な姿が40年経過した今なお脳裏に生々しく浮ぶ。

目的地についた正午頃だろうか、営門のまえの檜の大木は真二つにさけていた。低空で頭上を旋回する敵機の爆音に無防備の我々は、焼の原と化した広い営庭には避難の場所もなく、防空壕の入口はまだ木材が燃えていた、爆風で飛来したトタン板を頭に乗せて、おぼれる者はわらをもつかむ、あの心境であった。今に思えば国土防衛の任務にあった我々にとっては第一線の感がした。

無二の戦友は、おさななじみの隣の同年兵の△△君であった。行動を共にした。防火水槽の中に頭だけ見える兵士を鉄線で首をくくり棒切を通して引上げた事など。帰郷後も2人でしばしば語り合い追想にふけたものだった。彼は40年に手帳の交付も受けず、何の恩恵もなく他界した。長年の闘病に苦しんだ彼も原爆のためと思えば残念だ。

堀には多くの軍馬が頭をもたけては沈み、浮いては沈み、4日間の死体の整理の終る頃には大きな図体を浮べみな死んでいた。

焦げくさい悪臭のニギリを食べての作業も4日間で任務を終えたと記憶している。

帰郷するや西部2部隊に現役兵として服務していた弟が、すでに死亡したと思いに、櫛浜陸軍病院に収容されているとの報に接し、直ちに妹と2人で病院に向かう、B29の編隊は光工廠を爆撃して東方に向かっていた。夕刻病院に到着弟の顔を見

た、数日間も被爆そのままの顔は汗とほこりで見える影もなく、一糸まとわぬ哀れな姿であった後身は頭から足先まで皮を取った焼魚の如く、ケバケバの軍隊毛布にねかされていた姿は一入痛みを感じた。我等2人の手をにぎり大粒の涙と共に苦しさで耐えて待った肉親に会えたこと大声で喜び泣き叫んだ。右のベットにいた人は昨夜死んだ。左のベットは今朝死んだと悲しむ。毛布と焼身はピッタリと付き、痛さで起こすことも出来ない。火傷には大きなウジがうようよしている。ピンセットで取り除き赤チンキを塗るのが当時の手当であった。医師も看護婦も少ない。

周囲の傷兵の面倒も見た。親へ知らず代筆も何枚も書いた。京都の親に早く知らせると泣いて頼まれた。投函して帰ってみればすでに息絶えていた。水の給与は禁止されていた。目玉の飛出した傷兵が看護婦さん水を下さいと叫びつつ夜中に廊下をはい歩く。ぞう巾バケツの水滴をすする。ぞうきんをかみしめチューチュー吸っている姿は地獄の様相であった。昼夜の別なく火葬場へとタンカが行く、不用の毛布が日々積上げられる。病窓より見える火葬場の煙は絶え間がない。終戦の玉音をきいた傷兵は痛さも忘れ起き上がった。難儀かった。つらかった。日本は負けたか、ほんとに日本は負けたのか、悲しそうな叫びで院内はそうぜんとした。

自分も食欲なく熱に冒され、傷兵と同じく病院の厄介になった。弟とベットをならべていた自分も遂に発熱し、22日未明弟は息を引きとり運び去られたことは自分は知らない。そばにいながら最後まで見てやることが出来なんことが残念です。立ちのぼる煙に別れを告げて帰郷し、3カ月余り通院した。

妹も4～5年病床で苦しんだが、手当や手帳の交付も受けず遂に他界した。

再び戦争はあってはならない。

〔広島 入市 男 31歳〕

(34-3637)

市内の倉庫に向く途中、太田川の川端に、もう進むこともできない人達が5、60人いて、水をくれと口々に叫んでおられたが、社命により出掛けるころなのでゆるして下さいとお断りし、先を急いだ次第ですが、何もしてあげることができずに過ぎ去ったことが、心に深く残っています。

〔広島 入市 男 33歳〕

(24-0029)

水主〔かこ〕町で被爆し、ただ一人残った妹婿の母親を呉に連れ帰る為、身内の者で大八車を引いて7日夜呉を出発、8日朝、避難先の江波の海岸寄りの防空壕に着いたが、朝から帰途につく午後3時頃迄の間に、4、5人はいた被爆者の中で2人の人が、朝なんともなかった普通の人が昼には顔や手等が赤紫に腫れ上り、私達が帰る頃には頭の髪が垂れ下り、手や顔の皮膚が垂れて落ちていった。一人はまだ生きていたようだったが、一人は死んだ。他の人はただなすすべもなく手をこまねいて見ているだけだったが、見ている間に容貌がまったく変わって行く姿は、息を呑むようなショッキングな事でした。

〔広島 入市 男 34歳〕

(34-0676)

8月6日午前10時頃召集令状が来た。家族や地区の人達に送られて、午後3時頃山県部隊八重分屯隊に入隊した。

翌7日広島第2部隊に到着した。途中三篠橋の川岸には大勢の人が焼けただけ、折り重なってほとんど死んでいた。2部隊の附近は一面焼野原になり、どこがどこやら見当がつかなくなっていた。山々からは煙が立ち、周りには被爆死した人や馬がたおれ、目のやり場がない悲惨なものであった。私達の任務は生存者を收容する事や死亡者を一定の所に集める作業であった。無我夢中で命令の通りに作業したが、なんといってもこれがこの世の中の人間のする事なのだろうか、ほんとうに戦争はしてはならない、なんで、だれがこのような馬鹿げた事をさせたのか、残念でならなかった。

8日になってソ連が参戦したとの事で除隊命令が出て、即日帰郷した。

戦争はしてはならない。特に核兵器を使用する事は絶対あってはならない。  
私の妹も直爆で死亡しました。可哀想でなりません。  
(妹は他家に嫁に行っていたので死没者欄には記入していません)

(広島 入市 男 34歳)  
(34-1554)

私は当時高田原消防団員でございました。

8月7日朝早く団員全部で智徳橋に集合し、トラックで行き横川橋に着きました。  
見わたすかぎり焼野原で言葉では言い表わせないほどでした。

私の一生忘れることの出来ないことを申します。

どちらを見ても、見わたすかぎり焼野原で、死んだ人、けがをした人。その時横川橋の所の組合の前で、女の人がけがをして今にも死にそうに苦しんでおられた所に軍服を着た男の人がこられ「よく生きていてくれた」と会われたが、間もなく死なれました。

また、九州から20日前広島に来たという兵隊さんが、横川の土手の下で家の焼跡を探しておられたので、聞きますと、奥さんと一緒に来ていて、その奥さんは出産間近ですのに家の下敷きになられたのです。私も一緒に探していますと木の下で見つかり、奥さんを引っぱり出そうとしていたら腹がやぶれて赤ちゃんがコロリと死んで出て来ました。

今でもお父さんの前で亡くなられた娘さんのこと、また奥さんも赤ちゃんも死なれた兵隊さんのことが目の前に見えるようで、一生忘れることが出来ません。二度とこのような悲惨な戦争があってはならないと思います。

(広島 入市 男 36歳)  
(34-3527)

5米くらいの広い幅の道路に前進できないほど多数の死体（20体くらい）が、原爆投下後二日にもなるというのに、何等の手当をほどこすことなく放置されていたことは、人間社会の全機能がマヒ停滞していることを物語っており、想像外の被害を蒙っていることを直感した。—当時は特殊高性能爆弾と新聞報道していた—悲惨という思いがマヒしていて、死体の間を飛ぶようにして歩いて行ったことが、四十年後の今日なお臉に焼きついている。

〔広島 入市 男 37歳〕  
（29-0018）

当時私は山県郡加計町山県地方事務所に勤務していた。原爆投下の翌日、県庁応援のため同僚数名と広島市に入市する（加計町よりトラックで横川駅前下車、徒歩で入市）

1. 横川橋（木橋）を通過するとき、南側の欄干は吹きとんでいたが北側の欄干は残っており、1人の男性が自転車にまたがっていたまま欄干によりかかり爆死した状況を見、爆弾の威力を感じた。
2. 西練兵場を通過中、倒れた建物の蔭から「助けて……」と子供の声があったが、その時「B29」の空襲警報が発令され助けに行くことができず、間もなく死んだことと思うが、何もしてやれなかったことが今も心残りである。
3. 八丁堀では、防空壕に這入りかけた人が下半身が黒く焼けて四ツ道いになっていたのがいたましい感じがした記憶が今なお残っている。
4. 県庁の空爆の際の疎開先は、山口町の合同貯蓄銀行となっていたので、そこで若干の打合せ等があり、県知事の告諭を市内に貼付して廻ったが、至る所の建物の残骸の玄関や軒下に被爆者の死骸や重傷者がおかれてあり、炎天下で全く地獄の様相であった。

〔広島 入市 男 38歳〕  
（34-3022）

④ 年齢不明

いやだ、原爆は。あのすさまじさ、何十年たっても忘れられない。  
水を一杯のませてやりたかった。

〔広島 入市 男 年齢不明〕  
(40-0996)

b) 女

① 9歳以下(被爆時)

私の家族は幸いに軽傷ですみましたが、姉の嫁ぎ先の姑や主人は大変なやけどとガラスの破片が体の中に入り、その後遺症で今でも不自由しております。姑さんが1ヵ月目に亡くなりましたが、その時は半身やけどで動かすことが出来ず寝たきりで、亡くなった時は、背中にうじがわいて布団を通して畳までくさっていました。その時の様子を思いうかべ悲しみと恐ろしさで、二度とこのような事のない平和な日本でありたいと希望します。

〔広島 入市 女 8歳〕  
(28-0139)

小学校3年生だったので、自分の家がどうなっているか、そればかりみたくて、母親に連れられて自分の家を探すのですが、煙がたっていて方向がわからなくて、死体をまたいだりしてさまよったことをはっきりおぼえています。

くわのようなもので、ゴミでもよせ集めるように死体を扱っていたことが、いたいたしく心に残っています。

〔広島 入市 女 9歳〕  
(27-0445)

## ② 10歳代（被爆時）

ア) 人びとが毎日何人も死んで行く。そしてならべて焼かれているのを見て、可哀想だとは思いましたが、私は救護に行っていたのでたくさんの人々を見てしまったから、もう一生懸命やって、義務だと思ったから、それほど感じていなかったようです。

イ) けが人が、夜中でもねえちゃん水をくださいと言って、私たちのねている所へ来ると、頭から体まで真白いので気味が悪かったことをおぼえています。

ウ) 毎日手おし車で、市役所へたべものをとりに行って、大豆ごはんを作って、おわんに入れて、けが人にあげるのが私たちの仕事でしたから、それをずっとやって来たから、別に心のこりと思ったことはありません。私はそれを友達と進んでやったことが今ではよかったことだと思います。

どこのだれが死んだか、生き残ったかなど、私たちはわからないし、思い出したこともありません。ただ2週間の救護期間の任務をただけです。

〔広島 入市 女 15歳〕

(13-03-017)

キノコ雲、8kmばかり離れた場所におりましたので、はっきりと目に焼きつきました。未知のものへの恐怖と共に、美しさ（その時の悲惨な状態もまだわからなく、16歳の幼さもあり）を感じました。しかしあの時、美しいと感じた気持が、今にて自己嫌悪となって心にのこっております。

家族を探しに行く道中、力つきて道に横たわった人たちが、水を下さいと手をさしのべておりました。しかし水を飲むとショック死すると言われ、目をそむけるようにして通り過ぎました。彼の人たちは間もなく亡くなられたことでしょう。思いきり飲ませてあげたかった、これも後悔の一つです。

無数に横たわった黒こげの死体をまたぎながら、歩き廻りました。やっとたどり着いた我が家の跡地、中心地から1km足らずの場所で、焼けこげすら残っておりません。数体の白骨があり、母が娘の遺骨を確認するため、頭蓋骨に手を入れ、頭の

形を調べておりました。あまりの惨劇にショックで、恐怖も悲しみもありませんでした。

〔広島 入市 女 15歳〕

(13-10-039)

被爆後広島市段原高等小学校に行き、窓も吹きとび、大きな学校の中には何も無い所で、看護のために被爆の人々と生活を共にしました。白いエプロンをしていまずと皆看護婦さんに見えるらしく、(看護婦さん看護婦さん)と呼びつづけ、小さな男の子がお水を頂戴……と叫びながら、あくる朝冷たくなっていました。一人の婦人は子供さんの学校へ迎えに行くと言って叫びつづけます。でも腰の所に穴があいたような……そこから夏のことだからうみが出ていて、誰もよりつけません。

(子供が子供が……迎えに行くからここを出して)半狂乱に叫びながら、でも数日後、声は聞こえなくなっていました。二度と思い出したくない事です。

どうぞ平和な日本が続きますよう祈ります。

〔広島 入市 女 16歳〕

(11-0106)

○被爆者仮収容所は、患者に治療らしきことはできなかったのであろう、火傷の皮膚は垂れさがり、むけ出た肉は黄ばみ、づくづくとして臭く、ぶつぶつにもりあがった状態のままだった。薬を塗った様子もみえず、包帯らしきものをつけた人もみあたらなかった。

くすりを一、医者を一と叫ぶ声と、苦しい呻きに、女性の泣き声が混ざりあい、傷のない人間にとっては、身の置場も目のやり場もなく、ただただ恐ろしく、全身が震えるばかりであった。

○また、仮収容所（学校）での夜あかしで、息がきれる順に校庭の西の方であろうか、肉親の立合いもなく運び出され、犬猫同然に「焼かれ」ていたのを見た。あまりに大量殺人で「すべ」なしであったのだろうと思うが、県外から入ったものにとっては、広島だけが置きざりにされているような感じをうけた。投下されて10日を過ぎた頃のことである。

○終戦を知りながらも、この世を去らなくてはならなかった人たちは、どんなにやさしい思いであったか。そして、あの叫び、呻きが、40年を過ぎた今も耳もとを離れない。

〔広島 入市 女 16歳〕

（17-0009）

当時16歳の少女であった私にとって、あまりにもひどい惨状は筆舌に尽くしがたい。裸の人が多く、衣服をつけている人はみなぼろぼろであった。

収容された人達は学校の板間にゴロゴロと、まるで芋でも投げ出した様にコロコロがっていた。数百人収容されたケガ人に医者は1人看護婦1人で、薬と言えば赤チンキだけで、手当の施し様もなく、火傷に赤チンキを塗ったり、身体にささっているガラスを抜いたり位の事で、水をくれ水をくれと叫びながらバタバタと死んで行った。

私達は、校庭に石を積んで作られたカマドで、おかゆ（米つぶはかぞえる位しかないもの）を作り、バケツに入れて食事として朝・夕2回配給したが、1人に1パイと梅干が1コ、食器と言えば焼けただれた空かん、廻って行く度に何人かの人が死んでいた。中には、外傷は何もないのに鼻血がとめどもなく出て亡くなった男の人、幼い子供が背中1面火傷で、身寄もなく1人淋しく死んで行った。

盛夏の8月の事、そのうちケガ人の火傷にはウジが湧いて来て、傷口をめくるとウジが団子になって動いていて、その臭気と残酷さは今でも忘れる事は出来ない。

年はも行かぬ50名足らずの学生が行き、5、6名に分かれて各収容所に行ってお手伝いするには、あまりにも多くの病人で、食事出来る人は軽傷で、食事出来ない人が多く手が廻りきれないで、ほとんど何もして上げる事が出来なかった事

は心残りに思うが、地獄とはあんな事を言うものと今でも思っている。2度とあってはならない。見てはならない。

〔広島 入市 女 16歳〕  
(20-0035)

当時義弟は広島市三篠本町井上様方に下宿し、市役所に勤務通勤していました。

原爆投下の報を知りましたが、何の様子もなく避難して帰らず、弟と8月8日に市内に入りましたが一面やけ野原で、その悲惨さは言葉もなく、所々に漂う悪臭とポッポッと煙が見えても、涙も出なく、のどはかわき脱水状態の様で、ようやくの事で下宿先にたどりつきましたが、そこにもおらず、家族の方も被爆しておられ恐らく、電車の中ではないかとの事で、しかし望みを持ち宇品の収容所に行きましたが、そこにもなく2日後吉田へも行って見ましたが、名前を見出す事は出来ませんでした。1、2年は死を認める事も出来ず、毎日の様に消息を待ちました。

この他従兄弟の被爆後の苦しみ、食料なく、薬もなく、うらむ力もなく、その苦しさにまけ、死んでいった姿は忘れる事は出来ません。

〔広島 入市 女 16歳〕  
(32-0049)

救護に行ったこわれかけた学校で、床の上に敷物の上に寝ている人はよい方で、何も無い床に皆並んで横になっている中に、まる裸の中年の女の人がありました。火傷のためか全身がふくれ、そのくずれた傷口にハエがいっぱいいたかっておりました。周りの人が多分かけたのか新聞紙が一枚かけてあったのが、すごく心に残りました。私もその頃の事とて着替えなども持たず、学校から皆で広島へ救援のため出たので何もなく、今だったら、また広島近辺に住んでいたのなら、ゆかたの一枚も持って

行ってかけてあげられたのにと、女であるがゆえに余計、まる裸ではれあがった身体を横たえていたその人が気の毒で、いつも原爆の事を思う度その情景が目には浮かんでなりません。多くのけがの人をまのあたり見た経験は、その後遠縁の人が火事で顔や手を火に吹かれて火傷で病院に行った時も、つきそいで行きましたが、若い医者がおろおろして手当を早くしないのがもどかしく、原爆の時のけがはこんなものではなかったと、気強くそばにいてあげる事が出来ました。原爆といえばその時の女の人が気の毒に思い出され、何も出来なかった事が心にひっかかりとなって残ります。

〔広島 入市 女 16歳〕  
(34-1409)

死んでいく人々の死に方。

死ぬる直前まで、意識があまりにもはっきりしていたこと。

〔広島 入市 女 18歳〕  
(27-0086)

広島市外中山の小学校の近くから五日市まで、電車通りを歩いて行きました。その道中で見たことは、一口には言うことも、書き表わすことも出来ないような、思い出すのもこわい事です。

電車、自動車、馬車、馬、人、犬、木、小鳥に至るまでやかれ、たおされ死ぬ。そして生あるものは水を求めて苦しんでおりました。その中を暑さでふらふらになった私は何もして上げられず、あるいて目的地に1日ばかりでついたのです。

〔広島 入市 女 18歳〕  
(34-2312)

人の命が終わった時、生きていた証しとして哀惜の涙と共に野辺の送りをいたします。今日葬式がある度に思い出します。あの日の夕方。郊外の自宅近くの神社の境内は、多くの火傷や大怪我を受けた人々が苦しみながら横たわっていて、婦人会のお母さん方が交替で介抱しておられました。二日、三日と過ぎてだんだん人数が少なくなって行きました。四日目あるいは五日目だったのでしょうか、私は見たのです。亡くなった人達を大八車に乗せて引いて行くのを。小さなむしろからはみ出た何本かの足は垂れ下がり、ずれた黒紫の腕が車の輪にこすられ、ゆられて、きしみながら行きました。母が言いました。今日もう7回目だよと。あれが野辺の送りなのか。

人が人らしく生き、そして人らしくその一生を終えるのには、平和でなくてはならないと思います。そのためには、核は必要ありません。

〔広島 入市 女 18歳〕  
(34-3409)

## 1. 妹の死について

頭部のケガ（縫合何針か）8月29日頃より体に黒い斑点出来、髪の毛すごく抜ける。40℃以上の発熱続き時々うわ言「ピカッ、こわい、こわい、大きな光が、早く逃げなくては、大切な物持ってる」と袖を引っぱり続ける。高熱一週間続き、その間鼻血歯茎の出血続き、しまいには洗面器にドロドロの血を箸で鼻からとりいっぱいになる。9月7日死亡。ほとんど気は確かで皆側の者に礼を言い、死にたくない、死にたくない、早く学校へと手を合せ、線香を、の言葉を最後に18歳の生涯を終わりました（当時代用教員）。死後間もなく、傷の後、鼻よりウジが出て来て取ってやり、可哀そうでした。最後を見守る事出来たのは当時幸せとあきらめました。

2. 御近所の方も元気な方が当時、髪の毛抜け、ハンテン出来、次々亡くなられました。母も全くその通りで、肝臓、心ぞう、白血球1万以上〔に〕なり、認定患者となり、永年苦しみました。私も鼻血がよく出、とても不安に過ごしたものです。神経質になりました。

### 3. ケガの人、ケロイドの人、思い出す度、頭の痛い思いをしました。

〔広島 入市 女 19歳〕

(27-0147)

原爆の翌日、父をさがして母とともに歩きまわりました。川にはまだ牛の死がい  
が横たわり、裏通りには皮ふのたれさがった人がうつろな目で立っていました。あ  
ちこち煙も少し目にうつりました。横たわった死体がもしや父ではないかと、さが  
しまわった時は地獄のようでした。また今では考えられない道を夜通し歩いて疎開  
先までたどりついたこと。そのため私と行動をともにした母は、原爆病はもとより  
あらゆる病気で苦しんで、44年になくなりました。私は幸い健康ですが、いつ病  
になるかと不安です。

結局さがし求めた父は、一年後建物の下の土の中から遺骨となっていました。そ  
れははからずも胸にあった名刺が残っていたからです。子煩悩の父は二人の男の子  
が大学に入学するのをたのしみにしていましたので、死に切れなかったのしょう  
か。

〔広島 入市 女 19歳〕

(33-0033)

### ③ 20歳代（被爆時）

8月8日私たちの乗った列車が、原爆投下後初めて広島ホームまではいったと  
聞きましたが、もう8時（午後）頃だったか、日はトッピー暮れあちこち方々で火  
が燃え、そのあかりで1人の老婦人が息子？の名前を気ちがいのように、もはや発  
狂していたのであろうか（ケンイチよー出てきてくれ、〇〇が可愛かったら出てき  
てくれ）と泣きさげんでいました。ただ1人焼け野原にたたずんで。駅へおりた

ち、横川の駅前の臨時広島警察西署へ向け、松原町へ入った間もなくの風景が、幾年たっても脳裏にやきついています。

直径10mもあるような穴に、死亡者を投げ込み焼いていた。

幾百とも知れぬガラスが背中に突きささり、寝ることも出来ず、半分天井（二階か）の落ちた校舎（大芝国民学校）の床でウメキ、校庭では、たおれている老人がフラフラと立ちあがり5～6歩歩いてまたたおれ、そのまま動かなくなる等。火傷が化膿し、ウジが巣をつくり、手当をして上げようとすれば（ウミを食べてくれるからいいんです）と言う少女。

8日～13日までの6日間の出来事は、一口では語り尽くすことは出来ません。「水をください」の声を幾百回聞いたことか。

〔広島 入市 女 20歳〕

（24-0002）

原爆の事を思ったら自然に涙が出て頭がいたく、はちまきしないと頭の中から外へぱっと血が出るような気分になる。

また私の兄が爆死したと県庁から通知があった。県知事さんは楠瀬さんだった。死体は見ておりませんが、父と入市しましたが、広島町の町は一しゅんにして地獄絵を見るごとく、助かった人が不思議で、死んだ人があたりまえのような気がしてなりません。

9日に入市し14日にも入市しましたが、よくもこんなに早くかたづけられたとその時は思いました。何もが焼けてないので、亡くなった人のお骨を瓦の上にのせて置いてあったのを思い出します。県庁の警務課の中で頭、手、足をほうたいをして忙しく事務をしておられた人など、たくさんおられました、その人達は元気でおられるでしょうかと時々思い出します。

なるべく原爆は思わないように、二度とこんなことをくりかえさないで下さい。今年男の子、孫を連れて8月6日に原爆にお参りして行きましたが、孫二人が二度と来る所でないと言っておりました。書きたい事はたくさんありますが、何分つかれやすいのでこれ位に置きます。

〔広島 入市 女 20歳〕

(34-1126)

編成された救護班の一員として、被爆者を看護しながら妹の行方を探し、毎日行動していたので、今思うとぞっとするほど自分自身疲れていたのに、周囲が余りにひどいので、自分のことなど問題にならなかった。看護婦ではないから治療は手伝えないが、せめて息のある間にいろいろな事を聞きとって記録（名前や家族への伝言など）しました。

ボールのようにふくらんだ顔、どの顔みても全部同じ人相に見え、体中大やけどなのに話が出るのが不思議でした。

水を下さい、水を下さいとつぶれた目で人をさがし、飲ませてあげる方法もなく、欠けた茶碗で雨水のように上からポタリポタリとたらしながら、数えきれない位の人にそうしてあげました。

1週間も経った頃には、救護班にも薬も包帯もなくなり、背中にグサグサガラスの破片が突きささった患者が、自分で歩いて手当を求めて来たりしても、どうもしてあげられない状態。

まぐろのように地面にころがっている人の体は、生きているのにウジがいっぱいで目をそむけるばかり、私は原爆の写真を見たり、話をしたりするのは未だに嫌いです。

〔広島 入市 女 21歳〕

(13-03-011)

父を探しに広島駅へ1、2時間後に行きました。

火傷で精一杯生きのびたであろう旧中学生徒が、1人2人と「お母さん」と一声、ぱたぱた倒れて行くのがほんとうに生地獄そのまま忘れられません。

後で親が子供をさがしに行っても、子供はどこで死んだのやら分からないようで

す。若い学生の悲惨、忘れることが出来ません。

〔広島 入市 女 21歳〕  
(20-0026)

中国塗料五日市分散工場へ学徒動員の生徒を引率して、今日も暑い日になりそうと朝礼を終えて各部所に向かう。8月6日朝、とたんにパーアッとマグネシウムを思わず光があった。いそいで控室の厚い机の下に皆んなをもぐらす。空に雷のような巨大な稲妻がピューと下りてきた。ドカンと大きな音とガラス窓が割れ、ぐらっときておわり、何事もなかったと思い、そのまま仕事をはじめさせ、私は山に上がった。巨大なきのご雲。火柱の所は石油が燃えるように高く太く、目の前で見えるようだった。広島市だということで情報を待つ。

5時己斐に着く途中怪我人で道ばたはいっぱい、町から出てくる人の姿は顔がはれ、目は見えているのか？手をひろげ、灰色のはがれた皮膚がぶらさがり、歩くというよりふわりとおされているよう、通りいっぱい亡者が出来た思い。

千田町の所で母と妹に逢う。生きていてくれたので7日過ぎ別れ五日市に帰るためタカの橋まで来た時、ズボンの裾をつかまれ「水をくれ」と言われ何もして上げられず、兵隊さんと呼んで来てあげるとウソを言いはなしてもらう。とても悪いことをしたと思うが仕方がない。だんだん暗くなり通って来た道が冷たくなったのか、歩いて行けなかった人達がイザリ出ている。動いている人ではまたつかまると思い、静かな人をまたいで行く。真暗の通り両側は燠の山。電柱がもえて電線がぶらさがり、青白い火がポロポロともえてその薄明かりで見る姿、ウメキ声（カスカニ）、明治、住吉、観音橋と一人で暗闇を、私も地獄に来たようで身の毛の立つ思いだった。

翌日から生徒の家族、担任の一年の生徒の死体探し、救護に歩く。橋のある所は川巾いっぱい何列にも死体がひっかかり、どの人を見ても苦しかったのでしょう、手の指は何かつかむようにもだえていた。昨夜の通りの人は皆んな死んでいた。

市内は己斐からまる見え、焼野が原、もう何もその時は感じなかった。ムシロやトタンはかけてある死体を探す。死臭がひどい。蠅がたくさん出て来てからだ中に

止まる。せっかく見つけた子供は、首がザクロのように口をあけウジがポロと落ちて、半裸の傷だらけ、目は見えないが声は出る、（お母さんを探して）とさけぶ。その子の家族も探したが傷で動けない。二日後その子は死んでいてそこにはいなかった。涙が出て仕方がなかった。

夜になると、あちこちで死体を焼く火が無数、毎夜のように見える。風の吹き方で焼ける臭いがキツク、その臭いはまだそのままになっている。人・畜と腐る臭いと共に、現在も何かそれに似た事故や火事を見ると匂ってくる。私一生はなれない臭いとして残ると思う。

二度と見たくない悲惨な状態を私達は見て来た、今現在の人々には見せたくないと思っている。

〔広島 入市 女 21歳〕  
(25-0002)

ああ生地獄……思い出せば胸が痛む、広島市は廃虚となり異様な陽炎のもえる様子が今も私の頭にくびりつく。ほんとうにいたましい。広島駅前電車3台の通路、腰掛の骸骨は形をとどめたまま静かに置いた格好、何とも云えぬ。

ビール瓶があめの様にとけて山のようになった様子、また塩の間屋らしい所の焼塩の山、何とも云えぬ。井戸の中であおむけになって死んだ男の人の水死体、顔、手、足、ふくれてすごく大きくなっていた。

人間の焼けた所の瓦の色は、他の焼けた色との違いをはじめて知った。油じみた色だった。

長崎へ投下した日なので、広島の上空にB29らしきが来た。私達はごうらしき所でしばらく避難した。

この紙面には書き切れぬ。

人類のなすべき行為ではない。めざめてほしい。静かに合掌す。平和を念じて。

〔広島 入市 女 21歳〕  
(32-0136)

的場町の太陽館横に被爆者がたくさんいて、その中の人水がほしいと言ったので飲ましてあげたら、熱いから本当の水（冷たい水のことと思われる）をくれと言われたので驚いた。その人は真黒に焼けて男か女か判別がつかなかった。再びそこを通った時には、その人は死んでおられたような気がする。

私は当時、被爆したと思われる義兄を広島中をさがしても見つからないため、気もあせっていたので、なくなった人の名前を聞いて家族に知らせる親切心を失っていたことを後悔している。

電車を歩いて胡町まで来て、ふと勸業銀行の中をのぞいて見ると、被爆して真黒くなった人がたくさん横たわっているのに、物音一つ無くシーンと静まりかえっていて、何か無気味でした。真黒くなった人達は大人と思われるのに、丈は1m位に小さくなっていました。そこには子供の姿はないので、きえてしまったのではないかと原爆のおそろしさを知った。また西練兵場に、風船をふくらましたようにまんまるくふくれあがった馬がごろごろころがっていたのには驚いた。

〔広島 入市 女 21歳〕

(34-4179)

私の主人と母とで（皆実町）リヤカーで己斐小学校まで、当時広島一中三年生の弟をさがしに行ったが、6日にはおなじように包帯をまいた死体でごろごろころがり、うめき声でお母さんお母さんだった。7日また行き、水道の所で千人針で△△△△と書いた腹まきが見えたのでだきかかえたところ、死んでいたのに鼻血を流し、肉親であることがわかり、今もなお胸がいっぱいです。

下の弟は一中一年生でしたが出血大量のため、いたいですよ、いたいですよと息をひきとりました。

父は首から上、両腕、両足ずるずるにて蛆虫がわき、毎日看病しました。

原爆の恐ろしさ、すさまじかったことが忘れられません。当時の広島は阿鼻叫喚、阿鼻地獄でした。一生忘れることが出来ません。

〔広島 入市 女 22歳〕

(27-0268)

此の世とは思えないむごたらしさ、直爆者のありさまは目、耳をおおいたく、思い出したくない。

夫の8月2日の入隊に世話になったり、そのために建物疎開の作業日を変えたため被爆死した叔父叔母への申し訳なさ。夫を探すことのみにかけて、叔父叔母の被爆の様子を知り得なかったこと、申し訳なさに心を苛まれている。

40年経った今も後遺症になやまされている人々。明日にも原爆症が出て来るのではなかろうかと、おののいている私達です。

〔広島 入市 女 26歳〕  
(34-3525)

#### ④ 30歳代（被爆時）

暑さのためかそれとも水ほしさにか、川に浮いている死体を見て、助かりたい一心で川に入ればと思ってとびこんだのだと思われませんが、その時は川の中でたえて助かるだけの体力もなく、力つきておぼれて死んだ方々だと思われます。

何とむごいことをと、その時はアメリカの鬼ちくのやり方に思わずいきどおりを感しました。ただただ亡くなられた方々の冥福を祈りました。

水をほしがる被爆者の方々に水を汲んでやることも出来ず、せめて何等かの方法で水をあげられたらと今でも後悔しております。助けることが出来なくても水の一滴ぐらいと思いますが、その時は気持ばかりはやっけて、水も探しあてることも出来ず、本当に申訳なく思っております。

〔広島 入市 女 30歳〕  
(11-0146)

市中で原爆の被害を受け、かろうじて避難した主人に海田で会いました。頭部に怪我をしていましたので一応私が怪我の処置をして、一緒に両親のいる胡町に向いました。(今思うと原爆に会い海田まで避難して来た主人、身体がだるくつらかったことと思い、死を早めたのではないかと今では済まなく詫びています)

国道には広島から逃げて来る人でいっぱい、衣服も爆風で破れ、頭髪は焼けちぢみ、顔、手の皮膚はブラ下がり、血とゴミで男女の区別も出来ないような人達。道端にふせる母親が死の状態にあるのに乳を求める赤ん坊、またのませようと努力するお母さん。私は手伝ってお乳がのめるような状態にしてあげましたが、本当に気の毒でした。あの母子はどうなされたかと時々思います。硬直した女の4歳位の子供、顔も身体も黒くこげて死んでいるのに、高々と抱いて死んではいけないと叫ぶお父さん。全く気の毒でした。水々と叫ぶ重傷者、苦しかったと思います。死を早めたかも分からないけど、あげた方がよかったように思う。水を求めた人の声はまだ耳に残っている。

流川の勸銀の所に避難していた父。近所の病院の先生も一緒に海田の家にお連れしましたが、夜ねていても、子供のお父さんお母さんと呼ぶ声が耳にしておることが出来ない、夜明けを待って胡町までとぼとぼと歩いてお帰りになりました。恐らく子供さんは、お母さんと一緒に家の中ではさまれて焼死されたものと思います。

先生も間もなく死去されたように聞いていますが、親子のきずなも強いものだと思います。

〔広島 入市 女 30歳〕  
(34-4174)

己斐国民学校で廊下いっぱい死者が並んで死んでいた様子。運動場に一列に穴を掘って死体を順々に火葬していた様子。木陰で鉄色でマルワ切り〔ママ〕鉄のように硬直して死んでいた軍人。火傷をして着物もまともわず真白い薬(?)をぬって貰って道路を歩いていた人等、思い出し今でもぞっとする。

日赤病院でたまたま子供(原爆死)の学校(広島県立二中)の生徒(ハダカでパンツだけ、二中の校章の着いた帽子をかぶっていた)にめぐり合った節、我子のよ

うにかわいく看病してあげたかったけど、自分の子供を探すためそれも出来ず、でもせめて持っていたトマトを食べさせ、住所はどこ、と問うたら、能美、と言ったので、能美の方どなたかいらっしゃいませんかと1時間歩き廻りましたが、皆もうそれさえ聞こうとせず、自分の親兄弟を探すため、私も仕方なく立ち去りましたが、翌日どうしても気にかかり、また日赤へ寄って見ましたら倒れて死んでおられました。私は泣く泣く合掌し、御めいふくを祈り、私の息子を探すべく後髪を引かれるような思いで立ち去りました。

〔広島 入市 女 33歳〕  
(34-0691)

医療救護のため本川国民学校で救護活動していた時、今も強烈な印象として残り、あの時とった処置が正しかったか否か、40年経った現在も、是非不明のままの一つの悩みとして年毎に強く感じられる。

8月13日頃だったと思う、夕方3人連れの患者が来た、母と兄弟である。母親は可愛い我が子を何人も原爆症のため失っている。2日前にも弟1人を失った。此の兄は市外にいて良かったが、弟の方は市内で被爆したので今晚はとても生きてはいないと思います。誠に勝手なお願いで申し訳ありませんが、注射一本で安楽死させてやって下さい、お願いします。今迄同じ症状で亡くなった子供の最後、苦しみは親として見るに偲び難く、どうせ明朝迄の命ですから。親も、兄も、弟本人もお願いします、と言われた時、△△先生はじめ皆んな顔見合わずのみ、誰も引き受ける人はいなかった。夜明け方母親と兄が来て、3時過ぎになくなりました、私共の愚痴を良く聞いて頂いて有難うございましたと、深く頭を下げた。延命の策は何とでも出来るかと答えた。是非について答えは出ない。

〔広島 入市 女 38歳〕  
(34-1112)

⑤ 40歳以上（被爆時）

あの収容先での皆の苦しみの阿鼻叫喚、今でも目にやきついています。肉親をさがしもとめて尋ねて来る人や、今日もあの人死なれた、あそこにいた人も死なれたと、目のあたり見ながらどうして上げるすべも無く、私の孫も亡くなりました。

ほんとにこれこそ生き地獄の苦しみとは、なぜこんなめに合わなければならなかったのでしょうか。

私は呉市内に居住いたしておりましたが、呉で戦災に合い家財道具みなやかれ、やっと命びろいだけして田舎へそかい中の出来事。

〔広島 入市 女 44歳〕

（34-4150）

○私には2人の弟がおりました。一人は原爆投下後すぐ、広島に勤務していた息子を探しに行きました。一人は原爆投下後の後片付けに召集されて行きました。帰ってから2人は口々に、こんな激しい破壊は言語に絶するもので、その悲惨さは目を覆うばかり、夜寝てからも夢にまで見て一生忘れることが出来ない、この世の地獄を見て来た、と、話していました。

私もその話を聞いて被災者や家族の方に思いを馳せ、胸を締めつけられるような悲しい思いをしました。2人の弟はすでに亡くなりましたが、広島や長崎の被爆者や家族にとっては戦後は終わらず、また永久に終わらないでしょう。

○またこの原爆で、家族の一員として可愛がっていたカゲの馬を一匹失いました。息子を探しに行くのに食糧や日用品等を積んで、当時は自動車など無い時代なので、馬車に積んで行ったのです。ようやく探し当て一軒の農家に宿をとり床につきました。夜中に目が覚め馬小屋を見ると馬が見えません。これは大変と早速警察に頼んで探していたら、横川の方にとぼとぼと我が家をさして歩いていたのです。これこれ夜が明けてから一緒に帰ろうと、また宿に引返して寝ました。しかし夜が明けて馬小屋へ行って見ると、そこには元気な馬の姿はなく横に倒れて死んでいました。炎天下長い道中に、疲れと放射能に犯されて力つきて命が絶えた

のでしょう。可哀そうな忘れられない馬の一生でした。

〔広島 入市 女 53歳〕

(34-2804)

⑥ 年齢不明

敵機の来る中を船で五島より長崎港魚市場へつけ、城山まで歩きユビの口へ、電車が半黒く焼けて人が黒こげになって、思い出しても寒けが致します。道中でハダカの人が、水下さい早く、と何人の方々から申されましたでしょうか。五島から持って来たユデ卵、お芋等差上げたり、またおやすみになってる方が多くありましたが無キズで亡くなっていらっやいました。川の中にはたくさんの人が重なり合っ可哀そうです。

鎮西学院のがけ下では、馬や人が真白くなってお骨、昼ねのままの姿でした。竹の久保の入口では、昼食時のおぜんがあって家族が4人マッ黒で、ウスがありキネを持った人が半生で、これでお許し下さい。

主人と養女をやっとの思いでさがしました。五島より手伝人が6人程です。

冷水を差上げる事が出来なくて申訳なく思っています。

女学生の方が服が半焼で、戦争等ゼツタイにイヤです。お願い致します。

〔広島 入市 女 年齢不明〕

(28-0301)

Ⅱ. その他

a) 男

当時のことは思い出したくありません。それに書きたくもありません。思っただけでも当時の生地獄を思い出して夜も眠れません。

ごかんべん願います。

〔広島 救護 男 17歳〕

(34-0418)

救護部隊の数より怪我人がはるかに多いうえに、医療不足、收容場所不足が重なって、はかどらない救助が一層みじめであった。

また、死体の收容と火葬は、川ではロープで数珠つながりの死体が舟で曳かれてくる、トラックで運ばれてくる。終日その処理にあたったが、あまりにも多過ぎて、こわさを通り越した感覚であった。

特に忘れられないことは

- 朝、被爆から、晩おそくまで、熱さからのがれるため川の中に身を沈め、救助され收容所について亡くなった女学生。
- 骨折した足首から骨が出ているにもかかわらず、運搬の荷馬車からとび降りて親をさがす小学生。
- 軍靴の音に「兵隊さん助けてー」暗やみの中から弱々しい声。
- 焼肌にさわった感触。
- 母親が幼児を抱いたまま一体となって死んでいる姿。
- 仮設の仏壇に身内の安否をきづかって次々におとずれ、見つからずに次の場所に去っていく姿。

等がある。このような事は二度とあってはならない。

〔広島 救護 男 17歳〕

(22-0092)

b) 女

私は女学校の一年生でしたので一番症状の軽い患者の救護をしたのですが、それでも体にたくさんのガラスのささっている人や背をまるで焼いている人など大変な怪我でした。傷には蠅がたかり卵をうみ、それが蛆となって患者はかゆがり、手当といっても医者はわずかな赤チンを塗ってまわるだけですし、私達はうちわで蠅を追うだけでした。食事は馬鈴薯をゆがいたものが多く、重症者の喉は通らず、前日には元気そうにみえた患者も翌朝は死亡している状態でした。

〔広島 救護 女 13歳〕  
(34-2923)

広島原爆投下の八月六日の午後、呉の病院へトラックで送られて来る被爆者のあの時の様子は、今も、あの時も、私の命の亡くなる日まで忘れる事は出来ません。

病院の屋根いっぱい書かれた赤十字も何の効果もなく焼きつくされ、わずかに残った伝染病棟を病室と看護婦の宿舎にあてられ、夜、暗がりで見会った被爆者の方に恐ろしくて悲鳴をあげて逃げてしまった自分を、今も責める事があります。その方、その夜明けに息を引取りました。

裂けた傷口のウジも思い出すのも嫌です。

応急処置に海田市あたりで塗られた重油で黒くなった幼児の姿。たった一人で見ました。

絶対に核戦争は禁止すべきです。

〔広島 救護 女 19歳〕  
(32-0085)

家族の内7人が直接被爆したり、入市又は救護にて大変だった。中でも弟は15歳で修道中学の時、雑魚場町（今の市役所の裏の方）で学生の身でありながら建物疎開作業に従事させられ被爆し、親兄弟姉はその弟を8月6日は一日中探し歩いたが見当らず、翌日7日に元の兵器廠の入口あたりの草の上に横たわり居るところを大八車をつれて家に帰った。顔はスイカ位にはれ上がり、目は糸のようで口の中は緑色に焼けただけ、それでも水や氷を欲しがった。8月8日午後5時頃弟は死亡。

次々近所に被爆者が亡くなったり、帰らぬままの方々が出た。あわれなものであった。

広島市内で被爆した方々は、指の皮は袋のように焼けてぶら下がり、オバケ同然であった。はだかのままが黒くやけて、赤んぼを背おった方、男女の区別等わからなかった。そんな人は先々で倒れ、明頭寺等、海田市小学校にも多く被爆者が横たわり、救護のために歩けど、死体をまたぐように所せましと休んでいらっしゃる方々の間を歩き、まくら元にゆがいたジャガ芋のくずをくぼって歩いた。食べられる方はあまりなかった。油薬をぬってあげたこともよく覚えている。地獄絵巻であった。死体は海田の沖の土手でも多く焼かれたことを覚えている。生きている被爆者にウジが湧いていたのには驚いた。

〔広島 救護 女 19歳〕

（34-4145）

原爆の頃、軍病院に勤務していたので、投下の翌々日8/8被爆軍人が次々と送って来られ、その収容と看護に当る。生々しい火傷と皮膚のタダレあり、病衣は戦中色に染めてあったが、煤にまみれたような目だけが光っていました。

高熱と、針で突いたよう傷が翌日には赤く大きく腫れ、鼻および口の中までタダレていて、粘血便の排泄や口渇を訴えて、脱毛がひどく、氷枕の交換する時には8ミリ位の髪の毛がついてダラダラとぬける。

食事の介助や両便の世話、見る目もいたわしく、私は一生懸命看護に当たったが、ベットもなく床にマットをならべてごろごろと患者さんをねせて、次々となくなっていく兵隊さん方のことが、目の中底にのこっています。若かったし従軍をほ

こりに看護に当りました。

あの光景は筆舌につくし難い。

〔広島 救護 女 21歳〕

(35-0130)

当時7歳の私は、父が亡くなりましたが、3日間は父をたずねて歩きました。線路をまくらにたくさん人が死んでいる人。水をくださいとさげんでいる人。さげんでいるんでなく、やっと声を出し私をひっぱっていました。水をあげれば死ぬからやってはいけないと言って兵隊が立っていました。水をあげたかった。今も耳につく思い。

また、同級生に逢うことも出来ずバラバラに別れたまま。入学式や幼稚園の写真を出しては当時を思い出しています。

たおれたかべの下で、だれかが君が代を歌っていた人もいた。しかし大半が学童だったので、父や母をよんでさげんだもので……方向もわからずさげんだ想いは忘れません。戦争はいやです。

〔広島 被爆状況不明 女 8歳〕

(32-0184)



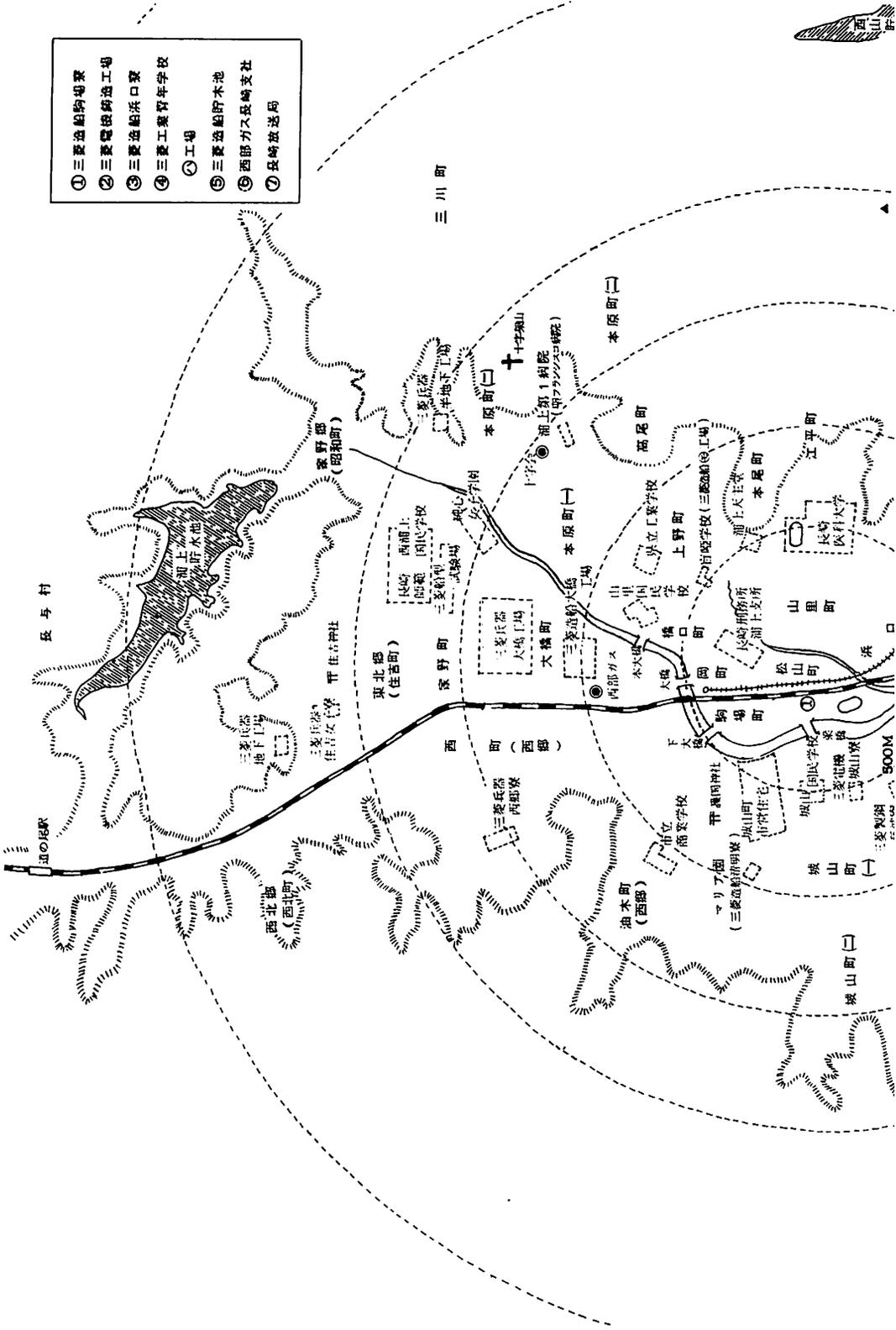


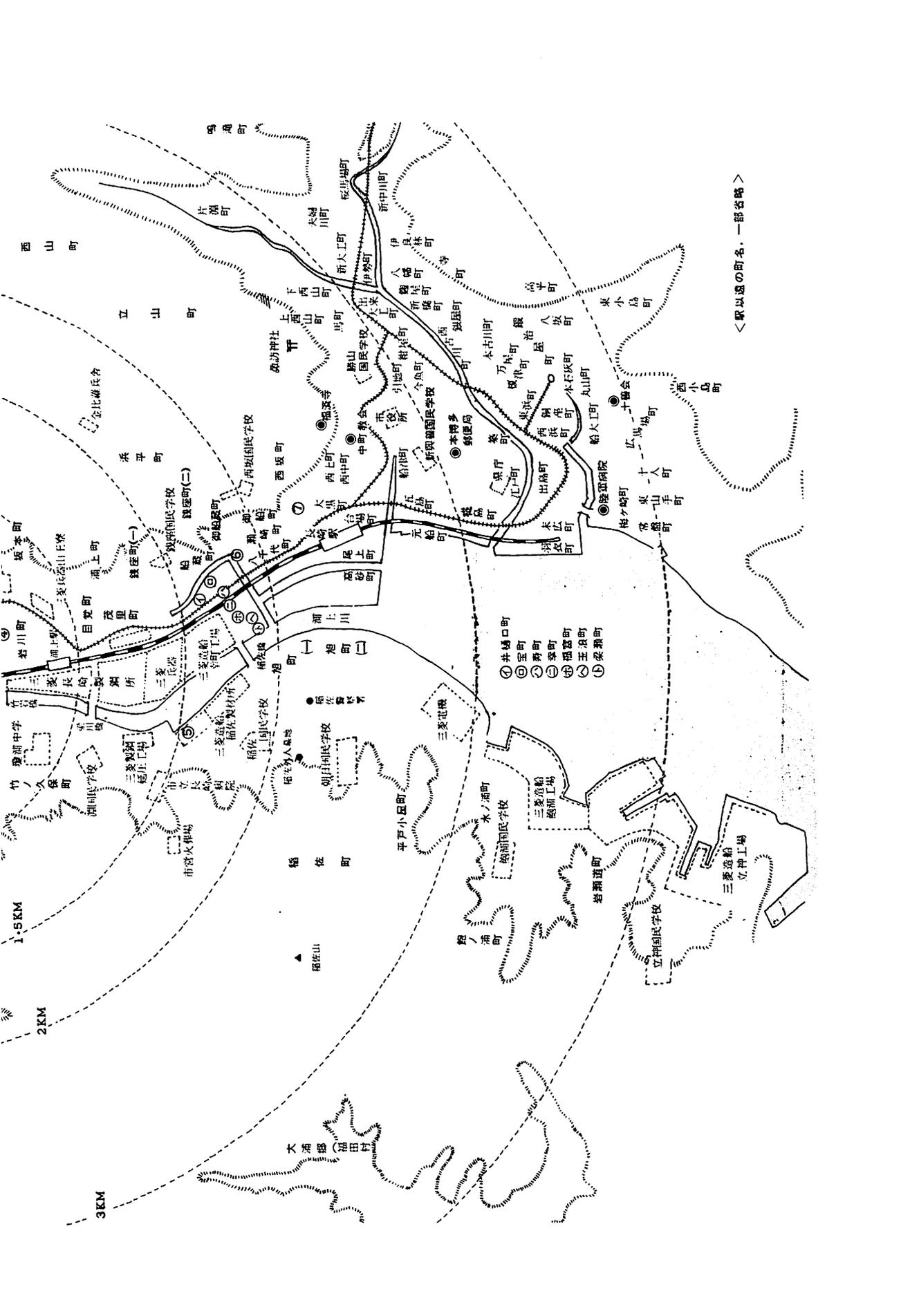




# 長崎

- ① 三菱造船船塢敷
- ② 三菱電機船塢油工場
- ③ 三菱造船船塢口敷
- ④ 三菱工業青年学校
- ⑤ 三菱造船貯水池
- ⑥ 西部ガス長崎支社
- ⑦ 長崎放送局





＜駅以迄の町名、一部省略＞

- ① 井樋口町
- ② 宝町
- ③ 舟町
- ④ 香町
- ⑤ 榎園町
- ⑥ 玉浪町
- ⑦ 梁瀬町

1.5KM  
2KM  
3KM

大浦郷 田田村

立神国民学校  
三波造船工場  
立神工場

西山町

立山町

橋佐町

平戸小區町

船浦町

岩瀬町

立神国民学校

三波造船工場

立神工場

坂本町

岩川町

竹園町

市営火葬場

市立長崎病院

三波造船工場

三波造船工場

三波造船工場

三波造船工場

三波造船工場

三波造船工場

三波造船工場

三波造船工場

三波造船工場

西坂町

西坂町

西坂町

西坂町

西坂町

西坂町

西坂町

船浦町



## I. 直接被爆

### (i) 2.0km以内(直爆)

#### a) 男

##### ① 9歳以下(被爆時)

稲佐小学校の教室には、たくさんの生きている被爆者が、夜になっても担架で運ばれていた。と同時に、死んでいく人々は「水、水」とうめきながら息を引き取り、生者と交代で担架で動物のように運び出された。

肉のやけた臭い、汗、尿、大便の入り混じった表現しようのない悪臭。

私の目前では二人の体格の良い朝鮮人が、母国語で涙を流しながら語らい、個々に息を引き取っていった。(たくさんの人々の死を、この目で見ました)

昼間、被爆した父の看護を終えて廊下に出た母と私は、思わず死人の山に目と鼻を塞いでしまった。それは廊下から校庭へと無造作に、焦げた丸太のように、人間が放置されていたのです。足の踏み場もないほどで、母の腕にぶらさがって死人をまた越えしているうちに、私はそのうちの一つの遺体につまづいて「母ちゃん踏んでしもうた」といったら、母は「もうよか、死んでしもうとるけん!」と叱るように怒鳴って校門へ急いだ。

あの時は、誰もが自分だけの感覚で生きていたのかも知れません。他人の死を、誰もが冷たい視線で追うだけで、感動する神経さえなかったのかも知れません。涙さえ出なくて、獣のように、ただ喚き声だけが教室中に交錯していたのです。

4歳になろうとしていた私には、ただ被爆当時の出来事だけが色あざやかに残っているだけです。その前後は記憶がないのに、その時の「4歳」だけが、今でもポツンと腫物のように残っているのは……どうしてだろうか?

思い出すと……フーッと胸が痛くなります。

[長崎 直爆2.0km 男 4歳]

(14-0042)

書きたくない。

[長崎 直爆2.0km 男 8歳]

(27-0341)

## ② 10歳代（被爆時）

被爆の当日爆心地の近くを通った、勤労奉仕先から自宅への帰路。翌日帰り着き、まだ焼けていた自宅と周辺。やっと歩ける母を連れて行った臨時救護所の往復。いずれも地獄絵さながらの光景にもかかわらず、恐怖心は無くなり、死体をかき分けて歩いたり、防空ごうで隣に寝ていた人が朝起きると死んでいたことなど、後から考えるとゾーとすることが、被爆地を離れる10日間の日常で、平気でおられた異常な精神状態が恐ろしい。

〔長崎 直爆2.0km 男 12歳〕  
(01-0055)

当時私は高小学1年でしたが、人間は病気だけで死ぬとっておりましたが、動物なみの残酷な死にかたをするものだと、情け無く、悲しく思いました。

〔長崎 直爆2.0km 男 13歳〕  
(2.7-0194)

- ①爆風で吹き飛ばされた。防空壕の内にたたきつけられたために助かった。
- ②たたきつけられて気を失った。気がついてみると目の前は火の海であった。はいずって外へ逃げた。
- ③木の下に灰になった子供が立っていた。次にもう一度その場所に戻ってくると、子供の身体はくずれていた。骨が糸のスジのようになっていた。
- ④姉といっしょに父親を探しにいった。家の焼け跡に叫び声をあげているような恰好の黒こげた死体があった。歯型や身につけている物から、その死体が父親であることがわかった。父は死ぬ直前に何を叫んだのだろうか。
- ⑤生き残った人も、後でうじがついて、みじめなものであった。全身に浮腫がおこり、豚のようになっている人もいた。
- ⑥爆心地に近い人ほどひどい状態であったが、爆心地から遠く離れた人でも、閃光

をみた（放射能をあびた）だけで何の外傷もないのに、2ヵ月から半年後に次々と死んでいった。

⑦死んだ人を担架で運んで、一つの場所に積み上げ、焼却するのを見た。生々しく死んでいった人々のことが印象に残っている。

〔長崎 直爆1.5km 男 15歳〕  
(21-0002)

トンネル工場内で被爆に遭い、30分位後に出てすぐ、本社救援に行くにも、県道は火の海で裏道を行く道中、百姓の人たちの家も全部焼けて、牛馬も半焼の状態です。本社に着いた時、目前に女性の方が倒れ、その人の子供2人、母を探しに来て私達の目前でその光景は、今でも忘れません。また守衛の方は、死んで時計だけが動いていて、人間の命とははかないものと思った。後で同郷から来た者と3人で同郷の同級生の△△君という友達を探し廻り、△△君は本社設計部にいて直爆を受け、私達が名前を呼び探したところ、上半身は焼けて水がパンツのひもの上にたまって、3人でそっと抱きかかえるようにして、汽車に乗せました。後に病院で死んだそうです。また、当時学徒動員で働いていて、直爆で逃げ遅れ、上半身と片方の足は出て、片方の足が鉄骨に挟まれて、助けてくれといていたけど、どうにも出来なかった事が脳裏に焼き付いています。

〔長崎 直爆1.5km 男 16歳〕  
(40-0228)

○ものすごい爆発音がして家がつぶれそうになった、すぐ父をさがすため爆心地に向かって歩いたが、地獄がほんとうにあるのならこれが地獄だと思った。爆風に飛ばされて電柱にひっかかって死んでいる人、動けなくて水……助けて……と叫んでいる人、ひどいやけどで皮膚をぶらさげて歩いている人、この光景は見た人でなければわからないと思う。

○これは人間が人間に対してすることではないと思った。

○あの時すぐに何らかの治療をしてあげたら、助かったかもしれない人もいたはずで、自分の身内をさがすことだけが精いっぱい、その人たちに何もしてあげられなかったことが、それからずっと心のこりに思っている。

〔長崎 直爆1.0km 男 17歳〕

(27-0555)

飛び飛びにたくさんの思い出はありますが、ただその時々瞬間的な思いで、実際には浦上～城山方面などでの路上たくさんの人々が倒れていて、また年も若かったせいかどうしていいのか途方にくれていた状態でした。

自分自身が訳がわからずじまいだったので、今になってあの三菱製鋼所の川に水を呑みに行く人々のことを思い出すと何とも言えぬ状況です。また(ざんごう)城山をの〔ママ〕ままの状態ママで女性、子供等がひざをだくような姿で息を引き取っているのが、また生々しく思えます。私達もその後は、その人々を外に連れ出し、近郊に死体と化した人を一緒に田の中にて焼いたこともありました。

何度か倒れた方の内から、水をくれとも言われましたが、私としてはどうすることも出来ませんでした。それが今もって心残りと思います。他にもいろいろとありますが、書き記すことは出来る状態ではありません。

(これは私が救助員として行った時の事です。)

〔長崎 直爆2.0km 男 17歳〕

(42-0652)

突然目の前でマグネシウムを焚かれたようなショックを受けた。さては隣の変電所で事故が……と思ったとたん気を失った。同僚に引き起こされ目が覚めたが、すぐには立ち上がれない、茫然とあたりを見回しても、煙とホコリでうす暗く視界

がきかない。大変なことが、恐ろしいことが起ったのだ。鉄骨とスレート屋根の鋳物工場内、足もと1尺横に5トン吊りの天井クレーンが落ち、アングルが地面にめり込んでいる。数人の人たちが下敷きになっていた。どこかでうめき声、叫び声がかきこえるが、私たちにはどうすることも出来なかった。

迷路のようになった現場、2人で助け合いながらやっと外へ出た。遠くで空襲だ一敵機来襲……と叫んでいる。とりあえず付近の防空壕へ入り、お互いの傷の確認をしたがかなりの重傷である。全身傷だらけ、特に頭からの出血がひどく、腰の傷は指が2本入るほどだったが手当のすべもない。ここにも数人が避難していた。こんな恐ろしい状況の中、人影もまばらで不気味に静かだ。

空襲警報が解除になり、避難していた女子挺身隊、学徒動員の女学生たちが職場へ戻り着いた直後の被爆、数百人の人たちが働いていたはず。みんな遠くへ避難したのだろうか、我々が最後の脱出組だったのだろうか。同僚は寮へ、私は城山町（自宅）へと別れた。

炎と煙に行く手を阻まれ、いったん本原町の小高い丘の上に避難し、芋畑に倒れ込んでしまった。かなり時間が経ったようだ。うとうとしていたところ、戦闘機の爆音で我にかえった。まだ何か起りそう、このまま死んでしまうのか、恐怖と疲労、全身が痛い、水がほしい、誰も助けに来てくれない。わずか2kmたらずの城山にいる親、弟、妹たちのことが気になる。やっと体を起したが歩けない。暗くならないうちにと棒切れを杖に歩いた。途中散乱している布団の布や綿を引きちぎり止血をした。そこら中に死体が、息絶えだえの人、助けをこう人、水をほしがる人、人、人。下アゴが半分吹っ飛び血を流しながら、拝むような目で助けをこう若い女性。だが私には何もしてやれなかった。中にはケガ人を助けるどころか死体や重体の人々の貴重品を略奪し、飛び廻っている青年を目撃した。まるで地獄絵のような光景だった。

ようやく大橋の近くへ来た時救護班に会い、城山は全滅だ何もない、それよりもなく汽車が来る、それに乗って避難しろ、と言われ汽車を待った。暗くなって汽車が来た。高い昇降口、やっとの思いで乗り込んだら、また空襲警報、全身下車の命令。列車の中がまた大変、ほとんどの人が裸同然、全身ひぶくれの人、肉を引きちぎられた人、列車中で死んだ人、うめき声、どなる声、異様な臭い、この世のものとは思えない。

夜中に大村海軍病院に収容され、水を飲ませてもらい軍医の治療を受けた。治療とは名ばかり、傷口に赤チンを塗っただけ、今でも傷跡はごみが入ったままなので刺青のようにになっている。そのまま真っ白なシートと毛布のベットに、血だらけ泥

だらけの身体を包み、死んだように眠り込んでしまった。

お昼頃らしい、ふと目を覚ますと、看護婦さんがやさしくスプーンでお粥を口に入れてくれる。にこやかな笑顔、思わず涙が流れた。数人の軍医と10数人の看護婦さんたちが親切なのに驚いた。あちこちで重傷患者にどなられ、ベットの上で粗相してもいやな顔もせず、むしろにこやかにテキパキと処理している姿、正に白衣の天使とはこの人たちのことだろう。

あの時、あの時代に、あれほど親切でやさしい病院、医師、看護婦さんたち、あれから40年、医学、科学の進歩した今日、見たことも聞いたこともない。あの白衣の天使たちのことは生涯忘れないだろう。

食事が終って、治療を受け、歩ける者は退院しなさいということで、自分のものはフンドシー一本、ゆかた一枚と草履をもらって退院、5、6人連れで諫早駅へ向かった。駅で一夜を明かし、11日昼頃被災地へ戻った。大橋から川沿いに城山へ、一面が焼け野原と化し、そこそこに死体が、川の中にも黒こげの死体が無数に重なっている。ようやく自宅へたどり着いた。

勿論家は丸焼け、焼け跡にみんないた。父も母も弟妹たちも、みんな元気そうに見えた。むしろ私はもう死んだと思っていたらしい。皆茫然としていた。ただ祖母が自宅近くの路上で直爆死。末の弟が行方不明になっていた。倒壊した家の梁の下敷きになって動けなくなっていた母親を、小学生の弟たちが既に燃えだした炎の中から助けだしたらしい。戸板の上に横になっていた。三菱製鋼所で働いていた父も、腰や手足〔に〕重傷を負っていたが何の手当もしていなかった。

夕方配給のにぎりめしを弟がもらって来た。バケツ一杯白米の飯にたくあん、何年ぶりだろう。むさぼるように食った。夜になるとあちこちで死体を焼いているのだろう、あおい火が上がっている。雨露をしのぐ所もない、むしろをかぶって夜を明かした日が続いたろう。毎日毎日近所の人たちがつきからつぎと死んで行く。新型爆弾が落ちたのだ、75年間は草木も生えないという。

17日夜、母が死に、あんなに元気だった弟、妹たち、25日までに6人も死んだ。こんどは誰の番だ、涙も出ない。

〔長崎 直爆2.0km 男 18歳〕

(14-1053)

10日間ほど意識不明でよく憶えていない。

〔長崎 直爆2.0km 男 18歳〕

(26-0028)

私の下宿していた町内で、かすりキズの男成人2人だけ（山の中腹で）

第一日目、重傷者でも動ける人は皆山に上った、4合目位の所は段々畑で茄子や胡瓜がシナビていたのを空腹で食した人は皆ハキ気と頭痛を起した。重傷の人は畑に着くと、水をくれと言いながら次から次へと死んで行ったが、水をやることも出来なかった。2人で夜、焼けなかった倒れた家をマキにして火葬した。

2人で2日目食料探しに行き、まだパチンパチンと焼け飛び散っている大豆の缶詰を多数拾い、皆さんと食料とした。（缶詰工場）

橋の欄干に叩きつけられた死体は、しゃがんでしりもちついた格好でこぶしをにぎり真黒焦げで、3日目には全体に油がにじみ、太陽の光を受けピカピカ光を放ち、アスファルトの上に死体から2米位の所までその油が流れしみついていた。

傾いたコンクリートの建物の窓辺の死体には、こなごなに割れた硝子の破片が無数に突きささっていた。

倒れた家は夜までにすっかり焼けた。その灰の上には大小に割れた白骨が散らばり、多いところでは足の踏み場もない位散らばり、頭の部分の白骨を引き上げて見たら、下は灰に埋まっていて肉がいったいくつついていた。

投下直後、倒れた家の下から、あっちからもこっちからも、助けてくれの悲鳴は聞こえるが、点々と火災が発生していてよりつけなかった。

〔長崎 直爆1.5km 男 19歳〕

(45-0031)

### ③ 20歳代（被爆時）

けが、やけどで真赤に焼けただれた手足、痛い痛いと言き声を立てる者。死体の焼ける独特のいやな臭い、水を求めて川に集まる人々を見ている本人も、片腕が何とか動く状態でも、その時どうしてこのような事になっているかを考えることは全然なかった。それ程考える力が落ちて、なぜという疑問の点がわいて来なかったのが、今から考えても不思議である。

〔長崎 直爆1.0km 男 21歳〕

（40-0974）

あの時私は下のトイレに入り、用を足し外に出ようとした時、急に黄色の光とめまいを感じて、一步外に出た瞬間、背中より吹き飛ばされていた。真暗です、何も見えない、息ができない。このままでは死んでしまう。ヤミの中で明かりをもとめて、明るい所へでた。防火用水の水が流れていたのので、その水を飲んで息を吹きかえした。あたりを見ると何もかもこわれている。

工場の正門からたくさんの人々が、驚天動地の形相で走ってくる。△△△、△△△、呼ばれて声のするを見ると、親友が「おんぶ」されて足から血を吹き出している。この親友を電停前のタコツボに。きずは左足の甲が二つに割れてい、早く病院へ。いても立ってもいられない。見るとあたり一面くずれ去って……。水を含ませてあたえるくらいが私にできる精一パイの看病でした……。

火は益々燃えさかり、熱風が吹きまくり、道のあちこちに這いまわるもの、死んでいる人々、すぐ足もとに12歳位か女の子が死んでいる。何とも悲惨な状況の中で、ふと太陽を見上げると血の色で染まっていた。まさに地獄の色を見たような……。

茂木より敵が上陸、早く逃げないとみな殺しだと……。いつのまにか残された者は、重傷者と死人だけになってしまった。山の手の方を見ると、火が下から上へ上へと燃えて行く。

5時頃か、それとも6時頃かトラックがきた。重傷者だけのせると言うのです。私は◇◇君を乗せると一人になった。そこへ寮の親友と出会った。私たちは何とな

く山王寮へ向かっていた。寮は焼けおちてあとかたもない。夕暮が迫っていた。いつの間にか私たちは三菱グラウンドに……すっかり日も暮れて、誰かが水をくれ、水をくれと遠く近くにきこえる。その時照明弾であろうか、飛行機がとんできて真ヒルのように……。私たちは側溝に身を伏せた。これからはばらくして、俺たちはどうなるのだろう、親友がポツンと言った。このまま死ぬかも知れんなー。

頭が痛い、ムネが痛い。おかの上の鎮西学院であろうか、赤い火炎がいつまでも、いつまでも燃えていた。私はその火を親友と共に見ながら、いつのまにかねむっていた。

当時私は山王寮に住んでいた。寮生は何百人いたかわからない。被爆の直後だったと思う、山王寮のあとに行ってみた（夜勤の者であったのだろう）白骨の状態できれいにねたまの姿であった（5人位ずつ並んでいた）

立っている地面があついで、カワラをめくって見ると赤火がおこおこと燃えていたのを今も覚えている。

〔長崎 直爆1.5km 男 21歳〕

（43-0075）

私は死んだ人を数えきれない程、焼あとで死体を集めやいた者ですが、私がいまだに忘れる事の出来ぬ事は多くありますが、その中の一つを書きます。

長崎松山町の事です、家の中であったようですが、お母さんと男か女か解りませんが、屋根の（たる木）がお母さんとだいた子供を、胸から二人を一つにつきぬけていた死体を見た時の事は、どうしても忘れられません。

また被爆後一週間たった時など、若い娘さんが気が違って、空を見て「ああ飛行機、ああ飛行機」とさけぶ姿も数多く見られました。

また自分の家だった所に、別れ別れになったのかその焼跡に「すみ子生きています。お父さんへ」と書いた札を立てた人もおられたが、何とか生きていてほしいと陰ながら私も思いました。

〔長崎 直爆1.5km 男 25歳〕

（22-0376）

あの凄惨さ、悲惨さは筆舌にすることは到底不可能です。今となってはなおさらのこと。自身で体験した生き地獄、見聞した表現できないむごさは、それでもほんの一部にすぎないものでしょう。

あの直後から帰郷までの5日間は、何を、誰を頼ることもできない彷徨の日々でした。市の対策本部から支給された乾パンをかじりながら、それでも自分より重傷の人たちを見ると、みんなで介護に走り廻ったり、爆風でこわれた家の補修や片づけに汗を流した。

日が落ちて地域の人々の炊出しの握り飯をかかえて、自分達が作った防空壕で肩を寄せ合うその瞬間、後から入って来た軍人に追っ払われて、道路傍の側溝に身を沈めて、星空を仰ぎながら冷えた握り飯と一緒にあれもこれも憤懣の涙と共に飲み下し、うたかたの仮眠に忘れた。

〔長崎 直爆1.0km 男 27歳〕

(40-1020)

#### ④ 40歳以上(被爆時)

大やけどして、大川の砂場に横臥している妻を発見。

水を下さいとの願で、小さなアルミの「やかん」をひろって川の水をやり、飛んで来ていた畳の上にのせ、戸板で覆いをしてやり、救護班に病院へ運んでもらった。ちょうどその時、娘の状況を尋ねた。娘は我が家の向の家に遊びに行っていて行方不明と聞いた。そこで我が家の焼跡付近を探し歩いた。2日ばかりでやっと探し求めた。道路わきの溝を掘って見つけた娘の「モンペ」の焼け残りから、娘の骨と断定し、焼けた小バケツに骨を入れた。

妻の死後、応急火葬場に、凹地に枯木を持って来てその上に石油をかけ、自分で火葬、骨ひろいを夕方自分でやった。

〔長崎 直爆0.5km 男 40歳〕

(13-10-014)

被爆当日の夕方、火災が下火となったので、早く自宅迄と思い、山王神社の横道を通りかかった時、倒れた家の中から助けて助けてと女の悲鳴が聞こえて来るので、早速倒れた家を覗き見ると、30歳位の婦人が3歳位の子供と二人で家の下敷きとなり、私の顔を見るなり、助けて下さいと手を伸ばして私にすがった。柱と柱の下敷きでこの材木を取り除くことは、私一人では到底出来ない。婦人の手を引いても動かない。みるみる内に火がこの家にもついた。

婦人が、私は死んでも良いから子供だけは助けて下さいと哀願されたが、火が間近に迫ってくるので、私も身の危険を感じて、奥様どうか成仏して下さい、あなただけではありませんと、私は心を鬼にして立ち去ることにした。生きている人が目前で焼死して行く姿を真の当たりに見て、断腸の思いがした。

〔長崎 直爆1.5km 男 44歳〕  
(40-0189)

## b) 女

### ① 9歳以下(被爆時)

小学校二年生の時です。

一瞬の出来事から人生の表から裏へと急変し、目に写るものは生地獄としか言えないあの日のことは、思い出すのがつらいです。

人間とは見れない生き物、叫び声……幼い私もその中でどうしていたのか……ただ姉と手をつなぎ、山へ向かって夢中で逃げていたこと……途中目に入るものは全て地獄絵図としか言いようがありませんでした。

全壊の家に残った母は、下敷になった父を助けるため大声をあげ、火の手のあがる中を兵隊さんの力で救うことが出来たそうです。

その夜母は父をタンカで運び、山へつれて来ました。もう何も話せない父は、顔形のない、動けない、生きた屍でした。頭から体中をぼろきれでくるまれ、どんな手当を受けたのだろうと子供心に可哀想で、きたないお父さんだと思いました。誰もが乞食のようにぼろぼろでしたし、ぼろぼろの格好で死んでいく人を黙って見る

ほど、すべてが狂い、地獄だったのです。

「人間であれば、人間らしい死に方をさせてあげたかった」死んだ人々に対する哀悼です。

〔長崎 直爆2.0km 女 8歳〕

(17-0008)

## ② 10歳代 (被爆時)

焼けた家のあとにはガイ骨がゴロゴロ。自分の皮を引きずって歩いてる人。ヤケドでみにくくなった顔。気がくるって訳のわからないことを言ってる人。ヤケド怪我の所にウジ虫がわいている人。死んだ人を積みかさね油をかけて焼く。防空ゴウの中は生地獄だった。道には黒こげになって死んでいる人。ぼろぼろに焼けた服。水を水をくれとわめいてる人。苦しさのため殺してくれと言ってる人。死んだ子供を抱きしめてはなさない人。死んだ人を一つの穴に10人～15人を積かさねて埋る。

12歳の私にはあまりの恐ろしさで、なにもしてやる事が出来なかった。

### 母の死

田の草取り中に被爆した母は、背中一面大ヤケド。ブドウのベリーAみたい。子供に心配かけまいとウメキ声一つ立てずに死んでいった母。

### 妹の死

8月15日終戦の日、叔父がさがしに来てくれ、叔父の家に行く途中、しんどい、歩けないと言った妹をオブツてやる事も出来ず、翌日16日死んで行った妹。今でもかわいそうで、思い出すと涙が出ます。

〔長崎 直爆1.0km 女 12歳〕

(28-0268)

父母を兄と私で焼きました。一生忘れることが出来ません。もう一人の兄は内臓が破れておりました。それでも私達のこと心配しておりました。

友達が裸でおりましたがどうすることも出来ませんでした。

〔長崎 直爆1.0km 女 13歳〕  
(27-0560)

幼い妹がコトバが何も言えないまま、冷たい水を欲しがっていることが分かっていたのに、何もあたりに無く、どうにもしてあげられなかったことが、今に残念で、哀れでなりません。

〔長崎 直爆1.0km 女 14歳〕  
(27-0461)

ア。兄のことですが、屋外で背中全体をやけどしました。その日がどうか覚えておりませんが、大村に収容されました。

やけどした凹んだ所に小さなウジ虫がかたまりとなって、体全部に次から次とウジ虫がわきました。その当時は赤チンキをぬって下さるだけで何の手当もしていただけませんでした。23日間生きていたのですが、1日も意識はもどらず、苦しみもだえながら、うわ言を言い、息を引き取る時は苦しみの余り目をつりあげて死んで行きました。

あの当時は私は14才でした。泣く事さえ忘れていました。だんだん年を取るにつれて、思い出すと涙があふれ出て止まらなくなりますので、もう思い出したくないのです。

ウ。その当時は自分のことが大事でしたので、他人様の事など考える余裕はありませんでした。

〔長崎 直爆1.5km 女 14歳〕  
(22-0353)

その時自分が生きているということが不思議なぐらいでした。そして弟が、40度以上の熱を出して飛び起き、そこいらを走り回り、苦しみ、水を飲むというよりは水びたしといったような、異常なまでに水を飲み、飲んだら真黒な便、これも水、水……といったもので、馬が小便をしているようでした。そんな日が1カ月くらい続き、弟は死ぬと思い、好きにさせてやりました。

〔長崎 直爆2.0km 女 14歳〕  
(42-1029)

思い出すのも苦痛、忘れたい一心。

当時の状況、周りの人（仕事中の仲間）約50人の中、即死半数。全身ヤケド、半死の人のみ。自分は7時間後意識取り戻す。

熊本五工の学徒が、腹がさけ内臓がとび出しているのに、眼が自分を見つめていたことが未だなお残って辛い。

丸焼けでふくれた子供の死体。米の配給所の前に並び被爆した人々の、黒こげにもかわらず、眼が救いを求めていたこと。

自分も大ケガだが歩き、はいながら我が家の方に向かう途中、川の橋は折れ、川の中は水を求めた人々でうずまり、水は血の色、道々には死体の山、馬の黒こげが悲しそうな目をして見ている。

死の世界そのもの、沈黙の世界、生きていても声を出す気力もない。投下された午後の様子でした。

〔長崎 直爆0.5km 女 15歳〕  
(14-7020)

20年8月9日

ひどい下痢、出血、めまい、耳なり、何度も失神して後数時間の命と言われたが、不思議に息を吹返して息の有る事が苦しくてうらめしく思った。夜中に長崎の山中に一人で、何度目かの気が付いた時、周りは死体の山。生きているのは私だけ。山中は町の燃える炎で昼のように明るく、山道の両側は死体がズーと続いていたが、全然恐怖感はなく、苦しく痛い体を引ずって山をさまよった。

20年8月10日～8月12日

昼頃に水の有る所にたどりついたが、汲んで飲む事も出来ないほど体が弱っていた。友達に汲んでもらって、これが最後の水になると言われたがそれでも死ぬえず、苦しくて失神を何度もくり返した。

20年8月13日

時津小学校に収容される。自分の顔を鏡を見て、あまりの恐ろしさに二度と鏡の前に立つ事が出来なかった。

8月10～15日迄、夜になると要注意の人の中に入れられ、朝になると私一人が息をして後は全部死人。40年過ぎた今も思返して苦しくて、口惜しくて、どうしてあんなに「ヒドイ」目に遭わなければならなかったか、原爆をにくむ、戦争を……。

〔長崎 直爆1.0km 女 15歳〕  
(35-0218)

○直後、がれきの間から2、3人掘りだしてやりました。これはいい事をしたと思ってる。しかし、逃げる途中もえさかる炎の中に赤ちゃんが泣いていたが、助けに行くことが出来ず、今でも自分をせめています。

○全身火ぶくれで、何十人も人がずらーと倒れていて水をくれと言ってたのに、水をのませてやれなかった。いずれ死ぬ人なのに、本当に今でも目に焼きついて、そんな時は食事がのどを通りません。

○時がたつにしたがって、ますます当時のことがせんめいになってきて、本当につらい。

○祖父母の遺骨がないのが、本当に心のこりです。今でも城山の方に行くと、どこ

かに骨がありそうで、そのあたりを掘り起こしたいと思います。

○私をさがしに来てくれた家人が、私らしいと火葬にした人はどんな人だったかと思うと、早くあの世に行ってその人をさがしてみたいと思う。

○牛や馬がゴロゴロ倒れていたのが、後になって本当に可哀想で、今でも涙が出ます。（その時は、ちほう状態で何とも感じず）

〔長崎 直爆0.5km 女 16歳〕

(14-0073)

私が被爆して家の下敷になった時、自分の怪我もかえりみず、私と友人を助けてくれた人のことが、今日でも忘れることが出来ません。生きておられるなら一目でも逢ってお礼を申しあげたいと考えています。その人がもし私たちの声を無視して通りすぎてしまえば、今の私はありません。

〔長崎 直爆1.0km 女 16歳〕

(16-0014)

爆心から1.4キロメートルの工場で被爆し、気づいた時は倒壊物の下敷になっていました。暗がりの中で手を伸ばしたら、隣席の人と思われる人の足にふれました。名前は忘れましたが、多分Kさんだったと思います。力の限り足を引っぱり、その人の名を呼びましたが、返事もなく、微動だにしませんでした。

七転八倒の思いで私は脱出しましたが、誰一人として人影の見えない工場の中で（逃げ遅れ、だい分時間がたち煙がもうもうとおそっていたから）その人の上の倒壊物をはねのけ、その人の生死を見極めることが出来なかったのが、悔やまれてなりません。また、逃げる途中、“水”を求め哀願していた人々に、水をあげることができなかったことなど、悔恨の思いは数限りありません。

〔長崎 直爆1.5km 女 16歳〕  
(28-0087)

あの時のことは思い出したくありません。

なぜなら、私のそばを20～30人位のけがをした人、やけどをした人が次から次に亡くなっていったからです。けがをした人は、水を求めながら「水！水！」と言いながら死んでいきました。

一方やけどをした人の体には、ウジ虫が肉を食べているのでしょうか。ウヨウヨとして体や手や足でうごめいていました。やけどのどの人にも、ウジ虫がいました。この様子を見て、もしここにピンセットがあったら、ウジ虫をとってやりたいと思いました。

やけどを負った人は「痛い痛い」と叫びながら次々と死んでいきました。

〔長崎 直爆1.0km 女 17歳〕  
(40-0191)

下敷になった工場から避難するとき、目をえぐられた人に、連れて行って下さいと手をにぎられてびっくり、その人を置き去りにして歩いてしまったことが今でも思い出されます。今考えると、目を負傷した時生きていられるのか？

〔長崎 直爆2.0km 女 17歳〕  
(09-0002)

- イ) 近所のお母さんが家の台所で炊事をしていたのでしょ、骨だけになって立っ  
たまの姿で、帯のふところにガマ口の金具がそのまま胸のところに残っている  
のを見た。一週間位たったでしょうか、枯葉をかきよせ道路のあちこちで燃すよ  
うに、被爆者を火葬した人骨が、いやに白く印象に残る。
- ロ) 私より前に出た友はハリの下になり三箇月の重傷を負う、その前に出た友は圧  
死、更にその前に出た友は外へ出てやけどと、一步一步の時差により、人間の宿  
命をひしひしと感じています。
- ハ) 渡る橋がなく、鉄橋の枕木を渡る時、隙間から川底に黒焦げの重なりあった死  
体が目にとびこみ、水を求めてはうように来たのでしょ、途中で息たえた人、  
人、人。この時初めてガタガタと、そして涙がポロポロと流れおちた。泣くこと  
も知らず、おこることも知らぬ、感情も抜きとられたような虚無状態で、ただ何  
かに憑かれたように歩いていた。

〔長崎 直爆0.5km 女 19歳〕

(11-0022)

- ①長崎医大の近くに大きな池がありました。その池の中へ直爆受けた人々が、池の  
中がすき間がない位に20人余りの人が死んでいたこと。また、妊娠している奥  
さんで生み月だったと思うような方が、池の横で赤ちゃんとそのお母さんが(へ  
ソ)のおを引いたまま死んでいたこと。たぶん直爆受け子供が出たのではないか  
と、その時思いました。
- ②馬、牛が道で2倍の大きさになって死んでおりました。その横で何人かの人が水  
をくれ、水をくれという声がしておりましたが、近くに水がなく、水を上げたら  
死んでしまうと聞いておりましたので、探してまではと思ひ、可哀想でしたので  
上げません。それがまだ忘れられない思ひです。
- ③私と一緒に同居しておりましたおばさんが、被爆1カ年位してから高熱を出し歯  
ぐきから血を出し、食べる物も出来ず死んでしまいました。そして(かいぼう)  
されたこと。おばさんは無傷でしたのに、とにかく無傷の人でたくさんの方が後  
で死んでいきました。

〔長崎 直爆1.5km 女 19歳〕  
(24-0078)

③ 20歳代(被爆時)

家族の死、家の焼失、今後どうして行こうかと、涙を流している事も出来なく、親類の家で世話になりながら2人の妹の看護をして、葬式といっても着のみ着のまま、箱の中に入れて土葬にした時の事が忘れられません。

原爆の事は思い出したくありません。

二度とこのような不幸な事が起こらない事を祈ります。

〔長崎 直爆1.0km 女 20歳〕  
(22-0154)

被爆三日前、寿町一町内は爆弾直撃を受け、ほとんど全滅。

近所の材木屋で20余名共同炊事中、当時は警報もとれ、早昼食中(ラジオで敵機しゅう来を耳にしたとたん、爆音と共に低空飛行して来た時に)異様な光をガラス越しに見た。全員は急いで窓ぎわをさけ、うつぶせになった。爆風で幾分か真暗闇で何も見えなかった。息を吸いこむと、熱風でのどが焼付いて痛かった。私は手で鼻や口をおさえながら少しずつ息をした。しばらくして物が見えるようになり、あたりを見ると、もえやすいような物には所かまわず火がついていた。外から走って来た人達は皆、手の皮、顔の皮がむけ、ぶらぶらと下がっていた。近くで下敷になった人達が”たすけてくれ”と叫ぶ声がたくさん聞こえたが、だれもふり向けなかった。火はだんだんと広がりはじめ、おそろしさと自分がにげるのがやっとだった。

橋は前の爆弾にやられ、つり橋を渡り、山手の指定の防空壕に行ったが、知らない人でいっぱい。私が入って行く所はなかった。そのうちそこもだんだんあぶなく

なり、皆こんぴら山の方へ上がっていった。山では焼けただれた人が泣き叫び、水を求めていた。一夜お山でさまよいながら見る市内は、火の海となっていた。

〔長崎 直爆1.5km 女 20歳〕  
(10-0014)

長崎の西山に住んでおりました。実姉は爆心地近くの婚家先におりました。

目の前がオレンジ色に光ったあと、ドカンと来て玄関のドア（昔の1cm厚さの蝶つがいをねじ切って）が飛び、硝子は全部割れ、窓ぎわにあった鏡台かけは天井をつきぬけて天井うらに下がっていました。

幸い、金比羅山のお蔭で命拾いしたと思います。

夜になって山の向こうが赤々と燃えているのを見て、皆で姉のこと「大丈夫よね」と話していました。

待っていても姉の便りがないので、翌日兄が探しに行き、一日がかりで夕方おそくに疲れ果てて帰って来て「皆死んでいた」とひと言いつきりでした。

翌日手伝いの人2～3人を頼んで、兄はまた出かけ、また一日がかりで婚家先6名の方をお骨にして帰って来ました。

兄は未だにそのことは一言も話したがりません。

兄自身その後、死にそうに体調を悪くしましたが、何とか取りとめ、今も65歳で何とか過ごしていますが、よくあれ位ですんだと不思議です。

長崎の友人達（大へんな被爆をした方々）とも、時々その時の話をしますが、そのため運命がすっかり変った人が多く、私達はどうして大切な人生の中でこのようなことに会わなければならなかったのかと思われてなりません。

〔長崎 直爆2.0km 女 22歳〕  
(08-0004)

戦死者の奥様が手続きに見えて、それぞれの係の方に計算記入してもらった仲間の姿が（死亡している）目に焼きついてはなれない。また、気絶（私）して「助けて」「母ちゃん」「足をきってくれ」と泣き叫ぶ声で気づき、暗闇の中で人々に助けられたが、「足をきってくれ」と泣き叫んだ人の声が、どんなに口惜しかったか、また痛みを苦しんだか。助けられ外へ出ると、工員食堂、職員食堂と共に火の海。全身裸の人、焼けただれ、放心したままの人、赤ちゃんをかばって（戦死者の奥様と思う）自分はみるも無惨な痛みで苦しんでいる人、大勢の人が男女の区別さえ分からぬ程に焼けただれて、余りにも変わり果てた死体がいたる所に。またうめき声等、この世の生地獄と思えました。

私も全身にガラスがつきささり、血の流れにビショビショになった体。血がなくなって死ぬのじゃないかと不安と恐怖です。

一緒に仕事をしていた友が、私が誰なのか分からない。こんな悲しい事があっていいのだろうか。途中、水をくれ助けてくれと泣き叫ぶ人々に、何もしてやれなかった自分が、今では心に傷ついて残る。

炎の勢いが強かったので、さけて通る時の恐怖が今でも心に残って胸が苦しくなる。にげまわって福岡の小江という山の中で見ず知らずの小母さんが、「おにぎりを食べなさい、可哀想」と涙を流して、おにぎりを下さったのに、お名前を聞いて、お礼を言われぬこと等、悔やまれます。

私を助けて下さった仲間が、10月会社からよばれ、会社にもどってみると死亡して会えなかった口惜しさ。皆んな傷もなく、重傷の私は、いまでも苦しみながらも生きながらえて、なぜと問いたくなります。私も一緒に死んでいたら、こんな苦しみを味わうこともなかったのに。

父が重傷の体で私を探しにきてくれた事。その父も探しに来たために無惨な苦しみ方で死亡しているのだと思います。

住む家も食べものもなく、アメリカ兵が上陸してくるからと心配した父が、数人の人と舟を借り、五島へのみちのり。舟の中で親類の者が血をはき、紫色の顔になり、髪の毛が抜け苦しんで死んでいる顔が、今でも目に浮かぶ。私も防空壕（会社のトンネル工場内）に、土の上におる。次々と死んでいく友と一緒にいながら、そのこわかった事、今では死んだ人の顔を見る事が出来ない。土の上に横〔たわ〕ってなく、病院に連れていってもらったら、今の私にたくさん病気が仲よくくっついていないだろうにと、くやまれる。

親類の人々を櫓をくんで茶毘しましたが、もえなく、いやな臭い。こんな思いを

したので、私に苦しい病気を残していったのかと思ったりします。その時の恐ろしさと惨めさは、政府の方々知っているのだろうか。貧乏すると、人の心もかわり、住む家、食べるもの、着るものがなく、どんなに苦しんだか。

〔長崎 直爆1.0km 女 23歳〕  
(40-0226)

被爆当時の事は何もかも忘れられない事ばかりです。今更いろいろと思い出すだけでも、夜ねむれなくなります。

逃げる道すじで、右左と黒い手が私の足元にすがりついて来て、水をくれ、助けてえーと、かぼそい声が何とも恐ろしく、其れをはらいのけて逃げました。今でも思い出す度に胸が痛みます。

〔長崎 直爆1.0km 女 25歳〕  
(28-0103)

#### ④ 30歳代 (被爆時)

爆弾が落ちた瞬間のあのすごい光、炸裂音、地響き、まさにこの世の出来事とは思えない。あのほんの一瞬の出来事の恐ろしさ、今でもちょいちょい夢に見て、夢であればよいがと思いい目がさめる。汗いっぱいかいている。

聖フランシスコ病院前の道には、たくさんの徴用工の若い人たちが皆やけどや怪我をして、痛いよう、お母さん、水、水とわめきながらあの坂道を上がって来て、病院の(レンガ造り)窓という窓からいっばいに猛炎が吹き出しているのを見て、根も力も尽き果てたのか、折り重なるようになって倒れていく。たとえ一口の水でも下の小川の水を飲ませてあげれば、せめて名前だけでも聞いてあげれば等と、日がたつにつれその思いはますますつのるばかり。

私は体験記を書いた。その中にも書き綴っている。私は喉がかわいて病院の裏の川の水を飲んだ、夢中で飲んだ。おいしかった。川の中はやけどの人たちがたくさん水につかって痛みをこらえていた。夕方になったら死人の山に火葬をする、あちらこちらからジュジュジュと音がして、油のもえる臭いが鼻をつく、ほんの目の前で……。幾日続いたことか。

義姉の家でも、義兄とその子たち5人即死。上の子2人は徴用工で火傷。1人は10日目位に早産したが〔子どもは〕1時間後に死亡、その後頭がおかしくなり未だに入院生活をしている。火傷の女の子は修道院生活で、弟、妹、父親等の冥福を祈り一生を送る覚悟です。もっともっと書きたいのです。

〔長崎 直爆2.0km 女 30歳〕

(28-0013)

五歳になる長女を背中におんぶして鉄道の線路わきを歩いていた時、大地を裂く大音響がしました。続いて青白い稲光が目の前を無数に走り、一呼吸おいてウォーというなり声をあげて、耳もちぎれんばかりの爆風がおそってきた。その瞬間「しまった」という思いが頭をよぎった。とっさに地面に伏せたが、その後はどうなったのか記憶はない。それから何時間たったのだろうか、「お母さん熱いよう。痛いよう」。か細い娘の声で気を取り戻した。5mほど吹き飛ばされ、線路わきの田んぼの中に倒れていた。おんぶしていたヒモを手で切って娘を抱き寄せると、「あんなにかわいい子だったのに」全身は焼けただれてまっ黒、鼻も目も見分けがつかないほどだった。その時私は「この子はもう助からん。せめて病院の先生に手を握ってもらって死なせたい」と思いました。

子供をおんぶしたまま逃げる途中、川のほとりで女性が顔を洗っていました。信じてくれないかも知れませんが、その女性の体が燃えているんです。しかも顔は全部焼けただれてピンク色、マグロの刺身と同じでした。そしてにげている途中、かかとの高いハイヒールをはいているようで、とても歩きにくいのです。かかとをみたら、おしりや太ももの皮がやけどでめくれ落ちてからみついていたんです。この時自分のやけどに初めて気づきました。尻の肉は焼けて骨がみえ、着ていた厚手のモンペもすっかり焼けて、すっ裸でした。……………。

だれかがやかんで水を配っていました。長女が「あの水欲しい」と叫びました。全身黒こげになり、ただ一カ所皮膚の残った手のひらを差し出して「ここでのめるから」といっても、私は「私たちにくれるわけないでしょう」としかるほかなかったです。その時1人の兵士が水をぬらした泥んこのタオルをもってきてくれ、娘は、この世で一番おいしいものをのむように……タオルをしゃぶりながら死んでいきました。

〔長崎 直爆1.0km 女 31歳〕

(28-0345)

S20.8.9私は兵器工場につとめる主人のもとへ昼食を持って住吉町から大橋町へ四名の子供を連れて歩行中でした(長男△7歳、二男△△5歳、三男△△3歳の手を引き、長女△△子1歳を背負い)。閃光の一瞬にして其の場にたたきつけられたようだった。先を歩いていた長男、二男は見失い、私は思わず連れた子を前にかかえて倒れ、背中の子と前にかかえた子のため私は前後の火傷をまぬがれたと思います。私は身体の両横と両足を大火傷をしたのです。子供は両方共大火傷して呼べども声なく、夢中で山の方へ逃げながらも長男、二男二名の子をさがしたが行方不明となってしまった。三男△△は午後四時頃死亡。1歳の背中の子も重態で夜半に死亡した。私は背の子とかかえた子に身体の胸部の火傷をのがれたため助かったので、今でもあの時二人子に助けられたとっております。四名の子を一度に失い、ただただ呆然とするのみでした。先に走った二名の長男、二男二名はついにさがし当らず、後で人の話で、長男7歳の△らしき子が住吉町の住家の附近を黒くやけただれた姿でふらふら歩いていたのを見たと言う話を聞いたが、1ヵ月も後のことで、どうしても2名の子は見つからないままでした。あの時のことは現在寝ても起きても忘れることは出来ません。

注) 主人のもとへ弁当運ぶは、当人に弁当持参させることが出来ない食料事情は判ると思います。(かたい御飯はなく、かゆの如きもの飯盒にて運んだ)

〔長崎 直爆1.5km 女 31歳〕

(22-0268)

## ⑤ 40歳以上（被爆時）

親子3人がちょうど家にいて被爆した。息子は二階の窓辺、娘は台所で氷水をつくっていて、私は台所でじゃがいもの皮をむいている時でした。家はめっちゃめっちゃにこわれたが、3人ともけがはなく、こどもたちを促して山の防空壕にのがれたが、食べものはなく町に帰ったが、町は死者、負傷者でいっぱい目もあてられない状態であった。家はないし、食べるものはないし、親子3人が郷里に帰り、生きるための生活が始まる。

間もなく娘は自立し、息子も家の状態を考えたのか学校をやめ、マグロ漁船員となり、昭和29年～32年まで、ビキニ、クリスマス島など南方の海上で水爆実験の放射能を受け体調がわるくなり、2度の被爆にすっかり体に自信を失ったらしく、2度海中に身を投げたが助けられ、九里浜病院。体の不安に希望を失った息子は病院をぬけ出し、8月4日水死体で発見された。いっしょにいなかったのでくわしいことはわからないが、どんなに苦しく、どんなに口惜しかったことかと思うと、長崎で苦しんで死んで行った人々のことを思出し、たえられない気持です。

〔長崎 直爆2.0km 女 44歳〕

(39-0013)

## c) 性別不明

城山北一条の町内の防空壕で夜明かししないと、まだ火薬だけが工場で燃えてるので危ないと思い逃げて行きましたら、隣組の人が布を体にボロボロにまとい、3歳の子供に1歳の子供を裸でだいて来た時は、誰だか分からず、すぐ私の横の石ころの上に寝て死んでしまいました。

馬のお腹のようにはれ上がった男女の分別分からない人や、肉の塊がゴミをかぶりピクピク動いていたり、死直前の人は皆「お母さん」か「痛い、痛い」の二つの言葉だけでした。そして「水」もいってました。

耳、鼻、目のはしが切れていたり、雨降ったりすると死体からうじが出て来たり、黒いハエがいっぱいだにのようすいついていました。

終戦もしらずに防空壕にいましたが、何から書いてよいのか分かりません。現場にいた人でないと書いても思うように書けません。御免なさい。

”白血病” ”急性結合しき炎”等後遺症で急に部屋で倒れ、足高くしてさかだちしないと意識もどらず、外出も出来ない時ありました。

〔長崎 直爆2.0km 性別不明 18歳〕

(13-11-015)

今にして見れば、悪夢のような出来事でした。思い出せばいろいろ有りますが、一夜明けて故郷へ歩いて帰る道中、道の灰の中に子供らしい黒く焼けた死体につまずいた時は、足のすくむ思いでした。右も左も死体が見られました。実にこれがこの世の出来事か？ なぜつみもない人々がこんなむごい目にあわなければならないのか。どうしようもないいきどおりでいっぱいでした。

いよいよ町はずれに出る頃には、焼け落ちた家の中から女の人が長い髪を振り乱し、手を上に上げ焼け死んでいました。さぞや助けを呼びながら苦しんで死んでいったことでしょう。

また、兵隊が死体を集めたその中には、まだ死ぬことも出来ず、声も出すことも出来ず、道行く我々に何かもの言いたげなうつろな目だけを向けていましたが、何もしてやることも出来ず、逃げるようにして帰ってきた事を今でも思い出しては、ほんとうにすみませんでしたと心の中でわびています。

ほんとうにもう戦争はしてはなりません。もういやです。

〔長崎 直爆1.5km 性別不明 19歳〕

(41-0081)

20年8月9日11時2分。その時私は大橋魚雷工場にて旋盤上にのぼり、パイト台の修理中でした。青白光が目の前にパッとただけを憶えています。気絶して

どの位たったかわかりません。あたりは人影もなく、あたりは薄暗くなっていました。これはにげなければと思い、立とうとして立てず、足を見ましたがすねより肉がとび出てさがつて、立てないまま這って鍛造工場付近まで行き、鍛造工場の工員3人と出逢い、三菱第二門前の防空壕にはいりましたが、防空壕が火事になり、私一人生きのび、外の三名は防空壕にて焼死しました。気の毒なこと致しました。

私、防空壕入口に出、力尽き倒れおりました。海軍の人が通りかかり、そこに農家の人が車力引いて通りかかり、車力に乗せられ兵器第一門前に車力に乗せたまま置き去りにされ、一晩中照明弾に悩まされ、あたりは火の海、生きた気持はありませんでした。

翌日10日に道ノ尾方面より避難した人々がぞくぞく長崎に向かって帰ってくるので、水、水と頼みましたが、誰一人近寄る者としてありませんでしたが、私の知人が通りかかり、私の名前を言って漸く解りましたが、妻を探しに行くと言って別れたきりです。

10日の夕方に久留米衛生隊が来て助けられ、諫早巽田国民学校にて初めて水を貰って飲んだ時の事、これで助かるのかとあの時の事、一生忘れることは出来ません。

〔長崎 直爆1.5km 性別不明 27歳〕  
(42-0005)

(2) 2.0～3.0Km (直爆)

a) 男

① 9歳以下 (被爆時)

長崎駅近くで被爆し、その後は山中 (通称二本松) に避難し、2日目の8月11日夕刻、瓦礫のあちこちがまだくすぶっている爆心の街を抜け、道の尾駅まで多くの避難者と共に歩きました。

その時目にした光景。焼けあとのあちこちで肉親の亡骸をダビに付す人たち。暗い瓦礫の中で親を、家族を求めて彷徨う幼い子供の姿を、今もはっきり覚えていま

す。

そしてその時の血と膿の匂い、死の匂いも忘れることはできません。

あの地獄の中で生きながら家の下敷となって死んで逝った人達、かろうじてその時免がれながらも、その後原爆症で血を吐きながら死んで逝った人達、家族と別れ別れのまま死ななければならなかった人達、幼子を残したまま死ななければならなかった母親、その時のこれらの人達の想いはどんなものであったかを、今考えても悲痛な想いで胸が痛みます。

〔長崎 直爆3.0km 男 9歳〕

(17-0002)

## ② 10歳代（被爆時）

ア) 原爆の投下後、私は元気な人につれられ私の住家まで帰る途中、道路や川の中に大勢の人間が黒こげになってたおれていたこと。

また、家の下敷になって助けを求めている人々、私自身火傷を受けていてひりひり痛いのでどうすることも出来ず、ほんとうに生地獄を見るありさまでした。

イ) 当時3、4時間たって、私自身も目が見えなくなっていたので、耳だけで聞いていたのですが、あれだけの爆弾（原爆）を投下し人々を苦しめているのに、その夜まで爆弾を落とし続けていたので、私自身の考えは、人間のやることでないと、つくづく思っています。

〔長崎 直爆3.0km 男 14歳〕

(23-0324)

私は当時学徒動員で三菱兵器工場へ行っており、姉も茂里町の兵器工場に通っていました。投下時、私は幸いにも家へ帰る途中だったので助かりましたが、姉は工

場で直爆をうけ大けがをしました。夕方姉はもう死んだものと思い、死体をさがしに山越えして現場に向かったのですが、途中けがや、やけどなどしている人と何人も行いました。様子を聞いて、町の方へは行けないとのことでしたが、しかし姉ももしかして生きているかも知れないと、はかない希望を抱き、行ける所まで行こうと思いました。先に進むにつれ、悲惨な状態でした。死体の山、助けを求める人達でいっぱいでした。表面元気そうな人達でも皆無関心で見て通るだけで、助けてやる人はほとんどいませんでした。皆そんな余裕がなかったのだと思います。多分人間はあんな極限状態の中では、皆自分のことしか考えない動物だと、当時14歳の子供心に思いました。

姉は大けがをして、歩いて来るのに行会いました。姉はほとんど裸でガラスが軀中にささっていました。大きな傷は途中で応急手当をうけたとかで、ガラスが入ったまま傷口がぬい合わされていました。

真暗な中、夢中で家までたどりつきました。

ただ、そんな中で、いつまた同じような爆弾が落ちて来るかも知れないという恐怖感は一生涯忘れることは出来ません。

〔長崎 直爆3.0km 男 14歳〕  
(23-0400)

父のヤケドはひどいものでした。翌日は顔が赤黒くはれあがり、水ブクレのため変形して見え、この傷が治るのだろうかと思ってこわい思いでした。

傷は当初(あり合せのマシン油の塗りつけ)の手当と、その後の治療(自家製の薬)がよかったせいか、3年くらいで、ケロイドにもならずヤケドの跡もわからないくらいに治りました。

しかしこの間に、生き残った人の中で、頭の毛が抜けてまだらなハゲ頭になっている人の姿を見たり、死んだという話を聞いたりするうちに、今度は父や自分の番ではなかろうかと、大分恐ろしい思いをしました。

〔長崎 直爆3.0km 男 15歳〕  
(09-0010)

- 被爆2日後、爆心地の浦上地区を経て道之尾郷まで、行方不明だった従兄をさがしに出かけたが、路上、工場の焼け跡等に遺体が散乱。牛馬はまだ屍体がいぶつていて凄惨そのもの、嘔吐を催しそうになった。
- それまでさほど苦痛とは思わなかった防空壕暮らしが、空しく感ずるようになった。いわゆる厭戦気分か？
- 頭部にガラスの破片をうけ、なんとか帰宅して来た（従兄の自宅、道之尾郷だった）従兄は被爆3～4日後から頭痛を訴えて寝込み、死亡する8/15までの2～3日間に極度に衰弱。歯茎から出血、舌は団子状になり「口腔が痛い」と訴えながら、悪臭を放つ嘔吐をくり返し、正に拷問死と言えるような死にざまだった。

〔長崎 直爆3.0km 男 16歳〕  
（14-7012）

従姉妹達がリヤカーで運ばれて来て、三日もたたない内に水を欲しがり死んでいった。火葬場もなく小学校の校庭で材木を重ね、まるで魚でも焼くように人間が火葬される様は、今思っても身のけがよだつ感がする。

〔長崎 直爆3.0km 男 18歳〕  
（11-0032）

### ③ 20歳代（被爆時）

あの日非番で下宿に朝帰り寝ていた。ピカードーンの音で目がさめると、頭部より血が出ている。窓のガラスが破れ飛び散ってけがをしたようだ。下宿の幼児（5歳）がいないと伯母の声で一緒にさがし出し、けがをしていたので救急診療所につれて行き、下宿に帰るともう下宿は燃えていた。

その日一日、知人を頼りに世話になり、着のみ着のままで、翌日より焼野原の爆

心地を通り、爆心地より1.5K位の工場に行き、集まった工場の人や出勤した近所の消防団の人と共に救助活動、部下の死体処理、遺族との折衝と2週間位過ごした。

15日が来、戦争は終わった。しかし被爆直後より多くの方が死んでいる姿、救助しても死んでいった人びとの死にかた、水をもとめて手を上げている多くの同胞や学徒動員された若い学徒たちになにもしてあげることができず、今自分だけが生きのびているのが、断腸の思いで心のこりである。

〔長崎 直爆3.0km 男 22歳〕

(12-0082)

原爆をうけた時の「せん光」が特に強く感じ、それ以来、雷の稲光がとても恐ろしくなり、最近になってその恐ろしさが薄らいで来た。

〔長崎 直爆3.0km 男 23歳〕

(10-0026)

家族を案じながら、やっと道の尾に避難したが、死者と重傷者ばかりで、水を求める者がほとんどだった。明けて10日防空壕の中にいた妻子が生きていた。親子3人抱きあって喜んだのも束の間、妻子はすでに致死量の放射線を浴びており、残り10日間の命であろうとは、その時までは神ならぬ身の知る術もなく、ただ親子3人、焼野カ原をさまよった。

右を見ても、左をみても、黒こげになった死体が散らばり、男女の見分けも出来ない人。今にもパンクしそうに、腹をふくらませ、虚空をつかむような姿で死んでいる人。

爆圧のためか、妊婦の腹から幼いみどり児が飛び出し、おへその紐で繋がったまま親子諸共死んでいる。私は見た。この目でありありと見た。こんなにすごい出産

があろうか。ただ茫然と立ちすくんでいた。

道の尾の寮でも、真暗闇の中、大勢の人が、うめき、たけり、狂い、叫んでいたが、何の治療も受けられず、水を求めながら、死を待つのみだった。余りの惨状に発狂してしまった若い挺身隊の人。その後どうなさっておられるのでしょうか。あの草屋根の下に、3人埋まっています。助けて下さい。とすがりつかれたが、誰も助けに行ける者はなく、自分の事がやっとであった。

かろうじて、三角の実家にたどりついた妻と子供はすぐ発病し、妻の髪の毛はさわっただけで、そろそろと抜け、歯ぐきは溶け、歯は一本もなく抜け落ち、高熱が続き、必死に探した氷も手に入らず、19日に子供が、20日には妻が、さようなら、さようならと言いながら死んだ。妻は20歳の若さであった。

もう絶対に原爆は許してはならない。

〔長崎 直爆3.0km 男 25歳〕

(43-0070)

#### ④ 30歳代(被爆時)

①家族が住んでいる自宅は、爆心地から約100メートル内外の所にあった。

②私の当日の予定は、市役所に配給物資のことやその他願いごとの打合せに赴く途中、大波止棧橋を経て県庁坂にさしかかった際、稲光のようなピカードンと物凄い大音響、熱風を帯びた爆風で5、6m吹き飛ばされ、坂道下の窪みに落された。その時左腕骨折の部分に、爆風で飛んで来た小石か何かで傷を負った。やけどは左半身に熱湯をあびせられたようにひりひりして熱さを感じた。特に左腕骨折の傷は、当時いたみを感じた。

③あちこちからパチパチぶきみな音をたてて火災。浦上方面(自宅のある方角)から立ちのぼるどす黒い煙。近くへ遠くへ悲鳴、怒号「タスケテー、オカアサンー、オトトサンー、オトオサンードコニー、水ヲ下サイー、水ヲクレー、水ヲ」のさけび声が交差、まるで生きながらの生き地獄そのものでした。

その状況、私ごと無学者では舌筆で表現できません。お許しを乞う。

このさけび声を聞き、妻子のことなどの心配になり、体の傷、やけどいたみも

忘れ、思いは妻子がいる自宅へ、どこをどうしてあるいたかわからない内に長崎駅前にてた。駅前では窓硝子こ〔わ〕れ黒焦げの電車4、5台、いずれも乗客は黒く焼けただれ重なりあっていた。途中、見分けのつかぬ黒焦げ死体をあちこちに数多く見た。金比羅山の中腹で、窪たまりにある田舎風の軒家（全焼に近い所）、梁柱の下敷きとなって救助を求めている手足眼等に重傷を負った70歳位の老人を救助したまでは良かったが、水をくれ、水をくれで付近一帯に水が無く、それに手当もできず、寸分にして死亡させたのが今にもくやまれる。

- ④自宅の焼跡にたどりついたのは真夜中、裏庭崖下（防空壕のあった所）付近をうごめく人影、妻子爆死と思いこんでいた私、妻が生存しているとはうれしくて…その妻が私の目前で、灰をかぶり、子供達の名前を呼びながら、話しかけても無言のまま、無我夢中で狂気となって、くずれた防空壕の土砂を傷ついた両手で払い除去する姿。今でも涙なくては……ついに子供達の遺体、遺骨見当らず行方不明。そのショックか、妻はその後は植物人間同様に苦勞がつづきました。

〔長崎 直爆3.0km 男 36歳〕

（11-0098）

#### ⑤ 40歳以上（被爆時）

被爆当時私が体験した恐ろしさの一端と、今もなお心に残ることども、2、3を申し述べます。

平時には騒々しい場所のことを火事場のごとくと申しますが、私は静かなること原爆のごとくと申します。幾千万戸の家が一時に焼け、幾万の人が死んで行ったのに、ただ一人消火作業をしている者はなく、目についた物は幾千の焼けるにまかされた家と如何とも手のつけようのない死者。

次は、原爆投下からすでに3時間余を経ても、ほんのわずかの外出中で不在の主人か肉親の者のみ、私の場合も事務所から2.5キロ足らずを、道路が焼けていたので5、6キロも廻り道し、山の頂上から水道の放水路に降り、川の中を胸まで浸かって我家に着いたのは2時過ぎで、主家は焼けてなく、裏の離れが盛んに焼けて、火の中にミシンの姿が目についた。

当日留守番をしていた長男と書生の姿が見当らない、旧制中学四年生と四月に卒業したばかりの書生、いずれも体格もよく元気旺りの青年。いつも以前から、非常の場合の訓練に町営防空壕へと打合せていたので、若い元気者のことで信じ、100米ほど先の山裾を廻った所で灰色の肌色をした一人の青年と出会い、市商（長崎市立商業学校）へ連れて行ってくれと頼まれ、町防空壕の手前でもあり（じゃあ来たまえ）とその人の左手を持って焼けてる道路の電柱をまたごうとした時、その人の左手首の皮が私の右手に残り、驚きと気の毒を一時に感じ、今も忘れられぬことの一つとなっています。その時またグラマンが機銃掃射に来て動きがとれず、市商も校舎が火の海のためその青年を道端の繁みの中に残して来たが、彼は被爆からすでに5時間を生き抜き、学校へ学校への一念で、普通の常識では考えられぬ生命力というか精神力というか、その偉大さに驚きます。

その他の例として、私の眼の前で精神病者になった人もいます。6人の家族を死なせ、奥さん以下赤ちゃんはじめ5人のお子様を防空壕の上へ次々と並べられた事実は私が認めますに、四、五日して私の疎開先へ親類の人から家族6人とも、主人がいるのに仏さんが一人も見当らん、近所の貴方知らぬかとのこと。私は6人の遺体を防空壕に並べられたのを見て手を合せお悔みを言った時、御主人はカラカラと笑いただの目付普通でないと思いましたが、その時すでに気狂いになられていたと思います。仏さんは長崎港に流されたと思います。

〔長崎 直爆3.0km 男 41歳〕  
(27-0250)

b) 女

① 9歳以下（被爆時）

父が爆心地近くで被爆のため、母、伯母が捜しに行き、火傷が重度の父を動かすことが出来ず、あまりにもむごい状態なので子供等（5人）に逢わせられないと放心状態で泣いていた。

弟がガラスでケガしたので小学校の治療所に連れていったが、軽度すぎて（5cm

位、頭) 中に入れなかった。

[長崎 直爆3.0km 女 5歳]  
(20-0048)

## ② 10歳代(被爆時)

8月15日被爆地(浦上天主堂)の近くで、焼死体がごろごろしている中から、助けてくれ、水をくれと言って私の所へ寄って来た人がありましたが、私は恐ろしいだけで子供心に(13歳)夢中で逃げたのを忘れる事が出来ません。その人はまるはだかで全身やけどされていました。今でもその人の事や周りのその当時の光景を思い出すと、夜夢に見る事があります。

[長崎 直爆3.0km 女 14歳]  
(22-0345)

当時私は長崎医大の職員でしたが、当日は食糧の配給日であったために自宅にいたのです。投下の翌日から近所の学生さんと一緒に、医大の焼跡へ行って負傷者の手当のお手伝いをしました。終戦の日まで。

ほとんどの人々が「水をくれ」と言っていました、水もなく困った。

私等は病院の地下室からブドウ糖のアンフルを持って来て、それを水の代わりにみんなに飲ませました。

助けることが出来ず、ただ息の止まるのをじっとみてるだけ、そして死体の処理を、焼跡で長時間かかって焼き、空き缶にお骨を拾っていたこと、決して忘れることは出来ません。

今思い出しても恐ろしい場面、それは当時その場を経験した者でないと判ってもらえないでしょう。

幸いに私は今日も生きていますが、亡くなった方々に対して済まないという気持は一生持ちつづけるでしょう。

被爆者であるが故に、職にもつげなかった、結婚も出来なかった、そんな苦しみ  
が、今幸福に暮している方々に判ってもらえますか？

〔長崎 直爆3.0km 女 15歳〕

(22-0339)

当時長崎県立長崎高等女学校4年生だった私達は、三菱兵器製作所に学徒動員していた。

茂里町の第一機械工場にいた友人の△△さん(一人っ子)は、頭上を動いていた大きなクレーンが落ちて、片方の腕の肘から先がクレーンの下に挟まってどうしても抜けず、迫って来る煙のために、彼女は自分の腕時計を両親に形見として渡してほしいと友人に託した。そして友人に、自分はいいから逃げてくれと言って、彼女は焼け死んでしまった。この彼女の悲劇的最期が大きな心の傷となり、私は現在に至るまで涙が出て語る事が出来ない。今日初めて、40年ぶりに記しました。私も子を持つ親になり、友人が△△さんの母上になじられた気持が分かる。

また、8月10日頃だったと思うが、長崎駅前の付近で、友人の消息を尋ねに爆心地へ行く途中、全身裸の男の人だったと思うが、肉片がボロ布のように全身ボロボロにたれ下がって、血に染まってユーレイのようにうつろな表情でゆらゆらと歩いていた姿を見て、あまりのむごさに胸が裂けそうで、何もしてあげることが出来ず、恐ろしくて急いで自宅に帰った。このことも心の中に原爆の恐ろしさがやきついています。

〔長崎 直爆3.0km 女 16歳〕

(11-0046)

- 翌日だったか翌々日だったか、焼けた家（自宅）に向かった時、家の近くで「お姉さん、お隣のお姉さん」と道端で焼けこげて死んだんか生きてる人かわからない人々の間から声がかかり、その方を見ても皆黒こげで判別がつかないでいると、「隣の△△です」と名乗られ「水を飲ませて下さい。水を」と言われ、もちろんその辺りに水などあろうはずがなく「しっかりしてね、すぐに警防団の人に持って来て貰うからね」と言って別れ、自宅の焼跡に行って母や弟妹の死体を探したが判らず、帰りにまた先程の場所で△△さんを探したがわからず、それきりになってしまったことが、今でも苦しい思い出になって残っています。
- その後日、また、焼跡に死体探しに行った時、台所とおぼしき所に真黒コゲになった死体（よくよく見なければ死体とはわからない）、これは多分母の死体で、その側に南瓜が形のまま焼けて残り、棒でつくると黄色い南瓜の煮えた色が鮮やかに残っているのに、母の死体は母らしい痕跡を何も残さずに黒い炭となり、触るとポロポロにくずれ、白い骨が見えたこと。これは憶い出すのも辛い悲しいことです。

〔長崎 直爆3.0km 女 18歳〕

(23-0421)

被爆して、防空壕に逃げるまでは直撃弾だと思って夢中だったが、防空壕の中のケガ人の異様なありさまに不安に思った。

夕方までいたが、まわりが燃えて、もういられないと、みんなちりぢりに逃げた。自分は北を指して逃げたが、どこを通過していいかわからないくらい死体の山だった。途中何人もから「水を、水を」と足をひっぱられ、弁当箱に水をくんできてあげた。浦上駅を通ったとき、駅舎の中に生き埋めになった人の「助けてくれ」という小さな声がきこえ、同じ国鉄職員なので、みんなでなんとかしようとしたが、どうにもならず、通りがかりの人々に加勢を求めたが、みんなそれどころでなく、やむをえずあきらめ、その場を離れた。浦上川沿い、大橋のところには、水を求めて逃れてきた人々だと思うが、死体の山だった。

長与に1週間とどまって、救援の手伝いをしたが、駅前も死体の山だった。

長崎に帰るころになって、ふと長い間髪をといていないことに思いあたって、く

しを入れて見たら、頭中壁土（長崎駅の？）だらけで、くしが通らなかった。

〔長崎 直爆3.0km 女 18歳〕

（42-0496）

- 下級生の重傷者の運搬に行ったが、他の人に助けてとすがられたこと。
- 自宅にすぐ帰ってしまった。残って救護すべきではなかったかと思う。
- 傷一つないのに、すきとおるようなまま死んでいった人がいた。訳がわからず気味が悪かった。
- 看護するというのは、私にとっては蠅を追ってあげることだけだった。それでも蛆が傷にすぐわいた。

〔長崎 直爆3.0km 女 19歳〕

（26-0015）

### ③ 20歳代（被爆時）

当時私は、稲佐女子青年団員として、何か事がある時にと救護活動の訓練を受けておりました。原爆が投下した時会社からの帰り道、町なみ家は半壊、出会う人たちの姿それは恐ろしく、口筆にとえようもありませんでした。父や妹もあのように焼けただれているのではと泣きながら……幸か不幸か家は半壊してましたが父も妹も無傷、うれしさにだきあって泣きました。

私は稲佐小学校に、校内の様子を見て二度びっくり、あのひろい校内にはだかどうぜん、赤黒く焼けただれ焼き芋をひっくりかえしたよう、その臭い、うめき声、肉親を探す人の声、まるで生地獄。ただぼうぜんと立ちすくんでいました。

「キサマ何をしてる」と大声で軍医にどなられわれにかえり、それからは兵隊さんとタンカで死んだ人を外に運びだす。

飛行機の爆音におののき被爆者が「防空壕にいれて」と私の足をひっぱる。「まってね」と声をかけるだけ、あわれさ、むごさ。

この人まだ生きているのではと思った人も外へ、またけが人を運び入れる。

こんなことが何日つづいたか、私自身も頭がいたく、はきけ、めまいがしだし、被爆者の人たちに手をあわせ帰りました。

〔長崎 直爆3.0km 女 20歳〕

(27-0045)

電工さん達が次々と現場から会社へ帰ってこられました、皆さん苦しそうに自分の体をつよく壁に何回も何回も走って行ってはぶっつけて、しばらくして、(くり返して) 気を失ってその場へ倒れて息を引き取られたり、水を下さいと、小さな声でうわごとのおっしやったり、ガラスで顔や体を切って、血だらけのまま女の方は泣き叫んでおられました。

宿直室にたくさん、歩けなくなった方々が横たわっておられましたが、二日、三日とたつうちに亡くなってしまいました。

10代、20代位のお若い方達が多かったので、とてもお可哀想でした。生き地獄とはこのことだろうと、今も思い出すと涙が出てまいります。

〔長崎 直爆3.0km 女 21歳〕

(27-0330)

被爆後家へ帰ったら、妹が顔にやけどをしていてびっくりしたうえに、主人がアキレスけんを破片で切っており、治療したくても治療ができずに、被爆後5日目に  
出島岸壁からあかつきたい〔暁隊〕の舟で五島にひきあげた。

主人は足がびつことなり働けず、被爆後1年半で亡くなった。

また、被爆した時、背中におぶっていた子供は植物人間になり、6年後に亡くな

った。主人と子供を亡くした悲しみは、今でも忘れられず、原爆の恐ろしさがいまだに心にのこります。

〔長崎 直爆3.0km 女 24歳〕

(14-0905)

- ①救助された方々が防空壕の中で次々と死んで行く姿を眼の前で見て、自分もそのようにして死んで行くのかと思い、こわい想いをした。
- ②御手洗いに行く途中で水をほしがって泣きさげんでいた人を見ても、どうすることも出来なくて困りました。

〔長崎 直爆3.0km 女 24歳〕

(27-0280)

#### ④ 30歳代 (被爆時)

- ①車中で被爆し、顔面をやけどしたが、他の人もやけどしている姿を見て、自分もそういう姿をしているのかと思うとやるせなかった。
- ②男性が真裸でいるのを見て、原爆投下ということがわからなかったので、不思議な気持になった。
- ③水をもとめている人に、水が届かず、かわいそうでならなかった。

〔長崎 直爆3.0km 女 33歳〕

(40-0479)

⑤ 年齢不明

被爆の恐ろしさは、言葉にも筆先に言い表わせないほど心に焼きついています。何をどんなに表わしたら良いのか分かりませんが、私達が町に出てみると、家のこわれた材木の上に死体が重なりあって焼けている姿、生がある方々の苦しみ、とても～～とても、何と表現したら良いのか見当つきません。

〔長崎 直爆3.0km 女 年齢不明〕

(42-0179)

c) 性別不明

- 1) 森の中でセミをとっていたが、飛行機の爆音がきこえ、光が走ったので思わず地にふせたが、自分たち(友人数人)が機銃掃射されたと思った。しばらくしてあたりを見渡すと、お宮の柵が(石製)パタパタとたおれており、その爆風の強さにおどろいた。
- 2) すぐ山の上から下の方(長崎駅)をみると、真黒で何もみえず、人々の泣き叫ぶ音がまるで地獄のように、ごときこえていた。
- 3) すぐ隣の友人(しげるといふ男子、2才年上)が直射をあびて真黒になって銭座町の米の配給所から家にもどってきたが、イタイイタイといって泣き叫んでいたが、間もなく亡くなった。
- 4) 防空壕の中で、近所の人たちとしばらく一緒にいたが、近くの兄さん(ゆうちゃん)が顔からヤケドのためのシルがたらたらと流れていた。
- 5) 被爆直後、足を切断した女の人が山の方にあがってきた。また何人もの人が髪はふりみだして、次から次に山の方にあがってきた。
- 6) 約1週間後、中心地を通過して道の尾駅まで歩いたが、浦上川(大橋)には真黒の死体がゴロゴロしていた。

〔長崎 直爆3.0km 性別不明 年齢不明〕

(42-0515)

(3) 3.0km～(直爆)

a) 男

① 10歳代(被爆時)

僕にはその時家庭はありませんでした。家族といえば兄と2人でした。実は僕たち2人は養護施設にいたのです。(天本養護施設)

その時僕は近くの空地で友達とセミ取りをしてました。その時何かピカと光が走り、石や砂や風が僕をその場にたおしました。近くに防空壕があるのでそこまでと思立上りましたが、その後の事は覚えてません。気がついたら壕の中にいました。誰かがつれて来たのでしょうか。早く施設に帰らなくてはと思い、外にでました。施設に帰ると兄が、生きていたのかと手を取ってくれました。夕方6時頃でした。

園長先生の娘さんが帰らないそうです。娘さんは長崎大学病院に勤めていたのです。

8月10日、11日と先生方始め僕たちは病院に探しに行きました。その道に死んでる人、ケガしてる人、大八車に死体の山。まだ生きてる人ものってました。僕は何も出来ないのです。本当に目にやきついてます。娘さんはその後も分からないそうです。

[長崎 直爆3.0km～ 男 11歳]  
(40-0244)

書けない

[長崎 直爆3.0km～ 男 14歳]  
(22-0022)

父は中心地より1km位で、妹は2.5km位のところで被爆しましたが、父はやけどがひどくその後仕事も出来なくなり、妹はひふの斑点で無残な姿でした、故に家庭も貧しくさんざんでした。

父はそのやけどが元で病床にふして、20年も苦しみ続けてとうとう亡くなり、妹も現在入院中です。医師から後3ヵ月位の命だろうと言われております。

当時のことは思いだしたくありませんが、水をくれーと言う声があちこちできこえ、稲佐橋のところで泥水をあげたことがあり、その人にとってあの水が末期の水であったと思いますが、いいことをしたのか、悪かったのか、今でも頭の中で考えることがしばしばです。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 17歳〕  
(11-0075)

ア) 浦上川、大橋附近の水辺(水量若干)に、馬、人がうつ伏せに水辺に向かって倒れていた。

イ) ゆり動かし、助けようとの心はあるが!!助けには行かなかった。ごめんください。足の裏が焼けて我が身でいっぱいであった。

注) 落下後3日目かと記憶する。

ハ) 実をいえばただただ放心状態であり、死した人には一顧だにしなかった。戦争とはこんなものか!!ただただ頼りになるのは自分のみ。こんなことを書いて良いものか。妹も女子挺身隊で、兵器工場か、または戸町トンネル工場にて作業しているのに。

以上

〔長崎 直爆3.0km～ 男 19歳〕  
(42-1932)

② 20歳代（被爆時）

あまりにも被害が大きく、ただ茫然とす。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 21歳〕  
(47-0005)

翌日、近所の娘さんをさがしに中心地一帯を廻る。死んでいる人を踏まないよう、またその中から足を握られ水をください、または住所を言われても、何もして上げられず、地獄絵を見るようで、今もあの方たちは？

思い出すのも苦しくなります。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 25歳〕  
(13-07-007)

考えたくない、思い出したくない。私は召集された衛生兵のため直接戦闘はしなかったが、原爆投下後長崎市内は死臭と死体の山。まだ死にきれないたいけな子供、老人、女性、非戦闘員の姿は、水、水と叫びながら死んで行く姿はどうしようもない。自分の力不足、この世に神も仏もないものか。

ひと思いに楽にしてやるのがよいのでないか、今考えるとぞっとするようなことを考えたり、水をやれば必ず死ぬと分かっているながら、水、水と叫ばれればやるのが情けじゃないかと、軍医は絶対にやってはいけないと命令され、私は命令に服したことを、今でも正しいかどうか疑問に思っている。

戦争はいかなる理由をつけても正当化することは出来ない。

戦争は人類の滅亡であること以外何でない。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 27歳〕  
(13-07-001)

### ③ 30歳代（被爆時）

- ① 当日までは川の浅い所で腰まで水の中にいてふらふらしていた人が、水を下さいと小さな声で叫んだ人が、翌朝は死んでいたのです。

あの時、水をやっていたらと思うと、今でも涙が止まらぬのです。

- ② 道の尾の六地蔵さんの前に腰かけていた70歳位のおばあさんが、生のキュウリを大事そうに両手で抱くようにして一口ずつかじっていたのが、翌朝は半分残して死んでいた。

とても耐えられないと思いながら妻を探しに向かったのです。

心身共にたかぶっています。乱筆でお許し下さい。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 32歳〕

(42-0404)

飽の浦銅工場に通ずる道路には荷馬車が横転し、大きな馬が焼け死に、稻佐川が海に流れ込む川口には無数の被爆死の方々が打ちよせる波に漂い、暑い太陽にさらされていた。街の両側は燃えるにまかせ、消火する人など全然なかった。その中に3名、4名と家と一緒に死んだ人たちが燃えて、その異様な臭いが鼻をつき、また駅近くでは満員電車が丸焼けとなり、逃げだそうとしたのだろう、窓から半分身体を乗り出した兵隊の姿は哀れであり、この無惨な光景はとてもこの世のものとは思われなかった。

時津から浦上駅にくる途中、被爆した人たちが山に逃げようとしたのだろう、鉄道線路にも多くの人たちが折り重なるように死んでいた。

かねての訓練などなんの役に〔も〕立たず、指導者も命令系統も自分の生命を守ることだけで、人の事や面倒をみてやれない人間の弱さを見て、頼りになるのは自分だけ、助かるため右往左往するだけの人たちだけのようでした。

この原爆で義兄と義姉の息子の2名が亡くなりました。原爆のない世界の平和が一日も早くくることを願っています。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 34歳〕

(46-0077)

あの日下宿屋に帰ってみると、下宿屋の老主人が逃げる気力を失って、血の染まったシャツ姿で塵箱に腰かけたまま、前の家の焼けるのを放心状態で見っていました。老母は腰をぬかした老人を残して町内会の人といっしょに町内会の防空壕に行っていました。私は老人を安全な場所へ移して、その翌日老母を探しに行き老人を預けましたが、老母は疎開させてあった娘が危ないと言って浦上の方へ行きましたが、その後どうなっただろうかと案じております。

私は何一つなくなった老夫婦に夜具や衣類をやって、その翌日に帰郷しましたが、頼りない老人たちのことや、疎開してあった娘はどうなっていたらどうかといつも気にかかっております。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 37歳〕  
(46-0074)

b) 女

① 9歳以下(被爆時)

現在70歳の母にいろいろ聞いてみましたが、とにかくあの時の状況は思い出しただけでも気がくるいそうだといつも言ってます。

人々のあと片もなく焼けこげ、顔、体すら分からぬ状態で、助ける、何かしてあげるところではなく、ただただぼうぜんと立ちすくむのみで、どんなに言い表わそうとしても言葉では言い尽くせないとの事。

目の前で人々が死んで行く姿、自分の身内がバタバタと急に死ぬ様子を目のあたりに見、恐怖の何物でもないとのこと。

あまり聞くと気がめいりそうなので、私もあまり聞けません。思い出す度に涙を流す母を見てると、年齢的に65歳以上、70歳以上と分けてでも、被爆者に対しての援助を充分にしてあげて欲しいと思います。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 1歳〕  
(11-0177)

父をさがしに、母と兄と私と3人で4日間さがしましたが見あたらず、むしろなどをあけて見ますが、人間とは思えない姿でした。

私が今一番目に残る事は、死んだ人達を山のように積み、その上に残材をのせて、何かを焼くように死体を焼いたことが目に残ります。

私は8歳でしたので何も出来なかったけど、父を探すことは出来ますので、死体の間をこえながら、父を探します。すると水を飲ませてくれとすがられますが、私も生きて行くのがせいっぱいですので、その人達に水などやる時間はありませんでした。

私達3人は、3日間何一つ食べずさがしたけど、父の姿はありません。そうこうする内に1週間が立ち、家は焼け、どうする事も出来ませんので、母の妹の所に行きました。

私は今でも想います。死体を見ない父が、今でも帰ってくるような気がします。

[長崎 直爆3.0km～ 女 8歳]  
(42-0306)

## ② 10歳代(被爆時)

原爆は考えたくない。その意味は、人々の助けをもとめる声が耳について恐ろしく思います。

[長崎 直爆3.0km～ 女 13歳]  
(27-0531)

原爆直爆長崎にて。

枕木が燃え、死者がころがっていた。

8、9日午後1時2時頃まで井戸水を汲んで飲ませていた。

被爆者はそう難してたすけをもとめ、アリのごとくつらなり、水、水と言って来た。岡崎の井戸水をどどんくんでやっていた。有難うウマイと言いながら飲んだところが「コラ、キサマ、水を飲ませたら死ぬぞ」と言ってツルベを取り上げた。消防団長みたいな人がトラックよりメガホンでとなり、下りて来てつきとばされた。

水を飲まなかった被爆者は、力つきて幾人もたおれて死んだ。それをトラックへつみあげて長与方面へのせて行った。ツルベを取り、水を飲ませなかった指導者、あん奴、今でもにくい。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 13歳〕  
(43-0076)

原爆投下の当日は、もえさかる炎がみえてとても行けないと、逃げて来た人からきいたので、姉の事が心配だったがあきらめ、翌日叔母と二人で、徒歩で長崎の自宅（浜口町）へ向った。川岸では、死んでくろこげの人達をつみ上げ油をかけてもやして、死臭がただよって、夏のさ中のこと、たまらないのでタオルで口と鼻をおおい歩いた事を覚えている。無さんな黒こげの死体ばかり、もう姉も生きてはいまいと思った。収容所と西山の貯金局にも足をのぼしたが手がかりはない。こんなにむごい死に方をして、死の瞬間どんなに苦しかった事だろうと心が痛んで、何か月もひょっこり帰って来るのではないかという気がしてあきらめられなかった。せめてお骨をひきとって、浜松の市営の墓地に埋めてやりたいと思っています。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 14歳〕  
(22-0047)

8/9日以後私達の町の防空壕へ、直接被爆して、手、足、体等ぼろぼろに焼けただけ、命からがらの人たちが、異様なうめき声をあげ泣きながら何人も何人も、ある人はリヤカーに、大八車に乗せられて逃げのびて来た。それ等の人たちを子供

も大人も一緒になって介抱した。ほとんどの人たちがまともな顔の人はおらず、衣服はぼろぼろで、子供心に怖い怖いばかりだった。怖さが先にたって上手に介抱出来ず、苦しみながらそのまま死んでいく人たちをだまって見ていた。思い出す度に苦しく辛かったろうと、名も知らぬ人たちが哀れでならない。

防空壕の中も、街のあちこちでも、死臭がひどかった。家屋の燃えかすの臭い、それ等に油をまいて幾つも幾つも死体を焚くあの臭い。頭の痛くなる臭いの長崎の街を忘れることは出来ない。何年も臭いがたちこめていたように思える。

食料探しに街を歩いている、電車の中でも、大人の人たちが皆々ぼんやりとした顔、生きているのかと疑いたくなる人々の顔々を思い出す。終戦という実感が私はまだよく判らなかった。

あの日私も学徒動員先へ出勤していたら、今の私はない。学友の一瞬にして死んで行った人たちを思うと、若くして逝った人たちの死を無駄にはいけないと強く思う。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 15歳〕  
(27-0089)

出島にあった門司鉄道局長崎管理部は、火事のため長与に移転しました。あの日のものすごい音と共に事務所のガラスがわれ、壁にかけてあったくわなど飛んでき、何がなんだかわからないまま、私達は炊き出しや長崎方面より貨車で送られて来た人が人の救護と手わけして当りました。

その当時住居は南山手町13番地にあり、全滅のデマが飛ぶ中、家族の安否が気がかりのまま、翌日線路を歩いて長崎方面へ向かう。

ものすごい悪臭と死んだ真黒こげの方々、まだ16歳だった私は、あまりのことに長与に引返そうと思いつつも、やはり覚悟をきめて歩きつづけた。真黒の死体の中から水、水ととぎれとぎれに聞こえる声にもどうにもしてあげられず、逃げるように歩きました。

その後20年間は、長崎に行く度に熱を出すので、お前はもう長崎に行くなと主人に言われたりしました。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 16歳〕  
(11-0096)

40年経っても真新しく思い出される当日の悲惨な姿。脳裏に焼きついており忘れることが出来ません。

翌日叔母を探すため入市、県庁を境に大波止方面焼野原。あっちこっちとまだくすぶり続けており、いたるところに死体があり、まるで豆をまいたような死体が、中には火ぶくれで着物等もちろん着た姿なく、真赤にはれあがり、あれほどに人間てふくれるものなのかなと思った。うつぶせになっている人、上をむいて亡くなった方、姿形なく黒こげにこげてくすぶっている人、目をおおいたくなるほどでございました。一瞬の内にこれだけの人々が亡くなり、一面焼野ガ原になるとは、いったいどんな大きな爆弾なのかな、ひどいことをするものだと思いました。

丁度銭座町の手前まで行った時、一人の老人が杖をつき今にも倒れそうな、手をさしのべなくてはと思うほど、水をくれ、水をくれと言い続けた人、水すらなく、またその人を助けてあげたくとも、気持の余裕もありませんでした。今思うには何とかしてあげられなかったものかとくやまれます。今もあの姿が忘れられません。

しばらく行ったところで、急に山の上から低空して来た飛行機にびっくり、あわてて防空壕の中に走りこんだところびっくり、白い斑点が出た人が亡くなっておられ、飛行機が飛んでいるのも忘れてとび出しました。当座は情報もなく分かりませんでした。今思えば原爆のしょうじょうと見た思いがいたします。

自宅にたどりついた折に、一人の男性の方が、ここに残っている品物等にはふれない方が良くから持ち帰らないようにと言われたのが、どういうわけか理解出来なかった。

ほたる茶屋の上の本河内のところのお寺様にも、たくさんの方が避難され、中にはケロイドみたいに体全身やけどでジクジクとなって、とても気の毒な気がいたし、こうして助かった我が身、生きることが不思議な気がいたします。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 16歳〕  
(14-0310)

被爆直後恐ろしくて防空壕から出られません。その中傷ついた人達が入ってきます。水をくれと哀願されますが、防護団の人達から、死ぬからやるなときつく言われます。結局その人達は皆死にました。

翌日爆心地付近に知人の死体を捜しに行きましたが、その途中の赤くふくれた死体、馬の死体、市電の中でそのままの状態に黒くなって死んでいる人、それから赤く大きくなって死んだ人を運ぶ（戸板にのせて）人達、気狂いのようになって我が子を探す母親等、それ等を見ても何の感情も湧かなかったことが、今ではぞっとします。あちこちがまだくすぶっており、地面があつくて引返したとおぼえております。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 19歳〕  
(11-0175)

### ③ 20歳代（被爆時）

8月9日当日は帰宅は無理といわれて、横穴で一夜を明かし、次々ともたらされる被害の様子におびえた。

10日、同じ方角の女子6名は海軍大尉につきそわれて自宅方向に向かった。山王神社まで進む間に、逃げて来る被災者の姿は見るも無惨な地獄からの亡者そのもので、死んだ我が子を抱いてうつろな眼で歩いている若い母親、背中の皮がはがれてゆれている男性、血が頭から顔から手足から流れたり、黒っぽくこびりついたり、電柱や、たおれた家、未だ燃えている家々のそこそこに死体がごろごろ。大波止から長崎駅を過ぎたあたりからは、もう一面焼野原というか赤茶けた焼けた屋根瓦で、その中に土人形のように男女の区別もつかない死体ごろごろ、わずかに息のある人は水をくれと弱々しく声をかけてくる。暑い時期なので、死んだ人や馬がふくらんでびっくりする程大きくなってころがっている。ようやく右に山王神社の片足になった鳥居が立っている辺りまで進んだが、そこから先はもう無理なのでまた引き返し、横穴でもう一晩すごして11日、再び自宅近くまで行き、横穴の中に避難して奇跡的に助かっていた母と再会して、そのまま鉄道で喜々津まで逃げてお互いに助かったことを喜び合ったのに、その母も8月30日原爆症で死亡した。死ぬま

での2週間余りの苦しみを見て、即死した人の方がどんなに楽だったかと辛い思いだった。

地獄のような風景を見た私は、その後何年も無感動な人間だった。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 20歳〕

(22-0183)

風頭山の山頂で、小学校の健康学園があり、三つの教室と小使室があり、小使室に主人の復員を待ちながら両親と妹、弟と私たち親子が住んでいました。

当日昼前に、早めに食事をしていましたら、解除のはずなのに爆音がして、あっという間にピカッと光り、ガラスが割れ、教室が半壊になりました。恐ろしくて外でゴザを引いてねむりましたが、その間に町の人たちがドンドン登って来て、教室に集りました。子供が外で遊んでガラスでけがをしましたので、小学校まで下りましたが、たくさんの人が血を流し、ハダシで歩き、山から下りる時はセミヤトンボが一面に死んでいるのが見つかりました。

三菱造船で働いている兄もけがをし、その後ガンでなくなり、兄嫁の妹もティン隊で軍需工場で働いて爆死。妹の嫁ぎ先の兄弟もハグキから血が出て止まらないとっていました。私たちはずっと山上にいました。

主人が復員してから、直ぐ東京に行きましたので、あとは風の便りで聞くばかり。ただ長崎でたくさんの方の死体を焼く火が、夜空に真赤に浮き上がり、その悲惨さは声をのむばかりでした。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 23歳〕

(13-07-016)

#### ④ 30歳代（被爆時）

黒焦げの死体。裸の放射能膨れの死体。白骨死体。肉の塊りとなった死体。人権もない虫ケラ同様の死体。肌に焼ついた紺模様の娘さん。4日ぶりによく帰ってきた隣組の学生アイさん。秒よみに寸刻を待たず悪化する容態。1分をたたない間に喉をふさぐ疑幕。悶え苦しむ度にドロドロの血便を排泄し、排泄物が出なくなった時、空気を抜いた風船同様、人の形をした板のようにペシャンコになって息絶えて死亡。放射能の人体に及ぼす怖ろしい威力を目にしながらも、施すすべもなかった私です。

9日午後2時頃より、私の配給所を目当てに帰って来た、人達が名前を呼ばれても判別のつかない姿。肌はダラダラとブラ下がり、黒人同様にチンブラの姿で水、水をと、この人達を肩車し、またおんぶして自宅に送り届けました。この10人以上の人達は、日を追って全部死亡。裸の男性を裸に近い姿で、恥も外聞も無く背負って歩いたあの日。アア、ウマカッタと飲まれた水。感謝された水が命取りになったのではないかと、年老われた遺妻、また成長して立派な職にある息子さん等に逢う度に心痛みます。

核兵器に対する知識のなかった庶民。相当長い期間原爆を伏せて公開しなかった政府の広報を恨みます。

私を頼って来られた△△さん、◇◇さんはじめ町内の人等、安らかに眠って下さい。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 36歳〕  
(40-0110)

S20. 8月に長女を、12月にばあちゃんを亡くし、翌年6月にとうちゃんを死なせました。

S20. 8月13日、浦上に長女を探しに行った時、段の上に工場の人達が焼いた骨が、バケツやそこにある入れ物に入れて、何重にも重ねられていました。

来年には卒業して家の足しにもなると思い、楽しみにして純心の学校に行かせたのに、原爆で骨になってバケツの中に入って帰ってきました。

[長崎 直爆3.0km～ 女 38歳]  
(42-0488)

c) 性別不明

被爆体験

小学校2年生の夏休み。

8月8日先生が死亡してクラス5人で浦上に行って、8月9日ひる前に家に帰るときに長崎駅で被爆にあいました。

その後友だちが浦上に行ったことをきき、姉や父といっしょにさがし、友だちは3人とも被爆してました。

もう二度とあんな目にあいたくない。今も3人であそんだゆめをみて目がさめる、私がいきてるかぎり。

8月9日のあくまのような日はいやです。

[長崎 直爆3.0km～ 性別不明 7歳]  
(40-0107)

Ⅰ. 入市被爆

a) 男

① 10歳代(被爆時)

1. 長崎市戸町で被爆したが、激しい閃光と爆風のあと、暫時して爆心地の方から衣服をボロボロにし、半身を赤褐色に焼かれた人たちが走って逃れて来たが、大変でしたね、と声をかけても、恐ろしい形相で睨みつけたまま、口もきかないで走り去って行った。

1. 町内の救護所に、タンカに乗せられた人たちが運びこまれ、治療の順番を待っていたが、顔中、手足とも薬を塗られ、苦しみ喘いでいた。そばに立っていた人が、この人はもう駄目だろうと呟いていた無情な声が忘れられない。

〔長崎 入市 男 10歳〕  
(13-03-007)

母の死に方について。

爆死をまぬかれたものの大けがをし、体が日一日と弱って行くのを自覚し、八月末頃から紫斑が全身に出来、のどのリンパ腺が腫れだし、自分の死期を感じ、弟も弱りつつありいずれ死ぬと思うから、お前1人残るけど後の事たのむと、遺言みたいな事を聞き、最後に腫れが大きくなって気管を圧迫し、呼吸困難となり、私にのどを切ってくれと願望し乍ら死んで行きました。あの時一気に殺した方が母のくるしみがなかったのでは、と思う事があります。殺人は出来ませんでした。母が案じてた弟も9月9日、1ヵ月後に、頬の肉が腐って穴があき、朝起きた時は冷たくなってました。

戸板に乗せて焼あとで身内を焼葬する13歳の少年でした。

◇例◇のウ) の様な事は、被爆者だれでも思ってます。

ガラス破片の傷口からウジ虫が出て来る被爆者の苦しみ。

〔長崎 入市 男 13歳〕  
(28-0083)

昭和20年8月6日8時15分。比治山の参道を登りながら耳にしたうめき声は、足が無い、水がのみたい、手がない、助けて下さい、殺してくれ、苦しい……。一瞬にして、あまりにもむごい地獄絵図が目前に広がって来た。自分の火傷も忘れて、男女の区別さえつかぬ全身火傷の人を抱き起すが、横の人が、私も俺もと這い

寄ってくる。どの人を助けて良いか分らぬ……。気がつくとも私もちよっと倒れていたのか？死体が私の体の上に乗がかかっていた。ケガ人を残して頂上まで逃げのびた。広島市内一面火の海だった。ケガ人を残して逃げた弱い自分が、今でも情けなく心に残る思いだ。

夜8時過ぎ、やっと我が家にたどり着くと、母が全身火傷で隣家に収容されていた。私の姿を見るなり、喜んで大声で泣きだした。心配して待っていたのだろう。夜遅くまで父の姿がなく、明日もなく、待てど帰って来てくれなかった。あれほど喜んだ母も19日、遂に帰らぬ人となってしまった。

〔長崎 入市 男 15歳〕  
(40-0118)

- 1) 被爆後4～5時間後市街を歩いたが、電車が燃えていたり、火や煙を避けて川ばたの道を歩いていた時、家の下敷きになった人びとの悲鳴をきいても助けられなかったり、水ぎわで水を求めている人びとに水を与えてやれなかったこと（水を飲むと死ぬと言われていたのと、水を汲むものがなかったことが理由であるが）などが、未だに心のこりである。
- 2) 長兄が大やけどをしたので、仮設病院に連れて行き世話をしている間に、無傷で大丈夫と思われていた父が死亡し（8/16）、家へ戻った時には骨となり、ドロップスの空き缶の中でガラガラと音をたてたことが、肉親の情として堪え難いことであった。

〔長崎 入市 男 16歳〕  
(13-01-006)

その時の思いを書くことは山ほどあるが、当時17歳であった私の脳裏から消え去らない情景が2、3ある。

1. 大雨の降った雨あがり、橋口町の大橋の橋桁に、焼け残った家屋等の材木の残材が橋桁にかかり、そのなかに人間の死体、及び牛馬等の死骸が折り重なっていたこと（長崎電車の終点大橋のすぐ側）
2. 浦上駅から道の尾駅間の鉄道の土手で遊んでいたのであろう、4～5歳の男女の性別不明の児が、Y型に近い姿勢で焼け、土手に押しつけられるように死んでいた。おそらく即死だったんだろう。母の名も呼ぶことも出来ず、あまりにもあわれ。
3. 水を求め、肉親をさがし、助けをもとめる情景は、まさに生地獄。原爆炸裂後3、4日以内に入市した人なら誰人も目にし〔た〕生地獄だ。戦争は悲惨だ、原爆は悪魔だ！

〔長崎 入市 男 17歳〕

(27-0286)

目の玉が飛び出し舌をペロと出した死体、内臓のとび出た死体、倒れた家の下敷になり生きながら死んで行ったのだろう、ずるむけの皮膚、この世の出来事とは到底言えない無残な光景でした。

私救助に行きましたが、傷ついた人々を長崎本線の鉄道線路の下まで何人運んだか分かりません。

真夏の太陽がジリジリと照りつける木陰一つ無い所で、助けを求めていつ来るか分からない救援の車を待つ傷ついた人々、兵隊さん痛いよ、何とかしてくれと言われても何一つ出来ず、助かる人も何人かは死んで行き、今もそのことが心に残る。

〔長崎 入市 男 18歳〕

(27-0551)

1. 兵隊さん助けて下さい、助けて下さいと、いくら呼んでも何にもすることが出来ず、未だに心苦しい。
2. 家族と一緒にそろって死んでいる姿は、うらやましかった。自分は一人死んでいくのかと考えたりもした。
3. 今でも思い出すと、泣けて泣けてしかたのないことは、母は全身傷だけで死んでいる。その近くで、無傷で泣いている子供を助けることが出来なかったこと。

〔長崎 入市 男 19歳〕

(47-0008)

## ② 20歳代 (被爆時)

- ア) 被爆直後諫早駅から大村市にある第21海軍航空廠に帰るため、汽車に乗車したが、負傷者が一杯で足の踏み場もなく、正に生地獄であった。
- イ) 被爆翌日から原爆被災の状況調査団が編成され(軍命令) その一員として用兵見地に立っての原爆対抗手段如何? の実地調査の特命を受けたが、防空壕その他の防御方法は全くないこと。原爆の落ちた位置と、その高度の調査は的中し我ながら驚いた。調査中、死体(非戦闘員)の多さに言い知れぬ怒りを覚えた。
- ウ) 長崎医大に収容された被爆者の悲惨さに目をそむけるような状態で、助けを求められてもどうにもならない無情さと、原爆戦の恐ろしさをいやというほど知らされた。
- エ) 調査中、東大教授嵯峨根遼吉氏へのアメリカ原爆作成学者から手紙をひろい、悪魔的兵器の恐ろしさを更に感じた。

〔長崎 入市 男 23歳〕

(08-0026)

### ③ 30歳代（被爆時）

1) 8/9夜の12時、村の警防団員として、班長として6、7名を引卒長崎警察署入り、命により約3時間の仮眠。午前4時救援のために出発。下命者は海軍軍人で下士官だった。赤十字の印がされた布製のカバンを肩にし我々に諸注意をした。救援に向かう方向、殊に強く記憶に残った項目として、

①大変な被災者なので、絶対に求められても水をやらないこと。

②被災者の中で、なんとか生きながらえそうな人の救援に行動すること。

私は班長として、これは困ったことを命ぜられたぞと考えたこと、生きそうにないとの判断をどうしたらいいだろうと。たしか午前6、7時頃、錢座の高台に向かう私たちに、兵隊さん水を、水と叫ぶ窪地にたむろした一団に足をからまれつつも、水は駄目だと断り、振り切って過ぎた切なさが今でも残念でならない。

2) 下の川辺だった。水量の少ない川の流れに顔を突っ込んでいた裸の子供。またよごれた顔で目だけ恨めしげに見上げた姿。力尽きて倒れたであろう川面の人々の姿が、思い出されるたびに気が重く、40年の今日が近く思えてならない。そして戦後は終わってないと……。

3) 城山に向かう道、川の辺り、まばらに生えた大きな松の間辺、5、6名の人々が倒れていた。その中の一人に川南造船の保安課員が川南工業のバッヂをつけて、持前の美髭が記憶の人だった。水をくれとも言わない彼等にほどこす術もなく見過ごした無情が心に痛い。

4) 浜口町の電停でのこと。二台の電車はほとんど焼け、14、5名もいたろうか、兵隊たちが投げ出されまたは折り重なって死んでいた。服装も焼けた人、焼けない人、腰の剣が痛々しさを感じられ、戦争の空しさ愚かしいものと思いつめ今日に至る。

〔長崎 入市 男 33歳〕

(42-0766)

道を歩きながら、幼児、学生などの無残な死に方を見、ぼうぜんとし立ちすくんでしまった。それかと言って死骸に被せてやるものもなく、ただ可哀想と思うほか

り。

だんだん進むに従って、どこもかしこもこんなものだ、家も全焼してしまっている。灰の中を歩くようなもの。山手に近づくにつれて水を求める人に会った。動けないのだ。「毒が入っているから飲んではいけない」との話があった。それで一応ことわっても、あまりの切なさに飲ませてあげた。後で自分の小水でも飲んだという話をきき、なかば気になり、なかば飲ませてあげてよかったと思った。

そして実家は、山の裾だから被害はなかろうと思って登って見ると、無茶苦茶に倒れており、人影も見えない。みんな防空壕に避難していたのだ。中では松の皮を被せたような顔になったり、生きながらうじ虫に喰われたり、顔が腐っていったりするのを見、そしてお互いが「まだ生きとったとね」と正常な状態では口にできない挨拶を交わしているのを見て、「終末」の描写を思い出し、また新型爆弾が落されてどうせ死ぬのだろうと、覚悟を決めさせられた。

〔長崎 入市 男 36歳〕

(13-01-008)

b) 女

① 9歳以下(被爆時)

兄(△△△△、海星中学校、川南造船所動員)が帰宅いたしませんので、両親、兄姉と共に兄を探しに行きましたが、火がひどく、混乱状態の中で兄は見つかるはずがありませんでした。それでも毎日(それから10日余)弁当を持って、兄の持ち物で金の物(ズボンのバックル、アルミの弁当箱)を頼りに探しました。

私達は3Kほど離れた所に疎開しておりましたが、その家のガラス戸も割れるほどのすさまじい爆弾で、中心地は想像に絶するものだったと思います。

兄の動員先も中心地でしたので、投下直後、生きていたらとても苦しんだのではないかと思うと、胸が張りさけんばかりです。遺骨も遺品も何もなく、未だに兄はもしかしてどこかで生きているのではと思うこともしばしばです。

〔長崎 入市 女 3歳〕

(27-0209)

真黒にこげた人や、焼けただれた人、死んでる人もまだ生きてる人も死臭がひどく、皮膚がやぶけてどろどろです。

母に手をひかれ兄をさがしに入市しましたが、電車もぐしゃぐしゃで死臭はひどくのどはかわくし、下から上からとにかくあつかった。

何かをしてやれる状態ではありません。必死で兄をさがしてまわりました。でもとうとうみつける事は出来ませんでした。

〔長崎 入市 女 9歳〕

(27-0537)

## ② 10歳代(被爆時)

私が長崎市内に入ったのは原爆投下後10日位後と思います。

当地大橋が市電の終点だったので、真っ白にやけた電車の台の上に、これも白い人体の骨がそのままになって放置されたのを見たことと、川の橋の下に生きている人が帰って来てむしろでねていた姿を見たことです。

〔長崎 入市 女 16歳〕

(27-0393)

家の下敷きになり、生きながら焼かれて死んで行った伯母さんのことを思うと、今でも恐ろしくまたくやしい気持でいっぱいです。

〔長崎 入市 女 18歳〕

(28-0119)

病室廊下とあふれる被爆者をひと目見た時、これが生きている人たちだろうか、目を覆いたくなるような惨状でした。

焼け焦げた四肢のむき出しになっている人たち、真黒焦げで裸身の人たち、肉片がぶらさがっている人、生身の体にうじ虫がぎっしりとうごめいているなんて、見たことのない人たちには想像も出来ないでしょう。

昨日まで元気だった人も、一夜明ければ高熱、鼻血、喀血、吐血、下痢、下血をくり返し、抜毛が一夜で枕が真黒になるほどでした。

若い女性の方に抜毛が始まると、私たちは言葉をかける勇気も出ませんでした。ただ涙があふれるだけで。

このような症状でほとんどの人が亡くなりました。

〔長崎 入市 女 19歳〕

(24-0115)

### ③ 30歳代(被爆時)

- 1) (死んだ) 人間を山のように盛り上げて焼いているさま。
- 2) 道端に亡くなった人に油をかけて焼いているところ。
- 3) 死んだ子供をさがしに死ガいの山の中から、まだ見つから〔ママ〕
- 4) 大学病院に行ってみると看護婦が10人しか残っていなかったこと。
- 5) 大学の学生が逃げるときに岸壁に爪のあとが残っていると聞いたのも大変かわいそうに思う。
- 6) 馬が失明してポツンと立っていたのが悲しげであった。
- 7) 戸板に3人伏せたまま死んでいる。

もっと早い時にこういう調査があつて欲しかった。

〔長崎 入市 女 35歳〕

(02-0029)

## Ⅱ. その他

### a) 女

- ① あの日、8月9日11時。私は長田駅前の諫早市農業会長田支所の信用部に信用係として勤務しておりました。国債貯金通帳に一生懸命に記入しておりました。その時、目の前がピカーッと光り、しばらくしてドーンと音がして、またしばらくしてから倉庫の戸がガタッ、ガタッと爆風で倒れたのを思い出します。また、仕事が終わって同僚の△さんと自宅に帰る途中、正久寺の下あたりを白いマクでも引くように爆風が東の方へ東の方へとどびて行っているのを見たのです。夕方6時頃だと思います。だから私は長崎中心部から、何キロが被爆地なんてことは思われないのだと思っているのです。こんな、遠く離れた所にも、爆風と思われるものが来ていたのですから、とても信じられないでしょうけどそうだったのです。
- ② 8月11日。被爆者を乗せた汽車が入ってきたので、警防団の人からタンカを借りて、同僚の人達と汽車の中に入って行きましたが、年も若かったせいでしょうが、今思うと恥ずかしいと思いますことは、一しゅんその人たちを見たとき足がすくんでしまってどうすることもできなかったのを思い出します。この世の人達とは思われないような異様な人間、また息をつくことも出来ないようにとても臭いケガ人であり、後ずさりしてしまったのを思い出します。それから勇気をだして、ケガ人さん達を丁寧に運んだのを思い出します。

〔長崎 救護 女 19歳〕

(42-0390)

被爆者の収容がはじまりトラック等で次々と運ばれて来た。着物はぼろぼろ、皮膚は真っ黒に焼けただけ、全身にガラスの破片が突きささり、この姿を見た時、非戦闘員の何の罪も無いこと人達がどうしてこんな目にあわなくてはと、怒りで胸がいっぱいでした。痛い痛い、水、水、おかあさんと泣き叫ぶ者、少しでも早くみんなの治療をと軍医、衛生兵、看護婦は夜の明けるのも知らず一生懸命でした。でもその手当を待てず亡くなる方も多く、まさに生地獄です。

午前中に包帯交換をして早や午後にはウジ虫がわく、生きている人にウジ虫がわ

くなど現代の人達にわかるでしょうか？ 薬といっても今のように豊かなことはなく、リバカンといってリバノールと肝油を混合した薬液をガーゼに浸しペタペタと貼っていく、そのガーゼの交換の時患者は死にものぐるいです。ガーゼを取るごとに血がびゅうびゅうとふき出し、その痛さ、私たちはもう少し辛抱してね、頑張っ  
てねとこそ言えないが、この人が自分の親兄弟であったらと思い、何度も涙を流したものでした。

食べたい物は手に入らないため口にすることも出来ず、誰一人と近親者のみとりも受けず次々と死んで行く。

こんなかなしいことが二度と繰り返さ〔れ〕ないよう、体験者の私たちは全世界の人たちに訴えなければいけないと思います。

美しい娘が髪をすく、すると櫛には黒い髪の毛が一ぱいからまって抜けている。その髪の毛をじって見つめ泣きじゃくる娘。やがて男か女かわからないように坊主になり、たいした外傷もないのに死んで行く。その死体の皮膚はぶよぶよで、手をかければつるつとむけてしまう。ウジ虫のわいた死体を担架にのせ合同火葬場へ運ぶ。このような日は何日も続く。食べるものも食べれず、苦しみながら一人淋しく亡くなられた方々のことを思うと、今の平和が本当に有難く、永久にこの平和が続いてほしいと思います。

〔長崎 救護 女 20歳〕

(27-0184)

ア) 諫早海軍病院に日赤看護婦として応召勤務していた。長崎投下の報に院内の傷病兵は重症者を残し、全員原隊に復帰させ、被害者の受け入れに万〔全に〕準備した。

8月10日より衛生兵と共に長崎市内に救援に行くが、市内に入ると、道路上には瀕死の人々で溢れ、誰をタンカに乗せていいか、悪臭と炎天下の中で、声のする人、脈のある人々を優先に、何回も何回も運んで来た。

ア) トラックでは間にあわず、貨車に横に並べて送り込んで来る。貨車より下ろし諫早駅前では応急手当をするが、真夏の太陽と、ハエの群がり、悪臭、水、水と高

熱にうなされて、そのまま名前も住所も言わずに、収容して来てもバタバタと死亡していった。

ア) 病舎内は満員、廊下も食堂もすべて被爆者でいっぱい。高熱と、おう吐、失禁、隣のベットの人が死亡すると、つられるように次のベットの人も死亡していった。

ア) 火傷のあとは、耳の穴、鼻の穴、すべての個所にウジがわき、枕にはベツリと抜毛、マスクのガーゼを三重にも四重にしても臭くて、死臭?で充満していた。

ア) 収容後3~4日経つと、死者は毎日何十人と続く。衛生兵は大八車に荒ゴモで遺体を包み、裏山に朝から夕までガラガラと運び茶毘に付していた。その茶毘よりの白かつ色の煙が1週間も続いた頃、あれほど満床のベットが日に日に空きベットになって、ウナリ声、泣く声、肉親を呼ぶ声が無くなっていった。

ア) 恐ろしい放射〔ママ〕とは皆知らず、私たちは多くの被爆者たちを素手で取扱った。第2次、第3次放射汚染に対する無防備での医療機関?、現在こうして生きておるのが不思議におもわれるが、体内には大なり小なりの放射汚染が残っているのではないかと不安なるも、あの時、地獄の中で亡くなった人々のことを思うと感無量である。私たちは強力に反核と世界平和を希う。

イ) 病院船、中支那と従軍して来たが、前線で戦死された姿は知らぬが、後方兵站病院に収容した多くの重傷兵も、被爆者のようにバタバタとは死ななかった。時が経つにつれ、たとえ身障者となっても皆貴重な一命を取りとめた。多くの人命を一瞬に奪った原爆。ゼッ対に許すべからず。戦争反対!!

〔長崎 救護 女 27歳〕

(45-0034)

第500救護班として大村海軍病院に勤務しており、あの8月9日の原爆投下後、被爆患者が続々と収容されました。着物はぼろぼろ、皮膚は真黒で焼けただれ、体中にガラスの破片がつきささり、痛い痛い、水、水、おかあさんと泣き叫ぶ、まさに生地獄でした。リバカンといってリパノールと肝油と混合した液をガーゼに浸し、消毒後バタバタと貼っていく、夜の明けたのも知らず一生懸命でした。でもその治療をも待たず数多くの方が亡くなっていく。誰一人と近親者のみとりもなく……。

包帯交換を午前中にすませた患者、午後には耳の中、背中、指等いたるところにウジ虫がわき、看護婦さん虫が噛む痛いイタイ、と泣く患者に、私達は今までこんな状態を想像したこともなく、これが親兄弟であったらと他人事と思えず、割箸やピンセットで次々と取っていく。現代の人達に話をしても本当だと思うのでしょうか？

可愛い娘が髪をすく、櫛に黒髪がからまって抜ける。たび重なるうちに坊主頭になり、こんなになってと泣く姿を見るたび、「暫くの辛抱、すぐ生えてくるからね」と木綿を切って手拭の代わりに頭へかぶせてあげる。

外傷が余りひどくない人でも次々と死んでいく。その死体は水ぶくれのようで、手をかければつるっとはがれる。こんなむごい恐ろしい事が二度とあってはいけない。原爆の恐ろしさを体験した私達は、核戦争は絶対にしてはならないと、そして全世界が平和であることを念願しております。広島、長崎で被爆の犠牲になられた数多くの方々のためにも、声を大にして生きている限り叫び続けなければいけないと思っています。

〔長崎 救護 女 30歳〕

(36-0004)

長崎と諫早では10kmの距離がありますので、この調査に該当するものは何にも持ち合わせません。〔問〕4に対しての私の思いを書きます。

私は、当時長田国民学校の教員で(35歳)現在76歳、あの日、日直当番をしていました。11時過ぎ、B29の爆音→たちまち→ピカドンー。目がくらんで職員室の広机の下に這いつくばった。爆弾が落ちた、どこだ？どこだ？真昼間なのに西の方(道の尾か、時津か)の空に不気味なきのご雲が立ち昇り、辺りは一面うす暗くなった。――これが後でわかった原子爆弾だったのです。その翌日から、駅がかりのよい長田小学校に被爆者がどンドン運ばれました。学校職員はもちろんのこと、部落の人達も交替で全員救護にあたりました。次々に汽車から降ろされる被爆者の目も当てられぬ形相、まるで地獄の絵図とはこんなものかと思われる、男か女かの見分けもつかないような、何にも身にまとうものもなく、髪は焼けちぢれ、衣服はずたずたに切れ下がり、それでも生命のある限り、歩ける人は自力で歩いて来られる。担架の人、汽車から降ろされたまま息絶えている人、全くひどいひどい。

全校舎の階下、一階全部足の踏み場もないほど被爆者の方を収容しました。近所から藁をもらってそれを束ねて枕をつくり寝かせました。

私たちの姿を見ると、先生→水、水—看護婦さん→水、水—あの時のあの声  
が40年たった今もなお、未だ私の耳に残っています。町中から、ゆかたを集めて包帯を作りました。炊き出し、おにぎり、毎日が戦争のようでした。

三日目の大村の陸軍病院から軍医さんや、上官の方々が見舞に見えましたが、ひどいな—、第一戦でもこんな光景を見たことがないと、口々につぶやいておられました。

四日目、五日目と、傷はだんだん痛む。頼みの薬は赤チン以外は何にもない。ものを言わない。動かないと見ると死んでおられる。暑くて悪臭を出すので、生きた人間に蠅がたかり、皮の下にうじを持ちつけ、私達はピンセットでそれを取って廻った。全く考えられない事である。

腰弁当てさがしに来られる親戚、知人の方も大変だ。六日目、七日目ともなれば、探しだされて帰る人、死亡される人、亡くなられた人は、消防団の手によって無人墓に毎日幾柱が葬られました。あれほどたくさんの被災者の方でしたけれども、最後まで残られた方は、大分少なくなって、全部大村の陸軍病院の方に引き取られました。中には、お世話になりましたと元気に手を振ってお帰りになった方もありましたが、はたしてあの中に現在お一人さんでも生存している方があられるか疑問に思います。

8月15日 終戦の詔勅をラジオでお聞きしました。

ああこの終戦が、せめて五日前であったなら、  
このにつくい原爆を落とされずにすんだのに。

目の前に、苦しみ、あえいでおられる患者の皆様を見るにつけ、  
何とお慰めしていいのやら、言葉もない。

はらわたがちぎれる思いである。

8月17日 大村陸軍病院に全員引揚げられました。

その後、患者を収容していた教室も、

死人部屋にしていた2教室も、

全部大掃除をして、

二学期から平常通り授業を行いました。

昭和20年8月11日～8月17日までの1週間

原爆被爆者を救護した悪夢のような思い出を書きました。二度とこんな事があっては絶対出来ません。

〔長崎 救護 女 36歳〕

(42-0398)

両親・弟妹四人を一瞬に失い、独り生き残りました。爆心地350mのところでは、両親の死体は見つけましたが、弟と妹は行方不明のままです。焼けあとの地面で父母の死体の横で、着のみ着のままの生活で次第に自分の体が弱り、吐血発熱等の前記の病状になり、長崎を離れ(17日)九大に入院、ために父母の死体を始末してやれず、弟と妹を探し出す事も出来ず、一番心痛みます。

家の周囲は真黒こげの死体ばかりです。戦争ゆえに仕方ない、甘受せよと国は言いますが、40年経った今も放射能のせいだと思われる病気をします。医者は原爆のせいだとみとめてくれません。

(例) △ちょっとした傷口が化膿する。

△下痢が止まらず2ヵ月続いた。検査の結果は悪い病気、ビールス性も無い。しかし正常にならない。

△目が悪く、白内障で見えない。爆心地であった。しかし年のせいで片づけられる。

〔長崎 被爆状況不明 女 23歳〕

(27-0016)

## b) 性別不明

原爆投下の当日、学校の命で駅に集合とのこと。何事だろうと急ぎ集まってみると、汽車から傷つかれた大勢の方々が降ろされていられる。皆さん衣服ははぎ取ら

れ、体中真っ黒に焼け焦がれられ、肉はさけ、血はふき出、目を覆うようなお姿にただ茫然と立ちすくんでしまいました。次々に降ろされる方々を海運病院まで運びながら、戦争よりむごいものはない、戦争は絶対にしてはいけない、こんなになるなんて、ほんとに生き地獄だ。傷つかれた方々を運ぶ道すがら、お母さん水を、お母さん水を、と叫ばれる。私くらいの年であられるだろう、声も出ない、涙も出ない、あまりのむごさに、水一杯も飲ませてあげずに別れたあの方達。どんなに苦しかったろう、つらかったろう。夜も眠れぬ日が続いた。ほんとにすまなかった。何もしてあげられずに。

〔長崎 救護 性別不明 年齢不明〕

(42-0182)

1954年10月15日，中共中央、国务院发布《关于整顿和加强国家机关的指示》，要求各级国家机关工作人员，必须遵守国家的法律，遵守国家的政策，遵守国家的纪律，遵守国家的秩序，遵守国家的荣誉，遵守国家的利益，遵守国家的尊严，遵守国家的统一，遵守国家的团结，遵守国家的和平，遵守国家的繁荣，遵守国家的富强，遵守国家的文明，遵守国家的进步，遵守国家的幸福，遵守国家的未来。

（1954年10月15日）



1988. 11. 28

日本原水爆被害者団体協議会

〒105 東京都港区芝大門1-3-5  
ゲイブルビル902

☎03(438)1897